

---

# 一色

相原ミヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一色

### 【Zコード】

Z2341X

### 【作者名】

相原ミヤ

### 【あらすじ】

世界は色で満ちている。全ての生き物は「色」「一色」を持つ。色は力であり、色の力を發揮する色の石が存在する。色によって力が異なり、国は色を使って霸權を争う。ここは火の国。火の国には赤を司る色神紅があり、紅の生み出す紅の石によつて豊かな国を作り出している。紅の石は赤色の力を發揮することができ、赤の力は熱を基本としたエネルギー。紅の石を使うことが出来る者を術士といつ。火の国の住民は皆、石を使う適性検査 選別を受けることが義務付けられている。術士に憧れを抱く十六歳の悠真であったが、

術士の才覚に恵まれず小さな漁村で生活していた。しかし、色神紅に敵対する官吏の争いに巻き込まれ、悠真の人生は大きく変わる。美しい色神紅と彼女を守る術士たちと出会い悠真は自らの色に気づいていく。

## 始まりの赤（1）

世界は色で満ちている。  
八百万の色。

全ての生き物は「この色」「一色」を持つ。  
同じ色の無い一色。

それは人も然り。

色は力。

色は時に心さえ操る。

悲しみの色。

強さの色。

慈しみの色。

世界は色で守られている。

最も美しいのは何色か。

色たちは霸権を奪い合つ。

決して終わることの無い色の戦い。

色は人を選び色を与える神に変えた。  
色神は石を生み出せる神に等しき存在。  
色神が守る国は豊かとなる。

ここは海に浮かぶ島国。  
火の国。

火の国には色神様がいる。

色神様は、司る色の石を生み出す。

火の国は、赤い国。

色神様の名は紅。

紅様は紅の石を生み出す。

紅の石は不思議な力を持つ。

火の国で最も偉大で、最も尊い紅。

この国で最も尊き色は赤。

潮の匂いが心地いい。波は砂浜に打ち寄せ、下がる。浜辺に木の船が上がり、甲板には魚が跳ねる。小さな漁村には何も無い。海岸に沿った家と、船乗りたちに道を示す灯台。山の子供が海に遊びに来て、手習いを教える塾は賑つた。住まう人は温かい。捕れた魚を市街へ売りに行き、米や野菜を手に入れる。海岸沿いは山が連なり、畑を作るには適さないが、豊かな里山は木の実や山菜の恵みを漁村にもたらす。時には、罠に猪がかかった。飼っている鷄は卵を産む。ここは、何も無いが恵まれた漁村。漁村には下緋がいる。下緋は、紅の石を使うことが出来る術士のこと。小さな漁村に、普通はない術士。術士がいるのは、この漁村に灯台があるから。灯台が船に道を知らせるから。

紅の石は、強大な力を生む。光を生み、熱を生み、動力を生む。紅が生み出す色の石。その石があるから、色神が国にいるから、火の国は豊かだ。外国も侵略することが出来ない。小さな島国が豊かさを続けることが出来るのは、一重に紅様のおかげなのだ。

悠真は漁村で生まれ育つた。漁師の息子らしく、海で泳ぎ、山野を駆けた。ふんどし一枚で海に飛び込み、草履を脱ぎ捨てて砂浜を駆けた。洗いざらしの紺の着物に、結わえるのが面倒だからと髪は短く切つていた。悠真の祖父は漁師だ。父も漁師だったらしいが、悠真は父のことを覚えていない。悠真が三歳の時に海に呑まれて死んだのだ。祖父は悠真に言った。海の神の元へと帰つたのだと。だから海を恐れるなど。悠真の母は、悠真が五歳の時に死んだ。母が死んだ時は覚えている。母は風邪で寝込み、そのまま死んだ。こうして悠真は祖父と一人きりになつた。

父と母があらずとも、悠真は平氣だつた。祖父と一緒に海に出て

魚を捕る日々。読み書きも出来た。元来器用な悠真は、字が美しいと褒められた。年の近い女の子から声をかけられれば嬉しい。子供たちの相手をするのも楽しい。何より、酒を飲み上機嫌になつた祖父の話を聞くのが楽しかった。上機嫌になつた祖父は禿げた自分の頭を撫でながら、悠真の知らない父や母の話をした。悠真の中の父や母の記憶はそのようにして作られていつた。そして、祖父と一緒に酒を酌み交わすのは、灯台を守る術士だった。

灯台を守る術士の名は「惣次」という。五十歳ほどの男だ。二年前に、この村に配属されてから、悠真は時間があれば遊びに行つた。十六歳になる悠真にとって、紅の石を使うことができ、紅に近しい存在に興味があつたのだ。そして、色神紅が生み出す紅の石にも興味があつた。紅の石を使うことが出来る術士になるには、生まれながらの才覚を要す。火の国に生まれた子供は、数え年が十になると否応なしに適性検査 選別を受ける。紅の石に見定められるのだ。残念なことに、悠真に術士の才覚は無かつた。

惣次が悠真に話すことはとても興味深いことだった。紅を守る軍を朱軍、朱軍をまとめる將軍を朱将と言う。紅の護衛を朱護と言う。術士は緋の字を与えられ、術士の頂点に立つただ一人の存在「陽緋」。陽緋について、灯緋、大緋、中緋、小緋、下緋と続く。惣次は、術士の中でも最も下の下緋だ。しかし、悠真に下緋を侮ることは出来ない。術士の大部分が下緋であり、火の国全土に散らばるのも下緋なのだ。

「いいなあ、惣次は、術士になれて」

悠真は口癖のように惣次に言つた。

「（）に配属前は、紅の石を憎んだもんじや。普通の生活をしてえ、術士の大半はそう思つてある。もしかしたら、紅様もそげえ思つところかもしれないの」

口癖のように術士にあこがれる悠真に、惣次は諭し続けた。

「（）の村は平和じやから、この村にずっとおるのがええ」

悠真は惣次の言葉の本意が分からなかつた。惣次が首に紅の石をか

けていることを、しっかりと見ていた。紅の石は、赤く輝き、灯台の明かりをつける。それは、摩訶不思議な光景だった。

世界は色で満ちている。赤、青、黄、燈、黒、白、紫……それぞれの色にも濃度があり、透明度があり、二つとして同じ色は存在しない。八百万の色。悠真は赤い太陽が好きだ。青い海が好きだ。薄青の空が好きだ。木々の緑が好きだ。黄土色の砂浜が好きだ。白い雲が好きだ。黒い夜空が好きだ。

幼い頃から、悠真は色が自分を見ていたように感じていた。それは、色が力を持っているからかもしれない。赤い色は力を持つ。この火の国で最も高貴で、最も強い色。誰もが赤を讃え、赤を身に付けることは許されない。人の命は赤で動き、赤は熱を持つ。下緋の惣次は紅の石を持っている。力を持つ赤を身に付けていた。悠真は、術士に憧れた。色の力を引き出し、色の力を制御できるから。

## 始まりの赤（2）

その年の梅雨は雨が多かつた。幾つもの嵐が訪れ、海は荒れ、何日も漁に出ることが出来なかつた。嵐なのに風はさほど無く、尋常じやないほどの雨が降り続いた。砂浜には、流木や千切れた海草が打ち上げられた。雨になると祖父の体の調子が悪くなる。悠真の祖父は年のために、痛む膝をさすり、梅雨時期だというのに囲炉裏に火を入れていた。歩くのすら間々ならなくなつた祖父を見て、悠真是胸が痛み晴天を望んだ。

嵐は、何日間も村の上に留まり続け、下緋の惣次は、灯台に籠り船が難破することを恐れていた。悠真が惣次に握り飯を届けた時、惣次は灯台から海を見ながら悠真に言つた。

「嫌な感じじや」

惣次の言葉に、悠真是首をかしげた。

「紅の石が反響しておる。野江に勝つほどの力か……」

惣次が海を見る目に迷いは無かつた。

惣次の目は、悠真に不安を与えた。多すぎる雨が地に戻ることなく山肌を流れ落ちてくる。大地が悲鳴を上げていた。

「非難しよう山が崩れるかもしね。じっちゃんや村の人を呼んでくるから」

悠真が掃除に言うと、惣次は頷いた。

雨の中、悠真は走り、村の家の一軒一軒の扉を叩き、灯台への非難を勧めた。嵐の中では笠も蓑も役に立たない。風に耐えて、悠真是高い波が打ち寄せる海岸を走つた。首を横に振るもの、悠真の言葉に耳を傾ける者、反応は様々だつた。

「逃げれるもんから先に連れて行き」

祖父がそう言つから、悠真は逃げることに賛同した村の人を連れて灯台へ走つた。子供を抱き、肩を貸し、何度も、何度も灯台と村を往復した。灯台の中は非難した人で溢れ、誰もが下緋である惣次を

頼っていた。非難をすることを決めた者の中で、残るは、悠真の祖父と数人の老人だけとなつた。必然的に、老人が最後になるのは、散ることの美学を持つ火の国独自のことかも知れない。田舎のこの村には、その精神が強く根付いている。

「もう一回行つてくる」

悠真は再び嵐の中、外へと出た。

灯台は海へせり出した高台にある。高台から石の階段を降りて砂浜を目指した。嵐の勢力が弱まることはない。夕方だというのに、外は夜のように暗く、雨は冷たく悠真の体力を奪い、海は大きな音を立てて唸る。地の底から響くような音。その音に、悠真は足を止めた。何か、大きなものが迫つてくる恐怖を覚えた。

直後だつた。悠真は息を呑んだ。海岸に面した里山の大半が崩れ落ち、悠真の家を呑み、学び屋を呑み、船を呑み、村の大半を呑み込み、土砂が川のように流れ、微かな明かりに照らし出されるのは、茶色い世界。流れる土砂が大地を揺らし、全てを洗い流す。祖父が生きている可能性は皆無。土砂は思い出を刻んだ家を、両親が生きた証を、全てを洗い流す。迫る音。唸る地面。この世の光景でない。地獄絵図のような情景。

「そんな……」

悠真は言葉を失つた。『ごつい』とした祖父の手の感触が未だに残つている。船の舵操る逞しい腕も、禿げた頭も、酒を飲んで上機嫌に語る声も、父と母の位牌に手を合わせる後姿も、全てが鮮明に思い出される。その祖父の姿が瞬く間に茶色い土砂に呑み込まれた。一度と見ることが出来ないのだ。何かが悠真の中を通り過ぎた。茶色い色が、流れる緑の木々が、悠真の胸に迫つた。

果てしない孤独

悠真が感じたのは、「孤独」だった。この広い世界でたつた一人残されたような気がした。悲しみも絶望も感じない。何も考えられないのだ。世界の色が消えたような気がした。

「悠真」

悠真の名を呼んだのは惣次だった。惣次の手が悠真の肩に乗せられた。惣次の手の重みが、悠真の世界に赤い光を取り戻した。赤に導かれるように、少しづつ色が戻つてくる。

色を憎んでは駄目よ

誰かが悠真に言つたような気がした。それは愛した村が消えた日の出来事だった。

「誰も生きておらん。紅の石が言つとる」

惣次はそう言つと、流れる土砂に手を合わせ、深く頭を下げた。悠真たちは、灯台で身を寄せ合い朝を待つた。その数、三十人ほど。村の人口の半分にも満たない。子供が泣き、眠りに落ちる。大人だけが不安を抱え、手を合わせる。無事に朝を迎えるのかといふ不安。これから的生活に対する不安。下緋である惣次が持つ紅の石が淡く輝き、人々のやつれた顔を照らしていた。赤が人々に安らぎと勇気を与える。

「何も心配することない」

言つたのは惣次だった。

「今の紅は、とても聰明で優しい子。あの子に任しておけばいい」惣次が言つから、悠真は未だ見ぬ紅のことを思い描いた。男なのか、女なのかも分からない。年も分からない。けれども、紅という存在だけは、火の国に生きるもの全てが知つていて。もちろん、悠真も知つている。

「今の陽緋の野江は歴代最強の術士。美しく、術だけでなく剣技にも優れる。あの子だったら、多くの術士を束ねていける」

惣次は続けた。

「今の朱将の都南は、剣士としても、策士としても優れている。術は使えぬが、柴の鍛えた刀が補つていて。多少荒っぽいところもあるが、不器用なだけ。他者に気遣いの出来る子だ」

惣次はそこまで言つと、村人たちを見渡し微笑んだ。

「紅を守る朱護頭の義藤は、若くて頑固だが頭の切れる子だ。術に優れ、剣技に優れる。子供の頃から紅を守るために戦い続けてきた。

生まれながらの才にも恵まれ、努力も惜しまない。数年後が楽しみな子だ」

惣次は紅を守る方々の名を知り、気安く呼んでいる。それは、今までの惣次の印象からは考えられないことだった。惣次は弱くて年をとつた下緋で、それ以上でもそれ以下でもない。下緋は、術士の中でも最下の存在。紅に近づけるような立場でない。なのに、どうして惣次は知っているのか。そんな疑問を悠真は持つたが、それを問い合わせることは出来なかつた。惣次の言葉が悠真を始めとし、村の人々に希望を与えていたからだ。絶望的な状況でも、紅が守つてくれる。そういう希望が満ち始めた。火の国で生きる民にとって「赤」は希望の色なのだ。

「他にも学者の佐久やからくり師の鶴藏、加工師の柴や、数え切れない子たちが紅を信頼し、支えている。何の心配も要らない」

惣次の言葉も田舎臭さが抜けている。噂でなく、惣次自身が紅を知り、紅の回りの優れた術士たちを知っている。悠真はそんな疑問を覚えたが、紅の話を聞いて心が和んだ。紅は色神であり、悠真たちが崇拜できる存在だから、紅という存在が疲れ果て、希望を失つた悠真たちに光を与えた。赤い色を与えた。身を寄せ合い、濡れた体を乾かし、うつらうつらと悠真は夜を過ごした。祖父が死んだという実感はまったく無い。朝日が昇る頃、再び嫌な予感を覚えた。嵐は弱まるごとを知らず、再び地鳴りが響く。突然、惣次が人々を搔き分け、年齢を感じさせないほどの勢いで駆け出した。直後、高い波が灯台に迫つた。大量の海水が窓を押し破り灯台の中へ入り、惣次の紅の石が輝き、風を巻き起こし水を防ぐ。しかし、それは一時のこと。紅の石の輝きが弱まつた直後に、鋭く剥がれた木の柱が惣次の胸に突き刺さつた。惣次の赤い血が飛び散り、悠真の頬につき、地鳴りが響き、山も崩れ始めた。紅の石はまだ水を防いでいる。それが、長く持たないことは明らかだつた。一刻の猶予も無かつた。

悠真は惣次と同じように人々を搔き分け駆け出した。強い風と雨が悠真を阻もうとしたが、悠真は止まらなかつた。悠真が惣次に

駆け寄ったとき、彼は息も絶え絶えの状態で、空を見たままの目に輝きはない。助かる見込みはない。悠真は何も出来ない。術士である惣次が何も出来ないのだ。悠真に何かが出来るはずがない。しかし、悠真は何かをしたかった。悠真の後ろには、生きることを切望している村の人たちがいる。親も祖父も亡くした悠真にとって、村の人々が家族だつた。

惣次の紅の石がそこにあつた。

「……悠真、お前なら出来る」

惣次は倒れ、目を見開き悠真を苛烈な目で見据えた。駆け寄った悠真に、惣次は血で汚れた手で紅の石を差し出した。燃えるような赤。赤は美しい色のはずなのに、血の赤は少しも美しく思えなかつた。残酷で、恐ろしい色のようだ。それでも、悠真は赤にすがつた。今この悠真を救えるのは赤だけなのだ。

力を……

悠真は思つた。手に紅の石を握り、願つた。

紅の石は、守る力があるはずなんだ。力を……

悠真の脳裏に死んだ祖父の姿が見えた。祖父と酒を酌み交わす惣次の姿が見えた。

力を……

直後、悠真の視界が赤く染められた。赤い色が鮮やかに輝いた。体の中を熱い何かが駆け抜けていく。赤、青、黒、白、黄、燈、緑……。数え切れないほどの色が悠真の身体を駆け抜け、赤だけが、鮮烈に強く輝いた。

そこには風も雨も冷たさも無い。悠真は赤い光の中にいた。振り返れば、身を寄せあう村の人たちがいた。悠真の手の中の紅の石が輝き、強い力を発していた。

「ありがとう」

悠真は言つた。それは、本来術士としての才覚がない悠真に力を貸してくれた、紅の石への礼だつた。そして、村の人を守るために命を懸けてくれた惣次への礼だつた。

「ありがとう」

悠真の頬を涙が流れた。助かつたという安堵が悠真を包み込み、気づけば、惣次の紅の石は、色を失い砕けていた。それは惣次が死んだからなのかもしれないが、詳細は術士でない悠真には分からぬ。悠真は、紅の石に相応しい存在でないのだから。

## 赤との出会い

数時間後、長く降り続いた雨は止み、雲の間から太陽の光が差し込んだ。それと同時に、悠真の意識は遠のいた。助かつたという安堵と極度の疲労がもたらしたのだ。

海の音が心地よい。潮の香りが心を満たしていく。しかし、体は燃えるように熱い。熱で節々が痛み、体が重く感じた。世界は赤く、熱い。赤い。赤い。燃えるように赤い。

悠真

遠くで母の声がした。記憶の中に残された母の声は、いつまでも若いままだ。赤い世界の中で、悠真はもがいた。体が石のように重く動かない。目を開いても赤い色しか見えない。

色は力を持つ。

惣次の声がした。

紅の石は赤い色の力を引き出す。強大な力を引き出す。破壊しか出来ないとと思う輩が多い中、よく守つたもんじや。

そこで悠真はゆっくりと思い出した。嵐が村を襲い、祖父が死んだ。惣次が死んだ。村は消えた。悠真は紅の石を使った。重く熱い体は、それが原因なのかもしない。

赤い色は高貴な色。赤を纏える者は限られている。赤い色。赤い色。

のぉ、小猿。

女の声がした。高圧的で、強い声。気高く、赤く響く声。悠真は辺りを見渡した。辺りは赤い世界。高貴な赤い色の世界。

わらわの色に染まれ。小猿。赤が小猿を守るぞ。赤こそ、最も気高く美しい色じや。

赤い世界。赤い声。悠真は声の主を探した。気づけば、声の主は悠真の目の前にいた。赤い髪、色白の肌に赤い唇が栄えている。襟元

を大きく開いた着物は赤い色。赤い瞳。高貴な赤は彼女の色なのだと、悠真は悟つた。

「色神紅」

悠真は彼女が紅だと思った。火の国の色神。この火の国は赤い色を司る色神紅を有している。強大な力を持つ赤い色は火の国の色だ。悠真が彼女を紅と呼ぶと、彼女は、けらけらと笑つた。

誰が紅じや。わらわは赤。色神ぞよ。紅はわらわの色を使い、わらわの色の石を生み出すだけ。わらわが赤。小猿、わらわの色になれ。他の色になるな。赤がもつとも強く美しい色じや。

赤と名乗った色神は悠真の頸に指をかけた。細い指はとても強かつた。

赤が小猿を守る。今度こそ、赤が世界を取る。

悠真は彼女が何を言つているのか分からなかつた。

お下がりなさい。赤。まだ、この子は色を選んでいないわ。

一つ、声が響いた。悠真は声の主を探した。澄んだ、無色な声。

五月蠅い色じや。赤を選ぶのは時間の問題じやと言つのに。赤はすっと悠真から手を引いた。

この国は赤の国ぞ。赤い色が守る国。この国で生きる以上、赤の力を必要とするはずじや。いつでも貸すぞ。赤を選ぶのなら。わらわの色を選べ。

赤は悠真に言つた。そして、美しく身を翻した。

一つだけ。小猿がわらわの色を使い、他の色も小猿の存在に気づいたはずじや。ぐずぐずしておつても、他の色に狙われるだけじや。よう覚えておけ。色は動き始めた。

赤の大きな帯が優雅に揺れた。結い上げられた赤い髪。細い首のうなじが美しい。悠真は赤に心を奪われかけていた。

悠真。

無色な声が悠真を呼んだ。

容易く選んではいけないわ。赤は力の色。平和と戦いを生み出す。色が悠真を狙つてくるわ。火の國の外から全ての色たちが。大

丈夫、悠真が選ぶまで、私が悠真を守るわ。

何色でもない無色な声。悠真の心に住んでいるのは、何色でもない。悠真は色を持たない。それが分かつた。赤い世界が無色な声に搔き消されていった。無色透明の、少し冷たい世界。熱された世界が冷えていく。とても心地よく感じるのは、それが悠真の色だから。

彩神紅に会いなさい。復讐とは関係なく。今の紅は優れた人だから赤に唆されることは無いでしょう。無防備なまま他の色に狙われるのなら、赤に身を寄せても良いでしょう。既に、私の色は動き始めたのだから。

その声は悠真を守る声。世界は動き始めた。田舎で平穏に暮らしていた悠真の世界は動き始めた。それが分かつた。

## 赤の術士

「術士でないのに、術を使ってよく無事だったものね」  
高く穏やかな女性の声が聞こえ、冷たい手が熱い悠真の頬に当てられた。すると、熱い体が徐々に熱を下していく。先ほどの夢が嘘のようだつた。悠真は夢を思い出した。よくもまあ、あれほどの想像を膨らました夢を見たものだ、と悠真は己に感心した。感心しながらも、悠真は目を開くことを拒んでいた。目を開けば、辛い現実が待つてゐるに違いない。

「面白い子ね。　　目をお開けなさい」

その言葉に惹かれるように、熱い体も冷えていく。強い力に引き上げられるように、悠真は目を開いた。夢が消えた。目の前には現実が待つてゐる。

赤い羽織が風になびく。目を開いた悠真が見たのは、限られた者しか身に付けることが許されない赤い羽織だつた。少なくとも、田舎で見ることが出来る羽織でない。悠真は赤い色の布を初めて見たのだから。悠真を覗き込んでいるのは、赤い羽織を肩にかけた女性だつた。その手は悠真の頬に当たらでている。

「陽緋様。村人はどちらへ？」

悠真の知らない男が、赤い羽織の女性に声をかけた。陽緋とは、最も強い力を持つた術士を指す。「緋色」を与えたされた術士の中の頂点。下緋の惣次よりも遙かに上の存在。

「市街へ誘導なさい。紅様への報告と官府へ復旧の要請を」

陽緋の指示に、陽緋よりも年は上だらう男が深々と頭を下げた。悠真は陽緋が腰から下げた刀に目を留めた。鞘も柄も、全てが朱塗りの美しい刀。赤を許された存在、それが陽緋。悠真は重たい体を必死になつて起こした。そこは灯台の中だつた。崩れた壁と、布のかけられた惣次の亡骸。　　。村の人たちは、外へと出たようだつた。起こした体が重く痛んだ。

「もう大丈夫ね」

陽緋は微笑むと、赤い羽織を翻して立ち上がった。赤い色が、胸に迫つた。

惣次は陽緋を知っているように話していた。歴代最強の術士。剣技にも優れた存在。それが、目の前の彼女だと信じられなかつた。陽緋は惣次の遺体の前にしゃがむと、手を合わせ、深く、深く頭を下げる。尊敬する者の遺体に手を合わせているようであつた。惣次の遺体に手を合わせていた陽緋は立ち上がり、身を翻した。陽緋に声をかけることは恐れ多いことだ。許されることでないかもしれない。それでも、悠真は尋ねたかつた。惣次が違和感を覚えた嵐の理由を、そして術士の中で頂点に立つ陽緋が、こんな田舎まで足を運んだ理由を。

「待つて」

悠真は陽緋の赤い羽織をつかみ、陽緋は首をかしげた。

「どうして、術士がここに……」

それは悠真の率直な疑問だつた。陽緋は術士の中で頂点に立つ。都の紅城で、術士の指揮をとり、紅を守るのが仕事のはずだ。そんな陽緋がどうしてこの村にいるのか。

「それは、あたくしが術士の筆頭、陽緋であることを指しているのかしら。陽緋がここにいる。それを疑問に思つてゐるのなら、返答は簡単よ。正体不明の何者かが、他者の紅の石を使つた。そう知らされて、術士の筆頭のあたくしが出向いたまで。それだけのことよ」田舎者の悠真とは違う言葉遣い。細い手足に、萌葱の着物。深緑の袴。足元は悠真が初めて見た輸入物の長靴だつた。下ろされたままの長い黒髪も目に留まる。何より目を引くのが、赤い羽織。もし、許されない者が赤を身に付けたのなら、それは厳しい罰則の対象となる。目の前の女性は、間違ひなく陽緋だ。

「俺は……」

悠真は言葉を探した。悠真は紅の石を使うことが出来ないはずだ。術士の才覚には見放されていた。どうして、自分が紅の石を使えた

のか分からぬ。

「全ては紅が判断されることよ。あなたは下緋である惣次を超える力を使い、人々を守つた。術士としての才覚に見放されたはずの、あなたがね」

そこまで言つと、術士の一人が陽緋に駆け寄つた。  
「佐久様より連絡が。分かり次第、状況を伝えて欲しいとのことです」

陽緋は静かな口調で言つた。

「紅様と朱将と佐久に伝えなさい。間違ひなく、青の石の力でしょうね。誰かが青の石を使い、雨を降らせ続けた。あたくしたちの進入を阻み続けた者が犯人でしきう。朱が動く必要があるかもしれませんわ。そして、惣次の死についても、紅様へ報告を」  
術士が深々と頭を下げた。

犯人。

悠真はその言葉を聞き逃さなかつた。

「待てよ」

相手が陽緋であろうと無からうと関係ない。悠真は聞き捨てなら無い言葉を陽緋の口から聞いたのだ。陽緋は怪訝そうに振り返り悠真を見た。

「犯人つてどうこうことだよ。青の石つて何だよ」

陽緋に苛立つのは間違つてゐることぐらい、悠真にも分かる。それでも、込み上げる感情を抑えきれない。消化不良の気持ちが込み上げてくる。

「嵐じやないのかよ。雨嵐じやないのかよ。犯人つてなんだよ」  
それは自然の嵐のはずだつた。雨の多い梅雨で、雨嵐がきたまで。多すぎる雨で、海岸沿いの崖が崩れたまで。「犯人」、「青の石」。それは、嵐が人災であるという発言。人災である以上、祖父も惣次も殺されたのだ。なぜ、二人は死ななくてはならなかつたのか。なぜ、村は土砂に押し崩されなくてはならないのか。平和な漁村にどんな罪があるので。なぜ、村の人たちは死ななくてはならなかつた

のか。一体、この村が何をしたというのだ。

「どういうことだよ！」

愚かな行為だと分かつているが、悠真は抑えることが出来ず陽緋に飛び掛っていた。

天と地が入れ替わった。非力な悠真には、何が起こったのかさえ分からない。振り上げたはずの悠真の手は、陽緋につかまれ、悠真是水溜りの中に倒れていた。陽緋は左手で悠真の手をつかみ、右手は朱塗りの刀に伸びていた。陽緋は、紅の石を使わずとも、容易く悠真の命を奪えるのだ。悔しくて涙が溢れた。祖父も惣次も死に、村は滅びた。悠真が愛した全てが無くなり、父と母の思い出も消えた。悠真は一人になつた。悔しくて、哀しくて、悠真の目に涙が溢れた。そんな悠真を見たからか、陽緋が刀の柄にかけた手を離し、服が汚れることを厭わず、悠真の隣に腰を下ろした。

「泣きなさい。そして、前に進みなさい。紅の石のことも、今回のことも忘れて。あなたは、十歳の選別で才覚を見出されなかつた。術士になる必要も無いわ」

陽緋の言葉は温かい。悠真の中の陽緋の姿は涙で歪んで見えた。悠真は元来、意志の強い性格。簡単に引き下がることも出来ない。

「知りたいんだ」

悠真は言った。目から溢れる涙は止まらない。

「どうして、こんな事になつたのか。俺は、引きさがれない」

陽緋は困つたような表情をした。

「あなたは、紅の石を使ったわ。それも、他人の紅の石を。術士が持つ紅の石は、持ち主にしか使用することができないよう加工されているはずなのに。他者の石を使用できるのは、紅だけのはずなのに。もし、望むのなら紅城へ連れて行くことが出来るわ。あなたが惣次の紅の石を使ったという理由を付けて。けれども、よくよくお考えなさい。紅城へ足を運ぶということは、術士になるということ。今までのような生活は送れないわ。考えなさい。犯人を捜すのは、あたくしたちの仕事。あたくしたちは、必ず犯人を捜し出し罪

を償わせる。それでは、あなたの気は晴れないのかしら？

陽緋は悠真を連れて行くことを避けたいようだつた。惣次も言つていた。術士になつても、楽しいことは無いと。逃げることは容易い。現実を忘れ、新しい生活を始めるすることは容易い。そう思うと、目の前に変わり果てた惣次の死体が浮かんだ。なぜ、惣次は死ななくてはならなかつたのか。なぜ、祖父は死ななくてはならなかつたのか。今、新しい生活へ逃げたところで何も変わらない。生涯、一人の死に追いかけられるのだ。

「紅城へ……紅城へ連れて行つてくれ。俺は、犯人を見つける。だがれが村を滅ぼしたのか、正体を突き止め、自分の手で復讐するまで、俺は生きることは出来ない」

「色神紅に会いなさい。復讐とは関係なく。」

無色な声に唆されたのでなく、悠真は己の意志で陽緋に懇願した。

陽緋は一つ息を吐いた。

「紅城へ連れて行くわ」

悠真の人生は大きく動き始めた。赤い色が悠真を包んだ。まるで、悠真を染めようとするように。

## 赤の術士（2）

陽緋は十人の術士を連れていた。そのうち九人が村人の誘導と救援、そして現場の確認に残り、一人が陽緋に従つた。悠真は陽緋に連れられ、田舎では決してお目にかかるない、からくりを見た。術士が使うからくりは、普通の物と異なり、紅の石の力を動力にして動くのだ。陽緋は最も優れた術士。だから、陽緋が使用するからくりはとても強大なものだ。陽緋に連れられた悠真が見たのは、木造の船だった。大きさは中船ほどだが、船の側壁に翼のようなでっぱりがある。その船は土砂が崩れた山の上にあつた。陽緋が持つていること、そして山の上に船があることから、それが希少なからくりであることが分かつた。

「この、空挺丸で紅城まで行くわ。お乗りなさい」

陽緋は身軽な動作で船に乗り、悠真は空挺丸から落とされた縄にしがみつきながら必死によじ登つた。

陸に打ち上げられた船には、中央に小さな木箱が置かれていた。悠真は甲板の隅に腰掛けた。陽緋は首にかけた紅の石を木箱の中に入れて蓋を閉じた。

「つかまつていなさい」

陽緋が言い、悠真は船にかけられた麻縄をつかんだ。直後、陽緋の紅の石は赤の光を放ち始めた。赤い色に呼応するように、共鳴するようになんとなく船が振動を起こし始め、次第に赤の光は強まり、ゆっくりと、確実に宙に浮き始めた。

「浮いている……」

悠真は絶句した。紅城にはからくりを作る職人がいるという。紅の石の力を引き出し、紅の石の強大な力を制御する。有効に使う。陽緋の紅の石の強大な力を、からくりが制御し、宙に浮いているのだ。

「すぐに着くわ」

田舎者の悠真が空飛ぶからくりに驚くのを見て喜ぶように微笑んで、

陽緋は言つた。

火の国で空を飛ぶことは不可能だとされていた。それを可能にしたのが、強い力を持つた陽緋と稀代のからくり師だ。悠真のような田舎者でも知つてゐる。現在の陽緋が歴代最強と呼ばれる力を持つていることを。惣次も言つていたから間違いない。歴代最強という呼び方は、彼女の存在を厳ついものに変える。現に悠真も、現在の陽緋は、厳つく渋い中年の男だと思っていた。しかし、目の前にいるのは、長い髪の美しい女性。色白で細い手足は、華奢な印象を与える。悠真が瞬く間に地に伏されたことから、彼女が優れた武術の使い手であることは明らかだが、見た目からは想像できない。現に、風を切つて進むからくり空挺丸を操作する彼女が、赤い羽織を脱いで、朱塗りの刀を置けば普通の女性。火の国では紅の石を使えるだけで、運命は変わる。紅の石が使えれば、必然的に将来は術士と決められる。悠真が憧れた特別な存在「術士」だ。

昨日までの雨が嘘のように空は晴れ渡り、眼下に広がるのは縁の山々と小さな村。そして田植えの始まつた田。野菜を植えている畠。小川には水車が回り粉を引く。牛や馬に荷物を乗せた行商人が小道を歩く。漁村で育つた悠真が知らない世界だ。

「あなた、名前は？」

陽緋が悠真に尋ねた。

「悠真」

答えると、陽緋はふわりと微笑んだ。

「悠真ね……。あたくしは野江よ。そもそも、あたくしの名を呼ぶ人など少ないのだけれど」

言われて悠真は思つた。陽緋とは、称号である。彼女の名でない。それと同時に、惣次の言葉を思い出した。

野江に勝つほどの力か……

惣次は知つていたのだ。陽緋の名が「野江」であることを、そして陽緋がここに足を運んでいることを。下緋は術士の中で最下の存在。その惣次が、陽緋の名を知り、陽緋が足を運んでいることに気づい

ていた。悠真は惣次という存在が分からなくなり始めていた。

「ねえ、野江」

悠真は惣次について尋ねようと野江の名を口にすると、陽緋野江に従う術士が刀の柄をつかんだ。その術士の刀は黒色だ。野江のようないい朱塗りの刀ではない。

「陽緋様の名を気安く口にするな

苛立つ術士を陽緋が制した。

「気にしないで。悠真是術士でないのだから。けれども、お氣をつけなさい。紅城に住まう者の中には、頭の固い輩も多いから」

野江は風を含む髪を押さえながら言つた。野江は気安いけれど、高貴な人だ。風になびく黒い髪も、権威を象徴する赤い羽織も、全てが野江を美しく見せている。

「どうして、俺を連れて行つてくれるんだ？」

悠真は野江に尋ねた。野江は悠真に対して、とても親切にしてくれる。

「あの村の下緋に、惣次といたでしょ。彼はあの村を、そして悠真にとても感謝していたからよ。でも、覚えていなさい。復讐に走ると身を滅ぼすわ。紅城に着いたら、大人しくしていなさい。それが、悠真的身を守るところになるから」

陽緋のその言葉が、悠真的胸に残つた。野江の口から惣次の名が出る。確かに惣次は術士として野江の知る人であるのだ。悠真的故郷を愛してくれた惣次は、陽緋の知る存在なのだ。それがとても誇らしく思えた。

空挺丸は、風を切りながら空を飛んだ。

数時間飛び続け、開けた場所へと出てきた。そこは、家々が立ち並び大きな道は馬や人が往来していた。悠真是自分が田舎者と呼ばれる理由が分かつたような気がした。想像していたよりも、市街はずつと都会だつた。大きな建物も整備された道も、行き交う人々の活気も、悠真的故郷と異なる。ここが同じ火の国なのかと、悠真是思わず息を呑んだ。

「あれが紅城よ」

陽緋が指差した先には、赤い瓦と朱塗りの柱が美しい城が見えた。名の通り「紅城」である。火の国を守る赤い色を司る色神紅。紅が住まう城だから、赤い色が許されている。しかしそれは、悠真が想像していたよりもずっと莊厳で、悠真が想像していたよりもずっと赤が輝いていた。

野江が操る空挺丸は、紅城の庭の一角に降り立つた。紅城は高い朱塗りの堀に囲まれ、降り立つた庭には白い砂利が敷き詰められた。目の前に迫る城は大きく、幾重にも重なる屋根が印象的だつた。空挺丸が舞い降りると、人が走りよつてきた。

「陽緋様、御任務お疲れ様でした」

走りよつてきた数人の人は、地に膝をついて深々と頭を下げた。野江よりもずっと年齢の上の者たちが、深々と野江に頭を下げるのだ。当然ながら野江は陽緋。悠真たちが否応なく尊敬する術士の頂点に立つ存在。気安く話しかけることができる存在ではない。

「こちらの変わりは？」

野江が尋ねると、先頭に膝を折つた者が答えた。

「大事ありません。紅様がお呼びです。一刻も早く来るよう、とのことです」

野江は空挺丸から飛び降りた。赤い羽織がひらりと風に舞う。音もなく美しく着地した野江は、空挺丸に残る悠真を見上げて微笑み、すぐに視線を膝を折る者に戻した。

「分かったわ。すぐに参りましょ。 空挺丸の整備と、悠真のことをお願いするわ」とおっしゃるわ

すると、先頭に膝を折つた者が言つた。

「それが……紅様よりのご伝言では、陽緋様が拾つてきた小猿も一緒に連れて来るよう、とのことです」

野江は苦笑した。

「何でもお見通しなのだから。悠真、一緒にいらっしゃい」

悠真は野江に言われるまま、空挺丸から飛び降りた。紅城の地に

足をつけると、体に赤が染みこんでいくように思えた。確かにここは、赤の色神のいる場所だ。何よりも赤が輝いている。悠真はそう思った。

## 赤の城

紅城は天守閣を持つ大きな城。朱塗りの柱に白い壁が美しい。板張りの長い廊下は塵一つ落ちておらず磨き上げられている。障子の隙間から見える部屋は、一面畳が敷き詰められ、部屋の中で書物を広げて仕事をする人の姿も見えた。悠真は、高価な畳を見たのは初めてだった。幾重もの階段を上り、廊下を進む。そこは張り巡らされた策のように複雑で、紅を守っているようだった。悠真は粗末で泥だらけの着物を着ていることが恥ずかしく、穢れた自分が歩くことで城を汚しているような気がした。すれ違う人々は、野江に深々と頭を下げていくが、悠真は自分が笑われているような気がした。

「悠真は自分で紅城へ足を運ぶことを決めたのでしょうか。前を向くなさい。あなたは、思つたまま走り出す。そのほうが自然であったらしいわ」

野江の言葉は的を射ていた。

上へと昇り、窓の外に広がるのは壮大な景色。長い廊下の先に一つの木枠の扉があり、扉の前には若い男が座っている。片膝を立て、野江と同じ、柄も鞘も赤い朱塗りの刀を立てて持っていた。年齢は野江より下。悠真よりは上だろう。藤色の着物に、やはり赤い羽織が印象的だった。赤い羽織を着ていることから、扉の前の若い男も紅に近しい存在だろう。そして、高い地位を持つている。若い男の目が、じっと悠真を見ていた。

「調子はどうかしら？ 義藤」

野江は若い男を義藤と呼んだ。野江が気安く呼ぶから、悠真は彼が野江とも近しいのだと感じた。そして、惣次の話からも義藤の名が出てきたことを思い出した。惣次は、今、悠真の目の前にいる男のことも知っていた。ますます、惣次のことが分からなくなつた。同時に、悠真は目の前の男が恐ろしく感じた。まるで、抜き身の刃。鋭く、近づくものを傷つける。悠真は喉元に刀を突きつけられたよ

うな錯覚を覚えた。

「それは俺に対するのですか？それとも紅に対するのですか？」

悠真は義藤の言葉に戸惑った。彼は、紅を呼び捨てで呼んだ。ここは、陽緋の野江の本名を呼ぶだけで睨まれる場所。そんな中で紅を呼び捨てにすることは、ありえないこと。悠真の目の前にいる男は、色神紅と近しく、色神紅を呼び捨てにできる存在なのだ。

「大仕事を終えて戻つたあたくしに、労いの言葉の一つも無いのかしら？」

野江は立ち止まることなく前に進んだ。

「俺は、その小猿を信用できないので」

義藤は鞘に入れたままの朱塗りの刀を差し出し野江の行き先を阻み、野江はその行為に不機嫌さをあらわにした。悠真は自分が信頼されていないことは、紅城へ足を運んでからずっと感じていた。誰もが見せる敵意と不信感。ただ、野江が一緒にいるから野次を言われることも無く、取り押さえられることも無いというだけだ。術士の筆頭陽緋である野江は、それだけの権威を持つていて。そんな野江に逆らうのは、命知らずの愚か者のすること、もしくは野江と同等の立場にある者のすることだ。抜き身の刃のよつな義藤はおそらく後者だ。隠し切れない品の良さを義藤は持っている。田舎者の悠真とは異なる品の良さが彼にはあるのだ。

「この子をここへ招いたのは紅よ。軽率な真似はお止めなさい。それに、あたくしの目を疑うつもりなのかしら？」

野江の声色はいつもと同じだが、言葉の端々に苛立ちを隠していた。

「どんな理由で、小猿を招いたのか分からぬ。俺は朱護だ。紅を守る」

義藤は、まっすぐな人のようだった。陽緋の言葉にも意見を変えようとしている。そんな義藤がおかしいのか、野江が苦笑した。

「悠真は惣次の石を使つたわ。不思議よね。他者の紅の石を使えるのは、紅だけのはずなのだから」

義藤は一度悠真を睨み、再び野江に目を戻した。

「ならば、なおのこと紅には近づけられない」

もちろん、悠真も敵意を向けられることに苛立つた。義藤は悠真を害のある敵だと認識しているのだ。敵だと認識される覚えは悠真にない。なぜなら、悠真は家族を失い、故郷を失った。被害者であり、復讐者なのだ。感情は混乱し、苛立ちは隠せない。紅城という権威ある場所に足を運び、赤い羽織を許された立場のある人々に直面しても、怯むことは許されない。

「ちょっと待てよ」

悠真是足を踏み出した。このまま斬り殺されるかもしない。それでも悠真是構わなかつた。あの嵐の日に、失いかけた命だ。未来は土砂に流され、未来は祖父や惣次と共に死んだ。この場に己の血を流し、紅の顔に泥を塗りたかつた。一步足を踏み出した悠真と同じように、義藤も軽く腰を浮かせた。

「おやめなさい、悠真」

野江が悠真の前に手を出し、行く手を阻んだ。

「あなたもよ。刀を引きなさい、義藤」

野江に従うのではなく、彼自身の意志で義藤は刀を下げる。義藤は、本当に悠真の命を奪おうと思えば、野江の制止に従はずがない。悠真に強い敵意と殺意を向けつつ刀を下げる。何を考えているのか分からぬ人だと悠真是思つた。悠真には、義藤の行為が、紅が悠真を試している一貫のようと思えるのだ。そんな悠真の気持ちを知つてか知らずか、野江は小さく微笑み、廊下に膝をついた。

「座りなさい、悠真。紅の前よ」

野江に言われて、悠真是慌ててその場に正座をした。汚れた服の土が、廊下に汚れを落としていく。野江と義藤が深く頭を下げるから、悠真もそれに習つて頭を下げ、ゆっくりと流れのような所作で義藤が襖を開いた。

## 赤の色神紅（1）

むせ返るほど香の匂いが、襖を開くと同時に辺りに漂った。悠真の心臓は嵐の海のように激しく脈打っているのに、頭は晴天の空のように冴え渡っていた。紅は色神。この火の国の頂点に立つ。紅に面通しを行うことは、普通の人生ではありえない。誰もが感極まるはずだ。なのに、悠真は紅に對して尊敬の念は抱いていない。故郷を、家族を奪つた存在をどうして尊敬することができようか。悠真はそれほど大人でない。頭を下げたまま目線だけを上に上げてみると、朱塗りの部屋が見えた。それ以上はどんなに目線をあげても何も見えない。それが、自分と紅との間にある長く、果てしない距離のように思えた。

「野江、よく戻った。どうだつた、惣次が最期の人生を生きた村は？」  
穏やかな男の声が響いた。その声はどこか悠真に惣次を思い出させた。

「壊滅していました」

野江が答えた。悠真は声の主が紅なのだとthoughtた。紅は色神だ。通常は紅が男なのか女なのか、若いのか老人なのか知らない。ただ、その穏やかな声の主は色神の印象とは異なつた。この部屋に満ちる鮮烈な赤い色と穏やかな男の声は印象が異なるのだ。不思議な気分だつた。何より不思議に感じたのは、その声がとても惣次に似ていたからかもしれない。穏やかさが、大きさが、包み込むような広がりが、祖父と酒を酌み交わしているときの惣次と同じだつたのだ。むせ返るような香の匂いも、男とは不釣合いで。

「そうか……惣次は死んだんだな。最期まで紅の石を使い続けるとは、惣次らしい」

僅かに男は苦笑していた。紅であるう男は言つた。その声がとても哀しげで、色神が下緋の惣次を案ずることが意外だつた。

「はい。そして、惣爺の石をこの子が……」

野江が悠真を指した。悠真は頭を下げたまま、二人の会話を聞いていた。耳だけで部屋の中の様子を感じ、部屋に満ちる鮮烈な赤を全身で感じようとしていた。その一人の会話に割り込むように、気高く高貴な声が響いた。

「遠爺、わらわにもしゃべらせよ。義藤、野江、顔を上げよ。よう戻つたな、野江」

それは、女性の声のようだ、少年のような、不思議な声だった。確かには、その声が発せられると部屋に満ちる鮮烈な赤が一層強まるということだ。赤い声が花開き、赤い声が部屋の空気をすべて変えていく。

「気遣い痛み入ります」

野江が答えた。悠真は紅に顔を上げることを許されていない。何も見ることが出来ないから、悠真は耳で必死に辺りを探つた。この部屋には惣次と似た声の男と、高圧的な女性がいる。どちらが紅なのか、悠真は想像がついていた。このむせ返るような香の匂いも、目を逸らしたくなるような存在感も、赤に相応しいのは彼女だ。悠真是赤を感じていた。襖が開いたときから感じた色。包み込むような大きく鮮烈な赤が目の前にあつた。

「わらわに分からぬことなど、何もあらぬ」

悠真是彼女が紅であると思った。高貴な香の匂いがそれを示していた。香の匂いも、気高い言葉も、全てが彼女は紅であると示していた。

「あら、そうだつたわね」

野江は苦笑していた。

「どうであつた？」

一言、彼女は言い、野江は答えた。

「漁村は壊滅です。生存者は三十余名。降り続く雨に山が崩れました。山が崩れるまで、あたくしたちは中に入ることが出来ませんでした。外部からの進入を阻みつつ、内部で雨を降らせていました。

隠れた術士がいるのでしょうか。それも、強大な力を持った。先代前の紅の石を隠れ持つ者は限られています。おそらく官府の仕業かと

一言、付け加えるのならば、村を破壊して相手を殺してでも止めろと言わればできなくともありませんでした……」

まるで自らの実力を伝えるような野江の発言に、苦笑する紅の声が聞こえた。

「分かつてある。野江はわらわの自慢の、歴代最強の陽緋じや。野江の力は信じてある。しかし、相手も相手じゃ。わらわを引きずり出すために、そこまでするとは。愚かな奴らよ。したところで、わらわは要求を呑まぬのに」

その言葉で、悠真の中の何かが結びついた。祖父が死に、惣次が死に、村が滅びた理由が結びついた。全ては、紅に関する事だ。紅が何かの要求を拒否したから、村は滅び、悠真は大切な者を失った。

悠真の中の何かが沸々と沸き起こつた。憎しみ、絶望、全てを巻き起こし大きな波を作り出していく。村を滅ぼしたのは、紅だ。間違つた矛先を向けていることは理解している。けれども、自分を抑えることが出来なかつた。

「あんたが……」

村が滅んだのは、紅せいだ。悠真は顔を上げた。叱責され、処罰されるのは覚悟の上。今の悠真は、それを考える余裕がない。目の前に広がるのは、朱塗りの壁が鮮やかな小部屋。畳みの緑色が朱塗りの壁の鮮やかさを際立たせ、小窓から光が差し込み、部屋の中を照らす。一段高くなつた奥にかけられた簾は半分開けられ、ひじ置きにもたれかかるように、しどけなく横たわっているのは、紅色の着物が鮮やかな女性。黒髪は結い上げられ、紅い簪が美しい。赤が高貴とされる火の国では、唇に紅をさす人はいない。鮮やかな口紅と、紅く線が引かれた目元がとても魅力的だつた。妖艶で、儂い。悠真は彼女以上に化粧が似合う人を思い浮かべることが出来なかつた。間違いなく、それは紅。誰よりも鮮烈な赤を持っている。紅は夢に現れた赤とどかが似ていた。高圧的な雰囲気が同じだ。紅の

横に控えるように、惣次と似ている男が座っている。惣次と似ているが、惣次とは異なる。赤く美しい羽織が二人の違いを示していた。惣次は死んだ。同一人物のはずがない。それに、下緋の惣次と赤い羽織を結びつけることが出来なかつた。

赤は美しい色じやろ。

夢に現れた赤の声が悠真の脳裏に響いた。憎いはずなのに、悠真の目は彼女を見つめ、心は彼女を捉えていた。とても美しい人。赤が鮮烈に悠真の心に刺さる。赤が視界に煌く。

紅は赤い煙管を口にくわえていた。煙管を持つ指先の爪は紅く塗られ、身を預けるひじ置きの隣には火鉢と香立てが置かれていた。

「あんたが滅ぼしたんだ！」

愚かな行為だ。悠真は、感情に任せて紅に飛び掛つた。野江の隣を駆け抜け、義藤の隣を通り抜けようとした。悠真は野山を駆けて育つた。足腰は丈夫で、悠真より速く駆けることが出来る者は村にいなかつた。筋肉が躍動し、心臓が高鳴る。強い緊張の中、復讐心だけが、悠真を突き動かしていた。何もしなければ、悠真は物と同じだ。再び生きるために、夢を見るため、現実を走るために、悠真は目の前の紅を憎んだ。紅を守る義藤が体を起こす。世界がゆっくりと動き、悠真の耳に自分の呼吸の音が響く。

「うわあああ！」

悠真は己を奮い立たせるために大声を上げ、何かに取り付かれたようには、悠真は義藤の隣を駆け抜けようとした。しかし、相手は紅を守る存在。火の国でも卓越した力を持つている。

「愚かな」

一言、耳元で響いた。荒立つ悠真の感情とは逆に、義藤の声は静かで、水の上に生じた小さな波紋のようであつた。

白刃を首に突きつけられ、悠真は身動き一つとることが出来なかつた。義藤は悠真を容易く制し、格の違いを否応なしに感じさせられた。抜刀した義藤が悠真と紅の間に割つて入り、悠真に白刃を突きつけるのに要した時間は一瞬のこと。野江に地に倒された時と同

じょうに、悠真は何が起こったのか分からぬのだ。

「わらわが何を滅ぼしたと？」

紅がゆっくりと体を起こした。紅が動くたびに、鮮やかな赤い色が動く。そして、悠真の喉に白刃を突きつける義藤に言った。紅の声は赤く輝く。

「義藤、案するでない」

そして紅は悠真に言った。

「そちは、生き残りとな」

紅の持つ煙管から、白煙が上がっていた。紅の動きの一つ一つが優美で、悠真の心を惹き付けた。歩く姿が気高い。流すような横目が美しい。あまりに高貴で、あまりに気高い。それが紅なのだと示していた。彼女以上に、赤が似合つ存在はこの世界にいない。憎い。紅が憎い。赤が憎い。なのに、美しさから目を離すことが出来ない。

「わらわに何の罪があると申すのか？」

紅は優雅に微笑み言った。赤い口元がほろりと綻ぶ。

「野江。小猿を連れてくると決めたのは野江じや。何が野江を動かした？」

紅の持つ煙管が野江を指した。紅の白く細い手が持つ煙管がゆらゆらと白い煙を上げていた。朱塗りの下地に金の装飾が施された、美しい煙管だ。

「まあ良い、ここへ小猿を招いたのはわらわじや。小猿の村が滅びたのは、わらわに要求を呑ませようとした者に違いない。そこに惣次がいると知つておつたのじゃろう。わらわたちが惣次まで見捨てるとは、相手も思つておらんじやつたじやろうな」

悠真は紅の口から下緋である惣次の名が出てきたことに疑問を持ったが、何も問うことが出来なかつた。何も聞えない自分。無力な自分。目の前には、紅がいる。果てしない怒りが込み上げてきた。紅は知つていたのだ。要求を呑まないことが、村の滅亡につながることを。紅だけでない。野江も、義藤も知つていたのだ。知つていて、見捨てた。紅は高貴な存在だ。色神であり、火の国を支える唯一無

二の存在。だからと言つて、悠真にとっては見知らぬ人だ。村の方が大切だ。村を見捨てた彼らが許せなかつた。

「だから、あんたが殺したんだ！」

悠真の感情が爆発し、色が悠真を包んだ。一つ、赤い色に悠真は心の中で手を伸ばした。

わらわの色を貸そうぞ。

赤が悠真に言つた。悠真は赤の声に心の中で頷いた。

## 赤の色神紅（2）

祖父は悠真が幼い頃から口癖のように「心を平静に」と言つていた。悠真はそれが出来ず、小さな頃は、年上の子供に食つて掛けた。喧嘩をして、負けたことは無かつた。負けず嫌いなのは、悠真的性分だ。誰かに自分という存在を否定されたり、踏みにじられたくない。

（そうやつておつたら、大事なもんを見落としてしまう。色は力を持つ。その色を支配するものは、どれだけの力を持つんかのう……誰もが、己の一色をもつておる。同じ赤を持つ人であつても、色が異なる。負けず嫌いで喧嘩つ早い悠真の色は、どんな色かのう？）  
惣次が一度、悠真に言つた。感情に任せて、殴り合いの喧嘩をした後のことだった。

（色は力を持つんじや。その中で赤は強い力を生み出す。赤は強い色じや。強い分、己を守り、相手を傷つける。赤い色がなければ、生き物は生きられん。命は赤で支えられておる。悠真の体にも赤は流れ、植物は緑で満たされ、空は青で輝く。色の中でも赤は強く、美しく、残酷な色じや。だから人は赤を敬い、赤の力を知らねばならん。この紅の石は、色神紅が一日ひとつだけ生み出す石。原石がさらに力を發揮し、わしら術士が使えるように加工師が加工する。強い術士ほど強い石を持つ。だから術士は忘れてはならぬ。その力は、命を奪うほどの力であることを。悠真が術士であつたとして、悠真は命を守る術士になるのか？命を奪う術士になるのか？）

惣次は紅の石を撫でながら赤い色の力を悠真に教えてくれた。赤い色は強い力を持ち、命には赤が流れている。そもそも悠真は、術士の才覚に恵まれず選別から落ちた。どれほど術士に憧れを抱いても、術士になる夢はかなわない。だから、悠真は惣次の話をあまり聞いていなかつた。

目の前に赤い色が迫つた。赤は力だ。相手を傷つけ、憎むものを

遠ざける。だから悠真是赤を求める、復讐の力となる赤を求めた。探すまでもなく、目の前には、義藤の紅の石があった。その紅の石が鮮やかに輝き、色が迫り、強い光と熱が辺りを包んだ。悠真是義藤の赤になる。

「おやめなさい、悠真。

無色な声が悠真を制した。しかし、悠真是止まらない。己を止めることが出来ない。己の体に赤が広がっていくことを感じながら、悠真是赤に身を浸した。

赤 赤 赤

高貴な赤い色が目の前に迫った。

「お止めなさい！」

野江の声が響いたが、悠真是抑えることが出来なかつた。溢れ出る力を制御できない。義藤が首から下げるにつれていた紅の石は強大な力を発し、紐は切れ、義藤が吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。

「お止めなさい！」

振り返れば、野江が紅の石を使い、悠真を押さえ込もうとしていた。置みが剥がれ宙に浮く。野江の言葉で冷静に戻つた悠真是止めようしたが、止めることが出来ない。溢れる力がそこにあるのだ。野江の紅の石の力と、悠真的せいで暴走した義藤の紅の石の力がぶつかり合い、渦を巻いていた。

「悠真！」

野江の声が響いたが、悠真的世界は赤で埋め尽くされていた。義藤の紅の石が悠真に力を与えているのだ。赤い世界。渦を巻く力。

「他人の石を使えるとは。やはり、連れてこさせて良かつた。遠爺も同じ意見だろ」

その声は間違いなく紅の声。悠真的赤の世界に、紅色の着物を着た紅が入ってくる。歩き方はしどけなく、それでも美しい。強大な力が渦巻く中、どうして紅が普通でいられるのか分からぬ。紅の周

団だけ、赤い色が弱まり、彼女は足を進め、紅の着物を引きずりながら、ゆっくりと簪を引き抜いた。長い黒髪がはらりと落ちる。力が渦巻く中でも、紅だけは別世界に存在しているのだ。紅が紅の石の力を収束させていく。

「私は、紅だ。私以上の紅の石の使い手なんているはずが無いだろ。術士は色の力を引き出すことしか出来ない。けれども私は色神紅。紅の石を収束させることができ、いかなる紅の石も使用することができる。加工された石であつてもそれは然り。赤は、私の色だ。

赤、なぜ小猿に力を貸す」

紅が簪を地に捨て、悠真の手をとつた。色白の細い手は、少し冷たかつた。

「俺は、俺は……」

悠真に満たされていた赤が少しずつ収束されていった。どんな赤い色であつても、色神紅の前では逆らえないようであつた。憎しみの赤を、紅が慈しみの赤へと変えていく。紅の持つ赤い色は誰が持つ赤よりも美しい。

「村を壊滅に追い込んだ者は、必ず捕らえてみせる。お前が手を汚す必要もない」

紅は断言し、微笑んだ。赤い色が綻び落ち、悠真の心を和ませた時、悠真の体の力は抜けた。思い起こせば、悠真は赤い色の牢獄にいたような気分だつた。全ての感情が憎しみの赤に染められていき、そこから紅が救い出してくれたのだ。安堵と疲労と虚脱感で悠真は立ち尽くしていた。

## 赤の色神紅（3）

紅の部屋は元の形を保つておらず、部屋の端で義藤が倒れていた。野江が慌てて義藤に駆け寄り、体を起こしていった。紅の石の暴走の最も近くにいた義藤が無事だとは思えなかつた。

「遠爺、大丈夫か？」

紅は振り返り、控えていた惣次似の男に言つた。男は先ほどの騒ぎが嘘のように、整然と座り、赤い羽織にかかる埃を払つていた。

「問題ない。まだまだ現役だ。それで紅、お前はどう思う？ 惣次の石を使つた子供は、義藤の石まで使つた。これは加工が悪いという言い訳は出来ないぞ。義藤の石は、柴が加工したんだろ。柴が加工を誤るはずが無い。紅、お前だけのはずだ。他人の紅の石を使えるのも、他人が使つた紅の石を収束させることが出来るのも……。それは色神の特別な力のはずだ」

紅は頷き、苦笑しながら悠真に言つた。

「紅の石は、持ち主に合わせて作られている。誰の物でもない石ならば未だしも、義藤のために加工された石を使うとは、どういう体の仕組みをしているんだ？ 実力者義藤のために、我が国最高の加工師の柴が加工した石だ。小猿、お前は私と体等の力を持つつもりか？」

第一印象のような、他者を見下す高圧的な仕草は無く、そこにいたのは普通の人。親しみやすく、人の中心にいるような存在。それが今のは紅。悠真の不信感を察知したかのように紅は言つた。

「ああ、あれは理想の紅像、その一だな。他にもその二、その三と続くから、いつか見る機会があるかもしれないな。 それで、野江、義藤は？」

紅は振り返り、野江に言つた。

「問題ありません。今は氣を失つていますが……」

紅は一つ息を吐いた。義藤の無事を知り、心底安心したらしい。

「義藤には、いつも悪いことをしているな、私は。本当に良かつた」  
紅が安堵したように微笑み、野江が苦笑していた。

「それなら、義藤に迷惑や心配をかけるのをお止めなさいな」と  
すると、紅は困ったように俯き、話題を変えようとしているように  
悠真に言った。

「それで、義藤の石を返してもらおうか」

悠真は逆らいがたいものを感じて、義藤の紅の石を紅に手渡した。  
騒ぎの音を聞きつけてか、人が走ってくる音が聞こえ、紅は廊下  
の先を見て言った。

「野江、悪いが対処してくれないか？佐久と都南以外は入れるな」「分かりました」

野江は紅に一度、頭を下げて廊下へと駆け出した。

状況が整理できず、身動き一つ取れない悠真を横目に紅は義藤に  
歩み寄り、容易く膝を折ると、義藤の肩を揺すつた。その姿が、色  
神紅の印象とかけ離れていた。彼女は紅のはずだ。赤い色に愛され  
ている。彼女が放つ赤い色は、誰よりも美しく、力強い。そんな紅  
が使用者の義藤のために容易く膝を折るのは、とても意外な光景だっ  
た。

「義藤、義藤。大丈夫か？」

義藤は小さくうめき声を上げて、慌しく体を起こした。義藤は抜き  
身の刀のような顔立ちをしている。目も、声も、仕草も品が良い。  
義藤は良家の息子かもしれない。荒々しいのに品が良いのは、彼の  
育ちでなく生まれが良いからだろう。

「紅！」

そして義藤は素早い動作で刀をつかんだ。

「義藤、問題ない。悪かったな、危険な目にあわせて。協力してく  
れてありがとう。ほら、義藤の石。騒ぎは野江が対処している」  
言つて紅は、義藤の石を彼に返した。義藤が心底安堵したよう、  
深く息を吐いた。

「信じられない、俺の石を使うなんて」

警戒の色を隠しきれない義藤を紅が止めた。

「信じられないから、ここまで連れてきた。そして、試したんだ。柴が加工した義藤の石を目の前に出して。義藤も田の当たりにしただろ、自分の石を使う様子を」

紅が言い、義藤はそれ以上何も言わず、彼女は立ち尽くす悠真に言った。

「私だって、好き好んで村が滅びるのを受け入れたわけじゃない。最善の策を練り、全力を尽くした。それが、この悲惨な結果だ。名前は悠真だったな。私は野江から報告を受けた。惣次の石を使い、村人を守った者がいる。だから、私は野江に命じたんだ。その奇妙な力を眠らせておくか、自らの意志でここへ来るか決めさせようと。そして悠真はここに来た。その力も証明した。安心しろ。野江が情報を持ってきた。必ず犯人は見つけ出す」

義藤は不審そうに悠真を見たが、何も言わなかつた。彼にとって、紅が全てであるようだつた。

「紅、それよりもどうやって誤魔化すつもりだ？ 騒ぎ立てられるぞ」悠真に対する警戒を解いていない義藤は散らかつた辺りを見渡した。

「そうだな、義藤。後は任せた」

紅は優雅に微笑み、呆れているのは義藤だ。

「まったく、あなたはいつも無茶をする。小猿の力を試すとか言って、わざと苛立たせるようなことを言つて……」

不満を口にする義藤を紅が一喝した。

「義藤、黙つていろ」

二人の間に、色神と護衛以上の親密さを悠真は感じた。

義藤は慌しく部屋を片付け始めた。畳を元の場所に戻し、壊れた物を小部屋のさらに奥へと押し込んでいく。同時に、新しい物と次ぎ次と出していく。誤魔化しきれない場所は、物を動かし器用に隠していく。慣れた動きが印象的だつた。

「紅、すぐに片付けられないところは、後で佐久と都南と一緒に片付ける」

紅は部屋の中央に座り、慌しく動く義藤を見ており、悠真は相変わらず、部屋の片隅で立ち尽くしていた。

しばらくして野江が戻ってきた頃には、部屋はすっかり片付けられ、野江は片付けられた部屋を見て苦笑した。

「義藤、あなた片付けるのが上手になつてているのね」

義藤はむつと押し黙つていた。もしかしたら、義藤は片付けに慣れていらぬのかかもしれない。

「野江、悠真を連れて行つてくれ。村を滅ぼした犯人は、必ず再び動き出す。今度は、私を狙つてな」

紅は不敵に笑つた。

「それよりも、遠爺。惣爺が死んだ。休んでも構わないが？」

紅は黙つて控えていた惣次に良く似た男に言い、男はゆっくりと口を開いた。

「惣次は一年前に死んだ。今更、何も変わらない。ただ、惣次の便りに書かれていた美しい村が滅び、氣の良い海の民が死に、氣の合う子供が無茶をする小猿になつてしまつたことがとても虚しいだけだ」

男は惣次と良く似た顔で、惣次と良く似た声で、惣次と良く似た口調で言つた。悠真は男と惣次の関係が気になつた。男は惣次と便りを交わす仲だ。悠真の知らない惣次を知つていて。なのに、惣次が死んだことに涙一つ見せず、平然としている。それがとても機械的で、無感情のように思えた。

「野江、最初に小猿を連れて來ることを決めたのは、野江だ。相手をしていろ」

惣次と良く似た男は、悠真のことを「小猿」と呼んだ。惣次と似ているからこそ、無性に悲しくなつた。

## 赤の仲間（1）

悠真は野江と共に紅の部屋から退室した。義藤は退室するのも気にも留めず、さらに片づけを続けていた。どうやら、義藤は生真面目な性格らしい。悠真と共に退室した野江は悠真を連れて歩いた。泥だらけの悠真は、野江の命令で風呂に押し込められた。田舎物の悠真が初めて見る大きな風呂場だった。初めて使う大きな石鹼と麻布で体を洗い、湯船を使うと体が温まり、心がほぐれた。湯に入つていると、先ほど会った紅の姿が悠真の脳裏に浮かんだ。理想の姿その一と呼んだ、第一印象。赤色が誰よりも似合う存在。強く何者も恐れないような第二印象。赤色が鮮烈に蘇り、心を赤色に染めていく。

「赤、赤、赤……」

悠真がつぶやくと、風呂の中で大きく反響した。

のう、我が器は美しかる。

同時に赤の声が響いた。突如、湯煙が赤く染まり、湯の上に赤が座つていた。赤い着物に赤い髪。赤い瞳が悠真をしかと見つめる。

「あんた、いつたい何者なんだよ」

悠真は赤に言った。赤はにいつと笑い、赤い扇子を開き口元を隠すと、けらけらと声を出して笑つた。

まさか、小猿が義藤を上回るとはの。紅も想像しておらなんだつたじやろ。紅の慌てる様子と言つたら……  
赤は嬉しそうに笑つっていた。

赤。それが我が名じや。我が器の紅は美しかる。我が色に染まれ。

言つた赤の目は鋭く悠真を見据えた。

赤が小猿を守ろうぞ。我が紅も小猿を守ろうぞ。我が色に染まれ。さすれば、赤が小猿を守ろうぞ。されど、小猿が赤を選ばぬなら、私は小猿を守らぬ。何ゆえ、我が利益にならぬ小猿を守るの

じゃ。ゆめゆめ忘れるでないぞ。我が色の力を欲するのなら、我が色に染まれ。

赤は鋭く言い放つと、ゆっくりと向きを変えた。

機会があれば、また会おう。

赤が言ひつと、赤い世界が消えた。そこには、白い湯煙があるだけだ。

赤との対話からのぼせはじめた悠真は湯から出ると、用意された着物を纏つた。汚れ一つ無い仕立てられたばかりの着物を、着て出ると、そこには紅城の使用者の女性が待っていた。仕立てられた着物は染み一つなく、田舎者の悠真は新しい着物を初めて着た。

「陽緋様がお待ちです」

待つていた使用者が悠真に言った。誰も野江を名前で呼ばない。つまり、悠真はとても失礼なことをしているということだ。それと同時に、陽緋などのように感じているのか不安になつた。誰も本当の野江を見ていない。もし、悠真が野江の立場からきっと辛く孤独に感じるだろう。使用者に連れられて歩く廊下は、野江と歩いた廊下と違つて見えた。陽緋野江も赤を持つている人物だから、野江が一緒でない廊下は紅城の中の色を殺風景にしてしまうのだ。紅城は人の気配に乏しく、悠真は誰にもすれ違うことなく紅城の一室に案内された。

部屋の片隅で野江が座つていた。背筋を正し、正座をする野江はとても赤が似合つた。物の少ない部屋には、小さな書卓と積み重ねられた書物が置かれていた。

「見違えたわね」

使用者は、悠真が部屋に入ると何も言わずに下がつた。

「お座りなさい」

野江が言い、悠真は戸に近い隅に座つた。戸に寄りかかっていると、すぐにお口がある安心感があつた。悠真の考えに気づいたのか、野江は笑つた。

「紅に会つてどうだつたかしら？」

野江の言葉に引き出されるように、悠真は脳裏に強烈に焼きついた、高貴で高压的な紅の姿を思い出した。

「印象と違つたでしよう？ 紅は賢い子よ。生き残るための術を知っている。だから、理想の紅像その一、その二と作り出し、いくつもの紅を演じられるのよ。それに、義藤のことを嫌いにならないでちようだいな。義藤は、若いけれど有能な子よ。天性の才能に加えて努力を惜しまない性分なの」

野江の言葉の一つ一つが、悠真の中で大きな波紋を作り出していた。紅を思う野江の気持ち、そして野江が義藤を信頼していること。彼らは、強い絆で結ばれている。

悠真が野江に返事をしようとしたときだ。悠真が寄りかかっていた戸が突然開いたのだ。

「野江！」

入ってきたのは、二人の男。野江の名を呼んだ一人が悠真の存在に気づかず、悠真に引っかかる派手に転び、悠真は上に圧し掛かる重みで身動き一つ取れなかつた。悠真の上に倒れた人物も起き上がり必死にもがいているようだつたが、それが上手くいつていな。どうして、人の上から起き上がるだけで、苦労するのだろうかと不思議に思うほどだ。

「どけ、どけ。どけよ」

悠真はもがく男の下で、必死に言つたが、重みで思うように声にならなかつた。失礼かもしれないが、悠真と彼らの面識はなく、遠慮をする必要もない。赤い羽織が視界の端でひらめき、彼らも悠真が容易く言葉を交わすことが出来ない存在なのだと教えられた。

「野江、これが義藤を吹つ飛ばした小猿だな」

一人のうちの一人、転ばなかつた方が悠真の上に压し掛かった男に手を貸しながら言つた。入ってきた二人とも、赤い羽織を纏つていた。彼らも、紅に信頼される存在なのだ。野江を名で呼んでいることから、彼らの立場が分かる。

「佐久は相変わらずだこと」

野江は転んだ男を見て笑っていた。悠真は笑う野江を初めて見たような気がした。

「話を誤魔化すなよ。俺たちを差し置いて、楽しい話を進めているみたいじゃないか」

手を貸した男が言った。手を貸した男は長身で浅黒い肌が印象的だった。その強い目に見られて、悠真は思わず目をそらした。まるで、強い獣を目の前にしたような気分だ。目を引いたのは、帯刀した朱塗りの刀。野江や義藤がもつている朱塗りの刀より大きく、力強かつた。

「それよりも、悠真を起こしてあげてちょうどいいな」

野江が言い、男は悠真にも手を貸した。男の手は、漁師の手のように厚く大きく、力強かつた。

「紹介するわ。彼が都南。紅の持つ軍である朱軍の將軍。朱将の都南よ。剣技や馬術、あらゆる武術、そして策略に優れているわ。術士の才覚を持たず、朱将になつたのは都南以外に存在しないわ」

どうも、と手を貸した方の男が言った。そして彼は野江を睨んだ。

「野江、その紹介は術を使えない俺に対する嫌味か？」

長身で日に焼けた肌が快活そうな男だ。この紅城に、術を使えない人がいることに悠真は安堵した。紅城は赤い空氣で満ちている。使用者も紅の石を首から下げている。悠真は今まで、一人だけ術士でないことに不安を覚えていた。だから、都南が術士でないことに安堵し、同時に術士の才覚を持たない彼がどのようにして朱軍に入り、朱将にまで上り詰めたのか不思議に思つた。濃紺の着物に、赤い羽織が美しい。野江と同じくらいの年齢だろう。落ち着いた大人の印象だつた。都南の目は獣のように鋭いが、今は穏やかな表情を浮かべていた。

「僕も忘れないでおくれよ」

言つたのは、派手に転んだ男だ。小柄で希少な眼鏡をかけている。優しそうな印象。薄青の着物に、やはり赤い羽織が栄えている。都

南と親しげで、同年齢ほどだろう。

「あちらは佐久。主に研究や分析を担当しているわ。術士としても、  
灯緋の力を持ち、あたくしに次ぐ術士。他色の石を紅の石と同じく  
らいの威力で使用できる数少ない存在よ。他国情勢や歴史に詳し  
く、歩く書物のような存在ね。唯一の欠点は、壊滅的なほど運動能  
力が低いこと」

どうも、と佐久は眼鏡を直しながら言った。

「野江、僕に嫌味は効かないよ。全てを受け入れているからね」  
柔和な顔つきをした彼は、楽しそうに笑った。他人を怒鳴ったり、  
憎んだりすることに縁遠い存在のようだ。紅は仲間を持つている。  
悠真が出会ったのは、きっと一部だろうが、赤が似合う人たちばかり  
だった。

## 赤の仲間（2）

術士は五つの階級に分けられる。最も強い力を持った存在が陽緋。術士の中でも一人だけしか名乗れない。陽緋に次ぐのが灯緋。そして、大緋、中緋、小緋、下緋とつながる。大部分が下緋だ。小緋以上は、幹部地位である。まるで仮のよつた笑顔をしている佐久は灯緋、とても優れた存在なのだ。

「そうだったわ、悠真には義藤のことも、紹介していなかつたわね。義藤は紅の護衛を担当する朱護の筆頭、朱護頭。あの若さで朱護頭なのだから、行く末が恐ろしい術士ね」

都南が笑いながら言った。

「ずいぶん義藤を買つてているんだな。義藤には嫌味の一言も無いのか。数年後には、陽緋の地位を奪われるかもしれないぞ。歴代最強の陽緋と言えど、その上がりがないという保障はないんだからな。義藤は努力を惜しまぬ天才。その才は紅城へ足を運んだ瞬間から明確だった。最近、体が鈍っているんじゃないか、陽緋殿？」

まるで、先ほどの仕返しをするかのように、都南は笑い、白い歯が浅黒い肌に栄える。野江は動じることなく切り返した。野江の方が一枚上手だ。

「あたくしの心配をしてくださつてありがとう。でも、数年後には朱将の地位を奪われるかもしれないよ。今は若い義藤も、いずれ成長するわ。剣技だけでなく、知識や判断力も兼ね備えるでしょうからね。お気をつけて。術を使えない朱将都南様。紅が義藤を陽緋に任ずるか、朱将に任ずるのか、まだ分からなくてよ。あたくしの心配はご不要よ」

一番笑つてしているのは、佐久だつた。

「底知れぬ嫌味合戦だねえ。朱将も陽緋も短命なんだから、変な冗談はよしなよ。まあ、朱将と陽緋が別人でなければならない、といふ決まりはないんだから、どちらも地位を奪われるかもしれないよ。

でもね、きっと紅はそんなことしない。一人がその職を続けたいと願っているうちはね」

佐久が笑いながら二人に言った。穏やかな表情をした佐久が最も腹黒い存在なのかもしない。

悠真は不思議に思った。野江も都南も佐久も、とても親しげにしてくれる。彼らが悠真に敵意を向けていないことは明らかだ。都南が小さな台を出し、陽緋が箱から茶道具を出し、茶を淹れてくれた。さすが陽緋ということだろう。湯を沸かすのも石の力で瞬く間だつた。このように、生活場面で石の力を使用するにはからくりが必要だ。悠真はただの鉄箱にしか見えないものに紅の石を入れることで、鉄箱が竈の代わりをすることが信じられなかつた。彼らは悠真のことを気にすることなく談笑していた。些細な甘味も出された。田舎者の悠真が口にしたことのないような甘味。佐久は何食わぬ顔で、都南の甘味をつまんでいた。どうやら、佐久は甘味に目がないらしく、都南と佐久は親しいようだ。まるで、都南は佐久の保護者のように、悠真は感じていた。

彼ら紅の信頼する人たちは、立場のある人なのに使用人を使わない。彼らは、彼ら仲間の世界を作り出しているのだ。まるで、他人を警戒しているようであつた。他人を警戒しているのに、悠真に警戒することはない。この場に最もそぐわない田舎者の小猿を、彼らは当然のように受け入れている。それは紅にも言えることだが、とても奇妙で不思議なこと。

「どうして……どうして俺に警戒しないんだ？」

耐えることが出来ず、悠真は紅から信頼を得ている彼らに尋ねた。すると、佐久が笑つた。敵意のない、優しい笑いだ。

「当然だよ。悠真君は、惣爺が認めた人で、惣爺が信頼した人だからね」

悠真は不思議に思った。どうして彼らは、只の下緋である惣次のことを知っているのだろうか。彼らにとっては、惣次は足元の存在のはずだ。術士の世界で年齢が関係あるとは思えない。関係あるのは、

力だけのはず。若い野江が陽緋であることが一番の証拠だ。

「惣爺が信頼した人に、悪い人はいないってか」

都南がお茶を一口、口に含んだ後に言った。

「どうして、惣次のこと……」

悠真は分からなかつた。都にいる彼らが下緋の惣次を知るはずがない。野江は柔らかく微笑んだ。

「当然のことよ。惣爺は、あたくしたちの戦いの師匠。灯緋としての力を持ち、先代の、そして先々代の、そのまた前の陽緋の師匠でもあるわ。あたくしも、佐久も、もちろん義藤も、惣次に術と剣技を教わったのよ。あら、都南は剣技だけで、佐久は術だけだったわね」

野江は思つたより嫌味が多い。美しい彼女に似合わず、悠真は笑いそうになつた。しかし、その内容に戸惑つて野江の嫌味に触れることはできなかつた。惣次が野江たちの師匠。術に優れた存在である。との内容はにわかに信じられなかつた。野江は紅の石を触りながら言つた。

「紅だつて、惣爺を慕つていたわ。惣爺と……悠真も会つたでしょ。惣爺と双子の遠爺。あたくしたちは、惣爺から戦い方を学び、遠爺から学を学んだわ。二人は、紅城の両腕。あたくしたちは一人に守られて育つたわ。一年前に惣爺が戦いで深手を負い、術士として十分に戦うことが出来なくなるまではね。惣爺は戦えなくなつたわ。だから、惣爺を守るために、別の生き方を渡したのよ。それは、數十年にわたり紅城を支え続けた、一人の夢。一足先に、引退した惣爺が新しい人生を手にした。誰も反対したりしないわ。だつて、それが惣爺への、せめてもの礼なのだからね」

悠真は惣次の姿を思い浮かべた。祖父と酒を酌み交わし、高らかに笑う惣次。その惣次が彼らの師匠だということは、容易く信じることなど出来ない。野江たち彼らは赤い羽織を許された存在。悠真が容易く言葉を交わすことは許されない。そんな彼らと惣次を結びつけることが、悠真には出来なかつた。しかし、彼らが、紅が、悠真

に対しても警戒しないのは、悠真が惣次と親しいから。そう思つと、全て納得がいく。

術士はいいことばかりでない。

惣次の言葉が悠真の胸に響いた。惣次は優れた術士であり、紅を支える存在を多く育ててきた。その言葉は重く、悠真にのしかかつた。同時に悠真は惣次がとても遠い存在のように思えた。気安く、誰よりも信頼していた惣次。その惣次が悠真に隠し事をし、遠くにいる。嫌な気分だ。そして、遠次という男と惣次は双子だから似ていて当然だ。

「惣爺が信じた。それだけで、俺たちには十分な理由なんだ。きっと、義藤もそれを分かっている。そうでなきや、顔を合わせた瞬間に殺されない程度に斬られているさ。紅が止めようと、関係ない。義藤は紅を守る存在。そして、あいつは、強いからな」

都南が言った。都南も野江同様、義藤を認めているのだ。

美しく強いが嫌味の多い野江。術の使えない朱将の都南。術と知識は一流だが体を動かすことが極端に苦手な佐久。抜き身の刀のような強い存在義藤。彼ら若い実力者に知識を与えて守り育てた遠次。そして、彼らに戦い方を教えた死んだ惣次。ここには紅を守る赤の仲間たちが集まっているのだ。

## 赤の眞実（1）

赤の仲間たちは笑い、一人笑みを浮かべた佐久が言った。眼鏡の奥の佐久の目が優しく、そして強く輝いた。

「それで、どうして悠真君は紅城に来たんだ？殺されに来たようなものだよ。僕たちでも、必ず守りきれるとは言えない。ここは決して安全な場所と言い切れないのだから。今なら間に合つかもしれないよ。自分の身を守る術を持たないのなら、どこか、故郷と離れたところに逃げた方がいい」

悠真はどうして、そんなことを言われるのか分からなかつた。悠真には帰る故郷も、家族もいないので。これから生活をする糧も基盤も、悠真には何もない。故郷を失つた小猿が生きるには、どこかの名家に奉公に出るか、低賃金で働き続けるか、盜賊になるしかない。「帰る場所はない。俺にどうやって生きろって言うんだ？俺は、生きる場所も、生きる道も奪われたんだ。だから俺は、復讐するまで諦めない。あの嵐が、誰かの手によつて起こされたものだと知つたときには決めたんだ。じつちやんを、惣次を殺した奴をこの手で捕まえるまで、絶対に帰らない」

悠真が言うと、都南がぱちぱちと手を叩いた。その表情からは何も読み取れない。浅黒く日焼けした肌に、白い歯が印象的だった。なのに、少しも笑つているように見えない。怒りだけが伝わってきた。獣の目に鋭さが満ちてゆく。

「立派な決意だが、とても愚かな小猿だな。お前は何も分かっていない。紅には敵が多く、その敵はとても強大な力を持ち、常に紅の命を狙つてゐる。だから俺たちは、この命を懸けて常に紅を守る。先代の紅も殺さ時のこと、俺は忘れられない。もつと、力があればと何度も悔やんだことか……。二年前の戦乱のことを、今でも夢に見る。俺は、今の紅を失いたくないんだ。紅は象徴でなく、一人の命だ。決して誰にも代わりを務めることなんてできないのだから」

それは信じ難いことだ。紅は色神だ。赤を司る色神であり、紅の石を生み出すことが出来る唯一無二の存在。誰もが紅を紅と崇め奉る。その地位は絶対的なもので、紅は神と同格だ。紅に従う者は多い。人民の大半は紅の味方だ。

「そんなはずは……」

悠真が思わず言つた。すると、佐久が言つた。穏やかだけれども、強い意志が込められていた。

「そんなことがあるんだよ。悠真君、色神がどのように生まれるか知つているかい？」

悠真は首を横に振つた。すると佐久は一つ息を吐き続けた。

「悠真君は、惣爺が信頼した人だ。だから、僕たちも君を信じてこれを話すよ。いいかい、色神は普通の人間だ。誰にだつて色神になる可能性がある。色神が命を落とすと、最期に生み出した石が、次の色神を選ぶんだ。紅だつて、元は只の人間。義藤とは幼馴染だつて言つていたよ。紅は十歳の頃に色神になつた。今から十年前の話だ。その頃のことは、僕たちも覚えているよ。僕と都南は十八だつた。野江だつて、十九だ。僕らは着実に力を付け始めていた時期だからね。僕と野江と都南の三人で陽緋と朱将と朱護頭の地位を取り合つていたんだ。先代の紅は、気の優しい男性でね、僕らは彼を父のよう慕つていたよ。今の紅とは対照的かな。平和を愛し、子供を愛していた。それは、先代が紅になつて十三年目のこと。当時、官府と先代は、他国との関わりでもめていたんだ。官府は他国と協力して、一国を攻めようと考えていた。火の国は小さな島国でね、広大な大地は夢のような話だ。けれども、それは他国の人を殺し、火の国人を殺す大きな戦いだ。先代の紅は反対したさ。そして、殺された。紅が反対していくは、民が従わない。だから、殺したんだ。僕たちはとても無力で、守れなかつた。遠爺も惣爺もだ。官府は先代の紅を殺し、次の言いなりになる紅を生み出そうとしたんだ。先代が殺された後、今の紅は誕生した。今の紅は若いが聰明で、微力ながら僕たちもいる。義藤がいる。だから、十年もの間、紅とし

て生き延びてきたんだよ。官府に従うこともなく、官府の怒りを買うこともなく、綱渡りをするようにね」

悠真は佐久の話が信じられなかつた。先代が命を落とした時のことは、悠真も微かに記憶している。誰も海に出ず、喪に伏した。その死がなぜ生じたのか、死んだ紅がどのような人だつたのか誰も知らない。そして、すぐに忘れられた。村の人は紅が死ぬのは珍しくないと話していた。そんな話をすると、罰当たりだと表立つてしないが、誰もが声を潜めて話していた。紅は神だが短命だ。

紅は生まれて、命を削つて石を生み出す。死した後は、再び生まれる。

そんな噂が流れるほどだ。紅がただの人間だと誰が信じるだろうか。民にとって、紅は唯一無二の色神なのだ。汚い言葉で言えば、紅が誰であろうと関係ない。死のうと生きようと関係ない。生活を支える石を生み出してくれればそれで良いのだ。その考えは悠真にもあつた。今日、紅と出会い、あの鮮烈な赤色を見るまでは、紅に興味もなかつた。十年前に死んだ紅も、同じように美しい赤を持つていたのだろう。世間上では紅が火の国の頂点に立ち、官府は紅に従つているはずだ。しかし、現実は違うのだ。紅は綱渡りをするように、必死に生きているのだ。

悠真は何も言えなかつた。静かな動きで都南が赤い羽織を正した。  
「俺たちがこの赤い羽織を着ているのは、紅への忠誠の証だ。この羽織は、官府と敵対する証。紅に忠誠を誓い、最優先で紅の命に従う。紅を裏切る行為があれば、親兄弟一族を差し出す覚悟。紅の槍となり、紅の盾となる。色神として誕生した紅が、信頼できる者を選別し、赤を差し出す。俺たちは今の紅から赤を授かつた。遠爺も同じだ。遠爺に関しては、先代からも赤を授かつていたらしいがな。小猿の知つている惣爺は一年前の戦いで深い傷を負い隠居した。その戦いも、紅を殺そうとした何者かとの戦いだ。紅はそれだけ命を狙われている。これが、民の知らない真実。この羽織は重い。紅と

命を共にするという決意の表れだからな

都南の話を、悠真は信じることが出来なかつた。紅は色神だ。民は讀えている。そんな紅が命を狙われているわけが無い。そう思つたが、悠真は自分も紅を象徴としか思つていなかつた。紅が命を落として、次の紅に代わつたとしても、あまり気にしない。紅は存在するだけでいい。誰が紅でも関係ない。そういう考えが、歴代の紅を危険にさらしてきたのだ。悠真は動搖を隠しきれなかつた。あの、高貴で鮮烈な赤を放つ紅が、命を狙われることが信じられず、赤の仲間たちが命をかけて、強い覚悟をもつてここにいることが信じられなかつた。

## 赤の真実（2）

紅が命を落として、次の紅に代わったとしても、あまり気にしない。紅は存在するだけでいい。誰が紅でも関係ない。そういう考えが、歴代の紅を危険にさらしてきたのだ。悠真は動搖を隠しきれなかつた。悠真も同じ罪を持つ。そんな罪深き悠真に、佐久は言った。

「官府は今、紅に一つの要求を突きつけている。紅はその要求を拒否し、悠真君の村は壊滅に追い込まれた」

深刻な目で、三人が悠真を見ていた。それでも悠真は己の覚悟を捨てることは出来ない。多くの人の命とと、悠真の故郷よりも重要なものがあるだろうか。誰もが教わるはずだ。命よりも重い物はない。どんな金銀財宝も命よりは軽いと。

「俺の故郷よりも、大切なものがあるのかよ。人の命よりも大切なものがあるのかよ」

悠真は言い野江が返した。

「紅だって、容易く拒否したわけじゃないのよ。要求を拒んだときから、何かをされると感じていたわ。それを回避しようと全力を尽くしていたことは事実よ。紅は最善を模索し、悩みながら決断した。その責任を己の肩に背負う覚悟をしてね。悠真、お聞きなさい。官府はね、石の監視を止めるように申し出ってきたのよ。正確に言えば、石の監視をする力のある紅の石を差し出すように申しってきたの」

「石の監視……？」

悠真はその意味が分からず、佐久が教えてくれた。

「紅はね、一つ希少な石を持っているんだ。それは、紅が誕生して最初に生みだす石だよ。生み出した紅が命を落とさない限り決して色を失わず、どの石よりも強い力を持つ。その石は、己が生み出した全ての石を監視することが出来る。いつ、どこで、どのように、どの程度の力が使われたのかをね。紅の石は無限に使うことができる

るわけじゃない。紅が長命になればなるほど、紅の監視から逃れることが出来る石は少なくなる。それを快く思わないんだろうね」佐久が置いた湯飲みが、小さく音を立てた。そのまま、佐久は続けた。

「いいかい、悠真君。監視が出来ないということを考えてごらん。誰かが、紅の石を欲望のまま他者を傷つけるために使用したとする。それが分からぬんだ。紅の石は、強大な力を生み出すことが出来るでしょ。その力を個人の思うように使わせてはならない。だから紅は、己の使った石がどのように使われたのか、誰が作り出したのか監視をしている。紅の石の力を悪用されれば火の国を滅ぼしかねないから、紅は石の監視を止めることができない。つまり拒むしかできなかつたんだ。石の監視が、紅の石の悪用を防ぐ唯一の抑止力なんだ。けれども、官府の要求を拒むことに対して紅も悩み、野江を派遣して警戒していたんだ。悠真君の村が狙われたのは、きっと惣爺の存在に気づいたからだよ。あの村に惣爺がいるから、狙われた。惣爺は紅が信頼する人物の一人。二年前の戦いで、紅を守つて力の大半を失つたのだから」

悠真の脳裏に優雅な紅の姿が浮かんだ。煙管を持ち、紅色の着物を着た彼女が、葛藤を抱えているとは思えなかつた。彼女は何も恐れるものがなく、搖るがない自信があるように思えたのだ。誰にも屈しない高貴な存在。高貴な赤色を司る色神。それが紅なのだ。

「俺にとつては、村が一番だ」

悠真が言うと、野江は着物の袖口で口元を隠した。嫌なものを避けるような仕草だった。

「そうでしょうね。人の命より重いものは無いのだから。それでも、紅の石を自由に使われてはいけないのよ。官府が勝手に他国と戦争を行わないようにするためにもね」

野江の言葉が悠真の胸に重く残つたが、悠真は「しかたなかつた」「紅も苦しんでる」「最善の選択をした」と己を納得させることは出来なかつた。今の悠真は復讐心で動いており、憎む気持ちを捨

ててしまつたら何も出来なくなる。全てを失い、廃人となつてしまう。己が己で無くなる恐怖。自分の生きる道標を失う恐怖。それらが悠真を頑なにしていた。紅を憎まなければ、己が生きる意味を失つてしまつ。紅は、悠真が憎むべき相手。時に他者を憎む気持ちは、何よりも強い生きる糧になるのだから。

妙な沈黙があつた。紅に忠誠を誓う人たちの中に紅を憎む悠真がいる。それは、奇妙な状況。妙な空氣を開けるように、それはそうと、口を開いたのは都南だった。

「それはそうと、野江。俺に小猿を預けてみないか？」

都南の唐突な言葉に、悠真は息を呑んだ。都南の強い目が一直線に悠真を見て、悠真は何も出来なかつた。獸に睨まれた兎のような気分だつた。野江が言つた。

「あら、朱軍にでも入れるおつもりかしら？ 物騒ね」

野江は小さくお茶をすすつた。小猿「悠真」は、彼らの話題の一つでしかない。

「じゃ、術士にするか？ 陽緋殿」

都南が豪快にお茶を口に含んで言つた。止めなよ、と静止したのは佐久だつた。

「二人とも止めなよ。どうして、朱将と陽緋という立場になると仲良く出来ないんだ？ 一人が喧嘩するなら、悠真君は僕が連れて行くよ。悠真君はまだ石を持つていらないから、術士とか朱軍に入る必要はないからね。紅もそれを望んでいるよ。厳しい野江と一緒にいるのも、粗暴な都南と一緒にいるのも疲れるだろうからね」

野江と都南の二人が佐久を睨んだ。第三者である悠真が緊張するほど緊迫感なのに、佐久だけが平然とし、甘味をつまんでいた。

「そんなに怒つたつて無駄だよ。僕に任せなよ」

佐久が湯呑みの中のお茶を回していた。佐久の眼鏡の奥の目が優しく見えた。温かいけれど、とても強い目。悠真は不思議だつた。赤い羽織は、紅と命を共にする証。赤い羽織を着ているだけで、紅と同類とされて暗殺されるかもしれない。陽緋や朱将ならば、赤い羽

織を着る必要も分かる。部下の信頼を集めるためにも、自身の長が紅からの厚い信頼があると思わせる必要がある。赤い羽織は重い。佐久は術士としては灯緋としての実力があるとはいえ、陽緋や朱将のような大きな役職を得ていらない。なのに、どうして彼は赤い羽織を着ているのだろうか。赤い羽織を着ているのは、彼の力を示すと同時に、彼自身が紅、陽緋、朱将から大きな信頼をもたれていることが分かる。穏やかで優しい目の奥に、隠された強さがある。

「好きになさい」

根負けしたように野江が言つた。

「好きにしろ」

都南が慄然として言つた。佐久が笑つた。まるで子供のような笑い方だつた。

「ありがとうね。悠真君も良いね？」

佐久に言われて、悠真は頷いた。赤い羽織を着た三人に囲まれて、拒否することなど出来るはずもない。

「それで、佐久は今日、自邸に戻るのかしら？」

野江は佐久に尋ねた。

「いいや、官邸に残るよ。青の石がどこから運ばれたのか調べないと。それに、野江の行く手を阻んだ紅の石を使つた人を特定しないといけない。悠真君は官邸に泊めるよ。武術が駄目な僕でも、官邸だつたら守りきれる」

佐久が言い、都南が苦笑した。

「一人で走るな。お前は壊滅的に身体を動かすことが駄目で陽緋になれなかつたんだ。一人で抱え込むな。俺も一緒に泊まろう。どうせ暇なんだ」

都南が気安く佐久の肩を叩いた。悠真は、朱将はそれほど暇なのかと感心した。一つ溜め息をついて、野江が言つた。

「また、あたくしを仲間はずれにするのね。いいわ、あたくしは、あたくしの好きにするから」

野江は残っていたお茶を一気に飲み干した。高貴な雰囲気の野江と

は思えない、荒々しい行動だった。

## 赤の茶会（1）

悠真は赤い羽織を着た人たちは、なんとも変わった人たちだと思った。悠真の前を、陽緋の野江、朱将の都南、そして佐久が歩いている。目の前を高貴な色である赤が、ゆらり、ゆらりと揺れている。初めて赤い羽織を見た時、とても美しい色だと思った。しかし、今は違う。赤い羽織が意味する重み、若い彼らが背負っている重み、紅が敵か味方か、悠真は何も分からぬ。そんな中で、赤い羽織を着た人たちは、なんとも平然としているのだ。大きな責任と重圧の中で、紅を守ろうとしている。悠真にとつて、紅は敵である。彼らは紅を守ろうとし、悠真も守ろうとしている。赤い羽織を着た人々は、なんとも変わった人たちだ。彼らにとつては、紅城で復讐に息巻く悠真が、とても変人に見えることだろう。赤い羽織は神の力である炎のようで、命の源である血のようで、人々に希望を与える太陽のようであった。悠真が出会った、赤い羽織の人たちは五人。野江、都南、佐久に遠次、義藤を加えた存在だ。紅の周りには若い人たちが多い。悠真は彼らの話から、それぞれの年齢を推察していた。遠次の年齢は不明だが、野江は二十九、都南と佐久が二十八、義藤が二十二ぐらいのはずだ。若い彼らが、紅を支え、火の国を守ろうとしている。

紅城は、紅の住まう大きな建物を中心に数十の建物で構成されている。悠真は、これが、紅の重臣が与えられている官邸なのだと理解した。

佐久は、何も無いところで何度も躊躇、その度に都南が支えていた。長身の都南と小柄の佐久の間には大きな身長差がある。その身長差を、悠真はじつと見つめた。何も無いところで、佐久が五度目に足を取られたとき、突如として悠真の後ろで声が響いた。いきなり空氣のように生じ、背後に赤い色が揺らめいた。

「ほら、またこけた。もう少し身体能力が高ければ、いや人並みに

動ければ、陽緋候補として野江に並べたのにな。なんせ、佐久は紅の石以外の色の石を容易く使うことができる。他色の石を使わせれば、野江を越える。身体能力だけの都南と術だけの佐久。足してちようじ良い

悠真の耳元で、囁くような声が響いた。赤い色が広がっていく。その声に、悠真の前を歩く、赤い羽織を着た三人が同時に振り返った。慌てて、焦つたように。振り返った拍子に、再び佐久が足を取られ、都南が佐久を支えた。

「ほら、まだ」

赤い声はけらけらと嬉しそうに笑っていた。悠真は振り返ることさえ出来ない。濃厚な気配が後ろにあるのだ。誰よりも鮮烈な赤い色が悠真の肩に手をかけていた。佐久が足を取られるたびに、嬉しそうに笑うその声が赤く響き、悠真は振り返ることが出来ない。

「ああ、ばれてしまつたな。怒らないでくれよ」

悠真は何も言えない。動けない。そこにいるのは、間違いない。間違いなく紅だつた。声が同じだ。濃厚な気配が同じだ。香りが同じだ。鮮烈な赤い色が同じだ。紅を思うと憎みがこみ上げて来る。悠真の村を守れたのに、守らなかつた。紅が滅ぼしたのだ。紅の境遇を知つても、悠真の憎しみは変わらない。なのに今、紅に対して怒りをぶつけることが出来ない。梅雨時のじめじめした空気を吹き飛ばすような、そんな赤に惹かれていたのだ。

「どうして、こんなところにいるのですか？」

慌てたように野江が言った。

「また、義藤を困らせたんだろ。悪いが、俺たちにまで迷惑をかけないでくれよ。義藤に怒られるからと、俺たちを盾にするなよ」  
都南が言った。

「僕はそこまで運動音痴ではないけれど」

佐久が言った。悠真の後ろの気配は、嬉しそうに笑つた。声が赤く花開く。

「だつてさ、ずっとあそこにいると息が詰まるだろ。心配するな

気配はゆっくりと悠真の隣を通り過ぎ、前に躍り出た。高い位置で髪を一つに束ね、着物に紅は含まれない。化粧をしていない顔は、野江ほど華が無いが、不思議と心を惹かれた。文物の着物を着ているが、質素な着物からは紅の姿を想像できない。あの、高圧的で高飛車な雰囲気は感じられないのだ。彼女は悠真の隣を通り過ぎ、そして振り返り悠真を見つめた。

「この顔、誰か知っているか？」

彼女は無邪気に微笑んだ。

「どうして……」

悠真は言葉を失った。憎んでいるのに、目の前になると怒りをぶつけることが出来ない。

「楽しそうなことをしているみたいだからな。私だけを仲間はずれにするなよ」

彼女は微笑んだ。

「こっちへ来い」

都南が彼女の腕をつかみ、引きずるように歩いた。

「おいおい、乱暴に引っ張るなよ」

紅はけらけらと、笑っていた。赤い笑いが辺りに輝いた。野江も佐久も都南を追いかけて歩いていた。悠真も赤い羽織の人たちと、赤を司る色神を追いかけて歩いた。

## 赤の茶会（2）

たどり着いたのは、官邸の一つ。部屋の主に断りを入れることなく、都南と野江は足を踏み入れ、部屋の主であるはずの佐久は時々足を敷居に取られてつまづきながらたどり着いていた。そこは、難解そうな書物と埃で溢れ、三部屋あるうちの一つは書物で溢れ、一つは仕事部屋と寝室のような場所になっていた。最後の一つに食卓や来客用の茶具が置かれて、日に焼けた畳が紅城の内部にある官邸にそぐわず、この部屋の主は、栄華や人目を気にしない存在と示していた。佐久の人と柄が、部屋の様子から伝わってきて、悠真は思わず佐久を見つめた。佐久はとても優しい。狭く散らかつた部屋は、失った悠真の実家を思い出させた。紅城は高貴な赤で満たされ、田舎者の悠真は肩が凝るのだ。紅城の中では異質なほど散らかり、生活感が溢れるこの部屋は、悠真にとつて温かく感じ、同時に自分が紅城に似つかわしい田舎者なのだと感じた。そして、悠真とは別の意味でこの部屋にふさわしくない存在が悠真の目の前にいた。彼女から溢れ出るのは眩い赤色だ。鮮烈で、温かくて、鮮やかで、強くて、儂い赤色。野江に攻められ、彼女は小さく笑った。

「『自分の立場を分かつていらっしゃるのですか？』

官邸の扉を後ろ手で閉めた野江が彼女に言った。

「分かつていいよ。私は強い。そうだろ」

自信溢れる口調は、第一印象の紅そのもので、紅は不敵な笑みを浮かべた。

「『この火の国に、私以上の紅の石の使い手はない。そうそう恐れるような事態にはならないぞ』

紅はひらひらと手を振った。まるで、紅は自らに護衛がついていることを無駄なことのように態度で示していた。そんな紅に対しても快感をあらわにし、眉間に深くしわを刻んだのは都南だった。

「義藤はどうした？」

都南が彼女に言つた。

「ああ、義藤は出来る奴だから、私の人形を護衛しているさ。私が出ているのを知つてているのか、知らないのか……。まあ、どっちでも良いけどな。義藤は私が抜け出したことを知つても追つてこない。あいつは知つてているのさ。敵の大半は義藤がいるところに私がいると考えている。だから義藤は追つてこないのさ。この姿の私に義藤がついていると、私が紅だと知られるからな。それに、私は一人で行動しているようで、一人じゃない。私を守ろうとしているのは表のお前たちだけじゃない」

紅の言葉に、佐久が溜め息をついた。

「確かに、紅は火の国で一番の石の使い手だよ。そんな紅に護衛がつく時点で間違つてているのかもしだれない。でも、忘れないで。紅は護衛が必要な存在なんだ。体外的にも、本当の意味でもね。一年前のような事態に陥つたときに、微力な僕らの護衛はきっと役に立つはずだよ」

紅は小さく笑つた。不敵で強い笑み。己の目下の存在だと、相手に知らしめるような笑みだ。悠真は今まで、紅以上に強い存在に会つたことがなかつた。それは、紅の石を使う力などではなく、紅は心が強いのだ。自らに対し大きな自信を持ち、自らを肯定している。迷う必要はない。自分を信じろ。紅は自らに言い聞かせていくようだつた。

「その、羽織を渡すときには言つただろ。私は籠の中の鳥じやない。私を閉じ込めておこうなんて、官府のようなことを言つた。私は赤を司る色神。赤は強く美しい色。私は、赤のように強くなければならない。私は赤のように、何者にも汚されない美しさを持たなくてはならない。誇り高く、強く、美しい赤を持たなくてはならないんだ」

その言葉があまりに強くて、悠真は一步後ろに下がつた。正直なところ、紅が恐ろしかつたのだ。紅は赤い着物を身に付けていないのに、全身に赤色を纏つているのだ。赤色がこれほど恐ろしいとは思

わなかつた。

「義藤を呼びましょう。紅が仲間はずれにして怒るのなら、義藤だつてかわいそうよ」

野江が言つた時、声が響いた。

「私も入れてもらおうかな。若い者たち」

声が響き、扉が開いた。そこには赤い羽織を羽織つた男がいた。見た目は惣次と同じだが、惣次ではない。惣次のような親しみやすさが無く、厳格で、他者より少し上に立つている。それは、彼の年齢のせいであり、優れた術士たちを育ててきたせいであり、師としての威圧感のせいであった。

「げ、遠爺」

あからさまに紅が身を引いた。紅は火の国で最も高貴な存在。赤が選んだ存在。紅の隣に立つ者は誰もいない、とても孤独な存在。紅の背負うものを、誰も分かち合つことは出来ない。強いけれど、少し華奢な紅がとても弱い存在に思えた。高貴なのに、内実は親しみやすい存在だ。歴代の紅を悠真は知らない。けれど、今、悠真の目の前にいる紅はそういう存在だ。高貴な存在であるはずの紅は、さまざまな表情を見せる。威厳高く強い存在。親しみやすく表情豊かな存在。

「どうした、紅。何か後ろめたさでもあるのか？」

紅に対して物怖じすることなく、遠次は足を進め、迷うことなく腰を下ろした。その横顔は惣次と同じだったが、堂々とした仕草は惣次とは異なつた。

「そんなのあるわけないだろ、遠爺。私に後ろめたいことなんて何もないわ」

紅は笑つて誤魔化し、手をひらひらと振り、足を投げ出して座つていた。その姿は高貴さとかけ離れ、田舎者と同じ仕草だった。

## 赤の茶会（3）

不思議なもので、紅がそこにいると、言つだけで空氣が変わる。埃臭い部屋の中に、高貴な空氣が色濃く満たされていく。高貴な香りが満たされていく。赤が満たされていく。佐久が埃を払いながらお茶を淹れ、野江が窓を開いた。差し込む光は、紅だけを照らしているようだ。

「佐久、お菓子は？」

まるで子供のように、落ち着きなく紅は部屋の中を歩き回り、勝手に物を引っ張り出していた。佐久も都南も、もちろん野江も何も言わなかつた。紅という立場が許しているのか、彼女の人柄が許しているのか分からなかつた。

「あつた！」

紅は小さく笑い、棚の中を覗き込んだ。佐久は相当の甘党らしい。思い出せば、先ほども都南の甘味をつまんでいた。紅は悠真が見たこと無いほどの大量の甘味を佐久の部屋の棚から出した。

「やつぱり佐久はお菓子を隠し持つているんだな。えつと、栗饅頭に、葛餅に、醤油煎餅に、甘納豆に。あつた、あつた。あ、この甘納豆は栗を使つていてるんだな。珍しいな」

紅はとても嬉しそうに、楽しそうに甘味を出し、遠次だけが険しい目で紅を見ていた。台の上に甘味を並べた紅から守るように、佐久が甘味を抱きしめた。

「紅、あんまり食べないでおくれよ。最近、僕が甘味を食べ過ぎると言う人が多くてね、厨房でも甘味をくれないんだ。買出しに行く時間は無いし。紅が食べると、僕の分が減るでしょ。食べすぎは体に悪いとか言つけれど、頭を動かすには甘味が一番なんだから。紅は良いじゃないか。自分でもらつてくれれば良いでしょ」

悠真は佐久が甘味に固執する様子が可笑しかつた。大人なのに、その仕草は子供と同じだ。

「いいじゃないか。お前は食べ過ぎだ」

紅が佐久から甘味を奪い取ると、台の上に身を乗り出した。わずかな拍子で佐久は腕を滑らせて姿勢を崩し、それを隣に座っていた都南が無言で支えた。都南と佐久は何とも言えない阿吽の呼吸で繋がれているようだった。都南に支えられながら身を乗り出した佐久は、焦り交じりの口調で紅に言った。

「駄目。僕から甘味を取ると、何も残らないよ。僕の身体は甘味で動いているんだからね。僕の動きが止まつたらどうするの？」

佐久と紅が甘味を取り合っていた。二人の奪い合いを止めるようこそ、野江が言った。

「二人とも、いい加減になさいな。紅も紅よ。佐久が甘味にこだわるのは知っているでしょう。いい加減になさい。紅、お座りなさい。それで、甘味を奪い合うのは止めて、そろそろ教えていただけませんか？何をなさりに足を運んだのですか？なにか、用事があつたのでしょうか？」

ああ、と紅は言い、座布団に腰を下ろした。紅は台に肘をつき、片膝を立てて、そつと悠真を覗き込んだ。男勝りの姿も紅らしい。

「ああ、それはな。これを渡そうと思ったんだ」

悠真の前に差し出されたのは、長い紐の先についた紅の石。紅の細い手が紐を持ち、下で紅の石が揺れている。

「それは……」

都南が言った。微笑んだのは紅だ。

「そう、これは惣爺の石だ。それも、惣爺が隠居前に使っていた物だ。隠居してから渡した紅の石は、限度に達し色を失ったからな」

紅の石は、色濃く輝いていた。

悠真は惣次の名を聞いて、とても嬉しかった。確かに惣次はここで生きていた。誰の口からでもなく、紅の口からその言葉を聞くと安心できた。故郷を、とても素晴らしいと言った惣次が、ここで生きていたという証を見たような気がしたのだ。惣次は、謎に包まれた人だった。今まで惣次がどのようにして生きていたのか、どのよ

うにして泣いていたのか、悠真は知らない。祖父と酒を酌み交わす惣次の名が、紅の口から語られる。それだけで、惣次が存在したという何よりの証拠なのだ。ただ、なぜ紅が惣次の石を悠真に差し出したのか、その理由は皆田見当がつかなかつた。

「どうしてそれを持つてきた？」

遠次が紅に尋ねた。紅は惣次の物だといつ紅の石を台の上に置いた。「惣爺は死んだ。これは惣爺のために加工したものだから、他の誰も使えない。 小猿は使えるだろ。義藤の石が使えたんだ。惣爺の石も使える。 そうだろ？」

紅の笑みは、悠真の心を惹き付けた。不敵で美しい笑みだ。その紅が悠真に言つのだ。

「惣爺が隠居前に使つていた紅の石は強いぞ。 そこの野江や佐久の持つ紅の石に匹敵する力を持つてゐる。 我が国最高の加工師、柴が加工した石であるしな。 上手く使いこなせよ」

異論を許さないような口調で紅は悠真に言つた。しかし、都南が勢いよく台を叩き身を乗り出すと鋭い剣幕で紅に詰め寄つた。

「分かつているのか？ 石の力は脅威だ。未熟な小猿に、惣爺の石を渡すということは、みすみす暴走することを許すようなことだぞ。刃を持つには、それなりの技量が必要だ。その刃が己や守るべき者を傷つけることだってあるんだ。 未熟な小猿に、優れた術士である惣爺の石は重すぎる」

息巻く都南を制すように、そつと遠次が手を差し出し、都南を止めた。そして、深い目で紅と悠真を見比べて言つた。

「紅、どうしてそれを小猿に渡す？」

紅は苦笑し、台に置かれた惣次の紅の石を指ではじきながら答えた。

「小猿に適した石を渡すということは、小猿を術士にするということだ。せっかく、選別を逃れたのに、術士にするのはかわいそうだ。生半可な石を渡せば、小猿の力が勝つてしまう。義藤の石を使つたときに、小猿の力は証明された。術士の力と石の力は釣り合わなくてはならず、弱すぎる石を持つことも、強すぎる石を持つこと

も許されない。この石がちょうど良いんだよ。どうせ、加工された石は私以外、誰も使えないんだしな。私は自分の石があるから、それ以上の石は必要ない。ならば、誰がこの惣爺の遺品を使うんだ？兄弟であっても、遠爺は使えない。このまま眠らせておく必要もない

悠真は、小猿な上に子供で田舎者だ。紅は小猿「悠真」が術士にならないように配慮してくれている。自分に適した自分の石を授かれば、悠真是正真正銘の術士となる。苦悩と苦難と戦いと緋を負う術士となる。紅は、悠真に緋を負わせないために、惣次の石を差し出したのだ。それを受け取るのか、受け取らないのか、どうすれば良いのか悠真是分からぬ。村の人や惣次、そして祖父の死に対する復讐を果たすには力が必要だ。惣次の石があれば、悠真は力を手にすることが出来る。直接、己の石を手にしたわけでないから、術士のように紅の配下として縛られることも無いだろう。海で自由に泳ぐ魚のように、野山を駆ける獣のように、悠真是自由の身のまま力を手にすることが出来る。惣次の石に大きな魅力を感じたが、それは許されないことだと思った。赤い羽織を纏つた人たちに、許されないような気がした。何よりも、都南から発せられる殺気に悠真是萎縮し、蛇に睨まれた蛙のようになっていたのだ。

「受け取りなさい」

言つたのは、野江だつた。小さな音を立てて、都南が動いた。その手が刀の柄を持っていたことを、悠真は見逃さなかつた。

殺される。

悠真是直感した。都南は悠真が惣次の紅の石を受け取ることに反対をしているのだ。義藤が悠真に向けた殺氣とは少し異なり、都南の方が義藤よりも荒々しい。

殺される。

都南が朱塗りの刀に触れ、悠真是身を固めた。

### 殺される

悠真は直感した。辺りを見渡すと野江も刀の柄を握り締めていた。悠真の存在と、紅の突飛な振る舞いが赤の仲間たちを混乱させ、混乱した彼らは、互いに刀に手を伸ばした。田ごろから戦いの中に身を置く彼らだからこそ、行動に迷いはなく、己の信念を貫くために命を懸けるのだ。

術士でなく、術士の選別で術士の才覚を見出されなかつた田舎者の悠真。この紅城で悠真の目的を達成するには紅の石の力が必要だが、紅の石は強大な力を持つ剣であるからこそ、赤の仲間たちは悠真に紅の石を与えることに反対するのだ。野江が何のために刀に手を伸ばしたのか分からぬ。朱将を力で止めるには、陽緋の野江が動くしかないが、野江が悠真の味方である保障もないのだ。この場にいる実力者たちが、混乱しているのは事実で、悠真は混乱を抑える力である唯一の存在であるはずの紅に目を向けた。紅は苛烈な目で都南と野江を見ていた。どうやら紅は野江が刀に手を伸ばしたことに気づいているようだつた。

「そんなことが許されると思つてゐるのか？術士でもない小猿を信頼し、強大な力を与えるのか？」

都南の声はとても低い。その声は苛立ちを隠しきれていなかつた。苛立ちは、悠真に紅の石を受け取るよう言つた野江に向けられていた。

「あたくしは見たわ。破壊された村を、死んだ惣爺を。復讐が許されるのなら、あたくしが手を下してやりたいぐらいよ。術士でないなら、いずれ術士になれば良いということ。悠真には力が必要なの。生きるために、己の道を示すためにね。都南に言われずとも、あたくしは紅の石の力を知つてゐるつもりよ」

野江の言葉も強い。悠真は身を縮めることしか出来なかつた。無鉄

砲に走り出す隙さえなかつた。彼らは戦いの才を持ち、平和な火の国の中で命を危険にさらしながら最前線で戦っている。野江も都南も強い力を持つている。その一人が苛立ちを露にしているのだ。

「二人とも、牙を抜きあうのなら、それなりの覚悟をしてもらおうか」

二人を制すように遠次が言った。彼は紅の石や朱塗りの刀に手を伸ばすことはしなかつたが、発する言葉の一つ一つに深い威厳が含まれていた。遠次は彼らの中でそのような立場にいるのだ。赤い羽織を着た彼らを導く。守る。それが遠次。惣次もこのようにしていた。思うと、惣次がとても遠い存在に思えた。優れた人たちを一喝する。惣次もそのような立場にあつたのだ。思い出せば、惣次は怒らせると、とても怖いと子供たちが噂していた。遠次は赤の仲間たちの父のような存在なのだろう。彼らに確かな道を示す存在なのだ。

そんな険悪な雰囲気の中、悪気なく、場の空気を読まないようにな  
紅が笑つた。

「いい加減にしないか、野江も都南も。遠爺の言う通りだ。こんなところで、そんなくだらないことで刀を抜くな。一人が争つたところで、私の前では何の意味も成さないぞ。私はお前たちよりも強いからな。都南、おとなしく聞け。お前たちと同じように私も惣爺には返しきれないほどの恩がある。惣爺がいたから、私は紅として身を守るだけの強さを手にすることが出来たし、一人だって陽緋と朱将になれただる。滅多なことは起こらない。惣爺の目と、私を信じないか？」

紅は続けた。

「お前たちの言いたいことは分かる。惣爺が認めた小猿を信頼するのと、石を渡すのとは違うということだろ。そんなこと、分かつている。それにな、惣爺の石は限界に近い。もう数回使えば、色を失い、力を失う。小猿が石を持って逃げたところで、何の悪さも出来ない。小猿の身に危険が近づいたときに、小猿を守る力をくれるぐらこむ。惣爺の石は私の時代の石だ。小猿が悪さをしたところで、

私は気づくことができる。いつ、どこで、どの程度の力が使われたのか、がな。小猿がどこにいるのか分かるのだ。だから、なにも案ずるな。私を信じろ」

紅が笑い、同時に紅から赤い色が零れ落ちた。人は皆、己の色を持つと言われている。悠真は赤の仲間たちを見比べた。皆、赤い色に近しい色を持っているが、それぞれに個性がある。その中で、紅の赤は最も鮮烈で、最も強く、最も美しい赤色だ。悠真の前に現れる「赤」と同じ赤色を持っているのは、紅が色神だからだろう。

官府は紅に、紅自身の石を差し出すように要求してきた。それは、紅の石の監視を止めること。悠真の目の前にいる紅が、色神となつてから十年が経ち、先代の紅が生み出した石は減ってきたはずだ。現に、赤の仲間たちの紅の石は、すべて悠真の目の前の紅が生み出した石だ。紅の石は強大な力を持つからこそ、悪用しないように監視が必要なのだ。悠真はそれを理解した。

## 赤の茶会（5）

紅は台の上に置き、指ではじいていた惣次の紅の石を掴むと、悠真の手をとつた。紅の手は悠真の手より小さく、細い指が印象的だつた。少し冷たい紅の手が、戸惑う悠真の手を開くとその中に惣次の石を押し込んだ。

「村が滅び、お前の家族や惣爺が死んだ責任は私にある。だからこそ、遠慮をするな」

紅が微笑み、悠真に惣次の石を握らせた。直後、微笑む紅の表情が翳り、彼女は深く頭を下げる。

「悪かった。本当に……。私が何かを誤らなければ、村は滅びなかつたかも知れない」

紅のその声は震え、紅は肩を落とし片手を擦り切れた畳の上につき俯いている。悠真は紅がとても小さく見えた。先刻まで、悠真は紅を憎んでいた。その憎しみは深く、処刑されることさえ厭わず紅に飛び掛ろうとしたほどだ。紅が官府の要求を拒否したから、悠真の村は滅びたのだ。つまり、紅が悠真の祖父を殺し、紅が惣次を殺し、紅が悠真の故郷を破壊したのだ。だから悠真は心から紅を憎んでいた。なのに、紅がそんな言葉を口にするから、紅の声が震えていたから、悠真の中の紅を憎む気持ちは薄れしていく。今、目の前にいる紅は、悠真が憎もうとしていた紅ではない。色神として君臨し、田舎者の命を塵のように扱う紅ではない。紅が村人の死を悼むようなことを言うから、悠真は混乱するのだ。紅は強い人のはずだ。第一印象の高圧的な言動も、年上であるはずの野江たちをあしらう様子も、自分の力に絶対の自信を持つている雰囲気も、全て紅が強い人だと表していた。なのに、今の紅からは強さを感じられない。村が滅びた責任を、その小さな体全てで受け止めて、今にも押しつぶされそうなのに、その弱さを誰にも悟られないように必死に隠し、強い紅を演じている。紅の持つ一色が、悠真の胸に鮮やかに彩った。

火の国で赤を統べる色神は、美しく、強く、そして小さな存在。誰もが色神を讃え、誰もが色神に奇跡を期待する。「色神」と呼ばれるから人々は色神を本物の神と勘違いしてしまうが、色神も人間。色に選ばれ、色の石を生み出す器となつただけだから、奇跡など起こせるはずがない。紅の石をどのように使うのかは、術士や権力者たちに委ねられている。色神が出来るのは、抑止力として石の監視をすることだけなのだ。色神が奇跡を生み出すのでない。奇跡を生み出そうと色神である紅は戦い、紅を守ろうと赤の仲間たちが戦っているのだ。

「悠真君」

佐久が悠真を呼んだ。悠真が佐久を見ると、佐久の眼鏡の奥の目が、とても強く輝いて見えた。それまでの、悠真の中の佐久の印象は優しく知的な人というものだつた。穏やかで、刀とは縁遠い。しかし、その考えを改める必要があつた。もしかしたら、彼らの中で怒らすと一番怖いのは佐久かもしれない。そう思つたほどだ。肩を落とした紅を見て、再び佐久に目を向けると、穏やかな口調とは裏腹な目をした佐久がまっすぐに悠真を見つめて言つた。

「もし、紅に牙を向けたのなら、僕は君を殺すよ。君がどんな理由でここに来て、どんな決意があるかなんて関係ない。僕らにとつて、紅に勝るものなんて無いのだからね。忘れないで。僕は君を守るつもりであるけれども、それは君が紅を傷つけない前提だよ。きっと、野江も都南も義藤も同じだよ。忘れちゃいけない。僕たちは君の方なんじゃない。紅の仲間なんだ」

その言葉が嘘でないことくらい、悠真でも分かつていた。野江も都南も否定しない。遠次も何も言わない。穏やかで、優しく、悠真を敵視しない彼らにとつて、悠真より紅の方が大切な存在だから悠真が紅に牙を向けた瞬間、悠真は殺される。赤の仲間は悠真よりも遙かに強い力を持ち、紅を守るために悠真の命を奪うことに躊躇はない。赤い羽織は嘘をつかないのだから。

野江が悠真の首に、引退前に惣次が使つていたとされる紅の石を

かけてくれた。その石がとても重く、重みの分だけ、紅の存在が儚い存在のように思えた。紅の石は火の国を守り、火の国を豊かにし、火の国の民の生活を支え、他国が火の国に進入していくことを防いでいるのだ。この石があるから、悠真たち火の国の民は生きていく。この強い力を持つ恐ろしい石があるから、生きていけるし、争いも生じるのだ。

「覚えておきなさい。紅の石を持つということの重みを」

野江の言葉はとても深みがあった。この石は惣次の石だから悠真是術士でない。けれども、悠真是憧れていた術士に一步近づいた。一步近づいたのに、嬉しい気分にはならなかつた。昨日までの悠真だつたら喜んでいたのに、術士の苦悩を知り、紅の姿を見たから悠真是素直に喜べないのだ。色神になつたために紅が背負つた苦難を、紅を守るために戦い続ける赤の仲間たちの苦難を、悠真是知つてしまつたから。

小猿は我が色をどのように使つつもりじゃ？

赤の声が悠真の脳裏に響いた。

人殺しに使うも、大切な者を守るために使うも、生活を豊かにするために使うも、全ては術士に委ねられる。我が赤色は、他色と異なり使い方が自由じや。小猿は我が色をどのように使つつもりじや？

赤が楽しむように悠真に語りかけていた。赤の言葉も、悠真への警告の言葉だつた。赤の力「紅の石」をどのように使うかは、悠真に委ねられている。悠真是、どのように強大な力を使えば良いか分からなかつた。同時に、どのようにすれば紅の石が持つ赤色の力を引き出すことが出来るのか、それさえ分からないのだ。それは術士と呼ばれる存在などではない。

## 赤の決意（1）

「こんなに、楽しい茶会に義藤がいないのは可愛そうね」

紅が悠真に惣次が使つていた紅の石を渡すといつ、突飛な行動をとるから、茶会は静まりかえつていった。悠真も首からかけられた紅の石の重みを感じ、赤の仲間たちの強さに押されて完全に萎縮していったのだ。その空氣を開けるように、野江が微笑んだ。

「そうだね、義藤も呼んであげなきや。義藤は僕らの仲間だからね」「佐久が甘味をつまみながら言つた。

「義藤の奴、一人残されていることを知らないのかもしれないな」

都南が渋く言い、遠次が続けた。

「紅に振り回されて、義藤も苦労が絶えぬ。呼んでやれ」

誰もが義藤に期待をかけ、義藤を大切にしているようだつた。努力を惜しまぬ天才。と赤の仲間たちが義藤を認めていたのは、先刻のことだ。もちろん、悠真は義藤のことがあまり好きではない。あの抜き身の刃のような顔立ちと表情が嫌いだつた。

数刻後、義藤が荒々しく引き戸を開いて入つてきた。義藤を呼ぶと言い、使用人を走らせたすぐ後のことだつた。義藤の首には数刻前に悠真が暴走させた紅の石がかけられている。悠真は、紅の石がどれだけの力を持ち、どのような可能性を秘めているのか分からぬ。しかし、赤は紅の石の使い方は術士に委ねられていると言つた。紅の石は使い方次第で、武器にも役立つ道具にもなるのだ。手にした色をどのように使うのか決めるのは。人間なのだ。

「ああ、義藤。ようこそ」

まるで自分の部屋のようにくつろいでいる紅に、先の儂さは見えなかつた。悠真はどれが紅の本当の姿なのか分からなかつた。高圧的で高飛車な雰囲気、弱く儂い雰囲気、気さくで強い雰囲気、紅が全てを演じ分けているのなら、紅は火の国一番の役者だ。田ごろから、演じることが必要な立場であるのなら、紅はとても辛い境遇にある

と言える。本当の紅は、どれなのか。紅に心が休まる時はあるのか、悠真はそれが気になっていた。それだけ、悠真の中に「紅」という存在が大きく居座っているのだ。憎む相手でない。尊敬する相手でもない。紅は、人の心を惹きつける魅力があるのだ。

「やはり、小猿の相手をしていたんだな」

義藤は開口一番にそう言った。

「相変わらず振り回されているな、愚痴ならいくらでも聞くぞ」「都南が気安く片手を挙げて義藤を出迎えた。部屋の主である佐久も微笑んだ。

「ようこそ、義藤。遠慮しないで入りなよ」

佐久が手招きをし、義藤は廊下に膝を折った。

「失礼します」

義藤が流れるような所作で部屋に入り座った。やはり、義藤の動作は品良く、紅が嬉しそうに義藤を出迎えた。赤い羽織も、朱塗りの刀も、義藤の力を証明している。

「渡したのか?」

義藤が紅に問うた。その一言で、悠真は義藤が言った言葉の意味が分かった。義藤の目は、悠真の首にかけられた紅の石に向けられている。この紅の石をめぐって、野江と都南が刀を握ったのは、先ほどのことだ。

「その話なら、俺たちの間で済んだ。かき乱すな」

都南が言った。悠真も義藤が激昂することを覚悟した。悠真の印象では、義藤とはそういう人のはずだ。しかし、義藤は小さく苦笑した。

「俺は反対なんてしませんよ。紅が言つのなら」

悠真は義藤が、紅の石を小猿に渡すということを認めたことが信じられなかつた。義藤が紅を信頼していることは明らかだが、紅の行動全てを受け入れるはずも無い。義藤は紅の身に危険が生じることを避けるはず。ならば義藤は、彼自身の意志で悠真を認めたと考えられる。都南は紅の安全のために反対をした。野江は滅びた村を見

たから悠真に力を与えようとした。ならば、義藤は何を思つて紅の石を悠真に渡すことを認めたというのだ。そう思うと、義藤がとても図りがたい存在に思えた。そんな義藤は背筋を伸ばし、悠真を見た。目は強く美しい。もしかしたら、義藤は良い奴かもしれない。悠真がそう思つてしまふほどだ。

「 小猿は俺の石を使った。それでいて平気な顔をしている。と言つことは、小猿の力は大絆に匹敵するということ。その上、力を制御できず、ただ暴走させているだけ。暴走させる上に他人の石を使えるとなると、想像以上に危険な存在だ。官府に渡れば、利用されかねない。ならば、ここにいてもらつたほうが小猿も安全で、官府に利用されないように俺たちが守ることが出来る。小猿自身が身を守るために紅の石を手にするのも当然のこと。術士でない小猿に紅の石を渡すことの全ての危険要素は、小猿が紅城にいることで排除できる。ここなら、この目で小猿を見張ることが出来て、何かあればすぐに止めることが出来る。小猿の力が暴走してめつたことが起きたりしない。俺も、一度も負けたりしませんよ。負けても、野江や都南、佐久が何とかしてくれるでしょう」

はつきりした。悠真は義藤から信頼されていない。義藤は悠真を危険な存在として見てているのだ。悠真は、やはり義藤はいけ好かない奴だと、思った。悠真は危険な奴だから監視しやすいようにここに残る事を許され、危険な奴だから官府の手に渡らないように守られている。そういうことだ。

「 義藤も言つね。本当に、数年後はどちらかが立場を奪われているかもしぬれないよ。何せ、都南はそこまで考えられないし、野江だつて同情で認めたようなものだからね」

佐久が拍手をし、野江と都南が悔しそうに目を背けた。悠真は赤の仲間たちが義藤の力を信頼していることが分かつた。義藤は、歴代最強の陽緋と、優れた朱将に認められている。彼らの立場を取つて代わるほどの天才。義藤は野江、佐久、そして都南を見渡し言つた。

「 まだ、引退なんてしないでくださいよ。俺は、生涯朱護でありた

いんですから。まだまだ、頑張ってください」

抜き身の刀のような義藤が、丁寧な言葉を口にしたことに悠真は戸惑った。やはり、義藤は良い奴かもしれない。無骨な言葉も、抜き身の刀のような行動も、全て紅を守るため。野江は言っていた。義藤は紅が色神になり紅となる前からの知り合いだと。もし、彼女が紅となつたから、紅を守るために強くなつたのなら、義藤は強い心を持っている。全ては、大切な人を守るため。やはり義藤は良い奴だという結論に至つた。悠真は必死に義藤の品定めをしていた。野江たち優れた術士が認める存在が、どのような人なのか気になつたのだ。

## 赤の決意（2）

悠真は義藤の品定めをしながら、赤の仲間たちに目を向けた。赤の仲間たちを見れば見るほど、紅は素晴らしい人たちに囲まれていると思うのだ。彼らは紅の仲間なのだ。突然、そうだな、と口にしたのは佐久だった。

「悠真君、ここに泊めると言つたけれど、やつぱり義藤のところに泊めてもらつといいよ。年も僕たちよりは義藤に近いし、氣を使わないで済むでしょ。僕ね、こう見えて人を見る目はあるつもりなんだ。義藤と悠真君。きっと仲良くなれると思うんだ」

悠真は言葉を失つた。正直なところ、悠真は義藤が苦手だ。悠真の必死の品定めの結果、義藤が良い奴だとしても、義藤の行動は紅を思うが故とはいえ、義藤はあまりに怖かつた。白刃が目の前に迫つた恐怖を簡単に忘れる出来ない。ならば、佐久と一緒にいたほうが安心できた。野江が獅子なら都南は虎、義藤は狼といったところだ。佐久だけが普通だ。安全なのは佐久と一緒にいることなのだ。

「無茶言つのは止めてください。俺は今日、泊りなんで」

佐久の突然の申し出に、あからさまに義藤が拒否をし、もちろん、悠真も同感なので胸をなでおろした。良い奴だとしても、義藤の第一印象は最悪だった。義藤の家に泊まるのなら、床下で寝たほうがましだ。恐ろしい人の近くで休めるはずがない。小さく笑つたのは紅だった。

「分かった、今日、義藤は泊まりだ。佐久と都南、野江も一緒にだ。  
小猿も来ればいい」

紅は誰もが反対することを容易く口にするから、空気を赤く染めていく。そんな無茶苦茶な、と佐久は言つたが、紅の決定を覆すことなど出来ない。

「嫌な予感がするんだ。官府が動き始める、そんな予感。犯人は、

惣爺を殺しても、私が動かないことを知り、次はどんな手で出でくるのか分からぬ。過ぎた警戒ならそれでいい。私の命が奪われるくらいならそれでもいい。下手をしたら、私をはじめ、お前たちも殺されるだ。石の警告はある。私が殺され、お前たちも殺されるようなことがあれば、次の紅を誰が守る？ 紅が死んでも次の紅が現れ、紅に代わりはいるが、紅に忠義を尽くす優秀な術士や將軍、技術者に代わりはないのだからな」

紅は、紅の石を取り出した。赤の仲間は紅を守ろうとし、紅は赤の仲間を失わないようにしてる。その関係は悠真には理解しがたい。「これは、私の石だ。私が色神紅となり、最初に生み出した石。私以外に使用することが出来ず、決して色を失わない石。全ての石がどこで使用されたのか分かる。この石を官府に渡すことは出来ない。この石が警告している。だから、今日は危険なんだ。こうやって、私が小猿を気にかける理由、分かるだろ」

紅は立ち上がった。

「赤影も動かすのか？」

義藤が言った。「赤影」が何を指すのか悠真には分からない。ただ、赤影が強い存在であることは、会話の流れから理解できた。  
「必要があればな」

紅の強い言葉に、義藤は苦笑した。

「紅は、紅の代わりは現れると言つたが、俺はそつは思わない。俺は、お前じやなきや共に戦うことはしない。忘れるなよ。紅は色神の前に、一人の存在なんだ。きっと、赤丸も同じだ。お前が紅だから、命を賭して守るんだ」

義藤はまっすぐに紅を見つめていた。赤の仲間たちは言つていた。義藤は彼女が紅となる前から面識があると。義藤は色神紅を守ろうとしているのではなく、彼女を守りつとしているのだ。義藤はゆっくりと続けた。

「それほど紅が危機を感じているのなら、紅は野江のところに身を寄せるといい。赤と都南、佐久に護衛を任せて。俺は、紅の人形で

も守っているから。その方が、官府の目も誤魔化しやすいし、官府も俺が紅から離れるとは思わないから、俺のところに官府をひきつけられる。何か事態が生じれば、紅は逃げやすくなる

「  
悠真は義藤の言葉に戸惑った。義藤は誰よりも紅の近くにいる」と  
を望むと思ったのだ。なのに、義藤の申し出は、彼が一人で危険な  
場所で囮になることを望んでいる。紅の警告は義藤が本気になるほど  
当たるから、義藤は自ら囮になると云つたのだ。確かに、紅の直  
属の護衛である朱護の義藤が、あの紅の部屋に残れば、敵は紅がそ  
こにいると思うだろう。守るために、危険な状況に平然と足を踏み  
入れる。義藤には命を賭しても紅を守るという強い決意があるので  
と、悠真は感じた。

## 赤の決意（3）

紅はいくつもの表情を見せる。その中で共通しているのは己の力に自信を持つているということだ。そもそも、色神として生きる以上、自分に自信がないといけないのかもしれない。自分に自信のある紅が警戒し、仲間が一緒にいることを指示したことは、紅が強い危機を感じているということ。紅が危険を感じているから、義藤は囮になると申し出た。命がけで紅を守ろうとする義藤に野江が言った。

「確かに名案かもしけないけれど、下手をすると義藤……あなた死ぬわよ」

野江の言葉は遠慮がない。何かを包み隠すようなこともない。

「そう簡単には負けません」

義藤に迷いは無い。すると都南が楽しそうに言った。

「まさか、義藤が自分から紅と距離を置くようなことを言つなんてね。義藤が紅の隣を離れて、どうするんだ？お前が紅を守るんだろ」「赤丸が動くなら紅の護衛は問題ありません。彼は、俺以上に強いから」

義藤も頑固だ。佐久が身を乗り出して言った。

「まるで、赤丸を知っているようだね。確かに、赤丸は強い存在であるけれど、赤影の正体や赤丸の正体を知っているのは紅だけですよ。紅も絶対に話したりしない。赤影や赤丸は裏の存在だからね」義藤は何も言い返さなかつた。「赤影」や「赤丸」が何を指すのか分からぬが、紅を守る存在であること、そして誰も正体を知らないことは分かつた。紅がけらけらと笑つた。

「赤丸のことを探るな。赤丸は、野江とも都南とも、もちろん佐久や義藤とも異なる存在だ。表の世界のお前たちが、裏の世界の赤丸を知る必要はない。義藤、私の警告は当たるぞ。止めておけ。

今回の敵は、村一つを壊滅に追い込み、外部から野江の侵入を阻む

ことが出来るほどの力を持つ。下手をすると、本当に死ぬぞ」

紅は笑っているのに、その言葉に冗談は無く、返した義藤の言葉も

冗談を含まない。

「だからだ。大きな敵ならば、紅を守りきれないかもしない。歴代の紅のうち、何人が暗殺された？運が良いだけでは生き残れない。二年前だって、下手をしたら紅も死んでいたかもしれないんだ。紅、赤丸を動かすほど警戒しているんだろ。逃げているだけじゃ、何も始まらない。惣爺もそう言つたんじゃないのか？惣爺を殺して、村を一つ滅ぼした奴を野放しには出来ない。もつと大きな被害が出る前に阻止しなければならない。どんな危険があつても、どんな犠牲を払つても。その犠牲が俺であつても、紅は犯人を捕らえて罪を明らかにしなきゃいけない。本当は、分かつていいんだろ」

しばらく沈黙が続いた。義藤の思いがけない言葉に、誰も何も言えない。もちろん、義藤を苦手としている悠真であつても、義藤の言葉は受け入れがたい。目の前にいる人物が、死ぬかもしれないといふことを容易く受け入れることなど出来ない。囮になつて確實に死ぬわけじゃない。そう分かつていても、この場の雰囲気がそう告げていた。歴代最強の陽緋野江。朱将として朱軍を率いる都南。陽緋に匹敵する力を持つ佐久。そして、次の陽緋とも朱将とも呼ばれる義藤。彼らが揃つても、面と向かつて敵と戦い勝つことは出来ない。田舎者の悠真には分からぬ政治的戦略や、工作があるのだろう。

「紅、それしかないよ」

佐久が一番に口を開いた。佐久は義藤の申し出を、紅に受け入れるように言つたのだ。そしてゆっくりと佐久は続けた。

「紅、聴くんだ。もし、今日を乗り越えたとするよ。それでどうなる？僕たちはいつまでも敵の尻尾をつかめないんだ。次は、どんな犠牲が出る？どんなことをされる？」確かに危険だよ。義藤一人では手が足りないかもしれないし、下手をすれば義藤が命を落とすかもしれない。それでも、これしかない

誰も否定しない。紅たちは敵の正体を知らない。誰も知らない。悠

真は一体何をするために紅城に来たのだ？悠真は、祖父を、惣次を、村の人たちを殺した人に復讐をするために紅城までやつてきた。田舎者と避難されても、小猿と馬鹿にされても、紅を憎むことになつても、悠真の信念は揺るがない。義藤は一人で敵と会う。それは千載一遇の好機。無力で何の伝手もない悠真が、強大な敵の正体を知る好機。悠真の復讐の相手が紅でないならば、本当の敵の正体を悠真は知らない。

## 赤の決意（4）

義藤は紅を守ることを決意し、悠真は復讐を決意した。義藤が囮となり敵と接触するのなら、悠真が敵と接触する好機はその時にある。悠真が己の決意を口にする時を探つていると、ずっと黙っていた遠次が口を開いた。

「紅を守るために一人で囮になり、死すことも厭わずとは……。義藤、お前の願いは、赤丸を再び表舞台へ引き出すことか？」

遠次の言葉に野江たちが不審な表情を見せた。そして、義藤は言った。

「俺は行きます。赤丸が動くのなら、赤丸が身を呈してでも、必ず紅を守る。赤丸を表舞台に引き出せるかどうかは、俺には分かりません。それは俺じゃなくて、紅や赤丸自身が決めることでしょう」

遠次は小さく笑った。

「お前は時々わしの想像を超える行動をする。十年前の子供とは別人だな。弟の義藤は強いが優しい。お前の父が言つていたのを思い出す。とても嬉しそうに、誇らしそうに、お前の父は話していた。お前の父はお前に会つたことが無かつたが、母が伝えていたのだろう。お前の母は、死すときまで子供の成長を願つていたに違いない。一人の息子は母が願い名づけた通り、紅に忠義を尽くす。行け、義藤。紅を守るのはお前の仕事だ。必ずや、お前の両親が紅と義藤を守ってくれる」

遠次が義藤の後押しをしていた。

「遠爺と義藤が俺たちに隠し事とは、遠爺は、赤丸の正体と義藤の両親を知っているのか？」

都南が言った。

「他人の過去をあざるものじゃない。お前だって、触れられたくない過去があるだろ」

遠次がぴしゃりと言い、その言葉に萎縮して、それ以上は誰も何も

言わなかつた。

「分かつたよ、遠爺。それ以上は何も言わない。俺は義藤が行くことに賛成だ。義藤じゃなくて、俺が囮になりたいが……義藤でなければ意味が無いだろうな。紅、それしかない」

都南が言つた。佐久と都南が義藤の申し出を肯定した。紅を守るためにだけじやない。正体を見せない敵の正体を知るために必要なのだ。そして、悠真にとつても必要なことだ。

「分かつた。危険を恐れていては、何も手にすることは出来ない。義藤、死ぬなよ」

紅が義藤の顔を覗き込んで言つた。それに対し、否定したのは野江だつた。

「お待ちなさい。みすみす義藤を死なせるおつもり？ 義藤は必要な人よ。簡単に命を落としてはいけないわ」

野江が強く怒りで震える声で否定した。

「安心してください。俺は死にません。たとえ死んでも、もう一人の俺が現れますから」

義藤が野江に告げた言葉の意味が悠真は分からなかつた。もちろん、他の人たちも同じだ。ただ一人、紅だけが不快感を露にしていた。遠次も何かを知つてゐるらしい。それでも、無表情を演じることが出来るのは、年の功だ。悠真は自分の意志を告げる機会を探つた。義藤が囮になつて、官府の敵の正体を探る。それは、悠真の望んだことだ。

「ならば、私は誰かのところに泊めてもうつとするか

紅が不満げに言つた。

「俺も」

悠真は言つた。義藤と一緒に行き、復讐の機会を探りたかった。好機を逃す理由は無い。

「そうだな、義藤のところに泊めてもうえないから、やつぱり佐久のところに泊めてもうつといい。都南より佐久の方が気安いだろ」紅が言つた。それは、悠真の望むこととは違う。

「違う。俺は、義藤と一緒に行く。俺は、村を滅ぼした敵の正体を探つて復讐するために紅城まで来たんだ。引き下がれない」

紅が苦笑した。

「言つただろ。義藤でさえ危険なんだ。小猿が行つてどうする？」

「分かつていいさ、そんなこと。それでも、俺は紅城まで来たんだ」悠真は何を言われても考えを変えるつもりは無かつた。そのためにここまで来た。そのために、生き延びたのだ。

「せつかく生き延びたんだ。なのにこんなところで死ぬつもりか？」紅の言つことは最もで、悠真は自分の命の重みを知らない愚か者だ。無鉄砲。他者に迷惑をかける。それでも、諦めきれない。ここで諦めては、自分が何のために生き延びたのか、なぜ生きているのか分からなくなるのだ。

## 赤の決意（5）

悠真は復讐の相手を探り、復讐をするために義藤と一緒に行動かなければならぬ。悠真は諦めることは出来ない。選別で落ちた自分が紅の石を使える。村の復讐をすることが生き延びた理由のように思えるのだ。

「ここで諦めたら、俺は生きる意味を失ってしまう」

それが本心だつた。危険でも足を踏み入れなければならない。

「小猿は愚かな上に馬鹿者だな。話を聞いていなかつたのか？ 実力者義藤一人でも危険だというのに、小猿が行つてどうするつて言うんだ？」

紅は悠真を止めようとしたが、悠真に止まるつもりは無かつた。それは紅に飛び掛つたときと同じだ。このまま生きていても、悠真是何も感じることが出来ないので。村が滅びて、祖父と惣次が殺された復讐をすることもなく、笑うことなんて出来ないのだ。

「俺は下がれない。俺は、戦わなくちゃいけないんだ」

悠真は再び反対されることを覚悟した。しかし、何を思ったのか紅は一つ息を吐きゆつくりと言つた。

「義藤、小猿の守を頼めるか？」

義藤は小さく笑つた。

「断つたところで、どうにもならないだろ。紅が小猿を守るといつのなら、俺は必ず小猿を守る」

諦めたような義藤の言葉が印象的だった。

「そんな無茶苦茶な」

野江が言つたが、悠真を止めることが出来ないことを感じたのかそれ以上は言わなかつた。同じように紅を大切に思う都南が言つた。

「小猿のことは義藤に任せよ。俺たちだつて、黙つて隠れているわけにはいかない。敵が襲撃するとすれば、義藤のいる紅城の最上階だろう。万一、勘良く紅の本当の居所を知れたときのために、紅

は野江と一緒にいる。もちろん、赤丸を動かすのを忘れないでくれよ。義藤の言葉を借りるわけじゃないが、赤丸がいる限りよほどのことは生じないだろう。赤丸は、俺たちを超える実力者に違いないからな。俺と佐久と、野江と紅は三つに分かれて紅城を囲む。それで良いな」

野江が続けた。

「敵はきっと、闇に紛れて来るはず。義藤、あたくしたちが、あなたを援護するわ。あなたを死なせたりしないわ」

野江が静かに笑い、悠真に目を向けた。

「悠真、あなたは強くおなりなさい。大切な者を守るには、それなりの力と覚悟が必要なのよ」

野江の言葉に嬉しそうに笑ったのは紅だつた。

「野江、都南、佐久、そして義藤。私の自慢の仲間たちだ。小猿も羨ましく感じるだろう。小猿が本意を成し遂げ、それでも、紅城で生きることを選ぶのなら、小猿に合わせた石を渡そう。私の自慢の仲間の下で学ぶことを認めよう。それまで、小猿は術士にならず、逃げ道を残しておけ。どんなに過酷な現実を知つても、この城で生きることを選ぶまでな」

紅の言葉に赤い羽織を着た面々は深く頭を下げた。年齢も関係ない。強さも関係ない。紅は誰よりも上に立つ強さを持つ。悠真も彼らの中に加わりたいと思った。それは、彼らの強い一体感に憧れた。彼らは何があつても紅を中心によどまつていく。どんな困難も紅がいれば乗り越えられる。決して孤独にはならない。家族を失い、故郷を失つた悠真にとって、その一体感は憧れであつた。復讐を果たすと息巻く自分は、復讐がなければ孤独に押しつぶされてしまう。誰も悠真のことを知らない。誰も悠真の心配をしない。悠真が他人を思うこともない。復讐が無ければ、悠真がいるのは孤独の海。ふと疑問に思うのだ。本意を遂げたところで、悠真はどうなるのだろうか。孤独から逃れるために、悠真は彼らに加わりたいと願うのだ。加わりたいと願うと同時に、悠真は彼らに加わりたいと願うのだ。

すのだ。

普通の生活をしてえ、そつ思つのが普通じゃ。もしかしたら、紅もそげえ思つともしれんの

よくよくお考えなさい。紅城へ足を運ぶといつことは、術士になるといつこと。今までのようない生活は送れないわ。

それまで、逃げ道を残しておけ。どんなに過酷な現実を知つても、この城で生きることを選ぶまでな。

彼らは幾度と無く悠真に忠告した。術士になることを望んでいいけない。術士になつても、待つてゐるのは過酷な現実。それでも悠真是言った。

「俺は、強くなりたい。強くなつて復讐するために」と、  
すると、紅が悠真の前に刀を差し出した。それは、普通の黒塗りの刀。

「もつて行け。むやみやたらに石を使つな。力は守ると同時に他者も傷つける。未熟な小猿はなおさらだ。小猿は今、義藤に身を委ねた。義藤に習え。義藤は強いぞ」

今の悠真に躊躇いは無い。迷うことなく刀を受け取つた。目の前に敵が迫つている。村の人たちが命を落としてから、一日も経つてない。忘れることが出来ない。呆然とすることも出来ない。悠真を駆り立ててゐるのは、強い憎しみと復讐心だけだから。

## 赤のからくり師（1）

義藤の決意と悠真の決意に茶会は不思議な局面をきたしていた。緊張からか悠真是お茶をたくさん飲み、気づけば湯のみは空になっていた。それに気を使つた佐久がお茶を入れようと立ち上がり、当然のように足をとられて転倒しそうになるから、当然のように都南が支えていた。

「お茶なら、俺が淹れますよ。危ないので、座つていてください」義藤が流れるような所作で湯を沸かすからくりに手を伸ばし紅の石をからくりに仕込んだ。悠真是気遣いをする義藤がどこか気に入らなかつた。義藤が気遣いをするとどうあっても、彼が良い奴だという結論に達してしまつからだ。術士である義藤は当然のように紅の石の力を活用し、からくり師が作り出したからくりで湯を沸かそうとする。悠真が紅の石で湯を沸かす瞬間を見ようと皿を細めたとき、「おや」と義藤は手を止めた。

「からくりの調子が悪いんじゃないですか？」  
義藤はからくりに仕込んだ紅の石をはずした。

「このからくり、使わない方がいい。以前、鶴藏に言われたことがあります。からくりは生き物と同じだと。無理をさせない方がいいです。からくりは、鶴藏にとつて子供なのだから。俺は鶴藏に叱られたくないませんからね。このからくりは使わない方がいいですよ」義藤は労わるように、からくりに触れていた。困ったように佐久は頭を抱えた。

「分かっているんだけど、どうも忙しくてね。僕が使うとどうしても落としたり、蹴つてしまつたり、踏みつけたり、僕にそのつもりが無くても荒い使い方になっちゃうからね」  
けられると笑つたのは紅だった。

「佐久が壊しちまうことは、鶴藏も承知済みさ。ちょうどいいじやないか。鶴藏も呼ぶといい

言うと紅は懐から小さなからくりを出した。それは車輪のついた小さな車だった。

「おや、珍しいからくりだな。鶴藏の新作か？」

都南が興味ありげに身を乗り出した。

「先日、鶴藏がくれたんだ。紅の石の力で動き、迷うことなく鶴藏のところまでたどり着く。鶴藏のここまで行くと、使用した術士の所まで戻るらしい。」

鶴藏がくれたときにな、体を動かすのが苦手な佐久に渡す、と詰つておいたのだ。佐久は鶴藏のところまで行く段階で怪我をしてしまうからな。佐久、お前が使え。私が使うよりお前が使つたほうが鶴藏の反応が面白いはずだ」

紅が笑いながら、小さなからくりを佐久に渡した。

「紅、鶴藏をからかうのは程々にしておけ」

遠次が紅に苦言をしていたが、紅は一向に気にせず笑っていた。

「いつも私から逃げる鶴藏への仕置きさ」

紅が笑いながら、からくりを佐久に手渡した。

「仕方ないね。紅が言つなら、僕が使うよ。鶴藏は僕が持つて思つていいんでしょう。いやあ、鶴藏が便利なからくりを作ってくれるから、助かるなあ」

佐久がからくりに自分の紅の石を仕込み、仕込まれた紅の石は赤い光を放つた。紅が膝を立てて、嬉しそうに笑った。

「佐久、少しばかりは、お前が怪我をしないための補佐でしかないんだぞ。しつかりしろ。私はお前にじつとしておけなんて、一言も言つていい。体を鈍らせるな。安全な範囲で動け、と私は言つているはずだ。鶴藏がお前のために作つたからくりだつてあるんだからな」

困つたように佐久は俯き、紅はけらけらと笑つていた。

「分かつていいんだよ、紅。僕だつて動かなきやいけないことぐらいね」

体を動かすことが極端に苦手な佐久が苦笑していた。

佐久が紅の石を仕込み使用したからくりは動き始め、佐久は紅の

石を取り外した。紅の石をはずされても動き続けるのだから、このからくりの制度の高さが証明されている。からくりは車輪を回転させ、障子の隙間から外へと出て行つた。

それからしばらく経つてからのことだつた。

「佐久はん、入ります」

障子が開き、外には前髪の長い男が頭を下げていた。ぼさぼさの髪に、よれた着物。張り詰めた空気を和ますような場違いな男。着物の形は甚平と近い。長い前髪で田は見えない。汚れた赤い前掛け。彼も紅に近しい存在のようであつた。鶴藏を呼んでいるのだから、目の前の男がからくり師鶴藏のはずだ。

「待つっていたよ、鶴藏」

佐久が身を乗り出した。ぼさぼさの髪の男が顔を上げ、悠真たちを見渡した。長い前髪に隠れて田は見えないが、小さな生き物のような仕草が怯えた印象を与えた。そして、体を縮めて慌てて障子を閉めた。

「す、すんません。あっし、出直しますんで」

人に会うことに照れているような雰囲気。現在、優れたからくり師がいることを悠真は知っている。野江が使う空挺丸を作り出し、紅の石から独立して動き、目的地まで辿り着くからくりを作り出した。紅の石は力であるが、使用方法は術士に委ねられている。術士が使用すると大半は戦いに利用されかねない。紅の石を動力として動くからくりがあるから、紅の石の使用幅は広まるのだ。これが、稀代のからくり師なのだと、悠真は小動物のようなからくり師「鶴藏」を見た。

## 赤のからくり師（2）

小動物のように隠れてしまつた稀代のからくり師を連れ出そうと、佐久が腰を浮かせた。

「ちょ、ちょっと……」

佐久が立ち上がり、大股で歩き、悠真の前を横切り、義藤と遠次の間を通り障子を開いた。

「鶴藏、待つて」

佐久が障子を開くと、そこには散らばつた荷物を慌てて道具箱に入れている男がいた。ぼさぼさの髪に、櫛を通したのはいつが最後なのだろうか。田舎者で汚い悠真は、どこか親近感を覚えた。

「すんません、改めて来ますんで」

鶴藏と呼ばれた男は、慌てて荷物をまとめていたが上手くいかず、慌てれば慌てるほど、手から道具が滑り落ちていく。使い込まれた道具が外廊下に散らばり、彼は道具を汚れた風呂敷に入れようとしていた。

「鶴藏、お前のことも紹介するから入れ」

膝を立てて座つた紅が言い手招きをしたが、鶴藏は深く頭を下げて信じられない速さで首を横に振つていた。

「あつしには、紅様と同席する資格がありませんので」

極度の緊張家なのか、照れ屋なのか、悠真には分からぬ。鶴藏はぼさぼさの頭をぐしゃぐしゃにし、搔いた頭からは埃が落ちた。

「鶴藏、また私を紅様と呼んだな。赤い前掛けを渡すときと言つただろ。お前は私の信頼できる仲間の一人だと。いい加減、赤を持つ覚悟を持て。紅を支えるのは術士だけでないんだぞ。学者がいて、師がいて、加工師がいて、お前のようなからくり師がいる。だから、私は紅として立つていける。誰が欠けることもならないんだ。周囲に恵まれているのが、私の幸運だ」

紅は子供のように頬を含まさせて、頬杖をつき、鶴藏は怯えたよう

に身体を縮めた。

「紅も鶴藏を怖がらせないでよ。気にしなくていいよ。からくりの調子を見て欲しいんだ。ほら、鶴藏、入りなよ」

佐久は鶴藏の腕を掴み立たせようとしたが、それでも佐久らしく足を滑らせた。佐久に手を貸したのは、入り口の隣にいた義藤だ。

「気をつけてください」

支えた義藤が一言、佐久に言った。

「ごめん、ごめん。義藤。助かったよ」

佐久は照れたように歪んだ眼鏡を直した。佐久は再び鶴藏を中へ引き込もうと試みていた。

「ほら、鶴藏。入つて」

「あつしは遠慮させていただきやす」

鶴藏を立たせようとして、佐久は何度も足を踏み外し、そのたびに近くにいた義藤が支えていた。

「あ、義藤。ありがとね」

佐久はそんなことを言いながら、小動物のよくなからくり師鶴藏を中心に入れようと必死になっていた。義藤は困り果てたように溜め息をつき、助けを求めるように都南に助けを求めていた。都南は逃げるようすに目をそらせていた。紅は手を叩いて笑っていた。

佐久と鶴藏の押し問答を部外者の悠真は見ていた。赤の仲間たちは生き生きとしていた。

「いい加減にして！」

大きな声を上げたのは野江だった。野江は彼女らしい歩き方で紅や悠真たちの前を横切った。困ったように肩をすぼめたのは、都南だった。

「鶴巳、紅が入れつて言つているでしょ」

野江は彼を「鶴巳」と呼び、乱暴に彼の腕を掴んで部屋に引き入れた。彼はばらばらと道具を辺りに散らばせて、遠次と義藤の間に座った。義藤がそつと鶴藏の背中を叩いていたのを悠真は見逃さなかった。

「紹介するわ。彼は鶴巳。通称鶴藏。空挺丸を作り出した、稀代のからくり師よ」

鶴藏は困ったように頭を搔いた。埃がぱらぱらと畳みに落ちた。

「あつしは鶴巳。鶴藏と呼ばれています。はい。鶴藏って言つのは、あつしが紅城へ雇用されるときに名前を鶴三と間違えて書類に書いて、そこで字が変わつて鶴藏です。はい。今じゃ、鶴巳と呼ぶんは野江だけです。どうか、鶴藏と呼んでください」

鶴藏は口ごもりながら話し、怯えるように畳に額をつけた。拍子に台に頭をぶつけ、鶴藏を起しすように義藤が手を貸していた。鶴藏の声は耳をそばだてなければ聞こえないような声。それが鶴藏の話し方。間違いなく鶴藏は小さな生き物のような存在だった。野江が溜め息をついた。

「鶴巳は稀代のからくり師よ。からくりの道ならば、右に出る者はいないわ。湯をわかすのに便利な、このからくりも鶴巳が発明したものなの。鶴藏がいるから各地に散る下緒たちは、安全に職務をこなすことが出来ているのよ。もちろん、中央に残る術士や、あたくしたちも同じ。からくりが、紅の石の使い方の幅を大きく広げて、あたくしたちの生活を支えているの」

野江は、まるで自分のことのように鶴藏を説明していた。悠真は野江だけが鶴藏を鶴巳と本名で呼ぶ。それが一人の距離を示しているように思えた。思えば、鶴藏のことを話すとき、野江の雰囲気がいつもと異なる。落ち着いた大人の雰囲気が、心なしか崩れるのだ。けられると紅が楽しそうに笑つた。

「野江は鶴藏のこととなると、自分のことのように話すなあ」

野江をからかつて楽しんでいるようだった。

「紅、いい加減にしてください。あたくしを怒らせないでくださいな」

野江が紅に答えて、席に戻るのとした。

「すんません、すんません。また、野江に迷惑をかけてしまつたつす。すんません」

鶴藏が頭を搔きながら、お辞儀をしていった。鶴藏は野江のことを気安く名で呼ぶ。佐久にせきちんと敬称を付けていたにも関わらずだ。

「そんなに頭を上げないの」

「すんません」

鶴藏は頭を搔きながら俯いた。鶴藏の田は郷に前髪に隠されているが、そもそも偏くことが多い鶴藏の顔を見ることが難しい。

「頭を搔かない」

「すんません」

鶴藏は体をすぼめて、出来るだけ小さくなつとこねよつだつた。この場の邪魔にならなこよつて、口の存在を隠しきつているよつだ。

「小さくならない」

「すんません」

鶴藏は困り果てたよつて、畳を見ていた。

「ちやんと前を見て」

「すんません」

「謝つてばつかつじやない」

「すんません」

野江と鶴藏はそんな会話を続けていた。野江の言葉は厳しこよつて、少しも鶴藏を傷つけるよつた語句を含んでいない。鶴藏もせば厭にしていないよつて、一人の間では当然の掛け合つてゐる。悠真はそれを感じながら、野江と鶴藏を並べてみるとどが出来なかつた。品の高い野江。せわせわ頭の鶴藏。「丑とすりません」とせりのよつだ。

「続きは後でしてくれ」

遠次が一つ歎き、野江は照れたよつて向も無ねずに俯いた。

## 赤の手合わせ（一）

紅城の人々は、個性豊かな人たちだ。いくつもの顔を持ち、気さくに振舞う紅。上品なのに嫌味が多い陽緋の野江。術が使えない朱将の都南。運動音痴で甘味に目がない佐久。人見知りのからくり師の鶴藏。彼らを包み込むように見る遠次。彼らは大きな責務を負い、火の国の核となる人たち。本来なら、悠真のような田舎者が言葉を交わすことなど許されない。なのに、言葉を交わすと、彼らも悠真と同じ人間なのだと実感させられるのだ。紅と共に歩むことを決めた赤の仲間たちは、常に紅を気遣っている。きっと、鶴藏も同じはずだ。

「鶴藏、いい加減私に慣れる。お前は先代紅の頃から、この紅城にいるんだろ。出会ってから十年。いい加減慣れろよ」紅が遠次の甘味をつまんでいた。全ては紅の立場と人柄が許される行動なのだろう。

「紅も、色神となつて十年。もう、子供じゃないんだ。いい加減落ち着きを持つたらどうだ？」

遠次に甘味に再び手を伸ばした紅の手を、遠次が軽く叩いた。紅は手を引つ込め、頬を膨らませた。

「良いんだ。私は十分がんばっているからな」まるで子供のように紅は振る舞い笑つた。しかし、直後まじめな顔をして悠真を覗き込んだ。

「さて、ふざけるのはこの辺にしておこう。小猿、よく聞け。私は敵が多い。敵が多い私が赤い色を手渡しているのは、紅城に数いる」

紅がゆっくりと口を開いた。悠真は辺りを見渡し、赤を許された人たちを見た。

「そこにいる遠爺、野江、都南、佐久、義藤。そして鶴藏。他にも、加工師の柴もいるが、奴は今頃どこにいるのやら。紅城にいるのは

彼ら五人。この広い紅城で私が心から信頼できるのは、この五人。小猿、他の人にについて行くなよ。他の人に一人でついて行つて安全だという保障を私はしない」

紅は微笑んだ。赤は美しく、強く、孤独な色。孤独な人たちが身を寄せ合い、仲間となつてゐる。紅たちは互いの孤独を赤で繋げているのだ。

赤じゃ

一瞬、悠真の視界が赤に包まれた。赤の世界で、夢で会つた赤い女性が浮かんだのだ。

赤になれ

赤の声が響き、そして消えた。悠真は不気味な感覚を覚えた。赤が悠真を捕らえようとしているように思えたのだ。悠真の一色を赤に染めようとする。

駄目よ。赤に染まつては駄目。

そのたびに、無色の声が悠真を止めるのだ。赤の仲間は優しく魅力的だけれど、赤に染まるなど言つ。悠真はその真意が分からなかつた。

赤の色神紅が信頼を寄せる人物が悠真の目の前にいた。彼らは何を思つてゐるのか、悠真には何も分からない。

「夜まではまだ時間があるなあ……」

場の空氣を敢えて読んでいいだろう紅が両手を頭の後ろに組み、そのまま畳の上に寝転んだ。そもそも広くない佐久の部屋。多くの人が集まり、窮屈な部屋の中で紅が寝転ぶから、赤の仲間と悠真是体を縮めるしかなかつた。最も怯えているのは鶴藏だつた。

「お止めなさいな。はしたない」

野江が紅を叱責したが、色神紅は何も気にする様子も無く台を蹴りながら足を伸ばした。

「仕方ないだろ。真面目な話をして疲れたんだ。少しげらいへつろいだつて良いだろ」

悠真は紅を見て、それが火の国の色神なのだということが信じられ

なかつた。今日、紅に合うまで、色神は高貴な神だと思っていたのに、目の前にいる紅は男勝りで大雑把だ。この人が、色神だと知れば火の国の民の大半は信じる道を失うだろう。そもそも、色神が普通の人間だったということを思えば、紅が男勝りで大雑把なのは仕方ないのかもしない。彼女はそういう性格なのだろう。

一つ、溜め息をついたのは義藤だつた。紅よりも義藤の方が品が良い。

「野江、都南、一つ頼みがあります」

「何だ？」

義藤の申し出に、都南が訝しそうに目を細めた。

「きっと、今日俺は戦います。その前に、一度手合わせを願えませんか？ 真剣勝負でお願いします」

義藤が畳に手をつき、浅く頭を下げた。

「それだ、面白そうだな」

紅が手を叩いて喜んでいた。

## 赤の手合わせ（2）

義藤が野江と都南に手合わせを願い出て、紅は手を叩いて喜び、体を起こすと胡坐をかけて座つた。そんな紅を野江が叱責した。

「紅、けしかけるのは、お止めなさい。義藤も義藤よ。なぜ、今日に手合わせをするの？」

野江は紅に世話をやく姉のようだつた。

「野江、義藤に負けることが怖いのか？」

都南が嫌味をこめて言い、野江は強い口調で返した。

「都南、あたくしの心配は結構よ。義藤もいい加減になさい。手合わせなら、いつでもしてあげるわ。今日以外の日ならね」

義藤は困ったように首をかしげ、続けた。

「今日でないと意味が無いんです。俺は今日、死ぬかもしれません。死ぬとしたら俺が弱いからでしょう。ですから、自分に言い聞かせたいんです。己は少しずつでも強くなっていると」

義藤の言葉に悠真は驚いた。悠真の守をすると言った義藤は、己の死さえ見据えているのだ。自分が死ぬかもしれない。復讐に息巻く悠真は自分の死を考えることが出来なかつた。復讐という目的を果たすまで、己は無事だという根拠の無い考えがあるのだ。それはまるで、子供のような浅はかな考え方だ。己の死を見据えて、己の実力を確かめるために手合わせを願う。それは、一般人の悠真には理解しがたい考えだつた。そんな義藤に野江は首を振つた。

「あなたは強くなつてゐるわ。あたくしは知つてゐるもの。義藤は忙しい業務の間、毎日鍛錬をしていたわ。あたくしたちは義藤の力を認めてゐるの。いつの日か、あなたに追越される日を待つてゐるの」

野江は眞面目な性格なのだろう。今夜、義藤が死ぬ可能性があるから、気を使つてゐるのだ。陽緋野江の威圧感は言葉では表現しがたい。野江に萎縮され、都南さえも口を止めてしまつた。その沈黙を

破つたのは紅だつた。

「良いじやないか。相手をしてやれ。ただし、今回は都南だけな」  
紅が笑い、続けた。

「まず、黙つて私の話を聞け。いいから、怒るなよ。今回の義藤との手合わせは都南だけだ。野江はおとなしくしておけ。理由はな、今回の手合わせは紅の石の力を使わずにするからだ」

言つと、紅は身を乗り出し義藤が首から掛けている紅の石に手を伸ばした。

「小猿の暴走に当たつて、義藤の紅の石の色が弱つてゐる。義藤がこの石を使い始めて一年。本来なら、まだまだ色が失われるような時期ではないが、なぜか弱つてゐる。今夜、戦うのなら、今使わない方がいい。一応、後で新しい紅の石を渡すが、柴が加工した石でないから、義藤の力に新しい石がどこまで耐えられるか分からぬ。だから今日は、術を使わぬ都南との手合わせにしておけ」

紅は義藤の紅の石を握ると、手放した。悠真には、義藤の紅の石に生じた変化など分からぬ。紅の石の変化を感じることが出来るのは、紅が色神であり、紅の石を生み出す唯一の存在だからだらう。紅の言葉に間違ひはないはずだ。野江が目を見開き、紅に抗議した。「紅の石が色を失う可能性があるのなら、なすこと義藤が囮になるのは……」

紅の石の力は無限に使うことが出来るわけではない。紅の石には使用期限があり、酷使すると色を失う。どのくらいの周期で色を失うのは術士でない悠真には分からぬが、加工師の加工の腕にもよる、と聞いたことがある。義藤は術士だ。剣術も優れていことながら紅の石を戦いの術として利用するはずだ。紅の石が色を失うことは、義藤が戦うことに対して大きな不安要素となる。

「野江、黙つておれ。その話はもう終わつた」

一喝したのは遠次だつた。遠次の年齢と立場と貫禄で野江だけなく赤の仲間たちは皆、身を縮めていた。紅は困つたように頭を搔きながら野江に言った。

「小猿の力を試そつと、義藤の石を小猿の近くに差し出すように仕向けたのは私だ。私だって困っているさ。まさか、義藤の紅の石の色が急激に弱まるなんて、思ってもいなかつたからな。新しい紅の石を用意するように手配はしている。質の良いものを加工師に渡しているが、加工師の腕がな……。柴の奴が戻ってくるなんて、都合のいいことが起こるはずもないから、今は義藤の紅の石の力を使わないようにするのが、一番なのさ」

義藤は首からかけた己の紅の石に触れて笑った。

「紅、何の心配も無い。俺は、剣術の鍛錬も積んできたからな」義藤の言葉は温かく、紅を思う気持ちで溢れていた。紅には何の否もない。全ては己が決断したことだ。と義藤は態度で示していた。悠真は、義藤が良い奴に見えて、どこか腹が立つた。都南が台を手の平で叩いた。

「分かつた。義藤、外に出る。朱将の都南が手合わせをしよう」

都南が朱塗りの刀をついて腰を浮かせた。

「ありがとうございます」

義藤は一度頭を下げる、流れるような所作で赤い羽織の袖を正しながらゆっくりと立ち上がった。

## 赤の手合させ（3）

手合させを願つた義藤と、それを受け入れた都南は草履を履いて中庭に下りた。紅たちは縁側にでると胡坐をかけて座り、悠真は紅たちの後を追つた。障子を開くと、白い玉砂利が敷き詰められた中庭があり、そこに都南と義藤は立っていた。義藤は丁寧な仕草で赤い羽織を脱ぎ、都南は荒々しい動きで赤い羽織を脱ぎ捨てた。義藤は赤い羽織を手早く置むと、縁側にそっと置き、都南は赤い羽織をぐしゃぐしゃに丸めると縁側に置いた。

遠次と紅は縁側に座り、鶴蔵は状況に怯えるように障子の影に隠れていた。佐久は紅の少し後ろに座つていた。

「何かあつたら、あたくしが間に入るわ」

野江が縁側から草履を履いて中庭に降りた。居所の分からない悠真是部屋の中から出れずにいた。すると、紅がにっこり笑い、手招きして悠真を呼び寄せた。

「小猿、こっちに来い」

紅が呼ぶから、悠真は四這いのまま、恐る恐る紅の横に座つた。紅の隣に座ると、彼女の持つ赤い色が鮮やかに輝き、部屋に満ちていった香の匂いが放たれていた。

「都南は強いぞ。剣術ならば、右に出るものはない。紅の石を使わずに戦うということは、義藤にとつてかなり不利だな」

紅は義藤を見て言つと、自慢げに語つた。

「私の自慢の仲間たち。術の腕は佐久が一番上だ。剣術ならば都南が一番上だ。そして、術と剣術を兼ね備えるのが野江だ。義藤も、術にも剣術にも秀てる存在。剣術で都南に並びたいと思うのは当然の心理だろうな。義藤が狙うのは、剣術の頂点都南と、術士の頂点野江。術を使う力 자체は佐久の方が上だが、佐久はある通り。実際場面で戦うならば野江だろうな」

遠次が咳払いをして、口を開いた。

「義藤をからかうのは止めておけ。あいつは、紅が思つている以上に必死なさ。お前が考えている以上に、あいつは己を鍛えている。努力を惜しまぬ天才よ」

遠次も義藤を高く買つていてのだと、悠真は理解した。

都南と義藤は互いに朱塗りの刀を抜いた。都南の刀は義藤のそれよりも一回り大きく、太く長かった。不思議なことに、都南の刀は刀身まで赤く作られていた。それは、まるで紅の石だ。

「都南の刀は、我が国最高の加工師柴が作った刀。あれは刀と呼ぶより、紅の石と呼ぶほうが正しい。柴が紅の石を加工し、刀に鍛え上げたんだ。一年前から、都南はあの刀を使っている」

紅が解説するように悠真に教えてくれた。加工師柴のことを悠真は知らないが、柴の加工の腕が群を抜いていることは感じていた。加工師柴が紅の石を加工し刀にした。その刀の存在が、術を使えない都南が朱将として立つことが出来る秘密なのだ。紅の石で鍛えられた刀が、都南を支えている。

義藤が抜いた朱塗りの刀は、白刃の刀だ。刀匠が鍛えただろう刀は、光を反射して美しく輝いた。流れるように義藤は刀を構え、両手で刀を持った都南も赤い刃を義藤に向かって。

「真剣の勝負なのか？」

思わず悠真は紅に尋ねた。悠真は術士にも剣術にも縁遠い存在だが「手合わせ」は竹刀で行われるものだという常識はあつた。仲間同士で真剣を向け合うなど常軌を逸している。

「当然だろ。あの二人は今から本気で殺しあう。互いを敵だと思って、寸止めなんてありえない。大丈夫、案するな。そのためには野江がいるんだ。傷をつけそうになつたら、野江が紅の石の力で止める。もし、野江が間に合わないなら、佐久もいるし私もいる。今まで、怪我をしたことは一度も無い。特に、今回は紅の石も使わない、剣術だけの手合わせだ。滅多なことは生じないさ」

紅は自然のように言い、悠真は都南と義藤を見た。都南と義藤がもう赤い色が強まつた。一人の持つ一色は、似てるようで違う。一色

とは、万人が持つ己の色。同じ色は存在しない。悠真は義藤の色に見覚えがあり、田を細めて思い出した。

赤、赤、赤……

悠真はどこかで義藤の一色と同じ色を見たのだ。悠真が色を見ることが出来るようになったのは、今朝から。義藤と出会つてからの時間も浅い。そのとき、悠真は理解した。紅の石にも色の個性があることと、紅の石の個性が術士とまったく同じであることを。悠真が義藤の一色を見たのは、悠真が義藤の紅の石を暴走させた時。義藤の紅の石と、義藤の一色は同じなのだ。義藤の紅の石と野江の紅の石の色は異なる。元来は、色神紅が生み出した同じ色のはず。紅の石に個性が出るときは、加工の時としか考えられぬい。つまり、紅の石の加工とは、紅の石が持つ赤い色を術士の色と同じ赤にすることなのだ。誰しもが一色を持つ。一色と紅の石の色が同じであるときには、術士は紅の石の力を引き出すことが出来る。

小猿は色を見る良い目を持つてあるの。

赤の声が悠真の脳裏に響いた。声の方向に田を向ければ、紅の後ろに赤が立っていた。

紅の石の力は加工によつて左右される。我が赤色は強大な力を持つ色じや。されど、紅の石は、加工をしなければ大した力を發揮することは出来ぬ。火の国の民は器用な民での。我が色の力を發揮するため加工という技術を見出して、加工によつて、己の持つ一色と紅の石の色を近づける事で、紅の石の力を發揮させるのじや。通常、加工には紅の石と本人の力を比較して極力色が同じになるように近づけていく。されど、それは色に差が出やすく、差が出るほど紅の石は脆くなりやすいから、野江や佐久、義藤と言つた優れた術士ではすぐに石をだめにしてしまうのじや。されど、紅が認める柴は違う。柴は己の田で色を見ることが出来る上、元来術士である柴は色を引き出すことにも長けておる。小猿は、柴に並ぶ良い田を持つておるが、術士として未熟ゆえ、加工師には向かぬの。

赤は都南と義藤を見て、けらけらと笑つた。

義藤の石が色を弱めたのは、小猿が赤に染まらぬまま使つたからじや。か弱き人間どもが、強くなろうと足搔いておるぞ。我が紅が信頼を寄せる一人が本氣で戦うぞ。

赤は嫌味な言葉が多い。しかし、火の国の民を思つてゐるといふことは感じられた。赤がいるから、火の国は守られている。

小猿、見ておれ。あれが、優れた術士の姿じや。

赤が言うから悠真は都南と義藤に目を向けた。

## 赤の手合わせ（4）

向き合う都南と義藤はゆっくりと刀を構えた。二人の間の色が強まり、悠真の隣に座る紅が不敵に笑つた。まるで、その笑い声を合図とするかのように、都南と義藤が同時に駆け出した。

悠真は「手合わせ」を始めてみた。それは遊戯のようで、遊戯のような笑いは含まれていない。剣術に縁遠い存在である悠真でも、二人が優れた剣士であるということは理解できた。

駆け出したのは二人同時だった。都南は右手に刀を持ち替え、義藤は左から都南に斬りかかつた。着物がはためき、刀と刀の擦れ合いう衝撃で小さな火花が散つた。

「出だしは都南の方が余裕だな。義藤は焦りすぎだ」  
紅が頬杖をついて悪態をついたが、悠真には何が何なのか分からなかつた。

最初の接触は一つの火花と同時に義藤が手早く身を引いた。義藤が身を引いた直後、都南が速い動きの転換で義藤のいたところを切裂いていたのだ。一步遅ければ、義藤は真つ二つになつていただろう。都南は片手で刀を持っている。まるで、都南と義藤の間には大きな実力さがあるようだった。

都南と義藤は円を書くように間合いを保つていた。都南が一步前に進めば、義藤が一步後ろに下がる。義藤が一步前に出れば、都南が一步後ろに下がる。都南は無防備に歩いているようで、隙の無い動きをしていた。都南と並ぶと、義藤が剣術で劣っているように見えるが、義藤は悠真の喉元に容易く刀を突きつけた存在。義藤の実力を考えると、都南が計り知れないほど優れた剣術の使い手なのだと証明されていた。

「義藤も腕を上げたね」

佐久が後ろから義藤を褒めていた。

「当たり前だろ。義藤は忙しい仕事の合間に縫つて、毎日、毎日、

一人で鍛錬を続けていたんだからな」「紅が笑っていた。

「手合させ」と言うからに、悠真は二人が激しく打ち合つ様子を想像していた。しかし現実は違う。一人は互いに見合わせる時間が長いのだ。一度目に一人が打ち合つたのは、しばらく経つてからだつた。二度目の打ち合いで先に駆け出したのは都南だつた。都南は義藤に向けて踏み込むと片手で持つていた刀を両手に持ち直し、下から上へと斬り上げた。義藤は後ろに飛び跳ねて交わすと、着地と同時に足を踏み変え都南の懷刃指し、刀を突き刺した。

瞬きをするよりも短い間に、都南と義藤の攻防は続いていた。義藤が都南を突き刺すために突いた刀の先を都南は左に交わしながら刀で払い落とした。払い落とされながらも引かぬ義藤は、刀と刀を擦らせながら刀を押し払つていた。刀と刀で強い押し合いが行われていた。

「腕力では義藤に勝ち田は無いな。都南に腕つ節で勝てる男は滅多におらん」

遠次が言つた直後、義藤は跳ねるように後方へ飛び、二人は再び間合いを計つた。遠次が言つたように、都南と義藤では腕力が違うらしい。見た目からも想像できるが、都南の方が義藤よりも体が大きい。浅黒い肌をした都南と、少し色白な義藤では、誰が見ても都南の方が強いということだろう。義藤は腕力で勝てないことを知つているかのように、身を引いたのだ。引いた義藤を見て、都南が笑つた。

「おいおい、義藤。お前、腕を上げたな。冷静な判断も磨きがかかるつていい。腕力もかなり上げたんじゃないか？」

都南が額を着物でぬぐいながら言つた。一方の義藤は肩で息をしていたが、その目はまっすぐに都南を捉えていた。

「俺は強くならなくちゃ、いけませんから」

義藤の額から汗が流れていおり、都南は笑つていた。

「だが、俺はまだ抜かされるつもりはないぞ」

都南が言い、再び刀を構えた。

「いつの日か、抜きます。あなたも、野江も、佐久も……。俺は、強くなきやいけないから」

義藤も言い、再び刀を構えた。

三度目の打ち合いは、二人同時に駆け出した。上から刀を振り下ろすのは都南。下から迎え撃つのは義藤だった。刀から火花が散った。今度は一人とも後ろに下がることをしなかつた。義藤が力ずくで刀を振り上げたが、都南は後ろへ交わした。義藤よりも都南の方が一枚上手だ。直後、義藤が態勢を立て直す前に都南が刀を横に振りぬいた。

悠真は義藤が斬られると思った。都南の腕は義藤よりも長く、都南の間合いは義藤よりも大きい。都南の刀は義藤の刀よりも長い。力任せに都南の刀を振り払つた義藤に、態勢を立て直す余裕は無い。義藤の色と、都南の色が激しくせめぎ合い、悠真の横に座っている紅が身を強張らせるのを悠真は感じた。

白い玉砂利が二人の足元で音を立てていた。都南が横に振りぬいた刀、義藤が地に沈み込む。

怪我をする事はない。

悠真は紅の言葉を信じていた。目の前で誰かが傷つくところを見たくなかった。悠真が声を出すよりも早く、悠真が目を閉じるよりも早く、義藤は地に沈み込み低い位置から都南の間合いの外へと抜け出した。剣術など知らない悠真は、何が起こったのか分からなかつた。義藤が体をかがめて都南の刀を交わし、屈んだまま転がるように間合いの外へと抜け出したのだ。

「小猿、義藤が斬られたかと思ったのか？」

紅が笑いながら言った。

「言つただろ、義藤は天才だ。まだまだ、都南には及ばないがな。めずらしく都南が本気になるぞ。あいつは、紅の石を使わずとも術士以上の力を持つ存在。今の義藤に勝ち目は無いさ」

紅が眞面目な目をして、都南と義藤の手合せを見るから、悠真は

紅の視線の先を追つた。

四度目の打ち合いは、都南の一方的な攻撃だった。都南は何度も何度も刀を振りぬき、義藤はそれを受け止めていた。悠真は目で違うのが精一杯だった。刀から小さな火花が飛び散り、義藤は防戦するばかりだった。悠真が視線を動かすと、紅の石を持つ野江が、打ち合う二人に一步步み寄っていた。野江が手合わせを止める間合いを計つているのだ。

## 赤の手合わせ（5）

都南の義藤の手合わせは終盤を迎えていた。右に左にと、刀を振り義藤を追い詰める都南と、必死に防戦する義藤。都南が一方的に義藤を攻め、朱将としての実力を義藤に示していた。

「追い詰められてから、長く食らいつく。強さを願う義藤らしい」遠次が小さく笑っていた。

火花が散るほど勝負の中、悠真は紅を守る赤の仲間たちの力をまざまざと見せ付けられた。これが、術士の力なのだ。もし、紅の石を交えた戦いになるのなら、彼らの戦い方はもつと変わるはずだ。これほど優れた力を持つ義藤が、今夜死すことを覚悟している。悠真が復讐をしようとしている相手は、計り知れないほど遠くにいて、悠真には手が届かない。悠真に復讐が果たせるのか、その確証はなく、悠真自身も己の命を愚かな方法で捨てようとしているのだ。

白い玉砂利を踏み荒らしながら、都南と義藤は手合わせを続けていた。一人が激しく打ち合つてから一分もたたない間に、義藤は後方に大きく姿勢を崩した。後方へ大きく姿勢を崩した義藤は、倒れながらも片手を地面につき地に横たわる前に転がり都南の横側に抜け出した。義藤の身体能力は悠真よりも遙かに高く、真剣を目の前にしても恐れることなく戦う、その強い意志が悠真よりも遙かに上だった。

義藤は片手で跳ねるように立ち上ると、寸分の隙もなく都南の懷に飛び込んだ。玉砂利が大きな音を立てて踏み荒らされ、刀を構えて飛び掛る義藤からは鬼気迫るものを感じた。都南も飛び掛る義藤に刀を向け、都南の刃の先は義藤の首を捉え、義藤の刃の先は都南の心臓を捉えていた。都南が一步後ろに下がるも、義藤は止まらない。

「あいつ…」

紅が小さく強く悪態をつくと同時に、赤が辺りを満たした。

赤の閃光は白い玉砂利を敷き詰めた中庭を満たし、赤の閃光が巻き起こした旋風が中庭を駆け巡った。悠真の頬を強い風が撫で、障子が大きく音を立てた。複数の玉砂利が飛び、障子に穴を空けた。悠真に玉砂利が当たることが無いのは、紅が紅の石の力を使い悠真たちを守っているからだ。悠真が横にいる紅に目を向けると、彼女は不満そうな表情を浮かべながらも、強い目を赤の閃光の中に向けていた。

赤の閃光が収まると、そこには弾き飛ばされて地に倒れた都南と義藤がいた。伏せて倒れる義藤はもがくように身体を起こし、壁にもたれるようになれる都南は倒れながらも手放さない刀を杖のようにして立ち上がった。紅の石の力を使い、都南と義藤の間に割つて入った野江は乱れた髪を整えるように自らの髪を撫でていた。

「気にくわないな」

紅が立ち上がり、遠次が紅の着物の袖を掴んで止めた。

「紅、おとなしくしている。全ては紅を思うが故の行動だ。この手合わせで、紅も義藤の覚悟が分かつただろ」

紅は不愉快そうな表情を見せると、視線を都南と義藤に戻し強く言い放つた。

「都南、義藤、勝負はついた。戻って来い。野江もこっちだ」「身体を起こした二人は紅の下に足を進めた。不満そうな表情を浮かべているのは紅だけでなく、野江も都南も同様であった。悠真が後ろを振り返れば、佐久が怯えたような表情を見せていた。

「紅、おとなしくしている」

遠次が紅を止めていた。紅が激昂していることは、紅と付き合いの少ない悠真でもはつきりと分かった。

紅のところへ歩みよった三人。義藤だけが目を伏せていた。怒りを露にした紅は、歩み寄った義藤に飛びかかり、胸倉を掴んだ。

「義藤、お前、何を考えているんだ！」

義藤は何も言わず、ただ目を伏せていた。

「紅、お止めなさい」

野江が紅を義藤から引き離そつと、一人の間に入つたが紅の怒りは収まらない。

「義藤、分かつていいのか。今の手合わせ、お前、相打ちに持ち込もうとしたな。己の命を捨てれば、格上の存在に勝てる。お前、分かつてやつたな」

紅は義藤にすがる様に叫んでいた。赤の仲間たちが紅を思つように、紅も赤の仲間たちを思つているのだ。義藤はゆっくりとした動作で紅を引き離すと、乱れた襟元を正した。

「紅、立場を忘れるな。俺は紅を守るための存在だ。そのために強くなり、そのために戦う。紅は踏み越えて行かなきや行けない。俺が倒れても、俺を踏み越えて紅は進まなくちゃいけないんだ」

義藤が言つから、紅は荒々しくその場に座つた。

「相打ちに持ち込んだところで、己が死ねばそれは負けだ。義藤は最早強い存在。実力者義藤に、敵は命がけで挑んでくるぞ。己の死を覚悟しているのは、お前だけじゃない」

そして紅は苛烈な目で都南を見た。

「それは都南も同じだ。今回、相打ち覚悟で飛び込んだ義藤が悪い。だが、敵が相打ち覚悟で飛び込んで、そのまま倒されるようどうする？死を覚悟でお前に挑むものは多い。正攻法でお前に勝てないことぐらい、皆知っているからだ。朱将として、どのような敵であつても、どのような覚悟と事情で敵が飛び込んできても、お前は勝たなきやいけない。覚えておけ」

紅の声と口調と態度が、彼女の怒りを表していた。

## 赤の涙（1）

紅の激昂で場を収めた都南と義藤の手合わせに、締めくくりの言葉を告げたのは遠次だった。

「若い者たち、一度落ち着く事を覚えろ。紅の言葉にも一理ある。敵は様々な事情と覚悟を持つて紅の命を狙つてくる。その理由は、お前たちに刀を振り下ろすことを躊躇わせることがあるだらう。だが、お前たちは戦わなければいけない。お前たちにも紅を守るという強い信念があるからな。死すことを覚悟で挑む者は強い。その事実は義藤の行動で証明された。敵も死すことを覚悟して挑んでくるのなら、お前たちは苦戦を強いられるだらう。二年前のように、多大な犠牲を支払わなくてはならないかも知れない。二年前のように、多くのものを失い、傷つかなくてはならないかも知れない。二年前のように、未来を閉ざされ、運命を捻じ曲げられるかも知れない。それでも、お前たちは今夜、紅のために戦うことを決意し、二年前に紅を守るために戦い、傷つき、多くのものを失った事を後悔していないだらう。わしも後悔しておらん。惣次が死んだことも、受け入れておる。それが、我らが歩む道なのだ。そして紅、覚えておけ。わしらはお主を守る。命を失うことを厭わずに。野江、都南、佐久、鶴藏、そして柴もお主のために戦い続けるだらう。それはお主が色神だからではない。なぜ、抽象的な存在に命をかけねばならぬのだ？わしらが戦うのは、お主が色神だからだ。色神がお主という愛しい存在だから、色神に命を捧げようと思うのだ。わしらはお主の幸せを願っているのだ」

遠次は柔らかく微笑んだ。その微笑は、紅という人物を心から慈しんでいる微笑であった。微笑んだ遠次はそっと紅の髪を撫でた様子は、まるで父が愛する娘に愛を示しているようであつた。

「紅、聞くんだ。わしは多くの紅に仕えた。いけ好かない紅を守りうとしたこともあつた。先代の紅のように、尊敬し守りたいと願い

つとも守れぬ紅もいた。わしが紅に仕えるのは、きっとお主が最後だ。心から尊敬していた先代の紅を守れずに死なてしまい、わたしと惣次は生きる意味を失った。だが、お主が紅となつた。十歳の幼い娘が紅となり、苦難を強いられた。お主は生きるために足掻き、生きるために強くなろうと願つた。お主に命を託す赤の仲間を守らうとし、新たな紅という存在を作り上げた。紅、お主は火の国を変えることが出来る。火の国を変える力を持つ赤の仲間たちが、お主に忠誠を誓つてある。紅、落ち着け。お主は必要とされているんだ。紅という肩書きを抜きにしてな」

遠次の手は髪か紅の頬に移り、そっと紅の頬を指で撫でた。同時に紅の目から涙が零れ、彼女は肩を震わせ、震える声で告げた。

「頼むから、命を失わないでくれ。頼むから、私を一人にしないでくれ。頼むから、私の近くにいてくれ。頼むから私と一緒に生きてくれ」

紅の目から、次々と涙が溢れた。

「私は、皆が命を賭けて守るような存在じやない。私は、ただ石を生み出す力を持つているだけなんだ。私は、何も出来ないんだ。小猿の故郷を壊滅に追い込み、恩ある惣爺を守れず……私は何も出来はしない」

ゆっくりと口を開いたのは野江だつた。

「あたくしはね、先代の紅に助けられたわ。天童として、術士の道を強いられ、孤独に苛まれていたとき、先代の紅は鶴巳を紅城に受け入れてくれたわ。あたくしはね、先代の紅を父のように慕つたわ。そして、先代の紅が命を失つた後に、あなたに出会つたの。あなたに出会つて、あたくしはもう一度決めたわ。今度は、愛おしい存在を守つて見せるとね」

都南が言つた。

「俺は、二年前の戦いの後に紅城を去る覚悟を決めた。術の使えない俺に、紅城での居場所は無いからな。俺は十の頃から紅城で生きていた。親や兄弟も何をしているのか分からない。俺は、紅城から

追い出されることが怖かった。紅、お前はそんな俺を受け入れた。もう一度、朱将として立つ覚悟を決めさせたのはお前だつたんだ。俺はお前を守りたい。その気持ちでここまで来たんだ」「佐久が言った。

「紅、僕も都南と同じだよ。一年前の戦いで、僕は術士としての未来を閉ざしてしまったから。でも、そんな僕に紅は未来をくれた。僕を叱咤し、もう一度立ち上がる力をくれた。勉学が好きな僕のために、僕にしか出来ない立場を作ってくれた。きっと僕は紅城の中でないと生きていけない。歩くことさえ苦手な僕が外の世界で生きていけるはずがないからね。僕はね、紅を守るよ。僕の未来をくれたのは紅だからね」

鶴藏が続けた。

「あっしは、紅様が好きです。はい。紅様は先代の意志を引き継ぎ、先代と同じようにあっしを受け入れてくれやした。あっしは、紅様と紅様の仲間のために、からくりを作り続けやす。はい」

小動物のような鶴藏が、しつかりと意見した。最後に言つたのは義藤だった。

「俺は色神が嫌いだつた。術士になるつもりも無かつたし、紅城へ足を運ぶつもりも無かつた。その俺が、ここに立つてているのは、お前を守るためにだ。俺は、先代の紅のように、お前を死なせたくないから術士になり紅城へ來たんだ」

紅が遠次から離れ、赤の仲間たちを見渡した。そんな紅は涙の中笑つた。

「私は歴代紅の中で最も恵まれている」

悠真はその笑顔を心に刻んだ。仲間に對し信頼を示し、仲間のため涙する紅の表情、行動、言葉、声、紅を構成する全てのものが悠真を惹きつけていた。

## 赤の涙（2）

紅は重圧の中生きている。自分を守るために誰かが命を失うかもしれない。それが大切な人だとしたら、なんとも辛いことだ。義藤がそっと手を伸ばし、紅の肩に手を乗せた。

「大丈夫、ずっと一緒にいる」

義藤の言葉は温かい。義藤は何も言わず、懷から布を取り出し紅の頬に流れる涙を拭いた。その様子は、優しい兄のようであった。義藤と紅の間には、悠真が割つて入ることが出来ない空気が流れている。それは、赤の仲間たちも同様であった。紅が色神となる前から、二人は一緒にいる。紅が色神になつたから、義藤は紅城へ足を運んだ。義藤は色神を守っているのではなく、悠真の目の前にいる女性を守っているのだ。その間には誰も入ることは出来ない。悠真の横で小さく笑う野江の声が聞こえた。

「さあ、あたくしたしは少し休みましよう」

野江が都南の背中を叩き、草履を脱いだ。野江の行動は紅と義藤に気を使つていていた。

「お、おう」

都南も野江の後を追い、草履を脱ぎ、くしゃくしゃに丸めて投げ捨てた赤い羽織を手に取ると佐久の部屋に足を踏み入れた。

「わしも休むとするか」

遠次が言い、部屋に足を向けた。

「ほら、佐久、鶴藏。行くぞ」

遠次が立ち尽くす佐久と鶴藏の肩を叩き、佐久と鶴藏も部屋へと下がつた。当然のように佐久は足を滑らせ、今度は鶴藏が佐久を支えた。

「佐久はん、氣いつけてください」

佐久を支えることに赤の仲間たちは慣れているようだった。赤の仲間たちが佐久の部屋の中に入るから、悠真は居心地が悪くなり赤の

仲間たちの後を追つた。義藤が紅を守ろうとしているから、悠真が義藤に行つている品定めが終わつてしまいそうだった。一人の女性のために強くなり、一人の女性を守るために命を賭して、一人の女性を支えるために笑い続ける。義藤を良い奴と決めたくなかつたが、悪い奴とも決めてくなかった。悠真は一度、紅と義藤を振り返り佐久を追つた。泣く紅の背を義藤がさすつていた。その光景は悠真の心にしこりを残すには十分であつた。

佐久の部屋の中に座つた時、都南が室内で遠慮なく服をはたき始めた。部屋の中に埃が舞うが、佐久も大雑把な性格なのか、あまり気にする様子は見せなかつた。野江が不快感を露にし、一つ咳払いをした。

「都南、外ではたいていただけないかしら？」

都南はわざと野江の前で着物を叩き言つた。

「今、外に出るほど俺も野暮じやないさ。いいじゃにか。部屋の主が気にしていないんだ」

野江に都南も負けていない。都南の口調は強く、悠真に紅の石を渡すことに反対し朱塗りの刀に手を伸ばしたときと同じような一色の乱れがあつた。

「お茶に入るでしょ。都南はあたくしに喧嘩でも売るつもりなのかしら？早く、羽織を着なさいな」

野江がお茶を指しながら不満を言い、押し負けた都南はくしゃくしやに丸めた赤い羽織を羽織つた。野江の口調も荒い。どうやら野江も苛立つてゐるようであった。一人の苛立ちは辺りに静寂を与えて、悠真が周囲に目を向けるには十分の時間があつた。悠真は都南が赤い羽織をまとうのをじつと見ていた。そして思うことは、赤い羽織の布は良い布なのかもしれないということだ。都南が乱暴に丸めた羽織には皺の一つも残されていなかつた。もしかすると、赤い羽織は絹なのかもしれない。悠真は、隙があれば誰かの赤い羽織に触れてみようとした。田舎者の悠真にとって、絹はとても珍しいもので、どのように絹を赤に染色するのか興味があつた。赤が高貴な色

とされる火の国では、絹を赤に染色することはあまり無い。赤の源は何なのだろうか。悠真には分からぬことばかりであった。

赤い羽織をまとい、皺がついていないか確認するような素振りをした都南は口を開いた。一時の感情の乱れなのか、都南の口調からは先ほどのような苛立ちは感じられず、一色も平静を取り戻していた。

「どうも気が立つのは、義藤の奴が気が立つてゐるからだろうな。あいつの感情の乱れは分かりやすいから、俺たちにも伝染する。別に野江に喧嘩を売るつもりは無いぜ」

都南が平然と言つた。誰も否定しないということは、赤の仲間たちは同感だということだろう。しかし悠真はそのように見えたのだ。都南には、義藤は平然と落ち着き払つてゐるように見えたのだ。都南と同じように平静を取り戻した野江がお茶を入れながら続けた。

「そうね、一年前のことと思い出しているのかもしれないわね」

悠真は一年前に何が起きたのか知らない。知つてゐることは、二年前に惣次が紅城から出て行くきっかけとなつた戦いがあつたということだ。これまで優れた力を持つていた術士が、術を満足に使えなくなるほどの戦い。紅たちが思い出す一年前の戦いに悠真是興味があつたが、それを聞き出す勇気は無かつた。先ほどの話では、二年前の戦いの後、都南や佐久までもが紅城を去ることを考えたと話していた。

二年前。

悠真は一年前に思いを馳せた。一年前、悠真は何をしていただろうか。少なくとも、火の国を支える色神紅や、紅を守る優れた術士たちが傷ついたとは夢にも思つていなかつた。佐久が笑つた。

「僕は今日、義藤が都南と手合させをして良かつたと思うよ。義藤は頑張り過ぎなんだよ。眞面目で、礼儀正しくて……義藤は紅城に來た十年前からまつすぐに走り続けてきた。僕はね、さつき義藤の素が出てきたみたいで嬉しかつたよ。大丈夫、一年前のような事態には決してしない。僕たちは、一年前より強くなつたんだからね」

遠次がゆっくりと口を開いた。

「紅は細い糸の上に立つておる。今にも切れそうな糸の上に。お前たちが、紅が足を踏み外さぬよう支えるのだ」

赤の仲間たちは遠次に深く頭を下げた。悠真は赤の仲間たちを見つめ続けた。彼らは何を思い、どんな未来を描いているのか。悠真是が知りたかった。

## 赤の傷（一）

赤の仲間たちは一年前のことを強く意識し、今日これから生じるであろう戦いを一年前と重ねていた。赤の仲間たちは一年前のことを強く引きずっている。赤の仲間たちはとても優れた術士たちであるから、彼らを感情を搔き乱す出来事はどのようなことなのか、悠真には興味があつた。悠真は赤の仲間たちとの距離が着実に縮まっていると信じており、残された距離をさらに縮めるには一年前の出来事を知るしかないと思ったのだ。

「ねえ」

悠真が声を出すと、赤の仲間たちが悠真に目を向けた。

「ねえ、一年前って……」

悠真が口にすると、その場の空気が豹変した。野江が睨むように悠真に目を向け、佐久が一つ咳払いをした。感情を隠そうとしない都南は、あからさまに不快感を示し、鶴藏は怯えたように身体を縮めた。遠次までもが、苛立ちを露にしていた。

「それは、あなたが口にすることじゃないわ」

今まで悠真に対し友好的だった野江が、初めて冷たい言葉を投げかけた。もちろん、悠真は術士でないし、紅から赤を許された赤の仲間でもない。それでも、惣次を架け橋として赤の仲間に近づけたつもりだった。あからさまに拒絶されたことは、悠真にとつてとても辛いことだった。いつも悠真の味方でいてくれた野江が悠真を否定し、悠真は野江から仲間でないと言われたようを感じた。

「い、ごめんなさい」

悠真は謝るしか出来なかつた。同時に、心に冷たい風が吹き込んだ。赤の仲間たちが持つ赤色がとても遠く感じ、悠真は自分自身を見た。悠真は赤を持つていない。十歳の選別で術士の才覚を見出されるとなく、十六になる今日まで故郷で平凡に暮らしていた。術士でない。赤の仲間たちは十歳の選別で術士の才覚を見出され、それから

長い年月紅城で紅を守り支えるため生きてきた。下緋ならば地方に派遣され「術士様」として崇められることもあるだろうが、中央の紅城で生きる赤の仲間は違う。紅の命を狙う者と戦い、官府との政治的工作に加わり、知恵を絞り、強さを求める時に命を賭して紅を守る。紅は紅城の一室で生きる「籠の中の鳥」と己を称していたが、赤の仲間たちも似たような存在だ。赤の仲間からすれば悠真は異質な存在。悠真と赤の仲間に何の共通点があるというのだろうか。どうして、悠真是彼らと仲間になれると思ったのだろうか。仲間になりたいと思うことさえ間違っているのに、なぜ彼らと仲間になれると思い込んでしまったのだろうか。紅が惣次の石を持つことを認めてくれたから、赤の仲間が悠真が惣次の紅の石を悠真に手渡してくれたから、紅の本当の姿を垣間見たから、優れた存在である赤の仲間たちが苛立ち言い争う場所に悠真はいたから、それは赤の仲間たちが優しいから、赤の仲間たちが輝いているから。赤の仲間たちが互いを思っているから、故郷を失い孤独な存在となつた悠真是彼らの一員になりたいと願つたのだ。強い一体感を持つ彼らの一員になるには一年前を知るしかないと思つたのだ。田舎者の小猿ば、紅城で紅を支え守る赤の仲間になれるという思い 자체が間違つているといふのに。

「ごめんなさい」

赤の仲間たちは悠真を責めない。一年前のことを探られたくないといふ以外は、悠真を否定するつもりは無いらしい。都南と義藤の手合わせの場にも同席させてくれた。紅の涙を隠そうともしなかつた。なのに受け入れられなかつたことが、悠真をとても孤独にさせた。

「いいのよ、悠真」

野江の声は優しかつたが、悠真の孤独は消えなかつた。一体感を覚え始めていたからこそ、孤独だつた。赤の仲間たちは平然としているが、悠真の心中は複雑だつた。このまま消えてしまいたい。彼らの前にいたくない。そう思うほどどの衝撃だつた。

「俺、廁に」

いたたまれない気持ちになつて、悠真は席を立つた。悠真と目が合つた鶴藏は、怯えるように肩をすくめた。

「廁なら出て左の突き当たりだよ」

佐久が身振り手振りを交えて教えてくれた方向に、悠真は逃げるよう外に飛び出した。

術士に良いことは無い。特に紅を守る赤の仲間たちは命を賭して紅を守り、支えている。それは紅を慈しみ、紅を愛しているから。悠真に赤の仲間と同じ気持ちはあるだろうか。紅の命を狙う敵から彼女を守るために命を捨てることが出来るだろうか。その覚悟が出来て、それを実行できない限り悠真は赤の仲間に近づくことが出来ない。二年前の出来事を隠されたことがそれを証明し、悠真は赤の仲間の傷を知ることが出来ないのだ。

## 赤の傷（2）

障子を開いて外に飛び出した悠真は、外廊下に立ち尽くした。都南と義藤の手合わせと、野江が一人を止めるために使った紅の石の力によつて、中庭は先ほどまでの高貴な静寂さを失つていた。中庭まで、義藤が片付けていることが、微笑ましく見えた。

覗き見をするつもりは無い。けれども、紅と義藤が悠真の存在に気づかないから、悠真は彼らを覗く形になつてしまつのだ。紅は中庭の岩に座り、義藤は熊手を使って白い玉砂利を均等に敷き詰めていた。悠真が紅の石を暴走させたときも、義藤は手早く部屋を片付けていた。どうやら、義藤はそういう立場らしい。義藤が生真面目なことは、義藤と出会つたばかりの悠真でも分かるほどだ。それに加えて、赤の仲間の中で最年少という立場が、義藤をそのような役回りにさせたらしい。豪快な都南が片づけをすることも、身体を動かすことが苦手な佐久が片づけをすることも、上品な野江が片づけをすることも、想像するに難しい。義藤が後片付けをするから、近寄りがたい義藤がとても人間味溢れる存在に思えるのだ。抜き身の刃のようなのに、冷たさはなく紅を思つ気持ちを隠しきれていない。

「もう、十年になるんだな」

紅が義藤に声を掛けっていた。十年。というのは、今の紅が色神になつてからの年月だ。紅がしみじみと語つていた。きっと、十年の間、紅と義藤は一緒に歩んできたのだ。悠真には埋めることが出来ない年月だ。

「そうだな、もう十年になる」

義藤は手を止める」となく紅に返した。

「義藤は真面目だから、十年間、一度たりとも私の名を呼ばないな。私の名を知らぬ野江たちならまだしも、義藤は私の名を知つているのに」「

紅は頬杖をついていた。義藤は小さく笑つたが、その手を止めよう

としない。白い玉砂利に目を向け、熊手を動かしながら話した。

「あの名を持つ人は、死んだことになり埋葬されているんだろ。両親も、娘は死んだと思い込んでいる。名を呼ぶだけ、寂しくなるだろ。一度と帰ることが出来ぬ生活なんだから」

義藤は紅が色神となる前からの知り合いだ。紅は色神となる前は普通の人間であつたのだから、親がいて、名前があるのは当然のことだ。色神となることで全てを失い、これまでの自分は死んだことになる。それは、色神が歩む辛い人生だ。

「義藤は強いが優しいな」

紅が笑いながら言い、義藤は手を止めることなく苦笑した。

「俺は強くないさ。紅、今でも俺は思うんだ。俺は、こうやつて紅の横にいて良いものか、と。二年前、紅を救つたのは赤丸だ。赤丸は強い存在だから、赤丸が表の存在になり、紅を守つたほうが良いのではないかと、ずっと考えているんだ」

すると紅は立ち上がり、義藤に歩み寄つた。

「赤丸は強いさ。赤影は、色神紅が持つ刃で赤影の頂点に立つ赤丸は色神紅が持つ最も鋭い刃だ。朱護や朱軍は色神紅が持つ盾だから、根本的な存在意義が違うんだ。 赤丸、そうだろ」

紅が空に向かつて声を掛けた。人影は見えないが、そこに赤い色が満たされるのを悠真は感じた。

「ほら、赤丸は私の近くにいる」

満たされる赤は、赤丸の持つ色だ。その赤は、己を押し殺している色だつた。己を押し殺すことに長けているのか、一色の特徴はあまり感じられない。義藤は何も見えないのか、空を見上げて紅に言った。

「今夜、何があつても赤丸を近くから離すな。俺が囮になると決めたのは、紅の近くに赤丸がいるからだ。赤丸は誰よりも強い存在だから。赤丸がいれば、紅は安全だ。大丈夫、敵の正体を掴んで追い詰める。火の国の民を守るには紅の石を有効に使う必要があり、紅の石を有効に使うには紅の命を狙う正体を掴み、正面から追い詰め

なくてはならない。紅、何があつても焦つて踏み誤るな。正面から敵の正体を掴み、証拠を突きつけるんだ」

義藤の声は強く、搖ぎ無い石が溢れていた。そこで悠真は義藤の真意を知ったような気がした。悠真は義藤が囮になるのは紅を守るためにだと思っていた。けれども、もしかしたら義藤はもっと深いところまで考えているのかもしない。敵を殺すのでなく正体と証拠を掴み追い詰める。その根源まで辿りうとしているのだ。官府がとかげの尻尾のように一部を切り落として逃れることが無いように、根源まで辿って証拠を掴んで正面から追い詰める。悠真は義藤の覚悟が恐ろしく感じた。その義藤の言葉が悠真の胸に残った。

「幼いころ、俺は沢山のことを憎んでいた。色神紅を憎み、自分の生い立ちを憎み、近くにある物だけを守りうとしていた。でも、紅と出会つて変わったんだ。紅は色神となる前から、世界を美しく見ていた。きっと、紅の目に映る世界は、俺が見ている世界と違う。世界は輝いているんだろう。そんなことを思つていただろう。紅は昔から、俺たちが守りたいと思っていた存在。守りたい小さな存在。紅が色神とならなければ、俺は隠れ術士として生きていただろう。紅が色神となつたから、俺は正規の術士として歩む道を得て、紅という色神を憎む気持ちを失つたのさ。野江たちが認める先代紅を、俺も認めることが出来た。そして、叶わぬことと知りながら、会いたいと願うほどだ。俺は今、紅城で生きることが出来て感謝している」

義藤を満たす赤色は、とても優しい色だ。強いが優しい色。紅が義藤のことを「強いが優しい」と称していた理由は、きっと義藤の色を見てのことだろう。人が持つ一色は、同じ色は存在しない。色は偽ることなく、その人の人柄を表現するから。

## 赤の傷（3）

紅を見ていると、悠真の世界が赤く染まつていった。きっと、悠真は紅に惹かれているのだ。紅の鮮烈な赤色に惹かれているのだ。多くの傷と涙を隠し必死で生きている紅が悠真の心を赤く染めていくのだ。

我が紅は、美しかる。

気づけば悠真の横に赤が立っていた。赤い目がひたと悠真を見つめていた。

いけ好かぬ紅もおつた。わらわは色でしか紅を選ばぬから。紅になつた途端、態度を翻し横柄になる者もある。紅になつた途端、仕える術士たちへの礼儀を忘れる者もある。歴代の紅は、平均して五年に入れ替わるのじや。短い者は一年と持たぬ。

赤は悠真のあごを掴んだ。

無知な術士らは、紅を殺すのは官府だけだと思うておるようじやが、紅を殺すのは官府だけでない。わらわが、殺した紅も数しけず。我が色は強い色じや。我が器が下らぬ人間であれば、我が色が下らぬ色となつてしまふじやろ。だから、わらわが紅を殺す。

悠真は息を呑んだ。赤の言葉は眞実に違ひない。その声が強く、偽りを含んでいないことは鈍感な人間でも分かるだろう。色神紅を選ぶんは赤だ。赤は色神紅を選び、赤色を強めようとする。赤の利益にならぬ紅を己の手で殺し、方や守ろうとする。悠真は義藤と言葉を交わす紅に目を向けた。

されど、わらわが守ろうと願つても、愚かな人間の手によつて殺される紅もおるのが事実じや。先代の紅がその代表じや。わらわが守ろうと願つても、わらわ一人では守れぬ。先代紅にわらわは何の不満も抱いておらなじやつた。されど、愚かな人間は先代紅を殺したのじや。先代紅が赤丸と共に死した時の哀しみが、小猿に理解できるか？小猿は我が紅を守ることが出来るのか？我が色に染まれ。

さすれば小猿は我が紅を守る力を手にする。一年前のような事態もおこらぬ。紅を守る力を持つ存在が傷つかずに済む。小猿、忘れるな。我が色に害なすならば、わらわは小猿を守らぬ。色は己の利益のためにしか動かぬのじゃからな。

赤が横柄に笑つた。先代紅の話は何度も耳にした。遠次や惣次だけではなく赤の仲間たちは先代紅を思い、先代紅を守ろうとしている。官府が他国との戦争に強要し、戦争を反対し暗殺された先代紅。赤は先代紅を守ろうとし、守りきれず死なせてしまった。赤は方や紅を殺し、方や信頼する紅を守ろうとする。赤は己の意思で生きているのだ。一年前のことを見るのは知らないが、赤の仲間たちが隠そうとするほどの傷がとても深いものだと悠真は感じた。悠真の目の前にいる紅も多くの修羅場を生き抜いてきた存在なのだろう。先代の紅に忠誠を誓つていた赤の仲間を己の仲間としたのは、彼女の人柄にあるはずだ。紅の人柄は悠真は垣間見てきた。紅が持つ赤色を悠真は見ていた。

小猿も、己の色に殺されぬようにするのじゃな。

悠真は赤を見つめた。赤という色を計り知れずにいたのだ。赤色の本質が分からずについた。赤が悠真の前に姿を見せ、悠真に語りかけ、悠真に力を貸してくれるのは全て赤自身のため。その赤が紅を守るうとしているように感じるには、悠真が赤と言葉を交わしたからだ。強く、己に絶大な自信を持つているような赤が、紅を守ろうとしている。赤は紅のために悠真に力を貸しているのかもしない。

おっと、小猿の色がわらわを追い出そうとしておる。小猿、覚えておくのじや。我が色に染まれ。わらわのためにならぬ存在を、わらわが守る義理もなく、我が紅や我が紅を守る力存在を危険にさらす必要もない。我が色に染まらぬのなら、わらわは小猿を守らぬ。わらわが、小猿を気に掛ける必要もあらぬ。

赤は身を翻して言った。

小猿、忘れるでないぞ。わらわが小猿を守る理由。わらわが小猿に我が色を貸す理由をな。

赤の華奢な後姿は、どこか紅と似ていた。悠真が赤色に心惹かれたびに、悠真を止める声がするのだ。

駄目よ、悠真。駄目よ悠真。あなたは色を選んでは駄目。赤に惹かれては駄目。紅に守つてもらいなさい。それでも、赤に惹かれては駄目。

悠真は自分が何なのか分からなくなっていた。悠真は術士の才覚に見放された田舎者の小猿だ。その小猿が故郷を失い、紅城に放たれて、その上夢か幻かも分からぬ赤に出会い、自分が何なのか分からなくなり始めていた。どうして急に色が見えるようになったのか、どうして赤が悠真の前に現れるのか、悠真を止める無色な声は何者なのか、悠真は何も分からなかつた。その答えを誰かに聞きたかつたが、それは許されないことのように思えた。悠真は大きな力の波に呑まれているのだ。その波からは抜け出すことが出来ない。後は、溺れるのを待つだけなのだ。赤の仲間の一員にもなれず、故郷にも戻れない。大きな流れに呑まれて、悠真はどうしようもない気持ちになつた。

大丈夫、大丈夫よ。悠真。

無色な声が悠真を抱きしめた。声で、悠真を抱きしめた。その声は、何の色も持つていなかつた。

## 赤の傷（4）

赤が悠真の前から去ると、赤で満たされていた悠真の世界は様々な色を取り戻していく。空の青、白い玉砂利、灰色の岩、茶色の外廊下、朱塗りの柱、紅が持つ鮮烈な赤色、義藤が持つ強いが優しい赤色。悠真の世界に様々な色が満たされたとき、突然紅が振り返った。紅は赤く腫れた目を見開き、驚いたように口を開いていた。紅の様子に気づいたのか、義藤も悠真を見た。

「小猿……」

紅が口を開いた。悠真は立ち聞きしたことを叱責されることを覚悟し身をすくめた。しかし、紅は責めるどころか目を見開き、心底驚いたように悠真に言ったのだ。

「小猿、いつからそこにいた？」

義藤が怪訝そうに眉間にしわを寄せたが、紅は悠真がいつからこの場にいるのかが気になるようで、腰掛けていた石から飛び降りると、悠真に歩み寄った。

「小猿、いつからそこにいた？」

紅の問いは強く、悠真は答えるしか出来なかつた。

「紅と義藤が十年一緒にいるって辺りから」

悠真が呟くように答えると、紅はますます目を見開いた。そして、けらけらと笑つたのだ。義藤が心配そうに紅に歩み寄つた。

「紅、どうしたっていうんだ？」

義藤の問いに紅は笑いながら答えた。

「私はずっと色を見ていた。たとえ、私の後ろに立とうとも、私は色で気配を感じることが出来る。特に先ほどは赤丸の気配を探ろうつと、色に集中していた。なのに、私は小猿がいたことに気づかなかつた。いや、これまでずっとそうだった。私は小猿の色が分からぬ。不思議だよな。全ての者は一色を持つというのに、私は小猿の色が見えない。小猿、お前は何者なんだ？私は小猿に興味

がある」「

紅が義藤の背中を叩いた。

「義藤、悪いが今夜小猿を死なせないようにしてくれ」

言つて、紅は義藤の背を叩いた。

「義藤、一年前と比べてお前は強くなっている。だから私は決めたんだ。今回、惣爺を殺し小猿の村を壊滅に追い込んだ敵の正体を知り、証拠を掴み、敵を追い詰めるために義藤が行くことを許したんだ。義藤は強くなっている。自信を持って」

義藤が笑い微笑んだ。

「大丈夫、小猿も守るし、俺も生きて戻つてくる。一年前に先輩である野江、都南、佐久、遠爺、惣爺が戦い、困難に立ち向かう姿を見た。俺自身も生きる道を示された」

義藤は深く紅に頭を下げた。

「どんな困難にも立ち向かつてみせる。一年前に証明されたんだ。二年前に深い傷を抱いた野江と都南と佐久が立ち上がる姿を見て、俺は誓つたんだ。そんな傷を抱いても、どんな苦しみがあつても、己はそれを踏み越えていくのだと。痛みを超えて、苦しみを超えて、また強くなれると。戦う力も、心も、俺は強くなれると。強くなつて、あなたを守り続けると。俺に存在理由を与えてのも、俺に生きる道を示してくれたのも、全てあなただから。すさんだ子供だった俺の心は、あなたに救われたのだから」

義藤は頭を上げて羽織を調えた。義藤の言葉は優しい。他人から感謝され、必要とされているのなら、どんな苦難も乗り越えていけるだろう。

悠真が分かったことは、赤の仲間たちが秘密を抱えているということだ。品の良い義藤がすさんだ子供であるはずがない。優れた朱将である都南が紅城を去ろうとしたのは何が会つたのか。天童として紅城に招かれた歴代最強の陽緋野江はどうにして陽緋になつたのか。優れた術の力を持ちながらも、身体を動かすことが苦手で陽緋になれなかつた佐久は、周囲からどのように扱われていたのか。

人見知りの天才からくり師鶴蔵は、紅城でどのような生活を送っているのか。そして、十歳で色神紅となつた彼女は、どのように戦い、どのような苦難を乗り越えてきたのか。赤の仲間でない悠真は何も知ることが許されない。確かなことは、赤の仲間たちの持つ一色は美しく、温かく、強く、傷を隠し続けているということだ。

「さあ、野江たちのところに行こう」

義藤は微笑み、紅の背を押した。

「大丈夫、何も案ずるな」

義藤が抜き身の刃のような顔で微笑んだ。

悠真は赤の仲間に憧れた。赤の仲間の強い絆と信頼関係と、運命を共にするという一体感に憧れた。しかし、赤の仲間は多くの傷を抱えており、田舎者の悠真とは根本的な部分が違うのだ。

「そうだな。ほら、小猿も行くぞ」

紅が悠真に言った。紅の持つ鮮烈な赤色が、赤の仲間たちをまとめて導く赤色が、悠真を招いてくれるから悠真は赤の仲間に近づけたよつに思えるのだ。

## 赤を護る者（1）

夜が来るまで、悠真は佐久の部屋で過ごした。紅と義藤は抜け出すことが他の朱護に知られないように、遠次と赤の仲間に一度挨拶をする。すると紅の部屋に戻つていった。紅がどのように部屋を抜け出しているのか悠真は興味が会つたが、二年前のことを尋ねて野江の拒絕されてから悠真は赤の仲間に嫌われないように口を噤むことを選び何も尋ねることが出来なかつた。鶴蔵は部屋の隅でからくりの調整を行い、その様子は悠真の興味を惹いた。木造のからくりを分解し、それをくみ上げていくことで何が変るのか、そもそも、からくりはどのようにして紅の石の力に反応して動いているのか、悠真には理解できず術士しか使用できないからくりは魅力的だつた。これからどのような便利なからくりを鶴蔵が作り出し、からくりを使って術士がどのように振舞うのか、悠真は未来を想像した。

赤の仲間たちは、遠次を中心として今夜の襲撃に備えた打ち合わせをしていた。紅と一緒に陽緋野江がいて、都南と佐久は行動を共にする。術の使えない朱将都南と、身体を動かすのが極端に苦手な佐久は互いに互いを補い合つている。

「今日、どんな敵がくるのかしら」

野江が不安混じりに言つた。

「大丈夫、義藤は強いよ。同期だつたら、恐ろしいほどにね。良かつた、義藤より年上で」

佐久が笑つた。彼らが佐久を認めているのは事実であつた。都南が決意を固めるように膝を叩いた。

「赤丸もいるんだろ。二年前、結局紅を守り敵を撃つたのは赤丸だ。俺と佐久と惣爺が敗れた敵を最後に撃つたのは赤丸だ。赤影は俺たちが倒しきれなかつた敵を影から倒し、赤丸は俺たちが破れた敵に勝利した」

都南が赤丸のこと口にした。悠真は赤丸の色を見た。赤丸は己を

押し殺している。紅は赤丸を裏の存在と話し、赤の仲間を表の存在と話した。赤影や赤丸を紅の持つ刃と称し、赤の仲間を紅の持つ盾と称した。赤影は己の存在全てを捨てて紅の刃となっているのだ。遠次がお茶を口に含んで赤の仲間を制した。

「赤影は強い。わしらは紅を支えるが、赤影は違う。紅を守るためなら己の命を容易く捨て、躊躇いなく人の命を奪う。先代紅と共に死んだ赤丸のことを、お前たちは知っているだろう。わしも知らなかつた。先代紅を守つていた赤丸が、誰だつたのか……。一度、紅が話してくれたことがある。先代紅を守る為に赤影の大半が命を失い、残された赤影が再度赤丸を立て再び紅を守つている、とな。赤影は存在しない人間たちの集まりだ。戸籍上で殺されるか、もともと存在しないはずの素質ある人間が赤影になる。よく聞け。紅を守るのはお前たちだけでない。赤影も然り。赤影も紅を守る存在だ。お前たちの仲間だ」

遠次の言葉に赤の仲間は軽く頭を下げた。都南が頭を上げた後、姿勢を正して遠次に言った。

「先代紅と共に赤丸が死ぬまで、俺は赤影のことも赤丸も対して興味はなかつた。赤影は紅の持つ影の力であり、漠然と、暗殺をする存在と思つていたから。でも、現実は違う。先代紅は赤丸を暗殺の力として使わなかつた。先代紅は知つていたのかもしれない。暗殺をしても何も始まらないと。赤影に罪を探らせ殺しても、何もならないと。正面から罪を明らかにして、正攻法で叩き潰す。そのようにしなければ何にもならないから。赤丸は先代紅を守つた。まるで、盾になるよう前に先代紅の前に立ち、そして死んだんだ。あの戦いの後、身元不明の遺体がいくつか出てきた。その数十九。赤丸を入れれば二十。先代紅と一緒に死んだのが赤丸だという証拠はないが、あれはきっと赤丸だと俺たちは考えた。持つていた紅の石が俺たちが持つていた紅の石よりも遙かに強い力を持っていたから。当時、未来をもてはやされていた俺たちよりも、先代紅と一緒に死んだ者はずつと強かつた。赤丸に違いないだろ」

都南の話の後、佐久が続けた。

「身元不明の遺体が戦う姿を、僕は見たよ。彼は何人の敵と戦い、そして最後は相打ちに持ち込んだ。年齢は僕らと同じ二十前後ぐらいいだつたかな。僕はそれが、赤影の一員だとすぐに分かつたよ。とても強い力を持ち、そして倒れていつたから。彼を殺したのは敵じやなくて僕だよ。僕と彼は一緒に戦つた。僕は追い詰められ、斬られ、僕を助けるために彼は相打ちに持ち込んで戦つた。僕が生きているのは、彼の命と引き換えにしたから」

赤影のことを語ったのは佐久だけではない。野江も続けた。

「あたくしも会つたわ。あたくしが出会つたのは先代紅と死んだ、赤丸とされている存在。あれは、先代紅が命を落とすずっと前。術士としてい厳しく育てられ、自分自身の存在理由を失つていたあたくしを先代紅は気に掛けてくださつていたわ。それでも、年頃になると悩むもの。そのあたくしの前に、姿を見せたのが赤丸だつたわ。先代の紅はあたくしのことを気に掛け、あたくしに赤丸を差し向けていたのね。あたくしの背中を押したのは、先代の紅と赤丸だつたのよ」  
悠真は先代の紅の姿を思い描いた。戦争に反対し、官府から殺された優しい存在。今の紅を支える赤の仲間たちの幼い頃を知り、赤の仲間の成長を見守つた存在。先代の紅には、野江たちのような存在はいなかつた。野江、都南、佐久の三人はまだ若く、大きな力をもつていなかつた。遠次と惣次が先代の紅を支え、赤影が紅を守つたのだ。先代紅と死んだ身元不明者は二十人。二十人の赤影が先代紅と共に命を捨てた。赤影は紅の刃であり、紅を護る存在なのだ。

## 赤を護る者（2）

紅を守ろうと尽力する者は多い。その代表が赤の仲間であり赤影であった。佐久が言つた。

「先代紅と一緒に、赤影の大半が命を落とした。若い者から、年齢の上の者までね。赤影は裏の存在。先代の紅を守るために全員が命を落としたわけだろうけど、その大半は命を失ったはず。残されたのは、きっと一握り。その一握りが新たな赤影を集めたところで、そう容易く集まるはずがない。きっと、赤影に入るには、子供の頃から特殊な訓練が必要なはずだからね。赤影は強い存在であるけれども、今は万全の状態じやない。一年前にも命を落とした赤影がいるはず。あの時の身元不明遺体は三体。だから今の赤影は本当に少ないはず。僕らは、赤影に頼らずに紅を守らなくちゃいけない。赤影は己を使い捨てのように戦うけれど、実際は違うはずだ。赤影も生きているんだ。先代紅と一緒に死んだ赤丸の死に様が、それを示していたから。先代紅と一緒に死んだ赤影たちが、それを示していたから」

紅は多くの人に守られている。赤の仲間と、赤影と、そして赤に。紅を守るために決意したのは義藤だけでない。赤の仲間たちも、紅を守るために命を賭している。紅の盾である赤の仲間は、紅の刃である赤影のことを思つていた。盾と刃が協力して紅を守れば、どんな敵でも弾き返せせるはずだ。遠次が柔らかく微笑んだ。

「赤影は孤独な存在だ。己を殺し、己という存在を全て消し去つて生きているのだから。裏の存在である赤影が、表の存在であるお前たちに認められたのなら、赤影にとつて大きな意義となるだろうな。赤影は殺戮集団などではないのだから」

歴代の紅の刃となり続けた赤影、そして歴代の紅の盾となり続けた赤の仲間。相反する二つの力が歩み寄つたのだと悠真は思った。

夕方になると、義藤と紅が佐久の部屋に戻ってきた。赤の仲間たちは紅に負担をかけないように、強い決意を隠していた。それが、紅への優しさであった。紅が赤の仲間が傷つくことに恐怖を覚えているのは周知の事実だから。

戻ってきた紅と義藤を交えて簡単な夕食を摂り、悠真は紅城の最上階へと足を運ぶことになった。紅は気さくに話し、その様子はこれから起こるであろう戦いの不安を感じさせなかつた。もちろんそれは、義藤や野江たちも同じであつた。

悠真是自分が義藤と一緒に歩いて良いのか分からなかつた。赤の仲間たちは命を失うことさえ視野に入れている。そこで、術士でない悠真が一緒にいるということは荷物でしかないはずだ。義藤は実力者だが、悠真を連れたことが原因で危険な目にあつことがあれば、悠真是取り返しのつかないことをしてしまつたことになる。悠真が迷つていると、漁師だった祖父の言葉が蘇つた。

(「己の道を定めたのなら、信念を貫け。それが、わしが悠真に願うことじや。海に出たら一人きり。広い海に一人でいるときに、右に行くか左に行くか、その判断を途中でた躊躇うことはできない。海で生きるのならば、自分の信念を貫け）

悠真的背中を押す言葉は「己の信念を貫け」というものだ。復讐をするために紅城まで足を運んだ。ここに惣次の石もある。悠真是進むしか出来なかつた。せめて、義藤の足手まといにならないように、それだけを願つた。

食事が終わると義藤は平然と朱塗りの刀を磨いていた。義藤は落ち着き払い、これから囮として敵を引き付けることを恐れていないようであつた。赤の仲間たちは皆同じだ。何も気にしていない。彼らの日常を知るわけではないが、彼らの平常を想像すると今のよくな状況だろう。狭い部屋で寄り添う赤の仲間たちの一員に、赤丸が加われば、と悠真是思つた。

朱塗りの刀を磨いていた義藤は刀を鞘に戻すと姿勢を整え赤の羽織の袖を整えた。

「紅、そろそろ行つてくる

義藤の言葉は、強さを持っていた。無駄な言葉を一つの念まない、義藤らしい言葉だった。

「氣をつける。そうだ、これを渡しておひづ」  
紅も端的な言葉で返し、新しい紅の石を義藤に手渡していた。悠真が暴走させたために、色が弱ってしまった義藤の石が色を失ったときのための代用品だ。加工師柴が加工していないといつ一抹の不安のある新しい石。今、義藤が持っている紅の石が色を失わないことを悠真は願つた。

悠真是後ろ髪を引かれるような気持ちだった。義藤に同行することは、悠真自身が望み押し通したこと。自分で望んでいて、後悔をするのは間違つていい。赤の仲間に迷惑をかけてまで、悠真是信念を押し通した。

「氣をつけなさい」

野江が言い、同意するように都南が頷いた。

「明日、僕の取つて置きのお菓子をあげるからね」「佐久が義藤を待つてゐる、といつ意味を込めていた。

「行つて参ります。紅のこと、お願ひします」

義藤は丁寧に頭を下げると、躊躇いなく振り返つた。

「行つてきます」

悠真是そそくさと義藤を追いかけた。

## 赤を護る者（3）

悠真は義藤に連れられて紅城を上った。野江と歩いた時とは見える景色が異なる気がするのは、悠真の心境が変化したから。悠真是今、野江と一緒に歩いたときとは違う目的で歩いている。他者の目も気にならない。最上階に上ると中年の護衛が一人、紅の部屋の前に座っていた。二人は不信そうに悠真を見たが、隣にいる義藤を見ると慌てて頭を下げた。この場所では年齢も関係ない。義藤は力で朱護の座についているのだ。そう分かると、赤を許された人々は、気安く親しむことが出来ない存在なのだと改めて感じた。紅を支え、紅を守る存在。その存在は戦いだけでなく知的に優れ、政治にも深く関わっている。

「代わります。後は休んでください」

やはり、義藤は丁寧な口調で護衛たちに告げた。護衛たちは怪訝そうに悠真を見ていたが、赤い羽織の力は侮れない。赤は紅の権威なのだ。

「ご苦労様です」

護衛たちは深く頭を下げて下がった。冷たい廊下に残されるのは、義藤と悠真の二人きり。

義藤は扉の前に座った。

「座れよ」

義藤に言われ、悠真も出来るだけ義藤と距離をとつて扉の前に座つた。義藤は悠真が初めて会つた時と同じように、義藤は朱塗りの刀を立てて抱え、膝を立てて座つていた。日は暮れ、廊下には明かりが立てられ、小さな火に照らされた赤い羽織がとても美しく見えた。悠真は義藤の横顔を見ては、目をそらす。そんなことを続けていた。襲撃は確実にある。けれども、その実感は無い。思うのは、どんなに良い奴だとしても、悠真は義藤が苦手だということ。何を考えているのか分からぬ。

「悪かつたな」

義藤が言つた。そのことばの意味が分からず、悠真は戸惑つた。

「刀を向けて悪かつた」

悠真は息を呑んだ。やはり、義藤は良い奴でとても優しい人だ。声色が優しい。その声色は、紅に向けるものと似ている。

「それは……」

悠真は返答すべき言葉を探したが、何も思い浮かばなかつた。義藤が悠真に刀を向けたのは、朱護として当然のことだ。義藤は紅を守る存在だから、紅を守るために危険な存在に刃を向けるのは当然のこと。それは強い義藤だから当たり前。しかし、義藤は優しい人だから、こうやつて悠真を気にかけてくれるのだ。「強いが優しい」という義藤の人柄に悠真是気づき始めた。

「小猿が俺を恐れるのは分かる。だが、夜は長い。あまり気を張りすぎるな」

義藤はそう言つと、押し黙つた。何を考えているのか分からぬ。

悠真是辺りを見渡した。紅の住まう部屋の入り口は一つだけ。扉の前には護衛が詰めている。まるで、牢獄。紅は外へ出られない。

「一体、紅はどうやつて外へ？」

悠真是思つたことを尋ねた。悠真是義藤に叱られることを覚悟していたが、義藤は笑つた。抜き身の刃のような義藤の表情が柔らかく綻ぶ。

「まるで籠の中の鳥だ。歴代の紅は、外へ出ることなく生涯を終える。先代もそうさ。そんな現実を許さなかつたのは遠爺と惣爺だ。

二人は稀代のからくり師鶴蔵に隠し通路を造らせたんだ。その道は、先代紅の時代に完成した。紅が使う石にだけ反応する道。それを使つて紅は外に出ているんだ。鶴蔵はあんな感じだが、優れたからくり師。隠し通路を造り、空挺丸を造つたんだから。良かつたよ、紅は外を忘れることなく自由に生きることが出来るから

義藤の言葉の端々から、紅への愛情が感じられた。

「義藤は、紅が色神になる前から一緒だつたんだろ」

義藤は、息を吐いて天井を見上げた。

「まったく、彼らは口が軽い。確かに、俺は紅が色神になる前から一緒だった。もし、紅が色神にならなかつたら、俺はまったく違う人生を送つていただろうな。赤い羽織を着ることもなかつたし、そもそも術士になつていない。それはそれで、退屈な人生さ。こうやつて尊敬する先輩方と出会うことも無かつたし、強さに執着することも、目標に走り続けることも無かつた。俺は何も後悔しちゃいない。紅と出会つて、俺の人生は色を持ったのだから」

義藤は紅のために術士になつた。紅に人生を捧げているようなものだ。思うと同時に悠真は疑問に思つた。義藤は術士としての才覚を持つてゐる。なのに、紅が色神にならなければ術士として生きていなかつたと話す。選別から落ちた悠真と同じ状況なのかもしれない。

「義藤は、選別から落ちたのか？俺と同じように」

悠真が尋ねると、義藤は目を細めた。まるで、作り物のような横顔だつた。義藤は努力を惜しまぬ天才だと、赤の仲間たちは称していた。その義藤が選別から落ちたということは想像しにくいが、術士にならなかつたかもしれない。ということは、選別で選ばれて術士になるという正当な道をとつてきていないということだ。品の良い義藤からは想像できない。

## 赤を守る者（4）

義藤は品が良い。姿勢が良くて、動作が流れるようだ。言葉がきれいで温かい。全うな道から外れているようには決して見えない。

「今回の敵は、俺と同じような存在だろうな」

義藤がふと口にした。

「隠れ術士、つて知つているか？」

唐突な義藤の問いに、悠真は首を横に振った。隠れ術士という言葉の意味が分からなかつた。

「火の国の民は皆、例外なく選別を受けるだろ。事情があつて選別を受けないまま大人になり、術士として導かれないまま術士の力を持つ存在だ。そのような存在は案外多い。俺は選別を受けていない。隠れ術士の大部分がそうだ。もしくは、術士の才覚があることが幼いうちに見つかり、戸籍上殺され実力者に金で売られてしまった奴隸のような術士か、どちらかだ」

術士は力だ。その術士の力を利用できれば、日常は変わらう。選別前に術士の才覚があることが発覚し、戸籍上殺され、親から金で売られて術士になる存在。それは、とても恐ろしいことだ。また、悠真はもう一つ疑問に思ったことがある。選別は戸籍にのつとり全ての民が受けれる。それを受けないことは出来ないはずだ。もちろん、田舎者の悠真も選別を受けた。義藤が選別を受けなかつたということは、ありえないことだ。

「だつて、選別は……」

悠真が言いかけると、義藤は言葉を遮つた。

「俺には戸籍がなかつたんだ」

予想外の答えに、悠真は息を呑んだ。義藤は息を呑む悠真を見て、ゆっくりと続けた。

「俺には戸籍がなかつた。それは、紅と出会つた時も同じだ。俺の両親は決して子を持つことを許されない人たちで、俺と兄は、生ま

れてすぐに隠された。山の中にな。俺と兄は生まれるはずのない人間。存在するはずのない人間。だから、選別を受ける必要もない。

俺みたいに孤児が術士の才覚を持ち、そのまま隠れ術士になる。それは案外多い話だ」

それは、悠真が知らない現実。悠真のような田舎者でも戸籍は持っている。そもそも戸籍を持たないことは、存在を国から認められないことと同じ。学校に行くこともなく、仕事に就くこともできない。悠真は、義藤を品の良い人だと思っていた。育ちが良いのではなく、生まれが良いのだと。育ちは粗暴だが、高貴な家の生まれだと思っていた。だから信じられなかつた。

「気にするな。今は戸籍もしつかり持つている。紅と共に歩むと決め、術士になつた時に遠爺と惣爺が用意してくれたから。気に病むことじやない。それぞれの人間には、それぞれの事情と過去がある。ただ、それだけのこと。俺には俺の過去と歩んできた道があり、小猿には小猿の過去と歩んできた道がある。それは決して否定されるべきものでも、肯定されるべきことでもない。過去があつて、今があるからな。俺は自分の生まれを残念だと思ったことは無いし、両親を恨んではいない。彼らがいたから俺は誕生し、こうして生きている。生きているということは、本当に素晴らしいことなんだ。自分が必要とされて、生きている。その喜びがあるから、俺は生きていける」

悠真は、義藤がとても大人な存在に思えた。義藤は頭が良い。悠真には出来ない考え方だ。悠真は自分のことばかり考えている、それは愚かで幼い考え。悠真は無力な田舎者。義藤のようにはなれない。

「紅は恵まれている」

唐突に義藤が口にした。

「え？」

悠真が問い合わせると、義藤は苦笑した。

「野江も都南も佐久も、優れた人たちだ。どんなに色神紅が優れていても、支えてくれる緋や朱、そして赤がいなければ優れた紅にな

ることは出来ない。紅一人では何も出来ないんだ。紅一人では大きな波に呑まれてしまうから。だから、紅は恵まれている。年齢も近く親しみやすく、先を見据えることが出来る彼らがいて。補佐してくれる存在が、紅を支えている。俺は小さな存在だ。彼らがいるから紅は立つことが出来る」

悠真は同じような言葉を聞いたことを思い出した。野江たちも、義藤のことを同じように言っていた。「若いけれど優秀な子」と称していた。義藤は野江たちを認め、野江たちは義藤を認めていた。理想の関係。羨ましい限りの理想の関係だ。

「義藤がそう言うなら、俺はもつと弱い。復讐すると息巻いているけれど、結局は何も出来ない。じつちゃんや、惣次、村の人人が死んだ復讐をする力も無い。こうやって、ここに来ただけで何をすればいいのか、何が出来るか分からない」

それは悠真の本音だった。とん、と悠真の肩に物が触れた。目を向けると、義藤の朱塗りの刀が悠真の肩を小突いていた。

「年はいくつだ？」  
「十六だけど……」

答えると再び悠真の肩を義藤が小突いた。

「まさしく小猿だ。恼むな、これからだろ」

朱塗りの刀が悠真の肩を小突く。まるで、背を押されているような気分だった。

## 赤を護る者（5）

義藤は温かい。まるで、悠真の気持ちを感じ取ってくれているようであつた。

「一人になつたんだな」

義藤が俯き、そして言つた。それは、悠真に投げかけられた温かい言葉だつた。

「え？」

悠真は義藤が、なぜそのようなことを言つのか分からなかつた。

「親もない。故郷もない。俺も同じだ」

悠真は義藤を見つめた。抜き身の刃のようで、それでいて優しい。義藤は刀を立てて、寄りかかり言つた。少しくつろいだ風の義藤の仕草は、作り物のような義藤を人間に変えていく。義藤は一つ息を吐き、天井を見上げた。

「一人になると、心に風が吹き込む。今はまだいいかもしれない。復讐に息巻いて、強い信念があつて、一つのことに集中できて……。生きる目的が誰かを憎むことならば、それは長くは続かないんだ。忘れるな、一つの軽率な行動が全てを決定付ける。どうして、あの時に言葉を交わしておかなかつたのか、どうして優しさに気づかなかつたのかと後悔だけが残る。自分を責めて、苦しむ日々が始まるんだ」

悠真は義藤のことを考えた。義藤は一体何者なのか。義藤は悠真の心情を想像して話しているのではない。それは、義藤の過去に基づく言葉のようだつた。子供を持つことが許されない立場の両親を持ち、戸籍を持たずに育つた義藤。紅に出会い、隠れ術士でなく正規の術士の道を歩むことを決めた義藤。抜き身の刀のようで、品が良くて……。紅を守り続ける義藤のことが分からなかつた。

「義藤、俺は……」

義藤は悠真の肩をつついた。悪戯めいて、微笑む義藤は野山で駆け

ていそうな表情だった。

「俺に親はない。会った記憶もなければ顔も知らない。言葉も交わしたこともないが死んだと知ったときは哀しく、とても孤独になつた気がした。俺に父の死を伝えたのは風の噂で、母の死は紅が色神にならなければ知ることはなかつただろう。俺の両親は、何も残さず死に、死んだことすら伝えなかつた。それでも、俺には兄がいたから、平氣だつた。俺と同じ時を生きた唯一の兄がいたから、不安もなく、紅がいたから世界に色を見つけることが出来ていた。遠次は俺のことを、強いが優しいって言つただろ。けれども、俺の兄に対しては優しいが強いと言つた。だから、俺がここにいて、兄は死んだ。俺と違つて、兄は強いから」

どうして、義藤がそのようなことを話すのは、悠真には分からなかつた。ただ、義藤の孤独が伝わってきた。義藤は孤独で、強くて、そして優しい。憧れを抱く存在だつた。それが、表から紅を守る義藤の本質だ。

「どうして、こんなことをお前に話しているんだろうな」

義藤はそう言つと苦笑した。

「良く似ているんだ。兄が死んだ頃の俺とな。大丈夫、人は一人になることは決してないのだから」

少し遠くを見て、哀しそうな義藤の表情が胸に響いた。そして、悠真は気づいた。己の身さえ守れるか危険な状況。そんな場所に無力な小猿を連れてくることを承諾した理由。紅の言葉だけない何かが、義藤を動かしたのだ。

「もしかして、俺を連れてきたのつて……」

義藤は答えた。

「言つただろ、俺と似ているからだ。兄が死んだ時、俺は生きることに絶望し、兄が死んだ理由を作つた者への復讐だけを考えていた。なのに、いくら探しても復讐する相手は見つからないんだ。兄は己の意志で死んだ母の後を継ぎ、一度と会えなくなつた。兄は優しい人だつたから、母が半端で終えた職を全うしようとしたのかもしけ

ない。俺は職に生きて、職に死んだ母を憎むしか出来なかつたのに。俺でなくて、兄が生きていれば良かつた。俺じゃなくて、兄がここにいたら紅を危険な目に遭わせることなんてないのに。俺は悩み、苦しみ、全てを失つた気分だつた。そんな中で俺は気づいたんだ。俺は一人だと思っていたのに、一人じゃなかつた。近くには紅がいて、野江や都南や佐久や鶴藏がいる。そして、俺をわが子のように育ててくれた遠爺と惣爺がいた。人は決して孤独になつたりしない「義藤の言葉は温かい。悠真の胸に重みを持つて響き、温もりを広げていく。抜き身の刀のように思えるのは、表面上の義藤の姿で、義藤の本質はとても優しい。優しい一色。

悠真は色神紅のことを思つた。彼女は色神としての重圧と戦い、火の国を守り続けている。たつた一人で、戦い続けている。そんな紅を支えているのが、悠真の隣で無愛想に座つている義藤なのだ。野江、都南、佐久、鶴藏も一緒だ。彼らは赤い色でつながつてゐる。

## 赤を護る者（6）

悠真は義藤のことを良い奴だと決めることにした。

「ねえ、義藤のお兄さんってどんな人だつたんだ？」

悠真は義藤に尋ねた。兄弟のいない悠真は純粹に興味があった。

「兄が死んだのは十年前だが、同じ顔をしていたな。外見はまったく双子も存在するが、俺と兄は惣次と遠次のように、外見はまったく同じだった。それは、多くの人が俺と兄の見分け方が分からぬほどだった。でも、性格は違つたな。兄はとにかく優しい人だつた。もし、俺じゃなくて兄が小猿と一緒にいたのなら、佐久のようになんか声をかけ続けるだろうな。兄は人を憎むとか、人と競うとか、そういうことに興味がないみたいだつた。頭が良くて勉学に優れて、それに、とても強かつた。術の力を競つたことは無いが、兄の才能は本物だ。剣術も優れていて、子供のころの俺は一度も勝つことが無かつたさ。それでも、俺は兄に勝とうともがいて、もがいて、もがいて。兄は俺の生涯越えることが出来ない壁なんだ。俺がどんなに強くなつても、記憶の中の兄は俺のずっと先を歩いている。そうだな、俺は兄と喧嘩ばかりしていたが、きっと兄のことが好きだつたんだ。俺は一人で生きていけると、ずっと強がつていたが結局のところは兄に頼りきつていたんだ。山から外に出て、市街に貢われた時も、強がつていたが俺は寂しかつた。寂しくて、山に逃げ帰りたい気持ちばかりだつた俺の隣に兄はいてくれた。兄がいて、紅と出会つて俺は生きる道を見つけたんだ。兄はとても強い人だつた。兄を超えたいと、兄と争うことは多かつたけれど、超えたいと思う時点では俺は兄に負けていたんだ。決して超えることが出来ない壁なんだから。それでいいんだ。兄は俺の上を歩いてくれれば、それで良いんだ」

兄のことを話す義藤はとても幸福そうであつた。幸せな思い出を蘇らせるように、義藤は微笑んでいた。

「ねえ、義藤のお兄さんってなんて名前なんだ？」

悠真が尋ねると義藤は笑つて言つた。

「忠藤」

義藤は床に指で「忠義」と書いた。

「俺と兄の一人を合わせて忠義。母はどんな思いで俺たちにこの名を与えたんだろうな。誰に忠義を与くせといつ意味を込めたんだろうな。今は、この名に誇りを持っている。兄は死んだが、俺と兄が忠義を与くす相手は見つかたんだ。俺は、紅に忠義を与くす」

悠真は義藤の指の軌跡を見た。達筆な動きで「忠義」と書かれて消えた字は、悠真の心に何かを残した。義藤は紅に忠義を与くしている。

「子供を持つことが許されない両親が、忠藤と俺を生むことを決めた。それに、俺は感謝している。山で育ったときも仲間はいた。山を出てからは、身分をじまかして紅の実家に仕えた。俺はそれで良かったと思っている。そうでなければ、本当に今の俺は無かった。俺は今の自分自身の境遇に満足しているのだから」

悠真は義藤が自分のことを話すことが信じられなかつた。もしかしたら、義藤は悠真の孤独を見抜いているのかもしれない。悠真が孤独だから、決して孤独でないと教えてくれている。悠真が孤独だから、孤独な彼自身の過去を教えてくれる。

義藤は良い奴だ。疑問に思うことは、義藤のことだ。

義藤は紅のことが好きなのか？

そんな野暮な質問をすることが出来ず、悠真は俯いた。義藤のことを見定めていた自分も、義藤のことを恐れていた自分も嫌いになりそうだった。

ふと、義藤の手が悠真の頭に乗せられた。その手が優しくて、強くて、悠真は何とも言えない気持ちになつた。

「よく、忠藤がこうやつてくれた。あいつは、俺と同じはずなのに少しも同じじやない。人は皆違う存在で、思考も、体力も、判断も、未来も、そして過去も全てが異なる。俺は野江や都南たちのように

なれなければ、彼らの過去を背負うことも出来ない。もちろん、俺の過去を彼らが背負うことも出来ない。背負つていけ。小猿自身の過去を背負つて生きていけ。誰も小猿の代わりは出来ず、小猿は唯一無二の存在なのだからな」

自分は唯一無二の存在なのだ。当たり前のように、当たり前でない言葉を言われた言葉を渡されて、悠真は何とも言えない気持ちになつた。紅城では特別な人たちが多くて、平凡な田舎者の悠真は自分がくだらない存在のように思えていた。

小猿は唯一無二の存在なのだからな。

悠真はその言葉を心の中で反芻した。妙に嬉しく感じたのが不思議だった。

赤を護る者。

赤を愛する者。

その存在が悠真の横に座っていた。抜き身の刃のようで、作り物のような顔をして、丁寧な所作と言葉、他人を思う気持ちを持つた優しい存在がそこに座っていた。

## 赤と異色（1）

赤を司る色神紅。そして彼女を守る赤の仲間と赤影。紅を守るために術士になつた義藤。悠真は色神紅のことを思つた。彼女は色神としての重圧と戦い火の国を守り続け、たつた一人で戦い続けている。そんな紅を支えているのが、悠真の隣で無愛想に座っている義藤なのだ。野江、都南、佐久、鶴藏も一緒だ。彼らは赤い色でつながつてている。義藤が黙つてしまつと、悠真と義藤の間に会話はなくなつてしまつ。第一、悠真と義藤に何の共通点も無いのだから。悠真は思考の行き場に困り燃える灯りをじつと見つめていた。揺らぐ炎の赤も、一つの色であった。

「知つてゐるか？」

唐突に義藤が言つた。抜き身の刃のようで冷たいけれど、とても優しく、現に悠真が困らないように声を掛け続けてくれているのだろう。唐突で会話に流れが無いのは、きっと義藤が悠真に氣を使い話題を探していいる証拠だ。そして、義藤はこのような状況になれない。きっと佐久ならば、もっと脈絡のある話をするはずだ。

「何を？」

問い合わせた悠真に小さく笑いかけ、義藤は廊下の先を見つめて答えた。

「色神は紅だけじゃないだろ。異国の話だ。火の国は他国との交流が殆どないから、普通の生活では外国に目を向けることもないが、石は色によつて力が異なる。青の石は水を操る。緑の石は植物を育てる。燈の石は獣と心を交わす。黄の石は土壤を豊かにする。他にも沢山の色の石が存在する。それぞれの力を有してな。色は力を持っている。火の国には赤の色神がいて、紅の石があるからこのような生活を送つてゐるが、他の色の石の力を持つた国はきっと違う生活をしている」

悠真はいろいろな色を思い描いた。火の国は色神紅と、紅の石があ

る。色神を有さない国はどのような生活を送っているのか。他の色神が守る国はどのような生活をしているのか、悠真は想像が出来なかつた。他の色の色神を有する国は、他の色を高貴な色としているのだろうか。赤を普通に身に付けることが許されるのだろうか。

「興味、あるだろ。この手のことは佐久が詳しいから、いつか聞いてみればいい。世界は広く気候も、土地も、動物も、植物も、火の国とは異なる。文化も、言葉も人の姿かたちさえ火の国とは異なるそうだ。海の向こうには異国がある。異国間に交流があるところもある。俺も見たことがない異国があり、赤でない色を高貴な色として讀えている。火の国は閉鎖的な国だから、誰もが勘違いしやすいんだ。他国に勝てると、他国より火の国の方が優れていると……。

現実は、それが真実かも分からぬと言つのに」

義藤は悠真を見て小さく笑つた。今の悠真はとても馬鹿みたいな顔をしているだろう。今まで、泳いでいた海の向こうに異国があることは知つていたが、異国に興味を持つことはなかつた。義藤の話を聞いて、いつの日か、異国に足を運びたいと願うのは悠真だけだろうか。田舎者の悠真が異国と触れ合うことなどありえない。けれど、夢を見るのは自由だ。

「国力は国土と資源と石の力と民の力で左右される。火の国が持つてゐるのは紅の石と民の力だけだ。国土も小さい。めぼしい資源もない。こんな東の島国が豊かなのはひとえに紅の石の存在があるから。そして、紅の石の力を有効に使う術士と、術士を信頼する民がいるからだ。赤は強い色だ。異色から群を抜いているが最強の石ではない。他に力を持つ石は、北の大国、雪の国が有する白の石。そして西の大国、宵の国が有する黒の石」

悠真は義藤を見つめた。

「白の石と黒の石にはどんな力があるんだ？」

悠真の問いに、義藤は少し間をおいて答えた。

「白の石はどんな傷や病でも一つにつき一度だけ癒し、黒の石は一つにつき一度だけ、一日だけ存在できる不死の異形の存在を生み出

すと。どんな人でも命は愛しい。だから白の石は貴重だ。火の国は対面上鎖国を通しているが、唯一外交を取っている国がある。それは色神も石も持たない流の国。流の国は、色神を持たないが外交能力に優れた国だ。流の国の主は、行動力のある誠実な人柄らしく、火の国も流の国の主を信頼している。流の国に紅の石を渡し、代わりに白の石を手にする。それは青の石や黄の石も然り。けれども、黒の石を持っているのは佐久だけのはずだ。佐久が研究のために持っているが、基本的に火の国は黒の石を手にしていない。それは、火の国を戦乱の国にしないための計らいだ。どんな国でも不死の異形に襲われては勝てない。だから黒の石は戦争場面で貴重となる。

宵の国は騒乱の国だが、現在の色神が強大な力と戦略で国を統一し戦乱を鎮めたと聞いた。今後、宵の国の色神が火の国を狙う可能性も高い。現に、何度も書が送られてきている。それは白の国だって同じだ。異国は火の国と紅の石の力を狙っている。外交面で誤り紅の石を他国に大量に渡してしまえば、その石の力で火の国は狙われてしまう。異国が狙うのは、火の国と色神紅。紅を支配下においてしまえば、紅の石を思うがままに使える。国内で争う暇などないといふのに、官府は何も分かつていない。紅の石は強い力を持つが最強の石でない。火の国が滅びないという保障はないのに」

睨みつけるように廊下を見つめる義藤の横顔が心に残った。

## 赤と異色（2）

火の国は平和だ。閉ざされた島国であり、他国からの侵略や領土争いあまりない。けれども、紅の石の力を他国が狙っているのは事実。火の国の平和は危うい均衡の上で成り立っている。他国から色の石を手に入れるのも、紅の石との交換が主になる。色の石は高い金のようなものだからだ。それは資源を手に入るの同じだ。しかし、紅の石を他国に流失し続ければ、皮肉にも他国が手にした紅の石の力によって火の国が滅ぼされてしまうかもしれない。

この平和は危ういものだ。火の国が異国の所有物となつた時、悠真たちの生活はどのように変化するのだろうか。今ままがいい。紅たちは、国内の官府と対峙すると同時に、異国への警戒を続けているのだ。赤い色と火の国を守るために。

「愚かな官府は火の国を特別な国だと信じ、紅の石は最強の力を持つた石だと思い込んでいるが、現実は違う。全ては石の使い方なんだ。どのように色の力を引き出すのか、どのように使うのか、それは政治家の力量であり、術士の才に左右される。紅の石は強大な力を持つが、その使い方は難しい。いわば諸刃のだ。紅の石はうまく加工しなければすぐに色を失う弱き石。紅の石はからくりを使わなければ、使用方法が限られる道の少なき石。強い力を持つとしながら時に異色に敗れる。例えば、佐久は青の石を使い水人形を作り出し自在に操り兵隊とする力を持っている。斬つても、倒れても、すぐ修復する水人形は恐ろしい敵だ。燈の石を使う力に長ければ、獸を使って自らの軍隊を作れる。獸は人間よりも身体能力が高く、環境の変化に強い。それは、それで最強の軍隊さ。色の使い方は様々で、どのように色の力を引き出すのか術士の力で決まる。使い方を間違つたいけない。俺たちは、色の中で生きているのだから」

紅の石の脆さについては、赤も口にしていた。そのことに、一般人は気づかないの義藤は気づいている。色の力は脅威であり、脆さで

あり、最も優れた色は存在しない。義藤はそのことを知っている。色は霸権を取り合う。そのためには人間を利用していに過ぎないのだ。悠真はそんなことを思った。赤は赤色を頂点に立たせるために全力を尽くし、異色は己の色を頂点に立たせるために全力を尽くす。国が霸権を争うように、色も霸権を争っている。人と同じように他者を蹴落とし、頂点に立とうとする。色も人も本質は同じなのだ。なぜなら、全ての人は己の一色を持つているから。

「どの色が一番美しいかなんて、そんなこと決められないということにな。そもそも、色の力を戦いに使おうと考えている時点で間違っている」というのに

義藤は笑っていた。異色と異国の中存在。火の国は狙われている。

「ねえ、火の国は狙われているの？ 赤は他の色から狙われているの？」

悠真が身を乗り出して義藤に尋ねると、彼は微笑んだ。

「それが人の世の常だ。だから俺たちは戦い続けるんだ」

悠真が夢見る異国。それはどのような色に守られているのだろうか。

「火の国を一番狙っている国は？」

そんなこと聞いても何にもならないのに、悠真は義藤に尋ねていた。それはただの興味であった。

「一番、というのは付けにくいが、脅威なのは雪の国と育の国だ。二国から攻められれば、火の国は間違いなく負ける。他国の支配下に置かれた火の国の状況なんて想像するに容易い」

悠真はさらに身を乗り出した。

「どうなるの？」

義藤は低く答えた。

「紅が死ぬことになる」

悠真には話の意味が分からなかつた。

「紅の石は脅威だ。火の国が他国から侵略された場合、残された道は唯一つ。囚われた紅が死ぬことだ。そうすれば、新しい紅が選ば

れ、新しい紅を軸に戦うことが出来る」

それはとても恐ろしい話であり、同時に義藤が言ひと現実味を帯びていた。不安になつた悠真の背を義藤が叩いた。

「大丈夫。そんなことには絶対させない。そのために俺たちはいるんだ。大丈夫」

異色はとても恐ろしい。争いは火の国の中だけでない。紅と赤の仲間たちは異国と異色にも目を向けているのだ。

赤は美しい色だ。強く、残酷な色。火の国は赤に守られている。しかし、気になるのはなぜ「赤」がこの島国を選んだのかということだ。火の国は偏狭の島国。気候は穏やかで、自然は美しい。しかし、土地の面積は小さく資源もない。なぜ、赤は色神紅を火の国に誕生させたのか。色の世界のことを悠真は知らないが、色が色神を選び色の力を与える。赤が紅を選んだようにだ。ならば赤は他国の人間に力を与えることさえ出来るはずだ。赤はなぜ火の国を選んだのだろうか。赤が力のある色ならば、それは不自然なこと。白は北の大國。黒は西の大國。なぜ、白や黒が狙う赤は小さな島国なのだろうか。悠真は思考をめぐらせた。

第一、色神が土地を選ぶということは間違つてゐるかもしがれない。白は雪の国を手にし戦争によつて他国を吸収し拡大したのもしない。黒は、黒の石を使って他国を侵略し宵の国を拡大したのかもしない。ならば、なぜ赤は他国を侵略しようとしたのだろうか。他国との戦争に反対した先代紅を守ろうとしたのか。悠真は色の世界のことが分からずについた。

思うと同時に、赤が計り知れない存在に思えるのだ。

## 赤と異色（3）

悠真が赤を思うと、暗い廊下が赤色で満たされた。それは赤が姿を見せる前兆だった。

色は霸権を争うのじや。

気づけば赤が悠真の前に座っていた。義藤は赤のこと気に気づいておらず、赤は楽しそうに手を義藤の前でひらひらと振った。その仕草はどこか紅と似ていた。もしくは紅が赤と似ているのかもしけない。

義藤には見えぬ。わらわは色神じや。誰しも見える存在ではあらぬ。

赤は妖艶な口元に指を当て、悠真に黙るように言った。

小猿が声を出せば、義藤に疑われるぞ。義藤は聰い若者じや。黙つておれ。

赤は妖艶に座りなおすと、赤く塗られた唇を動かし笑つた。

色は霸権を争うのじや。それはわらわも同じじや。わらわも色の霸権をとるために、色神紅を選び、紅の石を作らせ、紅の石を使わせる。

赤が赤く塗られた瞼を細めた。強いのに、どこか儂ないと感じるのは、赤と紅が似ているからだ。

わらわは、わらわの色のために存在する。この世から赤という色が消えぬためにな。色の世界とは、小猿ら人間が思う以上に複雑じや。あまたの色が存在する世界。主力を握つておる色は数十の色。わらわの赤色も、主力の色の一つじや。されど、いつその座を失うのか分からぬ。いけ好かぬ黒や白の奴が、赤を狙い、火の国を狙つておる。それは他の色も同じ。

赤は小さく溜息をついた。

少しづつ、少しづつ、わらわは朽ちてゆく。

悠真はその言葉の意味が分からず、思わず声を上げそうになつた。

その悠真に、赤は再び唇に指を当てた。

そう、思うだけじゃ。悠久の年月を、色の世界の霸権を争うことだけに使い、主張を続けるとは何とも愚かなことのように思うのじゃ。人間は容易く命を失い、わらわを裏切る紅と、わらわが守るうとしても人間ごとに殺される紅。異色は、色の世界だけでなく人間を使って己の色の主張を始めおつた。愚かなことよ。そして、人間ごとに心搔き乱される、わらわも愚かなことよ。

悠真は赤の美しさに目を奪われていた。赤は優雅に笑った。

小猿、義藤を死なせるでないぞ。義藤は紅のためにも、わらわのためにも必要な存在じや。小猿が我が色を受けければ、今日、いかなる敵が迫ろうとも義藤が命を失うことはあらぬ。

赤は身を乗り出した。

小猿、わらわの話、忘れるでないぞ。

赤は悠真の頬に触れると、そつと立ち上がった。

敵は来る。それは間違いない事実じや。それも、強い術士じや。命を捨てる覚悟も持つておる。小猿、忘れるな。敵は必ず来るぞ。赤が断言した直後、赤い色は廊下から引いた。赤が引くと同時に赤の姿は搔き消え、そこには静寂な廊下があるだけだ。

「どうした、ぼんやりして？」

義藤が悠真に尋ねた。

「なんでもない。大丈夫」

悠真は答えた。赤がいた。そんなこと誰が信じるというのだろうか。

本当にあれが色神「赤」なのかも分からぬ。紅を色神に選んだのか彼女なのかも分からぬ。結局は、悠真の妄想だと笑われるだけだ。現に、悠真自身も自分の目を信じていなかつた。ただ、赤が悠真の知らないことを教えてくれることを教えてくれることは事実だ。色神とは、不思議な存在だ。もしかしたら、紅には赤の姿が見えているのかもしれない。悠真は赤と紅を並べて考えた。紅の理想の紅像の一つは、どこか赤と似てゐるのだ。強く美しい赤を紅は作り出していた。そのようなことを思つと、微笑ましい。

「それで、小猿の故郷はどんなところだつたんだ？」

「え？」

思考の海に心を浸していた悠真は、義藤の問い合わせで現実に引き戻された。悠真の故郷は自然の美しい所。海で泳ぎ、魚が跳ね、裏山を駆け回った。悠真はそんな故郷で十六年間育ってきた。義藤が悠真に尋ねるから、悠真は故郷のことを話した。次第に悠真の言葉は熱をおびていく。美しい思い出。その思い出は土砂に呑まれていく。

「俺の故郷は、他にどこにもない。自慢の故郷なんだ」

悠真はそこまで言つと、言葉を詰ませた。故郷はもう無い。悠真の熱弁を黙つて聞いていた義藤が低く言つた。

「悪かった」

なぜ、義藤が謝るのか分からぬいが、義藤が謝るから悠真の目に涙が浮かんだ。故郷が滅びた事實を、惣次の身体から噴出した赤い血を、悠真は思い出したのだ。故郷が滅びたのも、紅城へ足を運んだのも、すべて夢であつて欲しいと願つた。目が覚めれば祖父が隣で眠つていて、火を入れて食事の準備をする。そうあつて欲しいと願つた。願いが虚しいものだと分かると、言いようの無い気持ちが悠真を襲つた。十六になつて、情けないことだ。男は泣くな、強くあれ。祖父が生きていたら、悠真を怒鳴つただろう。怒鳴られても良い。祖父の声を聞いたかつた。

「俺たちが何をしたんだ？ 義藤、教えてよ。どうして、どうしてこんなことになるんだ？」

義藤を責めて意味は無い。分かつていても、止められない。紅たちに何の罪も無い。

「なあ、義藤！」

悠真は思わず義藤の赤い羽織をつかんでいた。義藤は目を伏せた。そして、ゆっくりと悠真の手を覆つた。義藤の手はとても温かい。

「俺には、言葉をかける資格はない。それでも、一つだけ願いがある。紅を信じて欲しい。紅は強く優しい人だ。それだけは信じて欲しいんだ」

悠真は何も言い返せず、義藤の赤い羽織から手を離した。

赤はともかく、今の紅は優れた人よ。  
無色な声も悠真に言った。彼らは紅信じている。悠真はどうなの  
だろうか……。

## 赤い夜の戦い（1）

時は経ち、宵は深まつた。義藤は身動き一つとらず一点を凝視し、悠真は腰や尻が痛くなつて何度も姿勢を直した。危険な状況だと分かつていても、悠真是強い睡魔に襲われた。目を開こうと、意識しても自然と瞼が閉じていく。世界がゆっくりと沈み、頭の重みで顔が沈んでいく。眠つては駄目だ。眠つては駄目だ。自分に言い聞かせて、必死になつて目をこじ開けて、必死になつて頭を上げて、悠真是起きようと全力を尽くした。悠真的必死な抵抗も義藤は見抜いているのだ。だから義藤は優しい。

「眠つてもかまわない。案ずるな。俺が起きている。これは俺の仕事だからな」

義藤が廊下の先を見つめたまま言つた。

「疲れただろ。昨夜からずっとな。見ず知らずの紅城に来て、初対面の人間と会つて緊張の糸を張り続けて、疲れるのは当然のこと。お前はまだ、術士でないのだから」

義藤が言つた。言われる前から悠真是限界で、泣き疲れたのが正直なところだ。村が崩壊したのは昨夜のことで、野江と出会い紅城に足を運んだのは今朝のことなのに遙か昔のことのように感じる。今朝まで、紅を尊敬していた。村の崩壊の真実を知つてからは、紅を憎んだ。そして今は……。悠真是ゆっくりと目を閉じた。夢は見たくなかった。見る夢は悪夢に違いない。平和な故郷の情景ならば、なおのこと悪夢だ。忘れてしまふのがいい。何もかも忘れて、無の空間に落ちたかった。落ちて、落ちて、悠真是眠りに落ちていく。夢の中は黒い闇。

「起きるー！」

どのくらいの時間が経つただろつか。義藤の大きな声で悠真是目を開いた。眠つていた身体は硬直して上手く動かず、廊下で座つて眠

つていた身体の手足は冷えて冷たい。それでも、義藤の鬼気迫る声で、悠真は慌てて目を開いた。義藤は片膝を立てて中腰になり、刀を柄から抜きかけていた。

「来るぞ」

はらりと義藤の髪がなびいた。悠真が首にかけた紅の石は赤い光を放ち、義藤の顔を赤く照らしていた。

「石が……」

悠真が言つと、義藤は悠真に向けることなく答えた。

「反響だ。強大な力を放つ色の石が、力を放ちながらこちらへ近づいてきている。氣をつける。敵は、野江の力を跳ね返すほどの力を持つ、紅が把握していない術士だ。隠れ術士の中でも、小緋や中緋ほどの力を持つ。危険な存在だ。官府に雇われているのなら、官府の経済力を背景に持つ。もし、ここで術士を殺しても何にもならない。とかげの尻尾きりになるだけだからな。官府は知らぬ存ぜぬでしらをきるんだ」

ゆるりと義藤が刀を抜いた。朱塗りの鞘から抜かれた白刃が小さな灯りを眩しく反射していた。その直後、外で赤い光が輝き、強い力で壁が碎けた。

悠真は動けなかつた。このまま死ぬ。悠真が身動きひとつ取れないほどの時間。その間に、義藤は身体をひねらせ立ち上がり、悠真が頭で考えるよりも先に、義藤が赤い羽織を広げ、悠真の上に覆いかぶさり庇ってくれた。小さな木の屑が、ぱらぱらと悠真の上に落ちてきた。義藤の微かな重みと息遣い、そして義藤が持つた抜き身の刃が悠真の顔の横にある。

「義藤？」

悠真は身体の上に義藤の重みを感じた。当然の事ように、義藤は身を呈して悠真を守つた。悠真は復讐するつもりだ。なのに、どうにすれば良いのか分からぬ。強大な力をもち、石操る敵に対する術が分からぬ。義藤の重みが、悠真の不安を搔きたてた。悠真と義藤は同じ人間なのに、力は同じでない。

「隠れている」

耳元で義藤の声が低く響き、重みは急に消え去った。悠真は隠れるしか出来ない。息を殺し、身を隠し、義藤と敵の戦いを見つめるしか出来ない。

何が復讐だ。

悠真はそう思った。紅の石の力で世界が赤く輝き、暗い夜に赤い明かりがともされていた。赤い空。赤い夜。赤い風。赤い夜の戦いが悠真の目の前で始まった。

## 赤い夜の戦い（2）

紅の部屋の前の扉も破壊され、紅の部屋の畳が露になっていた。乱暴に廊下に進入してきたのは暗闇に溶け込むような黒い服をまとった四人組みだった。義藤はその前に立ちはだかつた。

「なぜ、紅の命を狙うんですか？すぐに陽緋たちが来ます。無駄なことは止めてください」

義藤は刀を抜き、四人組に言った。優しい義藤は四人組の敵に無駄な攻撃をやめるように忠告しているのだ。すると、黒い服の敵の一人が言つた。

「問題ない。我々は強い。出来るな」

低く響く声は落ち着き払つていた。出来るな、という言葉は黒い服の敵の一人に向けられていた。

「問題ないよ」

答えた一人が青の石を取り出し使つた。まるで、その力を義藤に見せ付けるかのようだつた。青い光が輝いていたと思うと、辺りに水が溢れその水は人間の形をかたどつた。使つたのは戦いなど無縁そな優男。声が穏やかで争うことと縁遠いように思えた。悠真は義藤が話していたことを思い出した。佐久が青の石で水の人形を作り出し戦うと。優男は佐久の特技を真似たのだ。それがどれほどの脅威なのか、創造するに容易い。

最初に話した落ち着きのある声が言った。

「先の朱護頭の佐久の特技だと音に聞いた。出来るのは佐久だけかと思ったか？ 答えは否。こちらにも利はある。ただの隠れ術士となるだるな。行け」

重厚な声が響いたかと思えば、水の人形は次々と階下へ走り出した。水の人形だから窓から飛び降りても問題ない。水が次々と敵になっていく。悠真は「先の朱護頭の佐久」という言葉に引っかかった。あの佐久が陽緋になれるとは思えなかつた。

「まさか、それほどの使い手とはね」

義藤が苦笑していた。

「俺の人形は強いよ。たとえ、佐久であつても簡単には倒せない。それは現陽緋の野江であつても同じ。でも、あなたも強いでしょ。義藤。あなたは強い。あなたは強い。あなたと違つて、俺は得意なだけ。石を器用に使うことがね。先の朱護頭佐久と同じ。色との相性が良いのかな」

それは青の石を使った男の声だった。穏やかな話し方は少しも悪人と思えなかつた。

「俺にもやらせろよ」

言つたのは最も身体の小さな存在。おそらく、子供だ。悠真より少し年下の子供。子供は黄の石を取り出した。黄の石は土壤を豊かにする石だ。つまり、大地の石。その石が何の役に立つのか、悠真は分からなかつた。

「あまり力を使いすぎないようにしなさい。こちらの本命は、隠れている紅なのだから」

女性の声が子供を制した。四人の敵は、長であろう男。青の石を使う優男。子供。そして女性。

「分かつていいよ」

子供はふてくされたような仕草をしたが、そのまま黄の石を使った。すると、紅城の大地が生き物のように動き、紅城を覆い始めたのだ。悠真が始めて見る黄の石の力だ。大地を自在に操る力は黄の石が有しているが、このような使い方があるとは思えなかつた。誰しもが一色を持つている。同時に、色との相性があるのだ。当然のようだが、火の国は赤との相性が良い民が多い。もちろん。義藤は赤との相性が良い。野江も赤との相性が良い。佐久は青や黄、燈と赤だけでない色との相性の良さを持っている。優男は佐久と同じだ。様々な色との相性の良さを持っているから、優男は佐久と同じように紅の石以外の石の力を大きく引き出すことができる。そして子供は、白との相性が良い。決して黄と色の相性が良いわけでないのに、強

大な力を引き出すことが出来る。その潜在能力は計り知れない。色を操る力が大きいから、相性の良くない石の力を使えるのだ。優れた力で色を引き出しているのだ。もし、子供が白の石を専属で使う術士になれば、それは歴代最強の陽緋野江に匹敵する白の石の使い手になるはずだ。

「外にいる陽緋たちは入つてこれない」

子供の声に悠真は息を呑んだ。義藤はこれから、この四人を相手にするのだ。四人は才能溢れた隠れ術士だ。年長と思われる男と女の色の石を操る力は未知数だ。今、色の石を使わないことを思うと術士というより、都南のような剣士に近いのかもしれない。幸いのは外で戦う紅や野江たちが、色の石を使う一人を引き付けてくれていることだ。二人は優れた術士であるが、子供が作り上げた土の壁の外で野江たちと戦うには、一人が集中して術を使い続ける必要がある。一人に義藤と戦う余裕は無い。油断して、野江たちがこの場に踏み込めば元も子もないからだ。義藤は外にいる野江たちを信じている。

「問題ない。一度に大きな力を使うことは野江たちも長けている。俺は紅を守り、少しの間時間を稼ぐだけだ。歴代最強の陽緋と、優れた朱将都南や佐久がいる。俺は、彼らを信じている」

義藤は少しも焦る様子を見せず落ち着き払っていた。その落ち着きが悠真に不安を与えた。強いが優しい義藤が消えてしまうような不安だ。

## 赤い夜の戦い（3）

倒れた灯りが木屑に燃え移り、赤く小さな火が燃えていた。悠真が辺りを見渡すと、義藤が刀を抜き赤い羽織を翻して夜闇へ向かつて駆け出した。

赤い夜の戦いの火蓋は切つて落とされた。

暗い空間で、義藤の赤い羽織だけが鮮やかで、義藤が刀を抜いた。迎え撃つのは代表と思われる男だ。義藤は火の国で最も優れた剣士である都南との手合わせで、その剣術の力を証明していた。もし、相手が悠真ならば一瞬で斬り伏せられるだろう。しかし、相手の男の腕も確かにあつた。義藤の持つ刀のきらめきを、黒い服を着た敵は受け止めたのだ。腕力も男の方があるのかもしない。相手の腕力で義藤の身体が半歩後ろに下がり、散らかった床の瓦礫が音を立てた。腕力では義藤は男に勝てない。それを感じたのか義藤は身を回転させ、男の背後に回りこんだ。腕力では負けていても、状況判断力と、応用力は義藤の方が数段上であった。背後に回りこんだ義藤は男の背中に刃を向けた。が、義藤は刀を回転させ柄を向けたのだ。一瞬の思考。

！

悠真は声を押し殺した。義藤の行動を見てはつきりしたことがあるとすれば、彼が優しい人だということだ。この状況で、義藤は男の命を奪わないような行動をしたのだ。男の背中を柄で殴り、昏倒させようとしたのだ。

悠真是剣術に精通した人間ではないが、分かることもある。刀を身近に感じる火の国であれば、誰しもが知っていること。

己を殺そうと挑んでくる相手に、相手を殺さぬように勝つことは難しい。

それは昼に紅が義藤たちに話したことと似ている。命を捨てて挑んでくる相手は強い。それと似ている。敵は義藤を殺そうとし、義藤

は敵を殺さずに捕らえようとしている。それはあまりに無謀なことだった。

義藤は優れた剣士だ。そして、敵の男も優れた剣士だ。その剣術の腕が、敵の男より義藤の方が上だとしても、死を覚悟して挑む男に勝てるほど大きな差ではない。それに、敵は男一人ではない。そして、これは昼のような紅の石の使用を禁止した戦いではなく、剣術に紅の石の力を加えて規則なしの殺し合いなのだ。

敵は男一人ではない。後の三人が戦いに加わる隙を探つていたのだ。青の石を使った優男は、仲間が負けるはずが無いと信じているのか少し後ろで傍観していた。黄の石を使った子供は戦いに加わりたいと、うずうずしているようだつたが、青の石を使った優男が止めていた。四人の敵の中の唯一の女が、ひらりと刀を抜いたかと思うと瞬く間に義藤に向かつて刀を振り下ろした。

悠真の中で色が光を持ち始めていた。女が義藤に刀を振り下ろしたのは、義藤が敵の男を殺さずに捕らえようと背後に回つたときだ。優れた剣士である義藤は戦いに加わった女の存在に気づき、すぐに身を翻した。最初に義藤と刃を交えていた男は姿勢を立て直し、義藤と間合いを取つた。義藤も女に刀で押し勝つと二人と間合いを取つた。

「殺さない戦いに勝ち目は無いよ。それで紅を守るつもり？」

女が義藤に警告した。彼らは上から義藤を見ている。彼らは一人でない。互いに互いを補い合い、そして一つの力を作り上げている。おそらく、悠真の村を破壊したきっかけとなる雨を降らせたのは優男と子供だ。上の二人は野江の侵入を阻んでいたに違いない。

「俺はあまり術に優れた者ではないが、それなりに鍛錬は積んできた。守護頭義藤を相手といえど、容易く負けはしない」

男は刀を構えた。義藤も刀を構え、答えた。

「俺は負けるわけにはいかない」

義藤の声は強かつた。強い決意と信念が義藤にはあった。

三人は同時に駆け出した。敵の男と女は寸分乱れぬ動きで一つの

意志で刀を振るつてゐるようであつた。それを迎える義藤も軽やかな動きと瞬時の判断能力に秀でて二人相手に遅れをとつていない。義藤の赤い羽織がはためき、倒れた灯りの炎が木屑を燃やす小さな灯りが、鮮やかに赤を照らしてゐた。刀と刀擦れあいで、小さな火花が散つていた。女が横に振りぬいた刀を義藤は屈んで交わし、男が振り下ろした刀を義藤は横に飛んで交わした。義藤も寸でのところで交わすから、赤い羽織が刀に斬られていた。一人と二人の戦いで互角であつた。まるで、舞つてゐるように、遊んでゐるように、三人は刀を振りぬいていた。

「いい加減、遊ぶの止めろよ」

言つたのは、黄の石を使った子供だった。三人は間合いを取つて動きを止めた。

「俺が加勢してやろうか?」

生意気に子供が言つと男は苦笑した。

「お前は外の術士を止めている」

言つと、義藤の相手をしてゐた男と女は色の石を取つた。

## 赤い夜の戦い（4）

当然ながら、男と女は術士である。一人は火の国の民らしく赤との相性が良い。術の力は優男や子供のほうが上だろうが、術の力は強さだけではない。色を引き出す力と、いつ、どのように、どんな力を使うのか応用力も必要となる。悠真は義藤が術を使うことを見たことがない。けれども、義藤が術を使う力にも秀でていることは分かつている。術と剣術を織り交ぜること、これが術士の戦いなのだ、と悠真は戦いを見守った。

女が紅の石を使った。紅の石は赤い力を凝縮させ刃となり宙に浮いたまま義藤を狙つた。義藤の紅の石は色を弱らせている。だからかもしけないが、義藤は紅の石の力で生み出された赤の刃を身を回転させて交わした。義藤が交わすから赤の刃が紅の部屋の壁を破壊した。その隙に男が再び刀を振り上げた。義藤は刀で受け止め、はじき返すと、次の瞬間には女が紅の石で風を巻き起こしていた。強大な風はうねりを上げ、それは交わすには不可能な力であった。

「しかたない」

義藤の声が悠真には聞こえたような気がした。義藤の紅の石は赤い色を放ち、女が作り出した風を相殺した。義藤の持つ紅の石と義藤の一色に寸分の違ひもない。赤と相性の良い義藤が己の一色と同じ色に加工された紅の石の力を引き出す。元来、術士としての才能にも長けている義藤の力は、悠真が見た野江の力に追いつこうとするものであつた。圧倒的な陽緋の力にいづれは並ぶだろう存在。その理由が分かつた。同時に、加工の技術の高さだ。紅が赤を与えた加工師柴。悠真は柴と出会つたことはないが、その技術の高さと人柄は加工された石から感じられる。

「憎たらしい力だぜ。これが朱護頭の力かよ」

黄の石を使った子供が悪態をついていた。黄の石を使った子供も野江と同じ、圧倒的な才能の持ち主だ。

「いつでも手を貸すよ」

青の石を使った優男が言った。佐久が出来るという青の石での水人形作りをやってのける、この優男の術を使う才能は確かだ。佐久と同じ色との相性の良さと器用さの持ち主だ。一人が術の戦いで参戦すれば、義藤は勝てない。

「下がつていなさい」

女が二人を一喝し、再び石を構えた。同時に男も石を取り出した。男が不満そうに言った。

「お前たちは外に集中している。陽緋たちが侵入してこないようにな」

言うと、男と女は刀を構えた。

敵はいくつも石を持っていた。色も様々であり、紅の石はじやらじやらと音を立てるくらい沢山の数がある。暗い闇の中で紅の石を始め、色の石が、鮮やかに輝いている。基本的に紅の石しか使用しない義藤は圧倒的に不利であった。

男が持つ青の石が青い光を放つと、辺りを水が覆った。水が意志を持つたように動き、義藤を包み、義藤が紅の石を使うと、水の塊が内部から破裂し、義藤は開放された。義藤はとても優れた術士だ。赤い羽織の義藤と、黒服の敵は刀で切り合い、ところどころで石の力も交えていた。これが術士の戦いなのだと、悠真は目を奪われた。昼の都南と義藤の戦いは、石の力を使わない刀と刀の戦いだった。今は違う。刀と刀の衝撃の間に、間髪入れず術の力を織り交ぜていく。紅の石の赤い刃は敵を打ち抜く矢となり、紅の石の赤い盾は敵の刃を防ぐ防壁となる。一瞬の思考と判断。義藤は考えるよりも早く動いているようだつた。

唯一の救いは、青の石を使って水の人形を作った優男と、黄の石を使った子供が参戦していないことだ。義藤に挑む時間は徐々に減り、どうやら外の戦いも激化しているようであった。紅は強い。紅が持つ鮮烈な赤色を悠真は知っているから、外のことはあまり心配

していなかつた。

野江は強い。歴代最強の陽緋の力は本物だ。

都南は強い。術の力を使はず朱将となつた力、義藤との手合わせで見せた力は本物だ。

佐久は強い。身体を動かすことは極端に苦手だが、術の力は本物だ。

赤丸。己の存在を押し殺す赤色を持つ赤丸。優れた存在のはずだ。悠真の目の前で戦う義藤。努力を惜しまぬ天才の力は本物のはずだ。

刀が触れ合うと同時に、小さな火花が散った。義藤は一人で朱塗りの刀と鞘で立ち回っていた。四人の黒服の敵の目に悠真は入っていない。攻撃してこないのが証拠だろう。戦う義藤の赤い羽織が、まるで舞うようにはためく。高貴な赤がはためき、命がけの戦いなのに、とても美しい。とても美しいのは様々な色が輝き、彼らが優れた力を持っているからだ。

## 赤い夜の戦い（5）

悠真は長い間戦つ彼らを見ていたような気がしたが、実際は長い時間ではないだろつ。紅城にいるのは野江たちだけではないはずだ。建物の中にいる朱護たちが紅がいるはずの場所に駆けつけてこない。つまり、戦いはきわどい均衡で保たれたまま長い時間を経ていないうことだ。義藤の赤い羽織は所々切れ、握り締めた悠真の手には汗がにじんでいた。悠真は敵に気づかれないように、必死に息を殺すことしか出来ない。

なせ、ここへ来たのか。  
己の無力さなど知っていたはずなのに、どうして復讐すると息巻いたのか。

後悔したところで遅い。義藤の足手まといにならないように、悠真は物音を立てず動かなかつた。悠真の存在が、戦いの均衡を崩さないよう必死に願つた。木屑は燃え続けているが、さほど大きな炎となつていない。部屋に煙が満ち始め、悠真是口元を手で覆つた。主に戦つているのは長である男と女の一人。一人の剣術は確かで、二人は義藤と対等に渡り合つていた。徐々に追い詰められる義藤。悠真是祈つた。どうか、義藤が傷つかないようにと。どうか、義藤が無事に朝を迎えるようにと。

直後、黒服の敵が放った紅の石の力が鋭い刃となり、悠真のすぐ近くと通り過ぎた。自分に命中するかと思って、悠真は身を固めた。声を出さなかつたのは、悠真の小さな勇気の結果。しかし、そのこわびりが小さな木屑を動かし、小さな木屑が木の破片を動かし、小さな音を立てた。とても小さな音。なのに、その音は黒服の敵が悠真の存在を知るのに十分な音だった。

女が義藤から悠真へと駆け出した。彼女は悠真を紅だと勘違いし

たのかもしれない。義藤が守る存在がここにいる。義藤が守るのは紅だけ。暗い場所、悠真と紅を間違えるのは当然のこと。悠真が紅と勘違いされている。

義藤が自分を見捨てればいいのに。

悠真はそう思った。そうしなければ、悠真は確実に義藤の足手まといとなってしまう。それだけは避けたかった。

女が紅の石の力が目の前に迫り、悠真は死を覚悟した。死ねば、黄泉の国で祖父や惣次、顔も忘れた父と母に遭えると願つたのだ。しかし、悠真を守つたのは義藤の紅の石の力。義藤は悠真を守つたのだ。

想像通り悠真の存在が、戦いの均衡を崩した。女が駆け出し、一人になつた男の助つ人なのか、咄嗟に義藤に飛び掛つた子供が義藤の刀の前に倒れた。その隙に、女が紅の石でなく刀で悠真に斬りかかり、義藤は再び紅の石で悠真を守つた。義藤が危険にさらされている。なのに、当然のように義藤は身を守つているのだ。そして悠真は感じたのだ。紅が赤の仲間たちに死なないでくれ、と伝えた言葉の真意を感じたのだ。自分のために誰かが傷つくことはとても辛いことだ。

黒服の敵はようやく見つけた紅の存在に焦つてゐるのか、その紅が偽者だとも知らずに執拗に悠真を狙つていた。女だけでなく青の石を使つていた優男も敵は紅の石や他の色の石で悠真を狙い、その石の力を義藤の紅の石が防いでいる。強い石の力のぶつかり合いで周囲は崩壊し始め、物は眼下の地へと落ち、露になつた紅の部屋の畳みがはがれ畠を舞つた。香台も倒れ、簾が引きちぎられた。義藤の紅の石の力が、悠真を守り続け、義藤は悠真を守りながら、残つた一人と刀を交えていた。風が舞い、赤い光が暴れる。暴れた赤の光は刃となり生き物のようにうねつっていた。それは広大な海の荒波であり、村を襲う嵐であり、嵐の空に轟く雷鳴であり、すべての力の根源のように思えた。赤の仲間の足音はまだ聞こえない。助けはまだ来ない。

満たされる赤。  
暴れる赤。

敵の石が色を失い砕けた。紅の石は無限に使用できない。限界に達したのだ。嵐の夜、惣次の石が砕けたのと同じことだが、黒服の敵はいくつもの石を持っている。砕けては次の石を使い、そして砕けては次の石を使う。それを繰り返し、必要以上に悠真の命を狙つてくる。紅の石の力を、悠真を守るために使っている義藤は、刀一本で敵と渡り合い、敵の紅の石の力を交わし、刀で攻撃を繰り出していた。義藤は紅の石の力を節約しながら戦っている。義藤の紅の石は色を弱めてしまっているから、義藤は慎重に石を使っているのだ。

もし、義藤が紅の石の力を節約することなく使えば、義藤は優位はもつと優位に戦えるかもしれない。危うい均衡ではなく、義藤の力で相手に勝てるかもしれない。

危うい均衡で保たれている戦いの終焉は一瞬のこと。義藤の生命線であつた紅の石が限界に達し色を失つたのだ。

砕けた石は透明で、色を持たない。

義藤の持つ紅の石の色は弱っていた。紅が心配し、次の石を手渡すほどだ。火の国最高の加工師柴が加工した紅の石は悠真を守るために赤い力を發揮した後、限界に達した。黒服の敵はいくつもの石を使い壊している。義藤の石が限界に達するのは当然のことで、むしろ弱っている石がよくここまで持ちこたえたものだ。それは、義藤が節約しながら紅の石を使っていたこと、加工師柴の加工の腕が確かなることによるものだらう。

義藤の守りが無くなり、悠真の目の前に赤い光が迫った。悠真は、再度死を覚悟して強く目を閉じた。

## 赤い夜の戦い（6）

目を閉じれば、世界は暗くなる。なのに、赤い光だけは消えない。鮮烈な赤い光は、目を閉じたところで消えることは無い。赤は最も高貴で、最も強い色。命の息吹も赤。火の国では、赤い色を失えば命は存在しないとされている。だから、生き物の血は赤い。赤い魚は神の使い。炎は神の力。人々の生活は赤に守られ、赤に作られる。赤は高貴な色。今、悠真の目の前は赤い色で覆われている。

小猿、わらわに染まれ！

赤く響くその声で悠真は現実に引き戻された。悠真の前に義藤が立ちはだかり、紅が今日くれた予備の紅の石で悠真を守っている。しかし、悠真は色の違いにすぐに気づいた。義藤が放つ一色と予備の紅の石が放つ赤色が異なる。色が異なるから、紅の石が悲鳴をあげていた。歪が大きくなり軋轢となる。赤が悠真の肩を揺すった。

小猿、わらわに染まれ！

赤の細く強い手が悠真の肩を掴んでいた。爪が肩の肉に食い込むほど、赤の力は強かつた。

小猿！

赤が悲痛な叫びを上げたとき、赤手が何かの強い力で跳ね返された。悠真は何が起こったのか分からなかつた。義藤の予備の紅の石は限界が近い。義藤の強大な力に叶わず、紅の石が悲鳴をあげているのだ。加工の重要性を悠真はようやく理解した。加工とは、紅の石を強めることになるのだ。何かの力で跳ね返された赤は、瓦礫だけの床に倒れた。赤は半身を起こして、叫び続けた。

ふざけておるのか！一時的で良い。小猿を我が色に染めろ！取り乱した赤が再び悠真の肩を掴んだが、何かの力で再び跳ね返された。赤は叫んだ。

そちは、小猿のために義藤を殺すつもりか！

赤が誰に何を言っているのか、悠真は分からなかつた。

小猿を守るために、我が紅を守る力を殺すつもりか！義藤をこの場で死なせるつもりか！

赤は揺らりと立ち上がった。

そちは、義藤のことをじつておるのか！そちは、わが紅のことを見つておるのか！

赤の姿は恐ろしいほど影を持っていた。赤色の全ての力が放たれていた。

そちは、そちの小猿のために、わらわの愛しい紅を危険にさらし、義藤を死なせるつもりか！義藤を、小猿を守るための盾とするつもりか！そもそも、小猿がここに来たのはそちに責がある。そちの小猿を守るために、なぜ義藤が死なねばならぬ！黙つておりずに何とか言つたらどうじや！

あまりの剣幕に悠真は圧倒された。赤は一体、誰に叫んでいるのだろうか。

何か言つたらどうじや！小猿のために、義藤を殺すのか！

赤は悲痛に叫び、赤は涙を浮かべていた。そして、力尽きたかのように両手を床に着いた。

よもや、そちが義藤を見殺すとは思わなんだ。そちが小猿を愛しく思つようじに、わらわも紅が愛しい。そちの身勝手な心のために、義藤が死ぬのか！

そして赤はけらけらと笑い始めた。

そうか、そちは紅が死なぬから良いと思つておるのじやな。死ぬのは、わらわが器にしてある色神でなく、ただの術士の義藤だから良いと思つておるのじやな。そちは、なにも知らぬ！そちは何も知らぬ！忠義の名を持つ者の正体を何も知らぬ！だから、義藤を殺すのだ！

赤は狂つたように笑いながら、涙を浮かべていた。

そちがそうするならば、わらわは小猿に手を貸さぬ。一度と、小猿に手を貸さぬ。好きにしろ。好きにしろ！

赤はゆらりと立ち上がり、色の合わぬ紅の石と使い悠真を守る義藤

に歩み寄つた。優雅に着物を引きずりながら、散らかつた床の上を歩くとそつと義藤の背中に手を当てた。

すまぬ、義藤。本当にすまぬ。

そして、頬を義藤の背中に当てた。

義藤、大きくなつたな。わらわは、そちの両親の代わりに見ておつた。わらわにとつて、そちは愛しい息子じや。ここで義藤を守ねば、わらわはそちの両親に顔を合わせられぬ。そちの父に何と申せばよいのじや？そちの母に何と謝れば良いのじや？義藤、すまぬ。義藤、すまぬ。力及ばぬわらわを許してくれ。小猿に興味を持つたわらわを許してくれ。必ず、紅はわらわが守る。一度と、醜き人間に紅を殺させたりせぬ。わらわが守つてみせる。

そして紅は義藤から離れた。

わらわに、そちを救う力は無い。わらわは紅を守つて来る。それだけは、信じてくれ。

何度も、何度も赤は義藤に謝罪していた。その声は義藤に届かないというのに、謝り続けていた。その叫びは人間の母のようであつた。

赤はゆらりと歩くと、ひたと悠真を見た。その目は悠真を通り過ぎた何かを見ていた。

また、わらわを愚かな女じやと思うておるのじやな。わらわは愛しい者を守るのじや。人間とかかわり過ぎて、また傷つくのも己の宿命。それで良いのじや。あの時より、昔よりわらわは何も後悔しておらぬ。それで己が傷つこうと、何も後悔したことはあらぬ。せいぜい、小猿を守つてみるのじやな。小猿を狙うはわらわだけにあらぬ。腹黒娘の黒も、利己的な男の白も、皆狙つてくるぞ。そち一人で守つてみるのじやな。わらわが力を貸すと思うでないぞ。その赤い目は無感情で、全てを諦めているようであつた。すつと赤は姿を消した。

悠真は叫ぶ赤の姿に何も出来なかつた。優雅で、高圧的な赤が悲痛に叫ぶの意外で、信じられなかつた。高圧的な赤が愛に満ちているように思えるのだ。

## 赤い夜の戦い（6）（後書き）

次話より少し血生臭くなります。苦手な方は『』注意ください。

## 赤い夜の戦い（フ）（前書き）

この話よつ少し血生臭くなります。苦手な方は少々注意ください。

## 赤い夜の戦い（7）

敵は三人がかりで紅の石を使い義藤を狙っていた。義藤は急いでしらえの紅の石で応戦していた。しかし、義藤の持つ一色と紅の石の色に徐々に歪が生じ、義藤が一步後ろに押されていた。

「小猿、伏せてろ」

義藤が振り返り言った。それでも悠真は動けない。諦めたのか、義藤は前に向きなおした。すると最後の力を振り絞るように義藤は力を強め、紅の石は合わない色を注がれて悲鳴を上げていた。色を失うまで残り時間は少ない。義藤が前に紅の石を押し出した。三人の敵が一步後ろに下がったとき、義藤は相手の色に打ち勝ち同時に、紅の石は色を失った。

赤が消えた一瞬の間。

辺りは暗闇に戻った。しかし、三人の敵は同時に紅の石を使い、世界は再び赤に戻った。

何も出来ない悠真の身体を何かが強く突き飛ばした。衝撃が襲つたが、強い痛みは無い。目を開くと、赤い羽織の義藤が悠真を突き飛ばしていた。赤の刃は先ほどまで悠真がいたところを刺し抜き、三人の敵は同時に悠真に向かつて駆け出した。

義藤は慌てて身体を起こしたが、直後、黒服の敵の刀に倒れた。肩口を刀で貫かれ、腹の辺りを横に切り裂かれた。それは悠真を守る盾となつたためによるものだった。

赤 赤

目の前に赤が飛び散った。全ての生き物が持つ赤。義藤も例外なく赤を持っている。義藤の赤い血が、悠真の頬に飛び散った。

「義藤……」

悠真は絶句した。義藤は強い存在だ。その義藤が倒れることが想像できなかつた。しかし、傷を負えば誰でも倒れる。

義藤は糸の切れた人形のように音も立てず床に倒れた。床に手を着く悠真の手に生温かく粘度のあるものが触れた。独特の臭い。嫌な臭い。

崩れ落ちる義藤を見ても、悠真は何も出来ない。全ての責任は悠真にある。悠真が一緒に来なければ、義藤は自分を守るために戦えた。他人を守ることはとても難しいこと。悠真が来なければ、義藤は都南たちが援守に来るまで、持ちこたえることが出来たはずだ。悠真が来なければ、義藤が負けることは無かつた。義藤を助けようと叫ぶ赤の姿が脳裏に浮かんだ。義藤の無事を願う紅の姿が脳裏に浮かんだ。都南の姿が、佐久の姿が、そして野江の姿が次々と悠真の脳裏に浮かんでは消えていくのだ。彼らは悠真に何と言うだろうか。未来ある実力者を悠真が殺したのだ。彼らに責められることよりも、強いが優しい義藤が死んでしまうことが辛かつた。

紅を守りたい、と笑う義藤。

強くなりたいと都南と手合わせをする義藤。

悠真を気遣い話しかける義藤。

良い奴義藤。

赤が守りたいと叫んだ義藤。

そして、悠真を守るために盾となつた義藤。

悠真は義藤に生きて欲しかつた。もう一度、笑つて欲しかつた。一緒にいて欲しかつた。

力を……

悠真は願つた。惣次の紅の石に助けを求めた。なのに、紅の石は反応しない。赤の姿は見えない。義藤は崩れ落ち、畳がはがれ、板の間が露になつた床に血が流れ出していく。赤は美しい色。なのに、少しも美しいと思えない。赤い色は残酷で、恐ろしい色だ。

「義藤……」

悠真は何も出来なかつた。ただ、義藤の名を呼ぶことしか出来なかつた。

「義藤、義藤！」

悠真は這つて義藤に近づくと、彼にすがつた。全てが嘘であつて欲しかつた。悠真の胸から様々な感情が込み上げた。男が泣くのは情けない。祖父は言つていたが、悠真の涙は止まらなかつた。抜き身の刃のようで、とても優しい義藤。義藤が負けたのは、悠真のため。その現実が辛かつた。

「義藤！」

悠真は叫んだ。義藤が目覚めることを願つて叫んだ。誰かに助けを求めた。嵐の夜、に助けを求めたのと同じこと。悠真は助けて欲しかつた。それは、自分の命を助けて欲しいのではなく、義藤の命を助けて欲しかつた。きっと、田舎者の小猿の悠真より義藤の方が火の国に必要とされていると思うから。この火の国の平和を守るには、悠真が愛した故郷の数少ない生き残りの人たちを守れるのは、悠真でなく義藤だから。

「逃げるぞ」

黒服の敵が言つた。一人が倒れた仲間を抱え、一人が悠真を義藤から引き離し、力無い義藤を抱えた。そして一人は悠真を捕らえた。

「離せよ！」

悠真は身をよじらせた。悠真は特別に訓練を受けたわけでない。義藤と互角以上にに戦つた敵に悠真が敵うはずが無く、悠真は懷に拳を叩き込まれ意識を失つた。

「義藤……」

意識を手放すその瞬間まで、悠真は義藤を思った。

## 赤の謝罪（1）

振動が身体に響く。馬の足音も聞こえるのに、辺りは暗い。敵に捕らわれ、どうなつてしまつたのか。悠真は現状を把握しようと目を開いたが、辺りは闇が深く何も見えない。

「義藤」

悠真は目を開いた。今の状況がつかめなかつた。それでも義藤の名を開口一番に口にしたのは、贖罪の念によるものだ。両手を後ろに縛られ、足も自由が利かない。もがきながら身体を起こすと、暗闇になれた悠真の目は力なく倒れた義藤の姿をとらえた。義藤の傷は乱暴に縛られ、手当を受けているようだつたが、きちんとした手当てでない。少しの間、命を繋ぎとめるための手当てだ。

「義藤」

悠真は義藤の名を呼んだ。しかし、義藤は動かない。

「義藤」

近くで見ると、かすかに義藤の胸が動いていた。何とか生きている。そういう状態だ。

悠真は義藤が生きていることに胸をなでおろした。同時に悠真の目に涙が浮かんだ。どうして、義藤を残してくれなかつたのか。生きていれば、紅城で紅たちが助けてくれるはずだ。きっと紅たちは流の国から白の石を輸入しているはずだから、白の石で義藤を助けてくれるはずだ。なのに義藤はここにいる。ここにいる限り、義藤は助からない。

悠真是記憶をたどつた。悠真と義藤は敵の手の中にある。悠真と義藤は木造の箱のような部屋に入れられ、隙間から外を見ると、舗装されていない道を動いている。馬に引かせてているのだ。この先、悠真と倒れた義藤に待っているのは絶望だけだ。

「なあ、千夏、秋幸。本当にあれは紅なのか？」

声が響き、悠真是壁に耳をくつつけた。それは、敵の声。長と思わ

れる男の声だらう。千夏、秋幸と言うから、それは残りの敵の名のはずだ。

「義藤が守るんだ。紅に違ひないよ」

もう一つの声が響いた。それは、青の石を使った優男の声。「それにしても、危なかつたね。義藤の石が砕けなければ、負けていたでしょ。たつた一人で、私たち四人の相手をするんだから。次に戦つたときは勝ち目がないだろうね。さすがとも言うべき力ね」女の声も混じつていた。黒服の敵は、義藤が守る悠真を、紅だと勘違いしたのだ。紅の容姿は誰も知らない。だから、義藤が守るか否か。それが判断材料となる。義藤が身を呈して守つた。だから、悠真は紅と勘違いされたのだ。長と思われる男が言った。

「義藤は噂以上の存在だ」

それに続けて、青の石を使った優男の声がした。

「それで、千夏。冬彦の様子は？」

一人の男が言った。それは、青の石を使った優男の声だ。声から若さが伝わってきた。

「秋幸、大丈夫よ。氣を失つているけれど、すぐに元気になる。義藤は優しいから、殺したりしない」

唯一の女が言った。つまり、秋幸とは優男の名だ。ならば、女が千夏。悠真は敵を探つた。冬彦の心配をするといふことは、黄の石を使つた子供が冬彦だ。

「それにしても、秋幸、千夏。紅とは小猿みたいだつたな。色神が小猿だつたとは。無力で、きいきいと騒ぎ立てる。あれが紅だと知れば、民は愕然とするだろうな」

男が言い、小さく笑つていた。

「春市、紅の石は奪つたんだろ？」

秋幸と呼ばれた男が言った。若い声だ。

「問題ない、秋幸。暴れられてたまるか。それでも、あの状態で石を使わなかつたんだ。使つもりはないんだろうがな」

悠真は必死に辺りを探つた。敵は四人。出てきた名前を整理すると、

春市、千夏、秋幸、冬彦。まるで兄弟のような関係。悠真はもぞもぞと身体を動かし、義藤の近くへと移動した。黒服の敵に悟られないように小さな声で、それでも義藤の名を呼んだ。

「義藤、義藤」

悠真はどうして良いのか分からず、義藤の名を呼んだ。助けてもらいたいと思うのは間違っている。悠真が義藤を助けなくてはならない。それでも、悠真は誰かにすがりたかった。義藤の近くは濃厚な血の臭いが漂い、悠真は吐き気を覚えた。高貴で優美な赤がもつ、残虐な一面。

悠真が義藤を傷つけた。悠真が義藤を苦しめている。その罪から、悠真は義藤の名を呼び、謝るしかできなかつた。

## 赤の謝罪（2）

どうして、こんなことになつたのだろう。全ては紅たちの忠告を無視したための結果だ。野江は悠真が紅城へ足を運ぶことに反対していた。それを押し切つたのは悠真だ。紅は悠真が義藤と一緒に行くことに反対していた。それを押し切つたのも悠真だ。全て、悠真自身の意思で判断し、悠真の責任で決断した。全ての責任は悠真にある。この状況を作り出したのは悠真だ。

### 復讐するため

その言葉で、悠真は忠告を無視し、結果、悠真を守るために、義藤は倒れた。自業自得と言えば容易い。けれども、そんな言葉では片付けられないほどの罪が悠真にはあつた。泣きたいほど辛くて、自分の感情を抑えられなかつた。

「義藤……」

何度もその名を呼んだらう。自分の感情を整理するため、自分を奮い立たせるため、ひたすらに義藤の名を呼んだ。義藤の第一印象は最悪だつた。けれども今は違う。義藤は紅を守るため強さを願い、その才能に甘んじることなく努力を続けた存在なのだ。一直線に、愚直に、義藤は生きていたのだ。その一直線さを恐ろしく感じたのは脛のこと。その抜き身の刃のような顔を嫌つたのは脛のこと。その一直線さを尊敬したのは強い決意を聞いた後。その抜き身の刃のような、作り物のような顔に親しみを覚えたのは悠真を気遣つて話しかけてくれた時。佐久は言つていた。悠真と義藤はきっと仲良くなれると。その時、悠真が義藤の優しさに気づかなかつたのは、悠真があまりに子供だからだ。

悠真を守ろうとしてくれた義藤。村が滅びたことに頭を下げてくれた義藤。野江たちを優れた人だと称した義藤。彼は憎むべき人でない。抜き身の刃のようで、それでいて優しく温かい。それが、義藤。そんな義藤が命を失うことなどが恐ろしかつた。

「義藤」

悠真は義藤にすがつた。両手と両足を縛られ、芋虫のように這いずり回つても、義藤から離れなくなつた。彼は死んで良い人ではない。紅が信頼しているから。赤の仲間が必要としているから。そして、悠真の友となってくれるはずだから。その思いはあるのに、無力な悠真は何も出来ないのだ。

「……落ち着け」

搾り出すような声が悠真の胸に響いた。その声は苦しみも含んでいなければ、後悔も含んでいなかつた。ただ、優しく、ただ穏やかだつた。

「義藤！」

悠真は義藤を見た。暗がりの中で義藤の目は開いていた。額には汗が浮かび、暗い中でも分かるほど義藤の顔色は悪い。白い唇が小さく震え、言葉を刻んだ。

「……落ち着け。仲間を信じろ」

義藤は小さく笑つた。分からなかつた。どうして、こんな状況で他人のことを心配できるのか。その笑顔が辛くて、痛くて、悠真はどうすれば良いのか分からず、誰でも良いから助けて欲しかつた。悠真は自分でも驚くほど幼稚で、自分でも驚くほど無力だつたのだ。

「「めん、「めん、義藤」

悠真は言つた。自然と涙がこぼれた。

「大丈夫だ、自分を信じろ。お前は強い」

義藤は小さな笑顔を浮かべていた。悠真を安心させるように、落ち着かせるように、笑つたその顔は悠真を追い込んだ。悠真の罪は明らかなのに、それを義藤が否定してくれているから。

悠真は何度も、何度も謝罪した。謝罪したところで、義藤に届くが分からぬ。それに、謝罪しなくとも、義藤は許してくれるはずなのだ。義藤とはそういう人だから。つまり、悠真は自分の心を許すために謝罪を続けているのだ。ふと、悠真の頭を何かが撫でた。慌てて顔を上げれば、義藤の冷たくなつた手が悠真の頭を撫でてい

た。

「怪我は無いか？」

小さく吐き出したその言葉が、悠真をさらに追い込んだ。怪我をしているのは義藤の方で、義藤は悠真を守ったのだ。

「なんで、そんな心配するんだよ。義藤の方が……」

悠真が言つと、義藤はそつと悠真の頭を叩いた。

「術士が人を守れぬとなれば、紅の顔に泥を塗ることになるだろ」「弱く、咳き込みながら言う義藤の顔を悠真が覗きこむと、その目は柔らかく優しかつた。当然のように悠真を気遣い、当然のように悠真を守る。義藤の言葉に悠真は涙が止まらなかつた。

## 赤の謝罪（3）

悠真はこれからどうすればよいのか、眞面目検討がつかなかつた。無力な田舎者の小猿は、泣き喚くだけで何の力も持っていない。義藤の色は今にも消えそうであつた。

「義藤」

悠真は義藤の名を呼ぶことしか出来なかつた。そんな時、悠真の世界は赤に満たされた。赤を見ると、悠真は先ほどの、赤の叫びを思い出すのだ。義藤を助けたいと、叫ぶ赤の声が、今でも耳に残つてゐる。

義藤。

赤は狭い箱の中に現れると、そつと膝を折り義藤の頬に触れた。

義藤、何も案ずるな。

赤は微笑むと、そつと義藤に語りかけた。

忠藤は母に似ておるが、義藤は父に似ておる。双子でも異なるものじやな。案ずるな。紅がそちを見捨てることはない。案ずるな。わらわが、そちを死なせたりせぬ。

悠真は赤の横顔を見つめていた。なぜ、赤が義藤にこだわるのか悠真には分からぬ。赤が色神でない吉藤にこだわることは分からなかつた。義藤に赤の姿は見えていないらしく、義藤の目は空虚に空を見つめ続けるだけだ。

「赤」

悠真は赤の名を呼んだが、赤は悠真に目もくれず義藤を見つめていた。

義藤、すまぬ。わらわが下らぬ小猿に興味を示したために、そちを傷つけることになつてしまつた。案ずるな。紅がそちを助けに来る。わらわも義藤を見捨てたりせぬ。

赤が悠真を否定そのまま消えた。これまで赤は悠真を気にかけてくれていた。悠真に「染まれ」といながら、様々なことを教えて

くれていた。しかし、今、悠真は赤に見捨てられた。赤が義藤に謝罪した理由は、赤が悠真に気をかけたため義藤が傷を負つたから。そう気づいたとき、悠真は赤の言葉を思い出した。

（小猿を守る理由はない）

悠真が赤の利とならない限り、赤が悠真に助力する必要はない。赤は彼女自身の色のために紅を守り、悠真に手助けをしているだけなのだから。けれども、赤が義藤を気に掛けるのは、紅のためだけではないように思えたのだ。赤は紅のためという理由でなく、義藤を思つてているように感じるのだ。だから、こうやって姿を見せる。

悠真は赤に見捨てられてしまった。その理由は明らかだ。あの時、義藤が四人の敵と戦ったとき、赤は悠真に色を貸してくれようとしてくれた。だから悠真は、紅の石を使えるはずだったのだ。赤が色を貸してくれて、悠真が赤になれば、悠真は惣次の石を使えた。義藤が傷つく必要もなかつた。悠真が義藤が傷つく理由を作り、悠真が赤の力を使えなかつたから義藤は傷ついた。つまり、すべて悠真の責任なのだ。

なぜ、悠真は赤の力を使うことが出来なかつたのか。何に赤は拒絶されたのか。悠真は自分がどんな状況にあるのか分からなかつた。何も分からず、赤に見放され、悠真はどうすれば分からなかつた。都のことも、官府のことも何も分からない。政治とか、外交とか、術士とか、田舎者の悠真は何も分からない。けれども、この状況で義藤に助けを求めるることは間違つていて。

「ただ……」

悠真が義藤の顔を見ていると、義藤が小さく口を動かして何かを呴いた。義藤の意識は朦朧としているのか、義藤の目は空を見ている。

「ただ？」

悠真は義藤が何を話そうとしているのか、義藤の白い唇に耳を寄せた。義藤は空を見つめたまま、独り言のように続けた。

「忠藤……」

義藤は死んだ兄を呼んでいたのだ。義藤の兄「忠藤」は死んでいるのに、義藤の目には死んだ忠藤の姿が見えているようであった。

「忠藤。どうしてここにいるんだ？俺を許してくれるのか？十年前、母を受け入れた忠藤を否定した俺を。あの時、忠藤は何かを言おうとしていたのに、あの時俺は忠藤の力になれたかもしないのに。俺が忠藤を見捨てたようなものなのに。忠藤。すまなかつた。本当に、すまなかつた」

義藤は空を見たまま続けた。

「許してくれるのか。ありがとう、許してくれるのか。ありがとう」「空を凝視した義藤の口元は微かに笑っていた。義藤の目には、何かが確かに見えているのだ。

「それより、今まで、何していたんだよ。十年も、何をしていたんだよ。今頃姿見せて……」

そう言いつと、義藤は何もない空に血で赤く汚れた手を伸ばした。悠真はいたたまれなくて、その手を取りたかったが、両手足を縛られた芋虫のような悠真は何も出来ない。

「紅は無事なのか？そうか、良かつた。紅は無事なんだな。良かつた」

義藤が何を見ているのか分からぬ。悠真は何かを見ている義藤の姿を見ていることが辛かつた。

「俺は大丈夫だから、忠藤は紅の近くにいろよ。俺は……俺は大丈夫だから」

大丈夫でない。悠真は思った。義藤は少しも大丈夫でない。濃厚な血の匂いが、震える白い唇が、少しも大丈夫でないことを示していた。しかし、義藤は大丈夫だという。それは、義藤が強いからだ。

「覚えているか？昔の約束を。忠藤と俺の一人で、あの子を守るつて。そんな約束。俺が大丈夫だから、俺を気にかけるな。俺を……」義藤が笑うと、上げていた義藤の手は糸が切れたように地に落ちた。まるで、張り詰めていた糸が切れたようだつた。

義藤は深く息を吐き、ゆっくりと目を閉じた。義藤は息をしている。大丈夫。悠真は覚悟を決めた。悠真に覚悟を決めさせたのは、義藤の姿だった。義藤の態度が、義藤の言葉が、義藤の覚悟が、悠真に覚悟を決めさせた。義藤の心を悠真是垣間見たような気がしたのだ。義藤は優しい人だ。そして、強がっているだけなのだ。ここまで来たのは、悠真の意志。決意。下がれない。義藤を助け、紅の命を狙う正体を突き止め、村を壊滅に追い込み、祖父と惣次を殺した犯人を突き止めるまで、悠真は逃げない。

## 赤の敵（1）

悠真たちを乗せた馬車は、しばらく走り、止まった。

田舎者の悠真には、ここがどこ出るのか知る余地も無い。ただ、一度止まり、再び動き始めたことは分かつた。扉が開いたのは、それからすぐ後のことだった。悠真是敵の陣中に連れてこられたのだ。

「降りろ」

後部の木の扉が開けられ、悠真に命じたのは顔の半分を黒い布で覆つた男だった。声からすると、春市のようだった。

「千夏、紅を連れて行け。秋幸は冬彦を連れて行け。俺は義藤を連れて行く」

名と呼び方から彼は兄弟だろ？ 一人の男が前へ行った。おそらく、それが秋幸。様々な色と相性が良い実力者。そして、女性と思われる一人が悠真の足を縛った繩を切り、悠真を立たせた。彼女が千夏。悠真は身じろいだ。ここまで来たら、抵抗できるだけしなければならない。行動しなければ、好機に恵まれることもない。好機を待つだけではいけない。好機は自ら掴むものだ。昨日、野江に飛びかかつたから悠真是紅城へ足を運ぶことが出来た。そして、形は違うけれども復讐する相手を見つけたのだ。

千夏が女性だからという考えが悠真にはあったが、それが間違いであるとすぐに教えられた。身をよじり暴れようとした悠真の腕を千夏が締め上げた。腕の骨が軋んで音を立て、痛みで悠真は呻いた。  
「どこまでも愚かな小猿ね。これ以上は無駄なことよ

すると、千夏は悠真の耳元に口を寄せ、小さく囁いた。

「義藤を助けたいのなら、おとなしくしていなさい」

それは意外な言葉であった。彼らにとつて義藤は敵だ。敵だから義藤の命を狙うし、悠真の命を狙う。けれども、彼らは義藤を助ける

ような発言をしたのだ。その言葉を信じたわけがないが、悠真はなされるがままにしていた。諦めるわけにはいかない。千夏は義藤を助けるような言葉を口にしたが、それを鵜呑みにすることも出来ない。だから悠真は機を逃さないように、この場所はどこなのか知るために、全身でこの場の空気を探り辺りを見渡した。三人に命じた男 おそらく春市と思われる男が、軽々と義藤を抱えた。

悠真は引きずられるように歩いた。義藤を抱えた男、黒い服を来た仲間を抱える男、そして悠真を引きずるよう歩く女性。彼らが紅を殺そうとした犯人だ。それでも、彼らだけでそれを成し遂げたとは思ひがたい。官府が犯人だと紅たちは話していた。官府とは、実質的な政治を行う役所であり、紅と対等に渡り合つ存在。ならば、政治的に強い権力を持つ立場にある者が犯人だ。おそらく官府の人間「官吏」だ。官吏は一般雇用と血統雇用の一一種類が存在する。一般雇用は悠真のおよぶな民間人が学を得て、官吏になるための試験を経る道のり。血統雇用は血筋で雇用される。親が権力者である場合、子供にはその地位が約束されるのだ。この豪邸を見る限り、おそらく敵は後者だ。紅の暗殺という難題が彼ら四人だけでそれがなせるとは思えず、同時に目の前に経つ豪邸が彼ら四人の家だとは思えない。様々な色の石が、彼ら四人の所有物だとは思えない。色の石は容易く手に入れることはできない。紅の石は紅が一日一つ生み出す希少な石。今の紅の生み出した石は、紅の監視下にあるから容易く使用することは出来ない。つまり、彼らが持っているのは先代以前の石だ。今の紅が十年だから、十年前から紅の石を持っているということだ。そして異色の石を手に入れるのは更に難しい。火の国は鎖国状態だから、異色の石を手に入れるのは独自の道が必要なのだ。四人の隠れ術士を雇つている官吏は、強大な力を持った存在だ。権力という力に溺れた存在だ。

突然、彼らは足を止め、地に膝をついた。悠真も地に倒され、無

理やり頭を下げさせられた。砂利が頬に食い込み、悠真は横目で辺りを探つた。来るのはだ。四人の隠れ術士を雇つてゐる赤の敵が来るのだ。

「紅を捕らえました」

春市が言つた。広い庭園には松明が燃え、庭を照らす。悠真は目線だけを必死に動かして、相手の顔を見ようとしたが、見えるのは高価そうな着物の裾だけ。けれども、着物の柄から相手が年配であることが分かつた。

「して、春市。誰が紅だと？」

年配の男は黒服の四人の頭のようで、四人に命じているのはこの男だ。

この男が赤の敵だ。

## 赤の敵（2）

敵の本大将とも呼べる官吏は紅の姿を探していた。もちろん、悠真は紅ではない。もし、官吏が紅の真の姿を知らなければ悠真是紅として殺されるかもしれないし、敵が紅の真の姿を知つていれば悠真是偽者として殺されるかもしれない。結局のところ、人質となつた悠真に残された道は「死」のみであつた。そして願うことは、どうか義藤に無事であつて欲しいということだ。

官吏に紅は誰だ、と問われて千夏が悠真を押し付ける腕の力が強まつた。

「千夏が連れています」

義藤を抱えていた春市が言つた。

「誰だ、こいつは……こいつが紅だと？品位の欠片もない小猿が紅だと？お前ら兄弟はこいつが紅だと思ったのか？愚か者め！」

悠真は息を呑んだ。やはり、敵はかなりの高官だ。紅の姿を知つて、悠真が偽者であることに気づいている。自分が偽者だと知られて息を呑んだ悠真であつたが、息を呑んだのは悠真だけでなかつた。隠れ術士たちも息を呑んだのだろう。悠真の頭を押さえつけていた千夏の手の力が緩んだ。悠真は身体をよじつて、相手の顔を見上げた。四人に命じた男は年配の高貴そうな男だ。ふくよかな身体は男が権力を持つ立場であることを示していた。そして、悠真は年配の官吏の一色を見た。不思議なことに、臆病者の色であつた。臆病者の色は高圧的な年配官吏の見た目とそぐわない色であつた。しかし、色は嘘をつかない。悠真は色を見た。

年配の男は悠真の顔を見ると激昂し、春市の胸倉をつかんだ。

「愚か者め！誰が紅だと！」

男は春市の胸倉をつかんで投げ飛ばした。不思議なことに、春市は抵抗しなかつた。義藤と対等に戦う隠れ術士だ。年配官吏を押さえつけることぐらい容易いはずだ。容易いはずなのに春市は少しの抵

抗もしない。それは悠真を押さえつける千夏も同じで、冬彦を抱える秋幸も同じであった。何もしない一方、千夏は紅の石に手を伸ばしている。千夏が春市を助けたいと願っているのは事実で、己の怒りを押し殺しているのも事実であった。

「紅は小娘だ。お前ら、何をしに行つたんだ！」

官吏は倒れた春市を蹴った。何度も、何度も蹴つていたが、春市は抵抗しなかつた。他の兄弟たちも春市を助けようとなかつた。十数回、官吏は春市を蹴り続け、彼自身の息が上がつた頃、動きを止めた。

官吏は倒れた義藤を見ると言つた。

「赤い羽織か……それは、義藤だな。紅が真を置くとする朱護頭。調べたが、出生もはつきりしない者だ。どこの馬の骨とも分からぬ存在。そのような者に赤を与える紅の愚かさが片腹痛いわ。して、なぜ殺さない？すでに義藤は不要な存在だ。殺して、首を紅に届けてやれ」

官吏は言つた。義藤は以前隠れ術士であった。戸籍を持たず、山に隠されて育つた。もちろん、その出生は秘密に包まれている。戸籍を遠次や惣次が用意したところで、出生への疑問は権力者なら気づくだろう。赤の仲間たちは、そのことに対しても言わない。もちろん紅も同様だ。赤の仲間たちは義藤の生まれではなく、義藤自身の人となりを見ているのだ。だから何も気にしていない。義藤が紅を守ろうとする気持ちは本物で、義藤の優しさは本物だから。官吏の男は違う。義藤の生まれだけを見ているのだ。

（義藤のこと、何も知らないくせに）

悠真はそう思つた。義藤は良い奴だ。今なら断言できる。義藤の優しさの強さも知つてゐるから。

春市は身体を起こし、言つた。春市の口は切れ、赤い血が流れていた。

「義藤が身体を張つて守つたのが、この子供です。義藤は紅を守る。だから、これが紅だと。それに、義藤は優れた男です。生まれは定

かではないかもしだせませんが、実力は本物です。ここで殺すには惜しいかと。義藤は赤い羽織を着ている、紅が信頼している男ですか。朱護頭という、実力だけで手にした地位は本物です」

地に頭をなすりつけ、春市は義藤の命乞いをしているようだつた。春市は義藤の敵なのに、義藤の命乞いをする。信じられない行為だ。官吏は春市たちを見下ろして言った。

「なるほど、確かに義藤は紅が信頼する男だ。万一、こちらのことが紅に感づかれたとき、役立つかもしれない。それで、こちらの足取りはつかまれていらないだろうな」

男は春市に問うた。

「はい。万事ご心配なく」

春市は男に返答し、そして言った。

「一つ、申し上げたいことがあります。義藤との戦いで冬彦が負傷しました。どうか、冬彦に休みをとえてください」

男は言った。

「愛情深い義兄弟だな。覚えておけ、次に失態を犯すようならば、奴らより先に兄弟の死に目を見るかもしれないぞ」

春市をはじめとし、千夏、秋幸も深く頭を下げた。

「二人は牢に入れておけ」

男は四人に命じた。

## 赤の敵（3）

春市は義藤を抱え、千夏は悠真を引きずりながら進んだ。悠真是がこうと身体をねじらせるが、その瞬間に千夏に押さえつけられてしまうのだ。丁寧に手入れされた庭園を抜け、悠真是建物の並ぶ回廊へと連れて行かれた。

冬彦を抱えた秋幸は、早々と立ち去った。傷ついた冬彦の手当てに向かうのだろう。

回廊の中の一つの建物に悠真を連れ入れられた。豪勢な屋敷の中は、紅城と同じように畳が敷き詰められていた。畳みが並ぶ豪勢さは、紅城と異なり冷たさを持っていた。冷たく感じるのは、この豪邸に赤い色が無いからだ。紅城を満たしていた鮮烈な赤は、強さと温かさを持っていた。この空虚な豪邸には色がなく、果てしなく広がる静けさがあった。悠真の背筋に汗が流れるのは、囚人となつた恐怖ではない。色がない虚無の豪邸に、恐ろしさを感じたのだ。ここは田舎の自然とも紅城の輝きとも違つ場所。君が悪いというのが正直な感想だ。

悠真是千夏に引きずられながら段を上がり、外廊下を通り、一つの小部屋に入った。小部屋の奥には隠し階段があり、床から階段が引き出された。春市は灯りに火をつけ、階段を地下へと下り始めた。背中に義藤を背負つた春市は、少しも重そうに振舞うことは無かつた。都南に比べ細身である義藤も、一人の大人の男だ。背も比較的高いから、重さはそれなりにあるはずだから、春市の力はかなりのものだ。術士より都南に近い存在だ。

春市は丁寧に義藤を扱っている。意識のない義藤が乱暴に扱われないことに、悠真是ひとまず胸をなでおろした。もちろん、千夏に

連れられた悠真も一緒に降りた。地下室は階段の部分だけ木造りの壁であるが、地下に入ると石造りへと変わった。石造りの壁の地下室はとても湿度が高かく、天井に空気口があるが、上には建物が立っている。天井を見上げて見えるのは床下だ。どうやってこのような穴を掘つたのか分からぬ。黄の石の力を使えば容易いものかもしない。それさえも石の力の使い方だ。

春市が鍵を出し、牢を開けた。四畳半ほどの狭い牢の中には簡易の廁と、「じざ」が敷かれていた。冷たさが先に立つ狭く暗い牢獄だ。義藤を丁寧に扱う春市は「じざ」の上に義藤を寝かせると、義藤の赤い羽織を脱がせた。少し色の白い義藤の肌は彼の血で赤く染まり、傷を縛つた布も血で汚れていた。

「千夏、手を貸せ」

春市が言つと、千夏は悠真を牢の隅に押しやつた。春市と千夏の二人は、悠真を縛り上げるようなことはしなかつた。悠真は両手を縛られいたが、それ以上の拘束をされず、彼らは悠真が無力な小猿であることに気づいているようだつた。悠真は無力だ。その無力さは誰よりも悠真自身が知つてゐる。

「変な真似しないようにね」

悠真は千夏に威圧され、身を縮めた。もちろん、悠真は何も出来ない。千夏は義藤を囮むように、春市の向かいに座つた。

「義藤に手を出すな」

悠真は一人に言つた。勇気を振り絞つた声は情けないことに震えていた。義藤は悠真のことを最優先に守つてくれた。その身をかえりみず悠真を守り、その結果今に至るのだ。そんな義藤は今、意識を失つたまま敵に囮まれている。悠真は義藤が一人に殺されてしまうと思ったのだ。

「このままでいいのか？」

「どうするんだ？」

「どうしたいんだ？」

悠真は自分自身に問うた。『のまま、義藤が殺されてしまったとして、己を許すことが出来るのか。その責を負つたまま、生きていくことが出来るのか。それは、故郷が滅びて一人で生きていくことよりも辛いこと。義藤が優しい人で、誰からも必要とされていると知つているからこそ、なおのこと己を許すことが出来ない。悠真は、義藤を守ろうと叫んだ赤の姿を思い出した。叫んで、叫んで、叫んで、赤は義藤のことを助けようとした。それでも助けられぬと赤は己を責めていた。

赤は色神だから、人の世に関わることはあまり出来ない。出来るのは、己の器を選び色の石を生み出させるだけ。その石を人間に使わせて国を繁栄させるだけ。しかし、赤は義藤のために叫んでいた。手が触れないなら声を。声が届かぬなら祈りを。赤は義藤にささげていた。

己はどうだ？

悠真には手がある。足がある。声がある。人の世に存在する肉体がある。赤と違い、身体があるのに悠真は何も出来ない。いや、何もしようとしていないのだ。

行け。

悠真は自分自身に命じた。己の全てをぶつけろ、と悠真は命じた。

## 赤の敵（4）

身を乗り出し、義藤の前に立ちはだかった。それが悠真の精一杯の抵抗だった。悠真の両手は縛られ自由がない。義藤は悠真を身を呈して守ってくれた。傷の痛みを恐れず、命を失うことを探れず、会つたばかりの悠真を守ってくれた。それは悠真が惣次の知り合いだからなのかもしれない。けれども、悠真はそれだけないと感じていた。

義藤はとても優しい人なのだ。千夏も、義藤は優しいから殺したりしない。と言っていた。義藤は冬彦の命を奪わなかつた。強いけれど、優しい。抜き身の刃のようで、その刃は命を奪うことをしない。それに、春市と最初に刃を交えたとき、義藤は春市を殺さないように戦つていた。義藤は優しい人だ。強いが優しい人だ。悠真はそんな義藤を守りたかつた。義藤を信頼し、尊敬していたから。

「案ずるな、小猿。おとなしくしていろ」

春市が悠真に言つた。その声は低く落ち着きを持つていた。

「信じられるか！」

悠真は春市に飛び掛つた。無力な悠真が春市に勝てるはずもなく、悠真は瞬く間に春市に投げられ、地下牢の壁に叩きつけられた。息が詰まり、口から内臓が飛び出そuddつた。倒れた悠真の上に春市が乗りかかってきた。両手を縛られた悠真は何の抵抗も出来ない。ただ、春市に押さえつけられ何も出来ずに暴れていた。足を動かし春市を蹴り上げようともがき続けた。

「離せよ！離せよ！」

悠真はもがいた。もがいて暴れて、体のあちこちが地下牢の壁にぶつかつた。なのに、一つも春市に当たらなかつた。これほどまでに差があるとは思わなかつた。悠真は野江や義藤たちの足元にも立てない無力な愚か者。それでも、高ぶる感情を抑えられなかつた。滅びた故郷が、死んだ祖父と惣次が、傷ついた義藤が、悠真の感情を

高ぶらせていた。憎むべき相手は誰か。それは分からぬ。隠れ術士として、官吏の道具となつた春市たちなのか、隠れ術士を道具として紅の命を狙つた官吏なのか。その答えは分からない。分からぬが、誰かに感情をぶつけなければ悠真は理性を保てなかつた。

「離せよ、離せよ……」

悠真は暴れながらも、力が欲しいと願つた。そして、惣次の言葉の意味が分かつた。術士の世界は辛いことばかりだ。

普通の生活をしてえ、そう思うのが普通じゃ。

惣次は言つていた。惣次は紅の側近だつた。そんな惣次も術士を嫌つていた。術士に憧れる悠真をたしなめたものだ。今なら悠真も分かる。術士の世界は、紅の生きる世界は、危険で辛い世界。己の情けなさを突きつけられる。無力さを痛感させられる。心が辛くて、痛い。心の痛みが涙を誘つた。どうしようもなくて、悠真は泣いていた。

これが術士の世界だ。

悠真が憧れていた術士の世界だ。

術士の世界は辛いことが多くて、何も楽しい事はない。

術士の世界は傷が多くて、己の無力さをまざまざと突きつけられる。

情けない。

穩当に情けない。

野江は悠真に何と言つだらうか。

（あたくしは言つたはずよ。術士の世界は良いものではないと）

紅城へ連れて行つて欲しいと懇願した悠真を、連れて行くと決断してくれたのは野江だつた。それからずつと野江は悠真の近くにいてくれた。歴代最強の陽緋野江は、どのようにして陽緋の地位に着いたのか。実力第一の術士の世界とはいえ、若い女性が上に立つことを快く思わない者もいるだろう。野江は実力で全てを黙らせてている

のだ。野江の心労は計り知れない。

都南は野江に何というだろうか。

(小猿が何をいきがつていてるんだ。まず鍛える。それからだ)

都南は術を使わずに朱将までのぼりつめた存在。何でもありの術士の世界に、普通の人間が入り込んだようなものだ。普通の人間でありながら術士の世界で生きるために、都南がどのような道を歩んできたのか想像するに容易い。一朝一夕であれほどの剣術を得ることは不可能だ。術士と同格の力を得るため、想像を絶する鍛錬を積んだに違いない。

佐久は何と言うだろうか。

(まずは強くなりなよ。全てはそれからだからね)

優しい佐久はきっと否定しない。悠真の弱さも情けなさも受け入れてくれるだろう。それでも強い佐久は妥協しない。佐久の術を使う才是確かに、様々な色との相性も良い。佐久は優れた術士でありますから、身体を動かすことが苦手で大きな地位を得ることは無かつた。その時点で佐久自身に己の限界は突きつけられた。現実の頂上を見ても、佐久は逃げずに紅城にとどまつた。それはどれほどの勇気が必要だろうか。悠真なら、きっと逃げる。

紅は何と言うだろうか。  
美しく強い紅は何と……。

悠真是紅が何を言うのか分からなかつた。

「ごめん、俺何も出来なくて、邪魔ばっかりで。ごめん、紅。義藤  
がこんなことになつて……」

悠真是泣きながら紅に謝罪した。紅の胸の痛みを想像すると、紅の鮮烈な赤が翳ることを想像すると、悠真是何ともいえない気持ちになるのだ。

## 赤の敵（5）

どうしようもなくて、悠真は泣いていた。まるで子供のように、泣いていた。義藤の赤い血から逃げたかった。責められることから逃げたかった。春市は泣きわめく悠真を押さえつける手の力を緩めると、そつと悠真の頭を叩いた。軽く叩くその手は大きく、悠真は大きな力に守られているような気がした。

「安心しろ、これ以上傷つけたり、殺したりするつもりはない。おとなしくしている」

悠真はそれ以上何も言わなかつた。言えなかつたのだ。もし、義藤を助けられる存在がいるとすれば、悠真ではない。無力な田舎者の小猿ではなく、隠れ術士である彼らなのだ。彼らが信頼できるのか分からぬ。それでも、悠真はすぐるしかなかつた。彼らの持つ一色を信じるしか出来なかつた。春市は、義藤を殺さなかつた。紅城で義藤を殺すことが出来たのに、殺さなかつた。そして、悠真が紅でないと分かつた今も、悠真を生かし続けている。殺そうとせず、生かし続ける。だから、悠真は信頼しようと思つたのだ。今はすぐるしかない。

「助けてくれ、頼む。義藤は何も悪くないんだ」

悠真は春市に頼んだ。涙と鼻水でぐずぐずになつた顔で、祈つていた。

「わめくな、おとなしくしている。義藤はこんなくだらないところで死んでよい人ではないのだからな。義藤は生きなくちゃいけないんだ。俺たちとは違うんだ」

春市は悠真の頭を軽く叩いた。悠真は、大きな春市の手に「安心しろ」と言われたよつの気がした。

春市は懐から小さな刀を、千夏は小さな箱を出した。これから何が起ころか分からぬ。それでも悠真は祈つていた。

どうか、義藤が助かりますように……

「のまま義藤が命を落とせば、悠真は大切な人を失うことになる。昨夜は祖父と惣次が死んだ。これ以上、目の前で命が消えるのは見たくない。美しく強い赤色が残酷な色に豹変する場面を見たくなかつた。赤が消えて、命が消える場面を見たくなかつた。

どうか、義藤が助かりますように……

祈るしか出来ない悠真は色に願つた。義藤を助けることが出来る色は「白」だが、悠真是白を知らない。

春市が義藤の傷を縛っていた布を優しく切つた。布は小さな灯りで見えるほど、赤く染まり、対照的に、義藤の顔色は悪く唇は白い。傷口が露になると、悠真是思わず目をそらした。布を切ると、赤い血が再び溢れ出しだ。命は赤で生かされ、赤が消えると命は消える。それが辛く悲しい。赤が消えると命が失われるのなら、赤が残酷な色となつてしまふから。本当は違う。赤はとても優しい色なのだ。千夏が箱を開けると、針と糸、小さな刃物が入つていた。春市が片手で肩口の傷を抑え、反対の手で腹の傷を押させていた。千夏が手早く針と糸を用意し、皮膚と皮膚を縫いつけ始めた。

「助かるか？」

春市が千夏に尋ねた。

「分からぬ。普通は助からぬけれど、義藤は強いから。知つてゐるでしょ。それに、そのうち私たちは紅に負ける。私たちは紅に負けて、紅はここに足を踏み入れる。紅がここに来れば、きっと紅は義藤を助けるでしょ。白の石を使ってね。だからそれまでは……。私たちが負けるまで、義藤が命をつなぐことが出来れば、義藤に未来は残される」

千夏がそう答えた。「じざの上は赤い血で汚れ、悠真是その様子を見

ていた。一人は義藤を助けようとしてくれている。だから、二人は敵でない。ならば、なぜ紅に反旗を翻し、義藤に刀を向けるのか。

悠真は理解できなかつた。春市は苦笑した。

「確かに。つまり、義藤が助かるには、俺たちが負けるしかない。俺たちが死んで、義藤が助かる。皮肉な現実だな。せめて、お前たちだけでも助けてもらえば良いんだが」

春市の言葉に悠真は息を呑んだ。彼らは、殺されることさえ見据えているのだ。紅に殺されることを覚悟して、それでも紅を敵として戦い続ける。矛盾した行動だ。

「何を言つてゐるの？何があつても一緒に決めたじゃない。秋幸や冬彦は私たちを信じてゐるよ。秋幸と冬彦も戦うと。義藤と戦つてもかまわない、と一緒に誓つたじゃない」

彼ら兄弟は、強い意志で紅に刃を向けることを誓つたのだ。

そもそも、どうしてあの男に仕えてゐるのか。四人の真意はどこにあるのか。それでも、彼らが紅の命を狙つたのは事実であるし、強い力を持つてゐることも事実。彼らが、悠真の村を壊滅に追い込んだ一部であることも事実。悠真は混乱していた。彼らを受け入れるべきか、憎むべきか。憎むべき相手が義藤を助けてくれるのか……。

## 赤の敵（6）

憎むべき存在だった紅は、多くの重圧の中で耐えて、最善の選択を模索していた。彼らの擁護をするつもりはなかつたが、今、彼らを憎むことが出来なかつた。千夏は腹の傷を縫い合わせ終えると、肩口の傷を縫い始めた。腹の傷には布が当てられ、その上からきつく縛られた。肩口の傷は貫通しているから、前と背部と縫い合わせていつた。

「春市、私はね誰も死なせたくないの。それは、義藤も春市も秋幸も冬彦も、そして紅も……。私は紅のことを知らないけれど、あの義藤がこれほどまでに尽くす存在よ。紅の人となりは容易く想像できるでしょ」

彼らが義藤のことを信頼しているのだと分かつた。

「義藤は、大丈夫なのか？」

春市は千夏に尋ねていた。義藤の傷は深く、医師が診療しても助かる保証は無いだろう。こんな地下牢で、こんな素人の治療で、義藤が助かるとは思えなかつた。それに、義藤の生還が彼らの敗北と死にかかるといふとすれば、彼らの心情はかなり複雑なはずだ。

「言つたでしょ。少しの間、永らえば」

千夏が反論したとき、都南は強く床を叩いた。

「違う、そんなことじやない。千夏、言つていただける。石の力の応用について。試せるんじやないのか？」

悠真は春市と千夏が何を考えているのか分からぬ。確かなことは、彼らが力を持つていてるということだ。

「馬鹿言わないで。そんな、何の確証もないこと出来るわけないでしょ」

春市は一つ息を吐いた。

「だが、千夏。理論上は可能なんだろ。何があつても義藤を死なせてはならない。……紅がなかなか助けに来なければ、頼んで良いか

？」

「最悪の場合はね」

千夏は春市の肩を叩いた。

丁寧に布が巻かれた後、春市は階段から上に出て行き、戻つて来たとき小さな桶と布を持っていた。千夏が悠真を縛つている縄を切ると、言った。

「きつと熱が出てくるから、冷やすのよ」

桶が悠真の前に置かれ、悠真は頷いた。そんな悠真を春市が一瞥した。

「明日また来る。おとなしくしていろ」

春市はそう言い捨てると、千夏と一緒に出て行つた。

残された悠真は、恐る恐る義藤に近づいた。顔色の悪い義藤は、昏々と眠り、義藤の手に触れると驚くほど冷たかった。悠真は赤い羽織を義藤の上にかけた。悠真に出来ることは、祈ることだけ。義藤が助かるように祈り、紅が狙われないように祈る。佐久が石の痕跡からこの場を突き止めてくれることを祈り、都南と野江が助けに来てくれるることを祈る。水に浸した布を、義藤の額に乗せた。義藤の身体は冷たい。悠真はあまりに無力だった。

どうか、義藤が助かりますように……

無力な悠真は地下牢の天井を見上げた。天井は低く、地下牢は狭い。身動き一つとれず、気持ちの悪いほどの閉塞感があつた。今まで感じたことのない閉塞感。まるで、自分の限界を突きつけられたようだつた。故郷で過ごしていたころは、悠真は自分には無限の可能性があると思っていた。術士になること以外は、何にでもなれると思っていた。何でも出来ると思っていた。努力すれば何でも手に入ると、何でもすることが出来ると、信じていた。けれども、今の悠真は無力だ。紅城に足を踏み入れても、悠真の先に道は現れない。

悠真の先に道はなく、悠真の頭の上には大きな天井が覆いかぶさっている。これ以上は手を伸ばせない。もつと上に、もつと上に、と手を伸ばすけれども手が届かない。

無限の可能性があるのなら。悠真は願った。一人孤独になると、悠真は寂しくなった。辛くなつた。

「赤」

悠真は赤を呼んだ。悠真に色を貸してくれた赤は、悠真の前から姿を消してしまつた。何にでも染まれると思った悠真は、何にもなれないのだ。

「赤」

呼んでも赤はここに姿を見せない。悠真に無限の可能性などなく、悠真に染まることが出来ないのだ。

悠真、あなたは無力などではないのよ。

無色な声が悠真に言つたが、悠真はその声を無視した。

敵である春市、千夏、秋幸、冬彦は、本当に赤の敵なのだろうか。彼らは敵なのだろうか。

何が敵で、何が味方なのだろうか。

彼らは悪なのだろうか。

何が正義なのだろうか。

悠真は分からなかつた。

## 赤の囚人（1）

暗い地下牢の中で、悠真は故郷の海を思い出した。青く広がる海面を、煌く水面を、青い空を、白い雲を、赤い太陽を、悠真は思い出した。潮の匂い、さざめく波の音、海鳥の泣き声、悠真の五感を刺激していく。海は広大で美しい。美しい海。ここが悠真の生きるべき場所だ。

（おい、悠真。海に潜るとときは氣をつけろ）

祖父の声が悠真の耳に響く。

（じつちゃん、心配するなよ）

悠真は軽快に答え、頬を撫でる潮風に目を細めた。

祖父が船を操り、網を手繰り寄せる。網には生きた魚が絡まり尾びれを動かしていた。

（今日は大漁、大漁）

祖父が上機嫌に禿げた頭を撫でていた。

悠真は祖父を見て笑うと、鉤を片手に海へ飛び込み、深く、深く潜っていく。太陽の光は徐々に遠のき、暗くなつていく。

冷たく透き通った海の中は無音の世界だ。何の音もせず、自分の心音だけが高く響いていく。魚の群れが目の前を横切り、海底の岩には海草が生え、貝が岩につく。地上の生き物である悠真の身体は空気を求めてがき始める。一秒を争う時間。思考を無駄に回転させれば、さらに空気を欲してしまう。心を平静にして、落ち着いて、悠真は海の中で目を見開く。海中で気配を消せば、目の前の岩の陰に大物の魚を見つけた。魚は自分の命が狙われていることも知らずに、岩陰の王者を気取っている。悠真は高鳴る心臓と空気を欲する身体。獲物を目の前にする興奮。悠真は鉤をかまえた。

魚の目は悠真と違つところを見ている。よくよく見れば、魚は己の獲物を探している。小魚を狙う大魚。そして大魚を狙う悠真。こ

れが自然の連鎖だ。

時として海は残酷だが、多くの恵みを与えてくれる。術士の才覚に見放された悠真も、祖父の後を継いで漁師として生きるはずだった。嵐に呑まれて死ぬのも、鮫に食われて死ぬのも、それも漁師の運命だ。

これが悠真の生きる世界。悠真は海に抱かれ、海に守られていた。海の恵みで育ち、海を遊び場として育ち、海で多くのことを学んだ。命のやり取りも、自然の残酷さも、全て海が教えてくれた。

今日一日で悠真が目の当たりにしたことは、海が教えてくれたこととは異なる。悠真は過酷だが恵まれた自然の中で、紅の石に支えられて生活してきたのだ。紅の石を生み出す色神がどのような人なのかも知らず、紅の石をめぐって多くの攻防が行われていることも知らず、紅を守るために、戦う人がいることも知らず生きてきた。

### 自分を信じろ

自分が、どうしようもなく無力で情けない存在だと感じた時、悠真の脳裏に義藤の言葉が響いた。義藤は一言たりとも悠真を責めなかつた。悠真がわがままを言ったからこのようになつたのに、義藤は一言たりとも悠真を責めなかつた。ただ一言、悠真に「自分を信じろ」と言ったのだ。悠真は手を伸ばし、そつと義藤の頬に触れた。義藤の頬は少し熱を持っていた。悠真は義藤の額に乗せた布を取り、再び桶に浸した。

### 自分を信じろ

何を信じれば良いのだろうか。無力な小猿は、山と海を求めて泣いている。

なあ、義藤。一体俺は何を信じればいいんだ？

気づけば悠真は眠っていた。現実から逃げるように、恐ろしいことから目を背けるように、悠真は眠りへ落ちていった。

朝日の光も差し込まず、時計もなく、悠真は今が朝なのか、昼なのか、夜明け前なのかさえ分からなかつた。硬い床の上で眠つていた悠真是体中が痛んだ。

「起きる、朝だぞ」

入ってきた男がそう言うから、悠真是今が朝なのだと思つた。義藤に目を向けると、義藤は小さな息を立てながら動く様子はなかつた。  
「義藤の様子はどうだ？」

悠真より少し年上だらう男がそう言つた。声が若い。気の良さそうな男。それは昨夜の優男の声だつた。つまり、秋幸。秋幸の顔を見た第一印象は「平凡」に尽きる。悠真是、どうして秋幸が義藤の様子を気にするのか分からなかつた。春市と千夏と同じように、秋幸も義藤を気にかけているのだから。

「あんたは？」

悠真是男に尋ねた。すると、秋幸は笑つた。

「あんたが紅だと思つたんだけどな。朝飯だ、食べていろよ。千夏呼んでくるから。義藤、しつかりしろよ」

秋幸はそう言つと、牢の前に握り飯と水を置いていった。平凡そうな優男の秋幸が、昨日恐ろしいほどの力を見せ付けたのだ。佐久と同じ、様々な色との相性が良い存在。秋幸は間違いなく佐久と同様の天才だ。

## 赤の囚人（2）

黒服の敵である春市、千夏、秋幸、冬彦は義藤を助けようとしてくれている。それは、義藤と面識があるからなのか、義藤が朱護だからなのか分からぬ。ただ、彼らが敵でないということは分かつた。悠真は空腹だったから、握り飯に手を伸ばしたが、それを口にする勇気はなかった。悠真は彼らの囚人だから。自由を奪われて、閉じ込められて、それで彼らの道具になる。

「俺はどうしたら良いんだ」

悠真は思わず呟いた。自分の行動で誰かが傷つく。その愚だけは犯したくない。それでも、悠真は何が正解なのか分からぬ。

義藤に答えを求めて無駄だ。昏々と眠る義藤は命を削りながら生きている。今にも消えそうな義藤の命。今にも消えそうな義藤の色。一刻も早く手当てをしなければ、義藤は命を失ってしまう。

義藤……

悠真は義藤を思った。彼は生きなくてはならない。悠真是心配をするしか出来なかつた。

「心配しなくていいのよ。私たちは、これ以上、義藤を傷つけるつもりはないから」

悠真的独り言に返事をしたのは、女の声。見上げると、粗末な着物を身に付けた若い女性が立っていた。黒く長い髪を後ろに束ね、強い眼差しが印象的だ。声からすると、千夏。その後ろには握り飯を持つてきた秋幸もいた。

「あんたは？」

悠真是尋ねた。彼女は千夏のはずだ。

「昨日会ったでしょ。私は千夏。後ろにいるのは秋幸」

間違いない。やはり、彼らは黒服の敵だ。悠真是身を固めて、警戒

した。彼らが義藤に危害を加えるつもりがないとしても、紅の敵であることは真実なのだ。

「警戒したところで無駄よ。命を奪われないよう、慎重に行動することね」

千夏は言つた。それは、敵か味方から分からぬ發言だつた。

「一体何なんだ？あんたたちは何なんだ。一体、何が起こっているんだ？」

悠真は尋ねた。彼らが味方なのか、敵なのか。味方ならば、悠真と義藤が助かる可能性は大きくなる。しかし、彼らは紅の敵だ。紅を守る義藤の敵だ。

「紅は官吏に命を狙われている。きっと、官吏であるあいつにとつて紅は気に食わない存在なのよ。今の紅が誕生して十年。紅は官府に呑まれなかつた。官府の思い通りに動かず、優れた術士たちに恵まれて、命を狙うにも容易く出来ない。一部の官吏は、それが気に食わないの。私たちは、火の国で最も愚かな男に利用される、生きる価値のない存在よ。それでも、義藤を死なせたりしない。私たちが義藤を殺したとなつたら、ばば様への裏切りになるから」

千夏は牢の鍵を開けた。なぜ彼らが義藤にこだわるのか、そしてばば様が誰なのかも分からぬ。それでも、尋ねることが出来なかつた。

「秋幸、小猿が暴れないように見張るのよ」

千夏はそう言つと、牢の中に入り義藤の横に膝をつくと、そつと義藤の頬に手を触れた。

「熱が出てきている。白の石が必要かもしけれ」

言つと、千夏は持つていた箱を開いた。義藤に巻いていた布を解き、傷口を確認すると箱の中から薬を出した。

「義藤は小さい頃から怪我ばかり。義藤だけじゃないけれど、義藤が一番怪我をしていた。いつも無茶をするんだから」

その声に義藤に対する敵意はなく、むしろ慈しみを感じた。悠真は間を計りながら千夏に尋ねた。

「義藤の知り合いなのか？義藤を助けてくれるのか？」

すると千夏は苦笑した。

「私たちは義藤の幼馴染よ。私たち四人は、義藤が八歳のころまで一緒に育つた。義藤が、街にもらわれていくまでね。義藤が術士になり、紅を守っていると知つて驚いたよ。義藤は誰よりも紅を憎んでいると思つていたから。私たちが義藤と別れて四年後、つまり十年前に先代の紅が死んで、今の紅が誕生したことが義藤の気持ちを変えたのかもしれないね。せつかく選別をかいくぐつて普通の生活を送る権利を得たのに、それを捨てて。馬鹿な義藤。紅を憎んでいたはずが、今や紅を守るために命をかけているんだから。だから、あんたを紅だと間違えたのよ。義藤が身を犠牲にして守るから千夏は手馴れた手つきで義藤の傷を確認し、手当てをした。悠真は千夏たちが悪い人だと思えなかつた。それは、義藤と彼らが友達だから。彼らは友達である義藤を殺す覚悟を決めて、友達である義藤に殺される覚悟を決めて、一体彼らは何のために戦つたのだろうか。彼らは紅や義藤を真に憎んでいるわけではない。なのに、彼らは義藤と紅に牙を向けた。

「どうして、紅の命を狙つたんだ？」

悠真が尋ねると、千夏は手を止め悠真を見上げた。その目はとても強かつた。

## 赤の囚人（3）

なぜ、愚かな男に仕えるのか。殺されることも覚悟して、紅に刃を向けるのか、その理由を悠真が尋ねると、強い目を見せた後、千夏は哀しそうに微笑んで答えた。

「私たちは、選別をかいぐり、普通の人として生活をしていた。捨て子の私たちは戸籍を持たず、選別を受ける必要がないから。なのに、私たちが術士の力を持つていることが知られてしまったのよ。私たちは存在しない存在。紅の庇護の下にないないから、利用されるしかない。例え、火の国一の愚かな男に利用されると分かつても、大切な人たちを守るには、それしかないから」

悠真はようやく分かった。千夏たちは大切な人を人質に捕られ、従うしかなかつたのだ。だから、義藤とも戦つた。己が殺されることも覚悟して、義藤を殺すことも覚悟して、紅に刃を向けたのだ。

戦つたのに、義藤を助けようとしている。彼らは義藤を助けようとしている。しかし、助けるならば、ここに連れてくるべきではなかつた。こんな牢の中では助かる命も助からない。

「ねえ、どうして義藤を連れてきたんだ？もし本当に助けたいのなら、連れてこずに紅城に残すべきだつた」

悠真が言うと、秋幸が笑つた。

「俺たちは囚人なんだ。だから、自分たちが解放されるために義藤を連れてきたんだ」

悠真は秋幸の言葉の意味が分からなかつた。

「はあ？」

素つ頓狂に返した悠真に秋幸は笑い、膝を折ると義藤の手をとつた。

「ごめんね、義藤。ごめんね」

秋幸は義藤の手を握ると答えた。

「分からない？俺たちはね、自由にしてもうつために義藤を連れてきたんだ。自分たちを自由にしてもらつたためにね。もしかしたら、

義藤が身を犠牲にして守った紅が偽者かもしれない。そんな想像、簡単にできたよ。俺たちと比べて、紅はとても優れた存在なんだから、自分を暗殺しようとしている犯人が近づいていることに気づいても当然だよ。ならば、ここに紅はいなくて、偽者かもしれない。第一、本物の紅ならば、俺たち隠れ術士より遙かに強い力を持つていて、簡単に勝てるはずだからね。俺たちは、あんたが偽者である可能性も考慮して、義藤を連れてきたんだ

「え？」

悠真は、ますます意味が分からなかつた。秋幸は笑つた。

「もし、ね。あんたが偽者だとするよ。ならば、あんたを連れてきて、紅は俺たちを追わないかもしない。俺たちを負わずに、暗殺しようとした犯人も、犯人が駒に使つた隠れ術士も探さないかもしない。それだと困るんだ。探してもらわないと困るんだ。だから義藤を連れてきた。もし、偽者の紅を捕らえたとしても、本物紅は義藤を助けに必ず来る。義藤は紅を守る最強の盾だろ。それに、色神を心から憎んでいた義藤が正規の術士となり、その上朱護頭になるなんだから、義藤は紅と何かしらの関係があるんだ。だから紅は義藤を見捨てたりしない。義藤を助けるためにこの場所を突き止め、義藤を助けるために、あの腐った官吏とも戦い、俺たち隠れ術士を殺しに来る。それでいいんだ。紅がここを探し出すためには義藤を連れてくることが必要で、紅がここを突き止めてくれれば俺たちは自由になれる」

秋幸はそこまで考えているのだ。紅にこの場所を突き止めてもらつて、紅に解放してもらうために義藤を連れてきたのだ。万一、悠真が偽者であったとき、紅が犯人を搜すことを諦めないように。

そんなことしなくても、紅はきっと犯人を探し出すはずだ。ここに義藤がいなくても、悠真がいれば助けに来てくれるはずだ、と。それは紅の人柄を知っている悠真だから断言できる、畏れ多いことだ。自分をどれほど高貴な存在だと思っているのだと、非難される

だろうが、悠真は断言できた。紅は誰であっても命を見捨てたりしない。

「義藤がいなくても、紅はここを突き止めるよ。紅はとても素敵な人なんだ。紅だけじゃない。陽緋の野江や朱将の都南、そして佐久に鶴藏、延次も赤の仲間たちは素晴らしい人たちだ。官府や官吏の思つようになさせたりしない。義藤を連れてくる必要はなかつたんだ」

悠真が断言すると、千夏が苦笑した。

「随分、紅を信じているのね。本当に奇妙な小猿ね。何を後悔しても、もう遅いの。私たちは前に進み続けるしかできないのだから。後は殺されるのを待つだけ」

千夏は何も後悔をしていない。紅に刃を向けたことも、おそれくこれから殺されるということも。

「ごめんな、義藤。もう少し頑張つてちょうどい」

千夏の言葉は偽りを含んでいない。悠真は千夏たちを信じようと思つた。信じるしか、生き残る道は無い。

「とにかく、私たちが紅の命を狙うのも、義藤と戦うのも、朱軍と戦うのも本意じゃないことは確か。それだけは忘れないで」

千夏の目が義藤を愛しそうに見つめていた。そして最後にゆっくりと付け加えた。

「もし、小猿と義藤が生き残ったのなら、決して私たちのことは義藤に伝えないで。赤い夜に戦つた相手が、同じ山で育つた仲間だと義藤は知らないといい。知っちゃいけないの」

彼らが死ぬことを覚悟しているから、とても悲しく感じた。

## 赤の囚人（4）

四人の敵は全てを覚悟して紅に刃を向けたのだ。それは大きな決断だつたに違いない。何が大切なか、何を守るのか、彼らは選択したのだ。友人、義藤と戦うことになつてもだ。悠真が千夏と秋幸を見比べていると、地下牢の扉が開き、光が差し込んだ。ゆっくりと響く足音は悠真たちに向かつて近づいている。

「千夏、秋幸」

言つて入つてきたのは、背の高い男。鋭い目はどこか都南と似ていたが、都南よりも威圧的な雰囲気を持つていた。声からすると、春市。

「春市、どうかした？」

目の前にいるのは春市だ。秋幸が春市に尋ねていた。

「春市、何かあつたんだね」

千夏が言つた。春市はひどく肩を落とし、深く息を吐いていた。何かがあつたのだと、分かるほどだ。

「奴が呼んでいる。再び紅に攻撃を仕掛けるつもりだ」

春市が言い、その言葉に千夏が苛立つた。悠真も戸惑つた。四人の隠れ術士を利用する官吏は、再び紅に戦いを挑もうとしている。紅は義藤を人質にとられ、彼らは紅に殺される時を待つている。紅が四人の隠れ術士を許すか分からない。けれども、悠真は四人の隠れ術士たちに命を落として欲しくなかつた。大切な人を守るために紅に刃を向ける決意をし、こうやつて義藤の身を案じてゐる。己が殺されることも視野に入れ、それでも未来を模索してゐる。彼らが死ぬ必要はない。死さえ覚悟していくとも、彼らは無謀なことをするつもりはないらしい。千夏が苛立ちを露に春市に言つた。

「冬彦抜きでするつもり？ 今度は向こうも警戒している。義藤が負けた相手だからね。冬彦は一番の力の持ち主よ。冬彦が抜きで、朱将と陽緋が動けば私たちに勝ち目はない。今も、赤影が動いている

かもしだい。下手な殺され方をしたら、みんな奴に殺されてしまう。殺されるなら、うまく殺されなくつけ……。今、行くべきじゃない

千夏が義藤の傷を布で巻きながら言った。弱気な千夏を叱咤するように春市は言った。

「そんなことは分かつていて。それでも、俺たちは紅に牙を向けた。いかなる理由があろうとも、色神に牙を向けた。覚悟を決めただろ。俺たちはもう、戻れないところに足を踏み入れているんだ」

春市は壁にもたれかかり、腕を組んでいた。そして、一つ溜め息をついた。

「千夏、今度は俺と千夏の一人で行こう。秋幸は冬彦と残る。それで良いだろ？」

悠真は春市と千夏を見ていた。紅の命を狙うこととは、彼らの意に反している。そして、彼らは都南や野江に殺されるかもしれない。悠真は混乱した。悠真の復讐相手は春市たちだ。都南と野江が復讐を果たしてくれるが、それは春市たちが死ぬことを意味する。悠真の中にそれで良いのかと躊躇が生まれた。春市たちの行動には理由がある。悠真の故郷を破壊した彼らを悪とするのなら、彼らを殺す紅たちは正義なのか？ 悠真には分からない。

春市たちは理由があつて行動している。本意でなく、彼らの理由があつて。死なせたくない。殺すことは何の解決にもならない。なぜ、このようなことが生じたのか。彼らを殺すだけでは意味が無い。「秋幸、ここで小猿の相手をしてや。千夏と俺は奴のところへ行く」春市は秋幸に命じた。

「秋幸、何かあれば義藤と冬彦を連れて逃げる。朱軍がここへ攻めてくるかもしない。赤影が来るかもしない。その時は、自分が生き残ることだけを考えろ」

春市は秋幸へ歩み寄り、そつと秋幸の肩を叩いた。春市の一拳手一同が兄弟への慈しみを示していた。

「必ず、生き残れ」

言つて、春市は秋幸の肩を叩き、身を翻した。千夏も立ち上がり、  
秋幸に囁いた。

「落ち着いて、仲間を信じて。自分を信じて」

言い残して、千夏も立ち去った。悠真はその言葉に聞き覚えがあつた。それは、義藤が悠真に告げた言葉と同じだ。千夏は秋幸に鍵を渡した。逃げるなら今しかない。それでも、逃げたところで義藤を連れて行けない。悠真は行動することが出来なかつた。

## 赤の迷い（1）

秋幸は眉間に深くしわを刻みながら、一つ息を吐いた。残された悠真は動けず、この場を動かす権利は秋幸が持っている。悠真は何の力も持つておらず、秋幸に逆らうつもりもなかつた。それは、秋幸たちの強い意志を知り彼らの邪魔をしたくない気持ちがあるからだ。秋幸が鍵を持ち、悠真たちの命を持つている。

「ここにいる。鍵はかけないから。何かあつたら、義藤を連れて逃げろ。義藤はこんなところで命を落として良い人じやないんだ」

秋幸はそう言い残した。

秋幸は悠真を信じた。

そういうことだろうか。信じたから、悠真を残して、鍵もかけずにここを去つた。

それとも、悠真が義藤を連れて逃げることが出来ない、悠真にはそんな力がない、と思っているのだろうか。

それとも、秋幸が不在の間に何かが生じる危険性があり、万一の時を想定して鍵をかけなかつたのだろうか。

想像することは容易いが、眞の理由は分からぬ。確かなことは、今、牢の鍵は開いており、自由に逃げることが出来るということだ。悠真は開いた牢の扉と義藤を見比べた。義藤は細身だが、意識を失つた人間は想像以上に重たい。また、傷の深い義藤を安易に動かして良いものか判断がつかない。万一、義藤を背負つて悠真が飛び出したとして、ここはどこなのか、どのよつにすれば紅城へ戻れるのか、悠真には想像もつかない。

逃げるべきか。  
残るべきか。

何が最善の策なのか、悠真は決めることが出来ずについた。

逃げるなら今しかない。鍵は開けられ、見張りもない。しかし、動く勇気がない。

「紅、俺たちはここにいるんだ」

悠真は呟いた。

「紅、義藤はここにいるんだ」

悠真は牢の低い天井を見上げて、紅の鮮烈な赤を思い出した。今、紅はどんな気持ちでいるのだろうか。義藤を血眼になつて探しているのだろうか。義藤を心配し、涙を流しているのだろうか。

「紅、今は何をしているんだ？」

紅の心を思つと、悠真は罪悪感で押しつぶされそうになつた。弱さを見せるのが苦手な紅は、今も平然とした姿を見せてているに違いない。どのようにすれば皆が傷つかずに済むのか、答えを知る者がいるならば、答えを教えて欲しかつた。悠真は一度と愚を犯したくなかつたのだ。

この状況から助けてくれる者がいるのなら、悠真はその手にすぐるだろう。義藤は青白い顔で、懇々と眠つている。

「紅、助けてくれ」

義藤を見ると、一刻の猶予もないことは明らかだ。紅に義藤を助けて欲してもらいたかつた。

同時に悠真に生じるのは彼らを死なせたくない、という紅と義藤を裏切るような気持ち。春市、千夏、秋幸、冬彦。彼らは悪い人でない。彼らは、紅に殺される覚悟で戦いを挑んだのだ。彼ら四人を助けて欲しいと願う気持ちは、紅を裏切るような行為だろう。官吏に逆らうことが出来ない隠れ術士とは言え、彼らが紅に刃を向け

たのは事実で、紅の信頼している義藤が深い傷を負つてここで眠っているのも事実。色神紅の権限があれば、彼らに釈明の機会を与えることに野江たち赤の仲間は否と言つだらうが、赤丸は何も言わないだろう。赤丸は紅の刃なのだから。紅が声を発すれば、赤丸は四人を殺しに来る。思えば、彼ら四人も赤影と赤丸のことを恐れていた。

悠真がすがるのは紅の、敵の官吏がとかげの尻尾きりをしないよう証拠を掴む、という言葉だけだ。証拠があれば、紅は四人の隠れ術士の真実を知るはずだ。真実を知れば、きっと紅は四人の隠れ術士を助ける。悠真は紅を信じたかった。

彼らの命は紅に掛かっている。  
義藤の命は紅に掛かっている。

どうすれば、皆が助かるのだろうか。

紅が四人を暗に殺害するはずがない。紅と出会い、紅と言葉を交わした悠真はそのことを理解していた。紅の人柄を知っているからだ。しかし、義藤を傷つけられた紅がどのような行動に出るか分からず、このまま義藤が命を失えば紅は心を乱すだろう。

「紅、俺はどうしたらいいんだ？」

悠真は誰もいない低い天井に問いかけた。もちろん返答などあるはずがない。全ては己で決めるしかないのだ。

迷った末、悠真は動かなかつた。動かないことも、一つの選択肢だ。

## 赤の迷い（2）

しばらくして足音が響き、戻ってきた秋幸の背には、少年が背負われていた。おそらく、その少年は冬彦だ。

「逃げなかつたんだな」

秋幸は悠真を見て、呆れたように言つた。そして、背負つている少年を指し示した。

「義藤に斬られた冬彦だ」

秋幸はそう言つと、開け放した牢の向かいの通路に冬彦を寝かせ、彼自身も腰を下ろした。

冬彦は小柄だったが、思ったより子供ではなさそうだった。眠っている顔立ちが出来上がりつつあるからだ。この冬彦は色の力を引き出す強大な力を持つていて、色を引き出す力は野江に並ぶだろう。冬彦が赤色の相性が良ければ、と考えると恐ろしい。赤色との相性が良く、正規の術士ならば、野江を超えるまではいかずとも、相当の力を引き出せるはずだ。恐ろしい才能。恐ろしいが、悠真はどうか羨ましかつた。

「大丈夫なのか？」

悠真は冬彦の身を案じた。優しい義藤は人を殺したりしないはずだ。けれども、冬彦を傷つけている。それだけ余裕がなかつたということだろう。

「それは冬彦のこと？」

秋幸が悠真に問い合わせし、悠真は頷いた。すると秋幸は可笑しいものでも見つけた可能のように小さく笑つたのだ。平凡な印象の秋幸が一瞬高貴な存在に見える。そんな、穏やかな笑いだ。

「あんたさ、相当変わつてゐるな」

秋幸は笑い、冬彦に目を向けた。

「大丈夫さ。義藤は優しいから命を奪うようなことを避けている。

千夏が薬を使って強制的に眠らせているんだよ。そうしないと、冬彦は休んだりしないから」

悠真は目を細めた。

「なんで、そこまで？」

仲間を薬で眠らせるということは常軌を逸しているように思えたのだ。

「守るためだよ。春市と千夏は紅に刃を向けて、己が殺される」とを覚悟しているのに、どうやら俺たちを守りたいみたいなんだ。だから、冬彦を眠らせて、俺を残して一人で向かった。優しいんだよ。春市と千夏は、年上だからと、冬彦と俺を守ろうとしているんだから

「秋幸は笑い、続けた。

「本当はね、俺だつて二人と一緒にきたかったさ。でも、二人の気持ちを踏みにじることは出来ないだろ。それに、眠る冬彦を一人残すことは出来ないから。とても迷つたけれど、ここに残つたんだ。春市と千夏と一緒にけば、俺は多少なりとも一人の力になれるかもしれないけれど。同じ殺される道しか残されていないのなら、二人の優しさを拒絶する理由は無いから」

悠真は秋幸と冬彦を見比べた。秋幸は普通だ。普通で平凡。そういう印象なのに、どこか高いところから物事を考えているように思えた。秋幸が悠真の立場にいたら、より良い道を探し出して行動できるだろう。そう思えるほどだ。一緒に行きたいという気持ちを持ちながら、年上の二人のためにこの場に残る。一人の考え方を知り、己の行動を決めていた。それが秋幸。

「なんで、生き残る道を探さないんだ？」

悠真は秋幸に問うた。まるで、諦めたような秋幸の発言が信じられず、そのような発言をする秋幸が許せなかつたのだ。

「紅は何も思わず人を殺すような人じゃない。なんで、生きようとしているんだ！」

声が裏返るほど荒立つたのは、悠真と年齢の変わらないだろう秋幸

が落ち着いているからだ。年齢の近い人から、生きることを諦めたような発言を落ち着いて聞けるほど、悠真は大人でなかつた。

「落ち着けよ。紅が優しい人だと、紅が人を殺すような人じやないとか、そういうのはあまり関係ないんだ。紅は俺たちを殺さなくちゃいけないんだ。立場上、俺たちを殺さなくちゃいけない。それが、紅の意に反していてもね」

悠真は秋幸の言葉の意味が分からなかつた。悠真が戸惑うのが分かつたのか、秋幸はゆつくりと続けた。

「紅は俺たちを殺さなくちゃいけない。それは、紅が色神だからだよ。己に刃を向けた人間を生かす。それは許されるようなことじやない。厳格に罰を下すのも、紅の威儀と権威を保つためには必要なんだ」

悠真には秋幸の言葉の意味が分からなかつた。威儀の意味も分からなかつた。権威の意味も分からなかつた。

「紅はそんな人じやないんだ。俺は、紅と出会つて紅の本当の姿を見たんだ。色神である前に、紅は一人の人間だから、紅の全ての行動に紅の人柄が出るんだ。紅はそんな人じやない。そんな人じやないんだ」

悠真が断言するのが可笑しいのか、義藤は更に小さく笑つた。

「そうだね。義藤が信じるくらいだ。そんな変な人だつたら、一直線に走り続ける義藤が一緒にいれるはずがないから。それに、戸籍のはつきりしない義藤を、才能だけで朱護頭に起用することは並大抵の決断力じやない」

悠真は秋幸の考えが変わつたように思えて嬉しかつた。

「そなんじよ。紅は優しい人なんだ」

悠真は嬉しかつた。秋幸が生きることを諦めないことは、四人の隠れ術士が生き残ることに繋がるように思えたから。秋幸に生きることを迷わないで欲しかつた。

## 赤の迷い（3）

悠真は秋幸に親しみを覚えつつあった。秋幸を初めとした四人の隠れ術士に生きて欲しいという願いは、時が経つごとに強まった。「なあ、秋幸。分からないんだ。秋幸たちと義藤はどんな関係なんだ。同じ山で育つたって言っていたけれど、本当はどういうことなんだ？俺は、信じたいんだ。秋幸たち隠れ術士のことを」失礼かもしれないが、悠真は秋幸に尋ねた。すると秋幸は柔らかく微笑んだ。

「確かに、話しても良いかもしれないな。俺たちの信念と覚悟をね」

秋幸はゆっくりと話した。彼らの生き立ちと、義藤との関係。そして、なぜ、奴らに手を貸すのか。

春市、千夏、秋幸、冬彦の四人は本当の兄弟でない。皆、路上で生まれた。親の顔も名前も知らず、己の出生の理由も知らない。そのまま路上で死ぬ運命だった。

最初に出会ったのは、春市と千夏だった。一人は気づいたときから一緒だった。捨て子を拾い奴隸として使う組織に拾われていたのだ。そんな春市が五歳、千夏が四歳のころ組織の壊滅に術士が乱入してきた。名も分からず、女術士だった。大半の子供は孤児を扱う施設に入れられ、相応の戸籍を与えられたが、春市と千夏はそうしなかった。女術士が施設に入れなかつたのだ。

二人は術士の才覚を有していた。孤児を扱う施設で、術士が現れたら必然的に隠れ術士にさせられてしまう。隠れ術士として、奴隸にさせられてしまつのだ。女術士はそれを避けるために、一人を山

に連れて行つた。

その山にいたのが、義藤と忠藤であった。

女術士はその後秋幸を連れてきた。秋幸も術士としての才覚を有していたからだ。

忠藤と義藤を育てていたのは「ばば様」だった。ばば様も術士であつたが、現役を退いているらしい。それに、ばば様も隠れ術士であつた。どうやら、ばば様は女術士と関係のある人らしいが、女術士のことを一言も話さなかつた。

ばば様は年齢不詳。戸籍もないらしい。不思議な人だが、秋幸たちにとっては親だつた。春市、千夏、秋幸という名をつけたのも、ばば様だつた。組織にいた頃、春市と千夏に名はなかつたらしい。

忠藤と義藤は女術士のことを知らず、秋幸も姿を見たことはない。存在するが、存在していない。そんな人のようであつた。

女術士が最後に連れてきたのが冬彦だつた。もちろん、冬彦の名をつけたのも、ばば様だつた。ばば様は、冬彦にも名を与えた。(ちょうど、四人揃つて、季節が一年終わつて気持ちが良いもんだ)ばば様は春、夏、秋、冬、の四人が揃つたことに嬉しそうに笑つていた。

四人の隠れ術士と忠藤、そして義藤の六人は一緒に暮らした。秋幸はまだまだ子供だつたが、年齢の近い春市、千夏、忠藤、義藤の四人は、剣術を競い互いに力を高めていた。秋幸の記憶では、もつとも強いのは忠藤であつた。それでいて忠藤は優しく、秋幸は忠藤に懷いていた。

余談であるが現在、春市は二十三歳、千夏は二十一歳、秋幸は十八歳、冬彦は十五歳。千夏と義藤は同じ二十一歳だ。

戸籍の無い六人は術士としての才覚を有していたが、戸籍がないため選別を免れ、術士に匹敵する剣技と体術を学んだ。教えたのは、ばば様だ。

最も強い忠藤であつても、ばば様には手も足も出なかつたのだ。幼い秋幸は忠藤の後を追いながら、そのような生活が永遠に続くと思っていた。親のいない術士でありながら、ここまで幸せに過ごすことが出来る者は滅多にいないだろう。

秋幸の幸せな生活が終わったのは、今から十四年前のことだ。当時、秋幸は四歳であった。忠藤が大好きな子供だ。春市が九歳、千夏が八歳、冬彦は一歳だった。幼い頃の話なのに、秋幸が過去のことを鮮明に覚えているのは、決して秋幸が賢いからではなく、その日々がとても幸福だったからだ。春市、忠藤、義藤は秋幸の兄であり、千夏は姉であった。ばば様の死は、秋幸の幸せな生活に終止符を打ち、全てが変わったことを秋幸も感じていた。

ばば様の死と同時に、忠藤と義藤は山から離れて街へもらわれていった。ばば様は死の間際に、義藤と義藤の兄を守るために街へと隠したのだ。秋幸は泣きながら忠藤の服にすがり、それでも諦めるしかなかつた。

忠藤と義藤は自分たちと違う。

二人は誰にも存在を知られてはならない。

死んで良い人ではなく、誰にも存在を知られてはならない。

守らなくてはならない存在。

特別な存在。

秋幸はそれを感じていた。あの女術士は、ばば様が命を失つても、姿を見せることをしなかつた。もしかしたら、來ていたのかもしけ

ないが、秋幸たちに姿を見せることはなかつた。

残された秋幸たちは、ばば様を山に埋葬し年長だつた春市を筆頭に山での生活を続けてた。生活の方法はばば様が教えてくれていた上に、正体の分からぬ誰かが生活を支えてくれていたのだ。おそらく、あの女術士だと秋幸は考えていた。秋幸たちはある程度大きくなると、自分たちの存在理由を考えた。そして、孤児を育てることにしたのだ。その中に隠れ術士がいるかもしない。運よく助けられた自分たちの恩を、誰かに返さなくてはならないから。秋幸たちは約三十人の子供たちを育てていた。山で暮らす日々。この日々が続くと思っていた。

平和は突然終わつた。

子供たちは人質に捕られた。人質にとつたには大きな権力を持つ官吏であった。四人は術士としての才覚を持っていたが、石を持っていない。戦えない。子供たちがどこに捕らえられているのか分からぬ。下手をすれば、殺されてしまう。

四人は迷つた。大切なものは何か、何を守るべきか。迷つて、迷つて、そして、紅と対峙することを決めたのだ。

## 赤の迷い（4）

悠真は義藤の生い立ちを知った。そして、秋幸たちと義藤の関係を知った。それらを知つて思つことは、彼らを死なせたくないということだ。

彼らは自分たちの存在が義藤に知られることを避けようとしている。今、義藤は眠っている。このまま彼らが敗れ命を落とせば、義藤はある夜に戦つた四人の隠れ術士の正体を生涯知ることは無いだろう。万一、知つてしまえば、優しい義藤のことだ。どれほど悲しむか目に見えて想像できる。だから彼らは己の存在を隠そうとしているのだ。

「術士って、もっと素敵なものだと思っていた」

思わず悠真は呟いた。術士の才覚があれば、世界は変わるだろう。術士として生きることが出来れば、世界は輝くだろう。悠真は漠然とそのようなことを考えていたが、現実は違う。

術士の才覚を持つことで戦いを強要される。

術士の才覚を持つことで権力者に利用される。

術士として生きることは辛いことばかりだ。秋幸たちの存在がそれを示していた。彼らは強く、そして残酷な現実と向き合っている。謎の女術士が秋幸たちを山へ隠した理由が分かつた。孤児であり、戸籍を持たない彼らが、隠れ術士として利用されることを防ごうとしたのだ。なのに、結局利用されている。

皮肉なことに、色神紅と敵対する官吏に利用されているのだ。そして、色神紅を守る義藤と刃を交えることになったのだ。

皮肉なことだ。

悠真は秋幸を見た。秋幸は気の良さそうな人だ。年は悠真より二つ上なのに、同じくらいに見える。それだけ気さくで穏やかだ。彼らは大切な者を守るために戦っている。それが意に反しても、自分たちの命を失うことに繋がるとしても。悠真には出来ない決断だ。無力な悠真は、故郷を破壊した復讐をすると思巻くだけで、何も出来ず結局のところ義藤を傷つけてしまった。今の状況を作り出してしまった。誰かが守ってくれなければ、何も出来ない。

悠真のことを祖父が守ってくれていた。惣次が守ってくれていた。村の人々が守ってくれていた。そして火の国という国家が守ってくれていた。けれども、彼らは違う。国から存在を認められず、家族もおらず、四人で身を寄り添つて生きて生きたのだ。

秋幸は悠真に笑いかけた。その微笑みは術士に憧れを抱く悠真をたしなめるようで、術士の現実を悠真に伝えるようであつた。

「そりやあね、術を使えない人が術士を見たら、とてもうらやましく感じるだろうね。無限の可能性を持つ色の石を使い、強大な力を作り出す。術士として火の国から立場を保障され、生活に困らないけれども、現実は違うものだよ。そうだね、でも、矛盾しているかもしれないけれども、俺は術が使って良かつたかな。今日、紅に殺されるとしても、術士だから俺は俺らしく生きることが出来た。春市や千夏、冬彦と出会えた。この力がなければ、俺はとっくに路上で死んでいたかもしれない。力があるから、女術士に拾われたんだからね。この力が俺を生かし、俺を殺す。そういうことだね。無防備な力は、何よりも危ういものなんだから」

秋幸の言葉は悠真の中に秋幸という存在を大きく存在付けるのだ。

「火の国は平和な国だと思っていた。生活に困窮すれば近所の人があ助けてくれる。それでもどうにもならなければ、火の国が助けてくれる。術士が助けてくれる。そう思っていたのに」

悠真は火の国のこと何も知らなかつたのだ。火の国の眞の姿は温

かいものではない。これまで知っていたのは、色神紅が守る火の国  
の一部の姿でしかないのだ。秋幸は眠る義藤に目を向けて優しく笑  
つた。

「どうかな。基本的に火の国は平和だと思うよ。民を巻き込んだ大  
きな戦があるわけじゃない。物資に困窮して餓死する民が大勢いる  
わけじゃない。治安が悪く悪行が横行するわけじゃない。悪政なわ  
けじゃない。色神紅が守り、官府が政治を行つ。色神と官府の二重  
政治は事実だけれども、それが民に悪影響を与えていたわけじゃな  
い。今以上の平和を望んじやいけない。これ以上、紅に負担をかけ  
ちゃいけない。そしてこれ以上官府に負担をかけちゃいけない」  
悠真の頭に疑問符が並んだ。なぜ、秋幸は官府の心配をしているの  
だ？ 紅と出会つた悠真にとって、官府は悪でしかない・

「官府に負担？」

思わず問い返した悠真に秋幸はゆっくりと答えた。

「官府で働く官吏であつたつて、あいつのよつた悪い奴だけじゃな  
い。火の国を支えるために、必死で働いている者もいるんだ。  
もつとね、寄り添えればいいのに。つていつも思うよ。紅と官府は寄  
り添つて、人事の交換をしてみてもいいと思う。紅が官府に術士を  
派遣し、官府は紅に官吏を派遣する。興味があつてね、官府の中に入  
進入したことがあるんだ。官府の中にも複数の派閥がある。その中  
には紅に寄り添おうとしている派閥もある。もちろん、小さな弱小  
派閥だけれども。紅はその派閥を見つけられないんだ。そして、自  
分の信頼する術士を簡単に派遣することも出来ない。今紅が持つて  
いる信頼できる術士は少ないし、その術士は紅を守るのに必要な力  
だからね。紅と官府が寄り添うことが出来れば、もつと紅は生きや  
すくなる」

悠真は目を見開くことしか出来なかつた。秋幸は官府に侵入して、  
内情を探り、そして解決策を探している。

## 赤の迷い（5）

秋幸は平凡なのに、悠真には分からぬほど深いところで物事を考えている。

「紅が信頼している術士は少ないのは事実。おそらく、陽緋の野江、朱将の都南、朱護頭の義藤、そして先の朱護頭の佐久。紅を支える遠次。からくり師の鶴藏。そして加工師の柴。赤丸と赤丸率いる赤影。俺が見つけ出したのは、それくらいだけれども、おそらく間違いないでしょ？」

悠真は秋幸に尋ねられ、うなづいてしまった。それは紅の内情を伝えることになるが、秋幸は全てを知っているように思えたのだ。

「紅の手駒は少ない。もつと増やさなきやいけないけれども、そう簡単にはいかない。それに、一年前の戦いで紅の仲間が失つたものは大きい。それでも紅を守るために戦ってくれる、そんな存在は容易く現れない」

また、二年前の戦いだ。と悠真は思った。昨日の昼も、二年前の戦いのことを話していた。その戦いが大きなものであることは分かつていていたが、野江が話そうとしなかった。悠真がずっと気になっていたことだ。赤の仲間たちが一年前の戦いで負った傷だ。それは赤の仲間たちが秘密にしたい個人的なことであるが、悠真はそれが気になっていた。

一年前。

その言葉が呪文のように悠真の中で広がるのだ。佐久が先の朱護頭ということも気になる。日常生活で支障が出るほど佐久は身体を動かすことが苦手だ。いつも誰かが佐久を支えていた。そんな佐久が朱護頭として戦えるとは思えなかつた。少なくとも、刀を持ったときに倒れてしまいそうであつた。紅がそんな無茶苦茶な任命をす

るとは思えない。全ては一年前に関係している。悠真はそのように思った。

「ねえ、一年前の戦いつて？」

すると秋幸は首をかしげた。

「一年前の戦いを知らない？ それはどういうこと？」

秋幸の言葉に悠真はたじろいだ。平凡な印象の秋幸に全てを見透かされているように思えたのだ。そもそも、秋幸の見た目は平凡だがその実は違う。佐久と同様の天才だ。一年前のことを見た目は知らないことを話すのは、悠真の正体を伝えるようなことだ。それは避けなくてはならない。なぜか、そう思った。

秋幸はそんな悠真の心情さえ見抜いているように、小さく呟いた。  
「良いんだ、一年前の戦いの戦いを知らなくたって、もうすぐ死ぬだろう俺には関係の無いことなんだ。ただ、伝えておきたかったんだ。紅に、伝えて欲しいんだ。官府と寄り添うための方法をね。無理なことだと理解している。だって、紅には手駒が少ないから。信頼できる術士を一人でも遠くに置くことは、紅自身を危険にさらすことだから。それに、役職を得ている野江、都南、義藤の三人を官府に派遣することは出来ない。一人に複数の役職を任せることは可能だが、現状では負担が大きすぎる。そして、年齢を経た遠次が官府に行くことも、日常生活に支障が出るほど身体を動かすことが苦手な佐久が行くことも不可能だ。でも、一つ案として知つて欲しいんだ。義藤が命を惜しまず守る存在が、少しでも生きることが出来るように。伝えてくれないか？ 俺たちが殺された後、紅と再会を果たせたのなら」

悠真は混乱していた。秋幸は紅を守るための手段を知っている。紅城の中にいたら気づかないことに、外部にいるから気づいているのだ。秋幸は誰かに守られる存在でなく、わずか四人で戦つて生き抜いている。だから気づくのだ。外から見て、気づくのだ。

それは紅だつて同じこと。無知な悠真を守るために案を講じてくれたのだ。術士の世界は辛く悲しい。隠れ術士の秋幸を通じて隠れ術士の立場を知り、秋幸の話で正規の術士の立場を知った。そして、秋幸の話で紅が生きるための道を知つた。

悠真是紅たちに守られていた。

紅が悠真に惣次の石を渡したのは、悠真が自分の身を守ることが出来るように。

完全な術士にして、悠真の未来を奪わないように。野江が最初、悠真を紅城へ招くことを拒んだのは悠真を術士にしないために。

それでも、しぶしぶながら紅城へ招いたのは、力のある悠真が悪用されるのを防ぎ、悠真を守るため。

紅城へ行けなければ、悠真是手当たりしだい紅の石で己の力を暴走させていただろう。それは、瞬く間に悠真の名を世間に知らしめ、悠真是何者かに利用されていた。都南が悠真を自分の下へ預けるようになつたのは、悠真に正しい力の使い方を教えるため。佐久が悠真に義藤と一緒にいるように言つたのは、義藤が悠真に近しい立場だから。義藤が瀕死の重傷を負つたのは、悠真を守るため。悠真是皆に守られていていたことに、ようやく気づいたのだ。気づかなかつた悠真是とても無知で、気づかなかつたが故に悠真是幸せだった。紅たちは復讐に息巻く悠真をどのような目で見ていたのだろうか。愚かだと思つたのか、是非もないことだと思つたのか、悠真に図り知ることは出来ない。悠真是紅城で何の不自由も無く、気遣いもなく過ごすことが出来た。義藤の石を使って力を暴走させても、紅は一言も怒らなかつた。むしろ、笑つていたくらいだ。悠真是紅たちに守られていた。

悠真も紅の力になりたい。この秋幸の言葉を紅に届けたい。秋幸のためにも、届けたい。悠真はそれを願った。願いをかなえるためには、自らが生き残り、そして四人の隠れ術士も生き残らなくてはならない。官府にある派閥を知っているのは秋幸だ。だから、四人の隠れ術士も生き残らなくてはならないのだ。

それは、義藤を傷つけた隠れ術士を憎む気持ちと相反する気持ち。一つの気持ちの迷いの中では悠真是足を進める覚悟を決めた。

## 赤の迷い（6）

紅に生きて欲しい。

四人の隠れ術士に生きて欲しい。

一つの相反する願いの中で迷いながら、悠真は答えを探し、紅を思った。

悠真の迷いに気づいているのか、秋幸はそつと話題を変えた。義藤のようなぎこちない話題転換でなく、秋幸らしい話題の切り替えだった。

「それにしても驚いたな。噂には聞いていたけれど、本当に義藤が朱護をしているんだから。昔の義藤は紅を心から憎んでいたから。先代が死ねば、色神も別人か。それとも、今の紅に義藤の個人的な感情があるのか分からぬけれどね。俺たちが知っているのは、もうらわれていく前の義藤だから」

秋幸は義藤に目を向けて小さく笑った。

「義藤と一緒に育つたのは、本当に子供の頃だけだけど、俺は義藤に鍛えられたな。そのたびに、忠藤が助けてくれていたよ」

悠真は首をかしげた。義藤に兄がいた。死んだ兄だ。義藤が忠藤の死に対し、深い後悔の念を抱いていることは知っていた。

「忠藤？」

悠真が尋ねると、秋幸は苦いものでも噛み潰したような表情をした。「忠藤は落ち着いた、とても優しい人だつた。死んだらしいけどね。分かりやすいだろ。忠藤と義藤の一人合わせて忠義になるんだから。義藤は嫌つていたよ。何に忠義を尽くすんだつて」

秋幸は義藤をじっと見つめていた。それは、義藤自身も話していたことだ。秋幸と義藤に面識があることは紛れも無い事実であった。

「今でも信じられない。忠藤が死んだなんて。俺は忠藤が大好きだつたんだ。子供の頃の俺は、とても寂しがり屋だつたから、忠藤はいつも一緒にいて、助けてくれていた。俺が事故に巻き込まれたとき、庇つてくれた。本当に信じられない。死んでしまったなんて。それでも、義藤が生きていてくれただけで良かつた。だからね、死なせたりしないよ。義藤はこんなところで命を落としちゃいけない存在なんだ」

悠真は思った。彼らは本当に義藤の子供の頃を知っているのだ。一緒に育つたのだ。秋幸が辛そうな表情をするから、悠真は話題を変えようと考えた。けれども、不器用な悠真は、秋幸のように普通のことと言えない。

「俺は悠真だ。言つておぐが、小猿じやない」

悠真が頭を捻らせて考えた言葉に秋幸は笑つた。

「俺は秋幸。知つているだろうけど」

秋幸は人の好きそうな笑みを浮かべた。

「秋幸たちは殺されるのか？」

悠真は恐る恐る尋ねた。秋幸はそんな悠真を見て笑つた。

「きつとね。何度も言つたとおり、俺たちは紅の命を狙つた。朱軍や陽緋、赤影に殺されても文句は言えない」

悠真は、秋幸のことが分からなかつた。どうして、自分たちが殺されると簡単に言えるのだろうか。

悠真と年齢の近い秋幸は、とても話しやすく、悠真の中でばらばらだつた物が一つにつながり始めた。義藤のことが分かり始めた。理解すれば理解するほど、悠真はこの状況を開けるために頭を働かせた。一つの相反する願いをかなえるために、どうすれば良いのか、悠真は必死で考えた。どうすれば秋幸たちも、紅たちも助かるのか。一体誰が悪いのか、なぜ悠真の故郷は滅びなければいけなかつたのか、なぜ祖父と惣次は死ななくてはならなかつたのか。何もかもが変だつた。秋幸たち隠れ術士も、紅も、もちろん死んだ祖父

や惣次も悪い人で無いのに、なぜこのようになったのだろうか。悠真には分からぬ。理解できない。なぜ、秋幸たちが紅に刃を向けたことは事実だ。けれども、秋幸たちが死ぬことには反対だった。

「誰もがおかしい」

悠真は言った。秋幸が不思議そうに悠真を見ていた。

「思うんだ。紅たちと、秋幸たちが敵対する必要はないんだ」

秋幸は言った。

「許せるのか？俺たちは大切な人を守るために、紅を殺そうとした。……それに、他にも多くの人を殺したんだ。村を滅ぼしたんだ」秋幸は目を伏せ、とても苦しそうな表情を見せた。悠真の故郷を滅ぼした秋幸たちは、罪を負った。決して逃げることが出来ない罪を負つたのだ。滅ぼした村のことで苦しむ秋幸は、そのなかの生き残りが悠真だと知らない。悠真が復讐をするために紅城まで足を運んだことを知らない。復讐のために紅城に来たから、二年前の戦いのことを知らないという事実を知らない。

大切な人を殺された悠真の傷

罪の無い人を意に反して殺した秋幸たちの傷

どちらも大きな傷だ。秋幸は平凡な天才だからこそ、大きな罪悪感を覚えているのだ。何が悪いのか。秋幸たちを殺せば解決するのか。悠真は何も分からなかった。

## 赤の迷い（7）

秋幸は大きな後悔をしている。一緒に山で暮らしていた大切な子供たちを守るために、腐った官吏の言いなりになり、一つの村を滅ぼした。命は平等だと、火の国の民は口をそろえて言う。それが事実であるか、実際にそのように扱われているのか悠真は分からないが、命は平等だと言うことは周知の事実だ。その周知の事が、秋幸を苦しめていた。同時に秋幸が眞面目で優しいからこそ苦しむのが術士としての力の使い方だ。

「俺たちは許されないことをした。力を持つている以上、その力を正しく使わなくてはならない。いかなる理由があるうとも、俺たちは力の使い方を間違えた。間違っていると分かっていても、こうするしか無いんだ」

悠真は、諦めたような秋幸の言葉が心に残った。秋幸は生きることを諦めている。四人の隠れ術士は、優れた力を持っている。もし、彼らと紅が手を取り合うことが出来れば、全ての問題が解決するようになるのだ。彼らは悪い人で無い。紅を助けることが出来る力を持つ存在だ。

同時に、悠真を悩ませるのは故郷のことだ。失った故郷、そこで死んだ人々。生き残ったわずかな者。彼らは悠真を見て、何と言つだらうか。

復讐しろ。

もし、そのような願いがあつたら、悠真は彼らを裏切ることになるのだ。

ここで悠真が彼らを許せば、死んだ村の人々に、祖父と惣次に顔を

合わせられない。それでも、悠真は憎むことが出来ない。彼らは許されないことをしたが、悪人でないのだ。

復讐に息巻いていた自分が恥ずかしい。あの時の絶望はすぐそこにある。あの時の悲しみもすぐそこにある。それでも、悠真是目の前にいる気の良い人を憎めない。

どうして良いのか分からず、感情の整理が出来ない。何を選んでも、きっと悠真は後悔するのだ。

なぜ復讐しなかつたのか。  
なぜ復讐したのか。

どちらにしても、その決断は悠真を苦しめるのだ。悠真は秋幸を見て、このまま秋幸が殺される場面を想像した。紅は残酷な殺し方をするような人ではない。しかし、他の目もある。紅に刃を向けたことは許される罪ではない。罪を明らかにして、処罰を下し、紅の権威を示さなくてはならない。そのために、首をさらすことさえ厭わないかもしない。

さらされた四人の隠れ術士の首。空虚な目がひたと悠真を見つめる。動かないはずの口が開き、言うのだ。

それでいい。

死ぬことを覚悟していた。

彼らは恨んだりしないだろう。きっと、殺されても今の状況を肯定する。それでも悠真は苦しかった。彼らの内実を知っているのは悠真だけなのだ。紅は知らない。野江も、都南も佐久も知らない。

それでいい。

これが隠れ術士の運命だ。

力の使い方を間違えたのだから。

そもそも、隠れ術士を作り出したのは誰なのか。なぜ、四人は隠れ術士にならなくてはならなかつたのか。彼らには、正規の術士にな

る選択肢が無かつたのだ。孤児として生まれ、火の国から存在を認められず、その力を強者に利用される道しか残されていなかつた。利用されるしか残されていない道に立たせたのは火の国だ。そ利用されるしか残されていない道の上で、力の使い方を考えろ、と説くことが果たして可能だらうか。

それでいい。

子供たちを助けたかつたんだ。

彼らは子供たちのために利用される道を選んだ。果たして、このまま彼らが紅に殺され、人質は救われるのだろうか。救われる前に殺されるかもしれない。生き残つたとして、心に深い傷を残すに違いない。当然だ。親のように慕つっていた者が、処刑されたとなれば、紅に対する憎しみさえ芽生える可能性がある。

何が正義なのか。何が悪なのか。

何が正解なのか。何が間違いなのか。

果てしない迷いの中、悠真は決断した。今、この追い詰められた状況で全てを判断するのは難しい。

だから、判断を先送りにしたのだ。

悠真は秋幸に言った。

「今は、生き残ることだけを考えるんだ。紅たちは悪い人じやない。紅も野江も都南も佐久も、本当に火の国のこと、火の国で生きる民のことを考えてくれている。紅が許さないのなら、その時に罪を償えばいい。今すぐに諦めなくていい。生きることを諦めないで欲しいんだ」

判断を先送りにして、結果が変わるとは限らない。ここで生き残つても、紅が罪を申し渡せば、簡単に秋幸たちの命は奪われる。紅が命じれば、野江たちは命を奪うことを躊躇わぬ。野江たちが躊躇つて、義藤が反対しても、赤丸が命を奪うだらう。

それでも、秋幸たちが許される可能性は皆無ではない。そして悠真自身も、時間がたつてから、気持ちを整理してから、彼らに復讐を果たすべきか考えたかつたのだ。一時の感情で、愚かな決断をしたく区内のだ。

秋幸たちがこのような行動をとつたのは、己の大切な人を守るうとしただけのこと。確かに秋幸たちは利用されることを拒むことが出来た。しかし、拒めば秋幸たちの大切な人の命を奪うことにつながる。もし、悠真だつたらどんな行動をとるのか。それは想像するに容易い。悠真も祖父を守るためになら、見ず知らずの人の命を奪うことを選ぶ。今は、この場から生き残ることだけを考えればいいのだ。判断は紅に任せればいい。

「どうやつて生き残るんだ？俺たちは人質を捕られている。自由がない。人質を見捨てるのなら、とつぐに見捨てている。見捨てることが出来ないから、俺たちは愚かな官吏に利用されて紅に刃を向ける故ことを覚悟したんだ」

秋幸が悠真に言った。つまり、人質がいなければ、秋幸たちは紅に敵対する理由はない。全ての鍵はそこにある。

## 赤の手紙（1）

人質がいなければ、秋幸たちは紅に敵対する理由はない。人質を助けなければ、秋幸たちは紅に刃を向け続ける。半ば意地のように、秋幸たちは紅と戦い続けるのだ。

人質を助けるしかない。

秋幸たちは人質という牢獄に囚われているのだ。

秋幸たちを救うには、人質を助けることが秋幸たちの解放につながるのだ。

「人質を助けるんだ」

悠真は言い放ち、悠真の言葉に秋幸は立ち上がった。秋幸は苛立ちを見せていた。

「それが出来ないから、俺たちは紅と敵対することになつたんだ」  
秋幸の言葉はもつともな事。賢い秋幸が解決策を見出せなかつたら、このような状況が生じたのだ。

悠真は考えた。どのようにすれば、秋幸たちが自由に動けるのか。

考えると、紅の姿が悠真の脳裏に浮かんだ。紅が悠真に手を差し伸べている。紅はきっと、秋幸たちにも手を差し伸べてくれる。

「助けを求めるんだ。野江たちに助けを。秋幸たちが自由に動けないのなら、野江たちに助けてもらう」

無謀なことかもしれない。けれども、野江たち外部の人人が人質を助けてくれれば、秋幸たちは自由になれる。それに、まさか野江たちが人質を助けるとは、誰も予想していないはずだ。野江の強大な力があれば、人質救出も可能なこと。予想していないところから攻め入られれば、動搖し、勝利の色は薄くなる。

秋幸が再び腰を下ろして言った。秋幸の声は、未だに諦めの色が強い。

「だから、どうやって助けを求めるんだ。それに、陽緋たちが動く保障もない。俺たちは敵なんだ」

何を言つても負の言葉で返す秋幸に、悠真はいらだつた。

「もつと前向きに考えろよ。大丈夫、野江たちが助けてくれる。紅はそういう人なんだ。秋幸だって言つていただろ。義藤が信頼する紅のことを。信じるんだ。紅のことを」

秋幸は深く溜息をついた。

「どうやって、紅に知らせるつもりだ?」

悠真は無知な小猿だ。石の力を使えば良いと漠然と思つていた。

「石の力で何とかならないの?」

すると秋幸は息を吐いた。

「確かに、出来なくはないけれども、紅に連絡をするのは無理だね。相手が同じ石の破片を持っていないといけないから。それに、俺たちは自由に石を使えるんじやない。石はあいつが管理しているから」  
悠真の浅はかな考えは、すぐに底をついた。しかしすぐに、新しい考えが浮かんだのだ。

「俺が手紙を書くよ。それを届ければいい」

単純な悠真は、単純な答えしか見出せない。そして秋幸は悠真よりさらに深いところで物事を考えているのだ。だから躊躇う。

「誰がそれを真の手紙だと信じる? 悠真が俺たちに脅されて書いた偽物だと考えるのが普通だ。それに、罷かもしれないと警戒する」  
秋幸は平凡な印象なのに、冷静で頭が回る。だから、躊躇うのだ。  
「俺と紅たちしか知らないような内容を入れて。それを届ければいいんだ」

悠真は誰が届ける、どのように行く、などの細かいことを悠真は考えていない。それでも、何とかなると信じていた。悠真の前向きさを支えているのは、紅に寄せる大きな信頼。紅の赤色を、赤い声を、赤い空気を感じていたのだ。今は突き進むしかない。この状況を打

開するために、この状況から先に進むために、今は突き進むしかないのだ。

「俺が行くよ」

根拠も方法も定かでない悠真の作戦に、誰かが声を発した。悠真が声の主に目を向けると、それは眠つていていた冬彦の言葉だった。

「冬彦、気がついていたのか？」

秋幸が言った。

「まったく、千夏も酷いよな。無理矢理眠らせるんだから。目が覚めたら、秋幸と小猿が話しているんだ。少し気になつて、盗み聞きしていたんだ。良いじゃ ないか。俺が行く」

冬彦は答えて、まっすぐに悠真を見た。悠真より年下であるう冬彦は、小柄だが気の強そうな顔立ちをしていた。快活で、幼さのこる仕草。その幼さは前向きを作り出す。

「俺が行く。俺が紅のところへ行く。奴に俺は動けないと思われているから、俺が行くのがいい。秋幸、俺に任せろ」

冬彦は壁にすがりながら立ち上がった。義藤に斬られたのは昨夜のこと。満足に動ける状態でないことはあきらかだが、それでも冬彦は行くと言い放つた。そして立ち上がって、冬彦は言った。

「心配するな。俺が紅のところへ行く。紅が皆を助けてくれれば、春市や千夏が従う必要もないだろ。その後、紅が俺たちに罰を下すのなら、甘んじて受け入れればいい」  
冬彦はとても強い存在だ。悠真より年下だとは侮れない。『惑う悠真に冬彦は言った。

「早く用意しろ。俺は、紅を信じる。俺は、義藤とは面識がほとんどないけれど、春市や千夏、秋幸も義藤のことを信頼していたんだろ。その義藤が命を賭して守ろうとした存在が紅だ。皆が信じる義藤が信頼するんだ。紅を信じてもいいだろ」

秋幸は何も言わなかつた。しばらくした後、秋幸は何かを決心したかのように言った。

「こちらの方は上手く誤魔化しておく。悠真、紙と筆を用意するから手紙を書いてくれ。もし、冬彦が紅に殺されるようなことがあれば、俺は悠真を恨むからな」

秋幸の言葉に躊躇いはない。彼ら兄弟は深い絆で結ばれ、己の命よりも兄弟の命を優先する。義藤や野江たち赤い羽織の人々が、己の命よりも紅を優先するように、紅が己の命よりも火の国の安寧を優先するように。

## 赤の手紙（2）

紅へ手紙を書いてこの現状を伝える。それは突拍子もない作戦だ。紅が信じる保障は無い。それでも悠真は紅信じることにしたのだ。野江と都南の力を信じることにしたのだ。

この手紙を届ける冬彦にも大きな危険が伴う。問答無用で斬られる可能性もある。相手は、村を一つ滅ぼし、義藤を追い詰めて勝った存在。とても危険な存在だ。そして、紅であれば冬彦が持つ才能に気づくはずだ。白に愛された、恐ろしいほどの才能に……。

悠真は秋幸が用意してくれた紙と筆で紅に手紙を書いた。

紅へ

義藤と俺はここにいる。俺に詳しい地理は分からぬから、どこかは、手紙を持っていた冬彦に聞いて欲しい。俺は無事だし、義藤も彼らが助けてくれた。一応助けてくれた、という表現が正しいのかもしれない。義藤は愚かな俺を庇つて深い傷を負い、手当てをしてもらつたが白の石が必要な状況だ。そう彼らが言つていた。

彼らというのは、義藤と戦つた四人の隠れ術士で、春市、千夏、秋幸、そして冬彦。

四人が義藤と戦つて、俺たちをここに連れてきた。けれども、義藤を助けてくれている。彼らは義藤の幼馴染だから。紅と戦うのも、義藤と戦うのも、彼らの本意じゃない。四人も優れた才能を持つて、四人ともとても優しい人だ。紅に刃を向けることの危険性も、この先に生じるだろう自らの死も全て覚悟している。隠れ術士として、利用されるしか選択肢が無かつたんだ。

隠れ術士の四人は人質を捕られている。大切な、一緒に生活している子供たちを人質に捕られて、彼らは戦っている。それが間違いだと知つても、紅たちが自分たちを殺すと知つても、彼らは人質を助けるために戦つている。

紅、聞いて欲しい。人質さえなければ、彼らは自由だ。その後、紅に罰を受ける覚悟もしている。紅が死を申し渡すなら、甘んじて受け入れる覚悟をしている。それだけ必死なんだ。人質を助けるために。

今なら分かるんだ。俺が復讐を果たすと息巻いて、野江と一緒に紅城へ足を運んだときから、俺は紅たちに守られていた。俺はどうしようもない田舎者で、皆が考えているようなことが分からなかつた。そんな俺が言うのは間違つているかもしない。彼らは紅に刃を向けて、そして義藤を傷つけた。俺の村を壊滅に追い込んだ。それでも、助けて欲しい。

俺はずつと分からなかつたんだ。一体、何が正解で、何が間違いなのか。無知で無力な俺は何も出来ず、この状況に巻き込まれた傍観者でしかない。紅がくれた惣次の石を使えれば、こんなことならなかつたかもしれない。そもそも、紅城へ足を運ばなければ、あの夜、囮となる義藤と一緒に行かなければこのような事にならなかつたかもしれない。俺は過ちを犯し、紅たちに大きな迷惑をかけた。今度は迷惑をかけたくないんだ。

彼らを殺さないで欲しい。

彼らは隠れ術士として戦つたんだ。隠れ術士として、選択肢が無かつたんだ。彼らは優れた術士で、きっと紅の力になつてくれる。俺は、信じているんだ。

助けて欲しい。彼らは悪い人じやないんだ。紅や野江、都南、佐久が少しでも労を割いてくれるのなら、彼らは自分で踏みとどまることが出来る。今、彼らを罰しても何にもならない。彼らの上に立つ存在を捕らえなければ何にもならない。だから、助けて欲しい。

俺は分かつたんだ。

俺は無力で無知だ。

厳しい鍛錬を積んだ義藤でさえ、その勝利は万全ではない。都南と義藤の鍛錬を見たけれど、実際の戦いは甘いものじやない。紅の石だけじゃなくて、色の石は強大な力を持っているんだ。俺はようやくそれが分かつたんだ。

石の力は、術を使う人間に左右されるんだと、俺はようやく分かつたんだ。

四人の隠れ術士は、優れた力を持つた術士だ。それは、紅たちを支えてくれる力になるはずなんだ。助けて欲しい、と願うことは間違っているかもしれない。けれども、俺は助けて欲しいと紅に泣きつきたいんだ。四人の隠れ術士の真意を知つたから、俺は彼らに復讐しようと思わないんだ。助けて欲しい。紅、助けて欲しいんだ。

愚かな小猿 悠真

紅の元へこの手紙が届くことを悠真は願っていた。手紙が届けば、紅は必ず動いてくれる。そう信じていた。悠真が知る紅は、様々な顔を持つ存在だ。けれども、その正体は、色神になってしまった普通の女性。歴代最強の陽緋である野江も、普通の女性だ。朱将の都南も、佐久も普通の人だ。決して神ではない。邪でもない。動いてくれる。助けてくれる。悠真は信じて、紙を折った。

「頼む」

悠真は冬彦に手紙を渡した。問答無用で近づいてくる冬彦を斬り捨てる可能性もある。それでも悠真は信じていた。紅を、紅の仲間たちを。よろめきながらも、立ち上がる冬彦を秋幸が支えたが、冬彦はそれを振り払い足を進めた。

「秋幸、お前も死ぬなよ」

冬彦が年上であるはずの秋幸に上から田線で口にした。

「当然だよ」

秋幸は苦笑し、悠真は立ち去る冬彦を見送った。

## 赤の幻覚（1）

ただ待つことしか出来ない悠真は、一人地下牢の隅に蹲つた。秋幸は立ち去った冬彦がいるように誤魔化すために上へと戻り、その他、春市や千夏の動きを探つていた。悠真は何も出来ない。

「義藤、これでいいんだよな」

眠る義藤に声をかけても返答は得られない。義藤に一刻も早く適切な治療が必要なことは明らかだ。燃えるように熱い義藤の身体を冷やすため、悠真は桶の水に布を浸した。先ほどまで聞こえるほど荒かつた義藤の呼吸音は、とても静かになつていった。今にも消えそうな義藤の呼吸音が、悠真に一抹の不安を覚えさせた。

「義藤、紅が助けてくれるから。それまで、頑張つてくれ」

悠真は義藤に言つた。悠真を底い、傷を負つた友に言つた。悠真是大きな罪を背負つて生きていけるほど強くなかった。春市、千夏、秋幸、冬彦の四人が罪を負うことも嫌だつた。

「義藤……」

悠真は祈つた。祈ると同時に、自分に何が出来るのか考えた。自分に出来ることがないか、自分しか出来ることがないか、必死に考えた。それしか出来ないので、悠真は頭を使うのが苦手なのに、今大きなことを考えている。頭が割れそうなほど疲れていた。その疲れが引き金となり、ゆっくりと眠気が悠真を誘つた。

それは、唐突な眠気。

辺りが煙で覆われたように見えた。

悠真の視界は白い煙で満たされ、悠真の瞼はゆっくりと重くなつていつた。現実と幻覚の間で、悠真は義藤の姿を見た。そして、安堵した。

義藤がそこに立つていたのだ。

血で汚れた服を着ていない。そこには元気な義藤が立っていた。

「義藤……」

悠真は義藤を呼び、立つ義藤に手を伸ばした。すると義藤は静かに膝を折り、悠真の頭に義藤の手が乗せられた。横たわる悠真に、義藤は微笑んだ。

「よく頑張ったな」

義藤の手は温かく、悠真は安堵した。

「良かった、義藤。無事だつたんだね」

夢と現実の狭間にまどろみながら、悠真は義藤に言った。すると義藤はいつもと変わらない笑みを悠真に向けたのだ。

「案ずるな。まもなく紅が助けに来る」

義藤はいつもと変わらない。幻覚の中であつても同じだ。

「『めんね、義藤』

悠真はそれ以上言えなかつた。悠真よりも、義藤の方が辛そうな表情をしているからだ。

「大丈夫だ。小猿が気にするようなことじやない」

辛そうな表情をした義藤は、一つ息を吐いた。悠真の身体の自由はどんどん奪われていく。重たい身体。激しい眠気。これが夢なのか、現実なのか分からなかつた。

「ねえ義藤。秋幸たち、助かるよな」

悠真は義藤に尋ねた。義藤と四人の隠れ術士は幼馴染だ。義藤なら、彼らを助けるために何をするだろうか。

「紅への裏切りかもしれないけど、俺は秋幸たちに生きて欲しいんだ」

義藤に問うのは、自分の行動を正当化するためだ。義藤が可と言えば、許されるように思えたのだ。義藤は困つたように微笑んだ。

「大丈夫、大丈夫だ。春市、千夏、秋幸、冬彦がどのような人なんか、俺は良く知っている。まさか、官吏に利用されていたなんて、想像もしていなかつた。一步間違えば、俺も彼らと同じ道を歩

んでいた。大丈夫、紅は助けてくれる」

義藤の言葉は温かい。声は優しい。悠真は嬉しかった。身体が重く、悠真は地下牢の床に横たわった。床の冷たさも感じない、穏やかなまどろみの中に悠真はいた。

「義藤、俺は」

横たわる悠真は義藤を見上げた。そこには、抜き身の刃のようで、作り物のような義藤がいた。優しい義藤がいた。

「俺は、義藤のことが苦手だつたんだ。だつて、義藤強いだろ。それが怖かった。でも、間違つていたんだ。義藤はこんなに温かく、こんなに優しいんだ。だから義藤。無事で良かつた。本当に良かつた」

悠真は義藤の無事に喜んだ。嬉しくて、これまでの不安が消えたようと思えた。

「簡単に死んだりしないさ。紅が簡単に死なせたりしない。大丈夫。そばにいる」

義藤は笑つた。すこし、寂しげな義藤の笑いだつた。

全では幻想の中のこと。悠真は義藤のことが気になりすぎて、そのような夢を見たのかもしれない。

「少し休め

義藤の声が悠真の中で響いた。そして悠真は眠りに落ちていく。ゆっくりと、ゆっくりと眠りの中へ落ちていくのだ。

## 赤の幻覚（2）

夢を見た。

白い煙の中の義藤は徐々に消え、悠真の目の前から全てが消えた。

夢の中に色は存在しなかった。色の無い世界は、何も無い透明な空間が永遠と広がっているのだ。白かと思えば、黒になる。黒かと思えば青になる。色が無いということは、見方によつていろんな色に見えるといふことだ。そこは不思議な世界。

悠真

夢の中で紅が悠真を呼んだ。そこは色の無い世界。

聞こえる声が赤の声かと思って、悠真は目を凝らした。鮮烈な赤を、高圧的な言葉を、悠真は待つた。義藤を守るために叫んだ赤は、今何をしているのだろうか。

「赤？」

赤い髪を、赤い唇を、赤い瞳を、悠真は待つた。赤い声を、赤い空気を待つた。高圧的で、強い力を持つた赤が現れることを待つた。あなたは赤に染まりすぎている。駄目よ。赤だけに染まつては駄目よ。赤は常に悠真を狙つていて。それでも、一つの色を選んでは駄目。力を貸してくれるというのは今だけのこと。聞いてちょうだい。

それは紅の声だが、紅でない。悠真はすぐに分かつた。それは無色な声。

「誰なんだ？」

誰か分かっているけれど悠真は無色な声に尋ねた。

大丈夫よ。全ての色があなたを狙い、あなたに従つわ。あなた

は私が選んだ、私の色を司る人間。また、会いましょう。  
色の無い無色な世界は、無色な声の世界だ。

悠真は色の世界を思つた。赤を思つた。

「待てよ！」

呼び止めたのは無色のことだ。

「待てよ。あの時、俺が赤に染まることを拒んだのは、あんたなんだな。あんたが、義藤を！」

悠真に赤に染まるな、という声。その声が赤を拒んだのはあきらかだつた。

おだまりなさい。

声が悠真に言つた。

あなたは、何も知らない。

姿も見せない声が悠真を叱責した。

あなたは自分のことを知らない。

姿も見せない声が悠真に告げた。

はつきり言つて、私にとつて紅や義藤はさして興味もない存在なのよ。今の紅は良い子だと知つてゐるけれども、あなたと比較するのなら、私はあなたを選ぶ。分かつてちょうどいい。

悠真は愕然とした。この声の主が誰なのか、皆目検討もつかない。ただ、悠真にとつて好意的であることは事実だ。

「分かんないよ。一体、何がどうしたつていうんだ？」

何も無い空間。様々な色がめぐる場所で、悠真は声に問うた。声は姿も見せずに答えた。

私を狙う色は多いわ。赤もその一人。けれども、私が赤の国である火の国に姿を見せたのは、どこかで赤を信頼してゐるかも知れないわね。分かつてちょうどいい。あなたは存在を知られたの。赤だけじゃなく、全ての色にね。このような危機は序の口よ。私はあなたを気に入っているの。簡単には手放したくないのよ。悠真は理解できなかつた。

「どうしたことなんだ？」

問うた悠真に声は笑つた。

私は他の色に捕まるわけにはいかないの。赤が気に食わない紅を殺したように、私もあなたを殺すかもしれないわよ。

悠真の思考を言葉が飛び交つた。己が殺される。この声の主に殺される。

私はあなたの色。そして、あなたは私の色を司る人間。気をつけなさい。

悠真は声に尋ねた。

「俺は術士にもなれない存在だ。何がどうなつてこうなつたんだ？」  
悠真は赤の術士に憧れていた。自らに術士の才覚がないと知った時が、悠真にとって最初の挫折だといえるだろう。

姿を見せるつもりは無かつたわ。本来なら、私の色を持つ人間は普通の人間として生涯を終えるのよ。けれども今回は仕方なかつたの。あなたを助けるために、私は姿を見せ、赤に染まつた。あなたの感情を抑えるために、赤に染まり紅の石を暴走させた。それでも、私は赤に染まつては駄目なのよ。

「何で、赤を嫌うんだ？」

声は悠真に教えた。

赤を嫌っているのではないのよ。私は何色にも染まることは許されないの。何色にも霸権を握らせることは出来ない。赤は、強い色だという人もいるけれども、本当は違うのよ。赤は愛情深い色。だから、義藤を守ろうとするの。愛情深い赤が選んだ色神紅だから、あなたを助けてくれるのよ。

「赤を嫌つていないので、どうして赤を拒むんだ？赤はあんなに叫んでいた。泣いていた。義藤を守つてくれと叫んでいた。なのに、なのにどうして？」

悠真の言葉に声は黙つた。そして、しばらくしてゆつくりと口を開いたのだ。

あの時、義藤を犠牲にしてここに来たから、敵の正体が分かつ

たでしょ。敵の正体が分かり、紅は官吏を追い詰めることが出来る……。なんて言つのは、後からつけた口実ね。さつきも言つたでしょ。私は義藤よりもあなたを選んだ。あの時、赤に染まつては、あなたは赤から本来の色に戻れなくなる。だから、私は義藤を見捨てたの。私のことを蔑むのなら、お好きになさい。私は、何も後悔をしていないのだから。

声はそう言い、存在感を消した。

夢は恐ろしいほどの現実味を持っている。

これが悠真の妄想だとしたら、それは恐れ多いことだろう。まるで、自分が紅に匹敵する存在。悠真は妄想の中でそのように思つているのだ。

## 赤と友(1)

固い床の上で骨がきしんだ。身体が驚くほど冷たくなって、灯りは燃え尽き、地下牢の中は暗闇が深く、天井の木枠の窓からこぼれるか僅かな光では、かるうじて義藤の顔が見える程度だった。

「俺、寝てたのか……」

悠真は夢と現実の狭間で見た幻覚を思い出していた。

義藤の幻。  
夢の中の声。

全てが幻覚の中へと消えて行き、少しも現実と思えなかつた。悠真は思わず自分の頭に手を伸ばした。義藤の手のぬくもりが、今もそこにあるように思えたのだ。義藤の声が今でも胸の中で響いている。義藤の笑顔が目に焼きついている。

悠真は身体を起こした。そして、このような状況でも眠れる自分に、思わず苦笑した。田舎者の自分は、鈍感なのかもしれない。疲れているとはいえ、急激な眠気に負けて眠つてしまつなど、ありえないことだ。秋幸たちが敵で無いと分かつても、ここは官吏の屋敷だ。官吏は紅に敵対し、紅の命を狙つている。素性の定かでない義藤を見下し、紅を無能な色神だとしている。ここは紅の敵の屋敷。気を抜いてよい場所ではない。現実、状況は何も好転していないのだから。

この場に、野江や都南、佐久がいたら、何と言つだらうか。都南は悠真のことを小猿と笑つだらう。野江は庇つてくれるだらうか。佐久は共感してくれるだらうか。悠真は赤の仲間を思い出し、義藤に目を向けた。

「義藤」

悠真は四つ這いで義藤に近づいた。

幻覚の中で義藤は笑っていた。悠真の頭を義藤は撫でた。  
案するな。

幻覚の中の義藤は笑い、悠真を気にかけていた。まるで、義藤が最期の別れを告げたように思えたのだ。

「義藤！」

悠真は不安に襲われ、義藤にすがつた。

義藤は悠真が寝入ったときと同じ姿勢で横たわっていた。汚れて切れた赤い羽織を上からかけて、じざの上で眠っていた。

何も変わっていない。

はだけた着物の間から見える包帯は、血で汚れていた。顔も血で汚れている。静かに動く胸は、彼が生きていることを示していた。

何も変わっていない。

悠真は義藤の額に乗せた布に手を伸ばした。布を桶の中の水に浸して、絞つた。

「良かつた、俺、義藤が……」

死んでしまったかと思った。という言葉を悠真は飲み込んだ。義藤は死んでいないが、辛うじて生きているという状況から何も変わつていない。

（義藤が死ぬ）

その言葉は、口にしてしまつただけで現実になつてしまつて思えたのだ。

「大丈夫だよな。義藤。俺は何も出来ないけど、これで大丈夫なんだよな」

悠真は眠り続ける義藤に尋ねた。返事は無いのは分かっている。ただ、悠真は自分自身に言い聞かせるように言ったのだ。

「大丈夫だよな」

悠真は念を込めて、もう一度言い聞かせた。

布を再び義藤の額に乗せたとき、悠真は義藤の頬の熱が引いていることに気がついた。悠真が眠るまで、燃えるように熱かった義藤の身体の熱が下がっている。

「義藤？」

思わず悠真は義藤の手首をつかんだ。何が生じたのか、悠真は理解できないのだ。手首をつかんだ指の先から、義藤の心臓の鼓動を感じた。

「良かつた……」

最悪の事態でないことに、悠真は安堵した。依然として義藤は目覚めていないのに、最悪の事態でないことに安堵した。紅たちが助けに来てくれるまで、それまで耐え抜かなければならない。

義藤はまだ生きている。危険な状態であっても、まだ生きている。それだけが救いだった。

「義藤、俺、頑張るから。頑張るからさ」

悠真は義藤に言つた。それは自分への戒めの言葉。逃げないように、立ち向かうように、義藤に誓うのだ。

「俺、何も出来ない小猿だけど、全力を尽くして頑張るよ。だから、だからさ、一緒にいてくれよ。紅が助けに来てくれて、ここから脱出したら、俺に教えてくれよ。いろんなことを。俺が、一人前の人になれるように、教えてくれよ」

悠真は義藤の手を握った。眠り続ける義藤が消えてしまわないように、悠真は祈つていた。もうすぐなのだ。もうすぐ、紅が助けに来てくれる。悠真は信じていた。

大切な友、義藤が命を失うことが無いように、悠真は祈つていた。

## 赤と友(2)

階段から灯りを持つた人が降りてきて、悠真は義藤の前で身構えた。敵だと感じたのは、最初のこと。意識の無い義藤を守りたいと、いつ願いからの行動だ。

「大丈夫か？」

その声に安心して、悠真は息を吐いた。それは、秋幸だつた。秋幸は消えた灯りに再び火をつけ、牢の扉を開いた。普通の印象の秋幸の言動は、どこかで悠真を安心させるのだ。

「義藤は？」

秋幸は一番に義藤の心配をした。

「大丈夫みたい」

悠真が応えると、秋幸は牢に入り、腰を下ろした。

「良かつた。千夏がいなきや、義藤の身に何かあつたときに対応できなかつから」

秋幸は安心したようだつた。幼馴染という理由で、秋幸は義藤を思つてくれていて。敵が彼ら四人でなければ、義藤は苦戦することは無かつただろう。彼らはそれほど優れた実力者なのだから。しかし、敵が彼らでなければ、義藤は敵から助けられることは無かつただろう。義藤が四人と戦つたことが幸運なのか、不運なのか悠真には分からなかつた。

「二人は？」

悠真が尋ねた。春市と千夏は、紅たちに殺されるのを覚悟で行動している。年長である二人だからかもしれない。悠真はそんな二人が心配だつた。春市と千夏は、秋幸と冬彦を助けようとしている。そして、秋幸は彼らの意思を尊重しつつも、自らの死を予測している。すれ違う思いやりであつた。

「春市と千夏はもう一度、紅の暗殺に繰り出している。既に、暗殺

とはいえないな。だつて、俺たちが紅の命を狙つていることが紅に知られてしまつてはいるんだから。知られてしまえば、紅も警戒する。一度目よりも、二度目の方が成功率は低い。例え紅の前に義藤がないくても、陽緋や朱将が警護に当たるはずだから。そんな中で、再び攻撃を仕掛けたところで負けるのは明らかだ」

秋幸はゆつくりと息を吐いた。その目が空を見ていて、悠真は悲しかった。秋幸は何を思つてはいるのだろうか、そう考へるだけで辛かつた。

「春市と千夏はすぐに動いているわけじゃないと思つ。きっと二人は今頃準備をしている」

秋幸は言つた。そして、少し間をおいて続けたのだ。

「それで、どうして昨日の夜に紅はいなかつたんだ？俺たちの計画は外部に漏れていなかつたはずだ。もしかして、知つていたのか？だから、紅は隠れていたのか？なら、何で義藤はいたんだ？危険だと知つていて……もし、それが本当なら、紅は全てに覚悟を持ち、己の役割と、敵を追い詰める術を知つている」

悠真は秋幸を見て、彼が頭の良い人だと分かつた。秋幸は、紅たちの本心を見抜いているのだ。

悠真は兄弟を見て、それぞれの雰囲気を感じていた。彼らは異なる性格をしている。だからこそ、上手くいくのだ。互いに互いが足りない所を補いあつてはいる。

長男の春市は、兄弟から信頼を集めている。長兄という単純な理由だけでなく、表に出さない不器用な優しさがあるから。武将らしい性格で、最も強い力を持つ。

兄弟のうちで紅一点の千夏は、医学の知識を持つ。春市の隣で、春市とともに兄弟を見守り、親のいない弟たちにとつて母のような存在だ。時に厳しく意見を言い、時に包み込むような大きさを持つ。春市も、千夏をとても信頼している。

秋幸は普通だ。普通という表現が最も正しい。特殊な力を持つて  
いると思えないくらい普通で、悠真よりも年上なのにとても気さく  
だ。言葉も普通。態度も普通。なのに、時折、驚くほど深い場所で  
物事を考えている。今回の紅の件もそうだ。そして、春市と千夏の  
覚悟を分かっているから、悠真と共に残つた。

冬彦と悠真はほとんど言葉を交わしていないが、冬彦が紅の元へ  
行つたことで彼の人となりが分かる。末の弟だからかもしれない。  
無茶をする性格。無鉄砲とも思える行動は、時に固まつた兄たちの  
足を動かす力を持つ。一直線で、感情に正直。そんな印象。

悠真は秋幸に目を向けた。秋幸は悠真の目の前にいる。年は悠真  
の一〇歳上で、十八のはずだ。秋幸と親しくなりたい、秋幸の友にな  
りたい、そう願うのは悠真の本心だった。

故郷にいたころは、誰かと友になることに躊躇うことなど無かつ  
た。なのに、悠真は躊躇つていた。

秋幸がもうすぐ命を落とすかもしれないから？

秋幸が故郷を破壊したから？

秋幸が紅の敵だから？

いずれにしても、臆病者の悠真は踏み出すことが出来なかつた。

### 赤と友（3）

これまでの悠真は、友となることに理由を求めてはいなかつた。友とは、利益抜きにして必要な存在なのだ。今、悠真の目の前には秋幸がいる。故郷を滅ぼした秋幸だ。

悠真是深い信頼で結ばれている紅や野江たちが羨ましい。彼らは深い絆で結ばれている。その紅の眞の強さを秋幸は知らない。だから、赤い夜の戦いの時に、紅が義藤と共にいないことが理解できないのだ。紅が強いのは、紅の石を使う力でない。悠真是歴代の紅を知らないが、おそらく今の紅のように優れた力を持つていたはずだ。ならば、今の紅の力とは何なのか……。

陽緋 野江

朱将 都南

朱護頭 義藤

学者 佐久

師 遠次

からくり師 鶴藏

加工師 柴

紅は多くの仲間を持つ。あの時、敵の襲来に気づいた紅を守るために、赤の仲間たちは最善の策を練つた。紅の強さは、多くの仲間に愛されること。多くの仲間に恵まれたこと。彼らを友と呼べる気さくさ。人柄。それが紅の強さなのだ。

悠真是紅の強さを知らない秋幸に言った。

「紅は強いよ。俺は、紅のことを、ほとんど知らないけれど、紅がとても強い存在だって知っている」

秋幸は悠真を見た。その目は疑念に満ちていた。

「そういえば、悠真は何者なんだ？どうして、義藤と一緒にいたんだ？」

悠真も無知でない。容易く紅のことを口にしてはならないことぐら  
い分かつっていた。紅の所在や人柄は、全て紅を守るための内密情報  
だ。けれども、悠真自身のことならば構わないだろう。そう思った。  
「俺が紅城へ足を運んだのは、昨日の朝のことだ。俺は陽緋野江  
に懇願し、紅城へ足を運ぶことを願ったんだ。野江は反対したさ。  
俺は選別で術士の才覚を見出されなかつた凡人だつたし、野江は紅  
の周囲や術士の世界がいかに危険な世界だと知つていたから。けれ  
ども、俺は懇願した。だつて俺は、故郷を失つたんだ。俺の故郷は、  
豊かな海に面した自然豊かな場所だつた。そんな故郷に、異常なほ  
ど何日も雨が降り続き、裏の山が崩れて故郷は滅びたんだ。俺は嵐  
が人の手によるものだと気づき、なんとしてでも復讐をしたかつた  
んだ。俺の唯一の家族だつたじつちゃんも、大好きだつた惣次も、  
あの嵐のせいで死んでしまつたから。あの嵐を巻き起こした人に殺  
されてしまつたから」「

悠真は、秋幸の表情が固まつていくことに気づいた。表情は陰り固  
くなつっていく。秋幸の目は動搖のあまり泳いでいた。

秋幸も、悠真の故郷を破壊した犯人の一人なのだ。  
あの嵐の生存者が目の前にいることを、秋幸はどうのように感じる  
だろうか。

犯人として、どのような気持ちで被害者に会うのだろうか。

悠真は語つた。惣次のこと、祖父のこと、村のこと、雨が降り続  
き、故郷が滅びたこと。そして、紅城へ行き復讐を果たすために義  
藤と一緒にいたことを。

秋幸の表情が険しくなつていった。とても辛そうな表情だ。秋幸

は泣いたりしない。しかし、その唇は小さく震えていた。

「あの村の生き残りなのか……」

全てを語り終えた後、秋幸が低く言った。自らの罪を明らかにすること、自らの業を背負うこと、それはとても難しいことだ。自分自身を冷静に見つめなくてはならないから。

己の罪を認める潔さを秋幸は持っている。

「俺たちだ」

短く呟いた秋幸の言葉は、何の飾りもいわけも含まれていない。「知っていたよ」

悠真は秋幸に言った。故郷を滅ぼした犯人が来ると分かっていたから、悠真は義藤と共にあの場所にいたのだ。悠真は自分が混乱したことを見出しだ。秋幸たちを憎む気持ちと、許す気持ちが交錯し、自分の感情が分からなくなつたこと。そして今、秋幸も同じように混乱している。

「俺たちが滅ぼした。憎くないのか?…どうして、俺たち助かるよう協力するんだ?俺たちは、自分たちの大切な人たちを救うために、他人を殺したんだ。なのに、どうして……」

秋幸は言った。悠真も心の整理はついていない。敵を憎むことが出来なくなつた今、どうすればいいのか分からない。けれども、秋幸と友達になりたいという気持ちに偽りはない。

「そんなこと、俺たつて分かつている。俺は秋幸たちを憎んでいたんだ。とても憎んでいた。俺にとって、村は全てだつたら。けど、今は秋幸たちを憎むことが出来ないんだ。秋幸を、春市を、千夏を、冬彦を、俺は憎むことが出来ない。許すとか、許さないとか、そんなのじゃない。逃げて、考えることを後回して、今は助かるだけを考えたいんだ。俺は死にたくない。義藤にも死んで欲しくない。そして、秋幸たちには生きて欲しいんだ」

俺たちは、友達になれるはずなんだ。悠真は断言した。

## 赤と友(4)

悠真は秋幸と友達になりたい。悠真の一方的な願いに困惑したのか、秋幸が頭を抱えた。秋幸は何も言わない。俯いて、何かを考えるかのように息を吐いた。

そして、頭をぐしゃぐしゃにした後、に再び顔を上げた。

その目はとても強い。秋幸の中の何かが切り替わったようであつた。秋幸の強い目はしかと悠真を捉え、秋幸の瞳が鏡のように悠真の顔を映していた。

「考えよう。紅に助けを求めるだけじゃ駄目だ。春市と千夏も戦っている。危険と隣りあわせで、今も奴のために戦っている。俺たちは冬彦が紅の下にたどり着くのを、待つだけじゃ駄目なんだ。この時間を無駄に過ごすことは出来ない。俺たちには何か出来るはずだ。何か……」

そして秋幸は言った。

「紅は義藤を残した。危険だと分かつて、義藤が殺される可能性を知りながら。義藤を生かしたいなら、そこに行かせるべきではなかつただろう。なぜ、紅は義藤を危険だと知っている場所に行かせたんだ？ 悠真の復讐に義藤をつき合わせたのか？ 俺たちが攻め入るという確証が無かつたのか？」

悠真は頷いた。紅たちは、敵の正体を突き止め、敵を追い込むために義藤を囮にしたのだ。尻尾切りにならないように、証拠を掴むために義藤を行かせたのだ。

危険を恐れていっては、何も手にすることは出来ない。

紅はそう言った。紅たちは渴望しているのだ。敵の正体を知り、

敵を追い込む一手を渴望しているのだ。もし、ここに悠真が捕らえられていると知つても、敵が白を切つたらどうなるのだ。否定するのは当然のことだ。闇に乗じて悠真と義藤と悠真を殺して捨ててしまえば、悠真たちがここに捕らえられていた証拠は失われる。

敵が奴であるという証拠も失う。それに、豪華な屋敷が物語るよう、敵は官府の高官。紅に要求を出せる存在。紅は証拠無しに朱軍を動かすことが出来ない。冬彦が運んだ手紙は事実を伝えても証拠にならない。偽りの手紙として、処分されてしまうだろう。紅は探しているのだ。敵を追い込む一手を。ここに義藤が捕らわれ、敵がここにいて、ここに主が隠れ術士に石を「え、駒として利用しているという証拠を探しているのだ。真の敵を追い詰めるための証拠が必要なのだ。悠真は秋幸に言つた。

「紅たちは探していたんだ。危険を承知で、敵を追い込む一手を」

悠真の言葉に秋幸は苦笑した。

「なるほど、証拠を探すために義藤を行かせたか……。ここに悠真がいるという証拠。ここに義藤がいるという証拠。紅がここに攻め入るに足る証拠。証拠があれば、紅はここに攻め入り、義藤を救うことが出来る」

何が証拠になるのか、悠真は思考を働かせた。何をすれば、紅たちへの手助けが出来るのか。ここにいる悠真は何をするべきなのか。悠真は考えた。そして秋幸は低く呟いた。

「悠真と義藤がここにいる。それが明らかになれば、紅たちがここへ突入する証拠になる。まずは、義藤たちがここにいる証拠を紅たちに送る。手紙のようなものじゃなくて、もつとしつかりとした証拠を。冬彦は手紙を届けてくれる。その手紙で、紅たちは助けてくれるはずだ。俺たちの大切な人たちを。そうすれば、俺たちは紅に

従う

秋幸は悠真に手を差し出し、悠真は秋幸の手を取つた。握り合つた手から、秋幸の温もりが伝わってくる。

「問題は、どうやって、悠真がここにいるという証拠を紅に手渡すのか、ということだ」

秋幸が言った。簡単なのは、悠真が脱出して、この位置を伝えることだろうが、下手をすれば義藤が殺される。悠真は考えた。紅の言葉を、野江の言葉を、巡った。

己が生み出した全ての石を監視することが出来る。

紅が誕生して最初に生み出す石は、監視する力を手にする。いつ、どこで、どの石が使われたのか監視することが出来る。そもそも、官府は紅に石の監視を止めるようになると要求し、紅はその要求を跳ね除了たのだ。悠真は考えた。紅は今も石の監視をしているはずだ。そして、石は本人しか使用できない。本人用に加工されているから。つまり、ここで義藤の石を使えば、義藤がここにいる証拠だ。しかし、義藤の石は限界を超えて砕けている。ならば、悠真が持つていた惣次の石はどうだ。惣次の石を使えば、悠真がここにいる証拠となり、紅は朱軍を動かすことが出来るはずだ。

悠真の中に一筋の希望が差し込んだ。

## 紅の石

全ての鍵を握るのは紅の石だ。

「紅の石だ」

悠真は言った。不思議そうに秋幸が首をかしげた。悠真は続けた。

「紅は石を監視することが出来るんだ。紅の石が一つ、どこで使われたのか監視している。俺が持っていた石。惣次の石を使えば、俺がここにいる証拠となり、朱軍が動くことができる。ここで、惣次の石が使われるということは、ここに俺がいるという証拠なんだ。惣次の石がここにあるということは、あの時、義藤と戦った者がここにいるという証拠なんだ。そして朱軍が動いてここを攻めれば、全ての罪は明らかになる」

秋幸が頷き、悠真の肩を叩いた。

「そうだな……でも、他人の石を使うことは出来ない」

悠真は秋幸の手を振り払った。

「俺は使える。俺は、惣次の石を使って生き残ったんだ。それに、義藤の石を使ったこともある。俺が持っていたのは惣次の石。俺が持っているはずの石。その石が使われれば、俺がここにいる証拠になるはずだ。石はどこにあるんだ？それを使うだけなんだ。それだけで、証拠になる。紅が朱軍を動かすことが出来る」

秋幸は目を閉じていた。何かを深く考えていた。そして、一つ息を吐いていった。

「分かった、悠真から奪った石は奴が持っている。他人の石を使うことは出来ない。だから、俺たちが持っていても無駄だ。だから、奴が持っている。本当に紅が石の監視をしているのなら、石さえ手にすれば、俺たちの勝ちだ。義藤も助かる」

「石を盗んでみる。もし、戻つて来ることが出来なければ、諦めてくれ」

秋幸の覚悟が伝わった。その覚悟が悠真を不安にさせた。秋幸は普通だが強い。普通だから、時に尋常じゃないほどの覚悟を持つている。その覚悟が、秋幸を儂い存在へと見せるのだ。紅城で囮となつた義藤と似ている部分があつた。悠真は秋幸の友でありたいから、彼を一人にしたくなかった。

「俺も一緒に行く。そのほうが、すぐに石を使うことが出来るから」  
悠真は秋幸を一人で行動させることが心配だった。兄弟の気持ちを知る秋幸は、兄弟のために戦うはずだ。一人にすることは出来ない。けれども悠真の申し出を秋幸は断つた。

「義藤はどうする？こんな状態で残していけない」

言つて、秋幸は義藤の顔を覗き込んだ。悠真は秋幸の肩をつかみ、自分の方を向けた。優しい秋幸が、間違つた方向に進まないように。「分かっている。でも、見つけてその場で使うことが出来れば、失敗する確率は減る。いや、殺されるかもしれないけど、紅たちに証拠を届けることは出来る」

秋幸は悠真の手を振り払つた。

「義藤を残してはいけない。義藤を死なせたりしない。悠真。俺を信じてくれ。必ず、石を盗んで戻つてくるから」

秋幸は必ず戻るという。しかし、その言葉に確証は無い。

「大丈夫。義藤は大丈夫だ」

「なぜ、そんなことが言い切れる？」

秋幸の言葉は最もだ。それでも、悠真の根拠の無い自信は揺るがなかつた。ここで秋幸を一人にさせるべきではない。義藤は大丈夫だ。根拠の無い自信が、悠真の背を押していた。

「大丈夫だ。義藤は大丈夫。そう、思えるんだ」

悠真が言い切ると、秋幸は再び義藤を覗き込んだ。そして、秋幸は義藤の手をつかみ、右手を見た。

「どうして……義藤……そつか……さすが紅だ……」

秋幸は何かを呟いていた。悠真は秋幸が自分の訴えを聞いていないことに苛立つた。

「聞けよ」

悠真は再び秋幸の肩をつかみ、自分の方へ向けた。

「義藤にも時間はない。だから……」

悠真は言った。秋幸と一緒に行く必要があると思ったのだ。秋幸が拒めば、隠れてでもついていくつもりだった。すると、秋幸は悠真の言葉を遮つて言ったのだ。

「分かった。義藤はきっと大丈夫だ」

秋幸の言葉に不安は含まれていなかつた。何かが秋幸を決意させたのだ。何が秋幸の考えを返させたのか、悠真には分からぬ。悠真是秋幸の考え方の変化に不信感を抱いたが、秋幸が悠真の同行を受け入れただけで十分だつた。

「一緒に行こう」

悠真の申し出に秋幸は頷いた。

「義藤、必ず戻るから」

悠真は横たわる義藤に言った。

悠真にとって、義藤は生きていて欲しい存在だ。義藤は、悠真より年上だけれども、とても親しみやすく大切な友だから。義藤は意識を失っている。この状況で一人にすることは、とても危険なことだと理解していた。しかし、それ以上に秋幸のことが心配だつたのだ。義藤は大丈夫だという根拠の無い自信。そして、秋幸が消えてしまうという不安。

それは、幻覚のためだつた。あの時、幻覚の中で義藤と話をしたから、悠真は根拠の無い自信を手にしたのだ。

義藤、必ず戻るから。

悠真は心の中で義藤に語りかけた。

## 赤の消えた屋敷（1）

皆が生き残る道を信じて、悠真は義藤を残して牢から外へ出た。

悠真は秋幸と一緒に、外へと出る階段を上った。久しぶりに吸い込んだ外の空気は、地下牢の中のように淀んだ空氣でなく、風が頬を撫でた。

「悠真、こっちだ」

秋幸が悠真を手招き、どこに何があるのか分からぬ悠真は、秋幸の後を追つた。

隠れながら廊下を歩いた。廊下を歩くだけで、とても広い屋敷だと分かる。権威を誇示するかのように庭は手入れされ、不必要な飾りがされていた。庭が手入れされているのは、紅城と同じだった。都南と義藤が手合わせをした中庭も、美しく手入れがされていた。しかし、紅城とこの屋敷は違う。悠真は一つの違いを感覚で感じていた。

時が流れるのは早く、外は赤い夕日に包まれていた。赤の色神紅に守られる火の国で生きる悠真にとって、赤は特別な色だ。赤は時として残酷な色に豹変するが、火の国で生きる悠真にとって赤はそれ以上の存在なのだ。赤があるから命は息吹を持ち、愛を象徴する色は赤だ。赤が熱を持ち、赤が光を灯す。闇夜に輝く赤い炎は、人々から闇への恐怖を消し去る。凍える冬には赤く燃える炎は欠かせない。

「もう、こんな時間だつたんだ……」

悠真は一日近く地下牢にいたのだ。眠つていたこともあるだろうが、時間の感覚がおかしくなったように感じた。

「もし、冬彦がすぐに紅の下へたどり着き、紅がすぐに朱軍を動か

したのなら、とっくに人質たちは救われているはずだ」  
「秋幸が赤い夕日を見上げて言った。それは秋幸の願いなのかもしない。

失敗すれば、人質を失う。

けれども、悠真たちが動かなくては紅が動けない。

時間的に、今動くのが一番なのだ。悠真たちの失敗は、人質の命に直結しない。悠真は自分に言い聞かせて、己を奮い立たせた。

大丈夫。

俺なら出来る。

時に、根拠の無い自信は必要なのだ。踏み出せない自分が情けないと後悔しないように、悠真は先に進むのだ。

悠真は屋敷を見て、空気が濁っているように感じた。何か穢れたものが辺りを覆い、色を濁している。

「嫌な屋敷だ」

悠真はとても小さな声で思わず呟いた。紅城とは異なる。豪華さは似ているのに、紅城とは違う。

赤が消えた。

火の国では赤が満ちているのに、この屋敷からは赤が消えている。高貴な色の赤が飾られているとか、いないとか、そんなことは関係ない。この屋敷の空気から赤が消えているのだ。

ここは嫌な雰囲気。嫌な色。寒気のような物も感じる。なぜ、この屋敷からは赤が消えたのか、その理由は分からぬが、この屋敷から赤が消えていることは事実だ。悠真の目が赤を見出せないのだ

から。赤だけでない。色が薄いのだ。人の心を支える色が希薄で、命があるように思えないのだ。植物が放つ緑は弱く、池に満ちる水の青は消えそうだ。

色が消えた。

色が消えるということはありえない。世界は色で満ちているのだから。しかし、色が消えようとしているように思えるのだ。

「代々続く権力者という証拠だ。醜い屋敷だ。この屋敷の下には多くの屍があるんだ。赤から見放された屋敷だよ」

秋幸が小さく呟いた。おそらく、秋幸が指した「赤」は、紅たちの事だ。赤の仲間たちから見捨てられた、色神紅が手を出すことが出来ない屋敷。そう指したはずだ。しかし悠真には違うように見えるのだ。

赤は美しい色じや。

赤い唇が放つ赤い声を悠真は思い出した。赤の色神。高圧的で、美しい赤はこの屋敷を見捨てた。義藤を助けるために叫んだ赤は、この屋敷を見捨てたのだ。

赤を知っている悠真だから分かるのだ。この屋敷の空気は、赤が嫌う空氣だ。だからかもしれないが、悠真は、赤い夜の戦い以来、赤の姿を一度も見ていないのだ。

赤が消えた屋敷は冷たく、孤独だ。火の国から切り離されているようを感じるのだ。

「血統官吏なんて、こんなもんだよ。眞面目に火の国を思っている官吏もいるのに、一方で紅を裏切る官吏もいる。平和に見える火の国も、実際は戦いの火種を多く抱えているんだ」

秋幸が赤の消えた屋敷を見渡していた。悠真よりずっと深いところ

で物事を考えている秋幸らしい。悠真は赤の消えた屋敷を見渡すた  
びに、赤と紅の姿を思い出すのだ。

「大丈夫だよ。紅が助けてくれる。紅がこの屋敷に来る。そうすれ  
ば、必然的にこの屋敷にも赤が満たされるんだ。鮮烈な赤色がね」  
悠真たちにとって、赤は希望なのだ。悠真は赤の消えた屋敷で、紅  
が放つ鮮烈な赤に焦がれた。

## 赤の消えた屋敷（2）

赤の消えた屋敷。

悠真は濁つた空氣の中、秋幸と共に足を進めた。豪勢な屋敷には人の気配が少ないが、秋幸は常に気を張っていた。誰にも会わないように警戒しているのだ。

「悠真！」

秋幸の声が小さく響いたかと思うと、秋幸は強く悠真の腕を引いた。物陰に隠れるように秋幸は悠真の腕を引っ張り、秋幸は悠真を手近な部屋に押し込んで隠した。

人が来たのだ。

障子一枚を挟んで声が聞こえ、自然と悠真の心臓が高鳴った。誰が来たのか分からぬ。ただ、秋幸が警戒していることは事実だ。悠真が気づくより早く秋幸は人の存在に気づき、こうやって悠真を隠したのだから。

このまま秋幸の裏切りが発覚したら？

秋幸はどうなる？

悠真はどうなる？

義藤はどうなる？

人質にとらわれている子供はどうなる？

春市、千夏、冬彦はどうなる？

「のまま秋幸の裏切りが発覚し、秋幸も、悠真も、そして義藤も殺されてしまうかもしない。一つの失敗が、皆の命を奪うのだ。

「何をしているのですか？」

その声は女性のもの。おそらく、使用人か何かの声だ。彼女が秋幸の裏切りに、隠れている悠真の存在に気づいているのか分からない。気づかれてはいけない。悠真は、息を殺した。

「いや、別に何も」

秋幸が答えると女性は言った。

「昨日の作戦に失敗したとか？」

女性の声は障子越しに凜と響いた。

「負けたわけじゃない。ただ、紅が身代わりを立てていただけだ。

俺たちは紅の側近、朱護頭義藤を捕らえたのだから」

秋幸は冷静だった。悠真を隠しながら、その場をやり過ぐそうとしているのだ。

「それで、今度は勝てるって言つの？」

女性は敵なのか、味方なのか、障子越しの悠真には判断できない。

「春市と千夏が準備をしている。勝てるとかそんなこと関係ないんだ。俺たちは、するしかないんだから」

秋幸の言葉に偽りは無い。

「それはそうね。皮肉なものよね。術士という類稀な才能を持ちながら、結局は私利私欲のために利用される道具でしかないのだから。あなたたちなら、いけたんじゃないの？陽緋や朱将たちの近くへ。彼らと同じ土俵で、紅を護り、彼らの仲間として戦うことが出来たんじゃないの？朱護頭を捕らえることが出来る力を持つている、ということは、そういうことじゃないの？」

秋幸たち、四人の隠れ術士は才能に恵まれている。しかし、戸籍を

持つていないうことだけで、隠れ術士になるしかなかつたのだ。  
「そんなこと、嘆いたつて何にもならない。だつて、親のいない俺  
が術士の才覚を手にしたら、歩むべき道は限られているのだから。  
己の境遇を言い訳にするのは、間違つてゐる。俺は、何も後悔した  
りしない」

秋幸は強い。当たり前のように、当たり前に考えられないことを口  
にするのだ。

「それで、あなたはどうしてここにいるのかしら? 一人と共に行か  
ないのかしら?」

女性は秋幸に問うた。

「俺が一緒に行つて、未来が変わるとは思えないから。俺は、ここ  
に残つて地下牢の見張りでもするだけだ。だつて、相手は術士なん  
だから」

秋幸の返答に女性が笑うのが分かつた。

「勝手な行動は慎みますように。裏切るようなことがあれば、私の  
娘も死ぬですから」

女性の声は強い。

「分かつてゐるさ。奴が俺たちを捕らえるのは人という牢獄。看守  
さえも、囚人なんだから。誰もが最愛の人を見捨てることが出来な  
いから、従うしかない。裏切りれば人質は殺され、裏切りを見逃せ  
ば人質を殺さる。決して逃げることの出来ない牢獄の中に、俺たち  
はいるのだから。逃げるには、人質を捕られていない第三者の介入  
が必要だ。そんな人、どこにいる? 紅さえも手が出ない、この屋敷  
の中。誰が助けてくれるつて言つんだ? ただ、生き残ることを願う  
だけだ」

悠真はその言葉で全てを知つた。奴は、使用人全ての人質を捕り自  
分に従わせているのだ。それが無性に腹立たしい。人質がいるから  
勝手に動けない。裏切りを見過ごせば、己の人質を失う。使用人同  
士が監視し合う。決して逃れることの出来ない牢。ここの人たちは、  
牢獄の中にはいるのだ。

赤。

悠真は赤を願つた。この屋敷を鮮烈な赤が救つてくれるようだ。  
赤が救つてくれるようだ。願うだけだ。息を殺し、気配を消し、存在を悟られないように。秋幸の人質が殺されないように、願つて己の存在全てを消し去るために悠真は息を殺した。

秋幸が苦笑交じりに言つた。

「分かっている。俺だって、人質を捕られているんだ。気安い行動をとつたりしない」

秋幸が言い、女性は続けた。

「氣をつけて下さい。私たちには、従うことしか出来ないのですから

足音が遠ざかる音が響いた。そこで、ようやく悠真は息を吐くことが出来た。息すら出来ないほど、悠真は身を固めていたのだ。自分が生きている証を、自分が人であることを消し去り、ただの物になろうとしたのだ。無駄かもしれないが、悠真は必死だった。背中が汗で濡れている事に気づき、自分がとても緊張していたのだと気づいた。

## 赤の消えた屋敷（3）

遠ざかる足音。  
遠ざかる危機。

足音が遠ざかるのを確認すると、悠真は深く息を吐いた。無意識のうちに呼吸を止めていたため、心臓は驚くほど速く脈打ち、自然と呼吸は荒くなつた。息を吐いて、悠真はようやく部屋の中を見る余裕が出来た。薄暗い部屋の中は、空気がよどんでいた。  
背中に流れる汗は、秋幸の裏切りが発覚しないかと、強い緊張を強いられていたからだ。

（良かつた）

悠真は心底安堵した。惣次の石を探しに、秋幸と共に行く。そんな悠真の意見が通り、今に至る。ここで悠真がついてきたために失敗してしまつた、人質が殺されてしまつた、それだけは避けたかったのだ。悠真は今以上に罪を負つて生きて行けるほど強くないのだから。

秋幸が咄嗟に悠真を押し込めた部屋は、どうやら物入れらしい。締め切られた部屋には埃が満ちて、長い年月換気が行われていないようだつた。締め切られた部屋は障子越しの薄明かりしか届かず、それゆえ湿気がこもりかび臭かつた。

異様な部屋だつた。

赤が消えた。

「この部屋には、色が無かつた。色が見捨てた部屋だつた。  
（ここは……）

悠真は辺りを見渡した。

部屋を見て、悠真は屋敷の異常をまざまざと感じさせられた。

「何で、何で……」

先ほどとは異なる意味で心臓が高鳴った。目の前にある光景を否定したかったのだ。

恐ろしい。

恐ろしい。

恐ろしい。

恐ろしい。

悠真は目の前の全てを否定した。これは夢だ。現実ではない。

なぜ。

なぜ。

なぜ。

目の前の光景を否定した。

ここが火の国のはずが無い。色神紅と赤がいる火の国は、小さな島国だが平和な国だ。もちろん、一般市民の手の届かないところで、色神と官府が争っているが、それは術士の世界のこと。火の国は小さな島国だが平和だ。自然が豊かで人々は温かい。

有り得ない。

悠真は現実を否定した。部屋の中の光景を否定して、これが夢だと信じていきたいのだ。

有り得ない。

悠真の心臓が強く、速く脈打つ。先の緊張以上だ。

有り得ない。

悠真是呼吸することが出来なかつた。この部屋で、呼吸をして酸素を体に取り込む。それが汚らわしく、一つ息をするたびに、己が内部から腐つていくように思えたのだ。

憎しみの声が、部屋の色を消していく。呪いの声が、色の輝きを消していく。命の息吹を消していく。火の国を憎む声。生きる者を呪う声。

有り得ない。  
有り得ない。

悠真の膝が震えた。  
悠真の唇が震えた。

## 人骨

部屋の中は、無数の人骨が転がつていた。頭蓋骨、肋骨、骨盤、大腿骨、上腕骨、すべてが無造作に転がつていた。一人や二人分ではなく、数え切れないほどの骨が転がっているのだ。

部屋の中に転がる骨。

「どうして……」

それは作り物でない。大きさが異なるのだ。子供と思えるほどの大

きのものもあつた。あまりに残酷で、悠真は息をすることを忘れた。息をすることを忘れるほど衝撃だった。悠真は田舎者だから、街のことは分からぬ。街でこの光景が当然なのなら、悠真は田舎者でありたかった。田舎者で十分だった。

「じつちゃん、帰りたい」

悠真は床に座り込んだ。

「じつちゃん。惣次。俺、帰りたい」

平静を保つため、悠真は故郷を思い出した。故郷を思ひ出さなければ、悠真の心が砕けてしましそうだった。

「じつちゃん」

無造作に転がる觸體のいくつかが、悠真を見ていた。虚ろに空いた穴には、かつて目があつたはずだ。黒い穴がじつと悠真を見ているのだ。

許さない。

かたかた。かたかた。觸體の口が動いた。

殺してやる。

かたかた。かたかた。觸體の口が動き、歯が音を立てた。手がもがくように動き、悠真に近づいてきた。

「この場所からは色が消えている。憎しみが、世界の輝きの源である色を打ち消しているのだ。

「ここは、普通の人が生きるべき場所ではない。」

田舎者の悠真の正直な気持ちだ。

## 赤の消えた屋敷（4）

色をかき消す呪いの声。

憎しみの声。

髑髏が悠真を見つめ、髑髏が悠真に語りかけた。

永遠に続く、苦しみの声を。

永遠に続く、憎しみの声を。

逃がすな。

捕らえろ。

さあ、地獄へ。

悠真は耳を塞いで蹲つた。固く目を閉じると、世界は黒で塗りつぶされる。目を閉じて、黒い世界に故郷の様子を描く。黒い世界に紅城の様子を描く。笑っている祖父。笑っている惣次。笑っている紅。笑っている赤の仲間。

「何も見ない」

悠真は呪文のように呴いた。

「何も聞こえない。大丈夫、大丈夫」

悠真は自分の世界に閉じこもった。色を思い描いた。色があれば、世界は輝くのだ。

「大丈夫、大丈夫」

心を閉ざせば大丈夫。何も感じなければ大丈夫。

蹲る悠真の肩に温かな手が乗せられた。

障子が開き、閉ざされた部屋に光が差した。

「大丈夫か？」

秋幸が声を発すると、色の消えた世界に色が指した。

秋幸の声はとても落ち着いている。どうして、落ち着いていられるのか、悠真には分からなかつた。この異常な状況下で落ち着いていられるはずが無いのだ。

「どうして、どうして……」

悠真は座り込み、人骨を指差した。秋幸は悠真の肩を叩いた。そしてゆっくりと膝を折り、床に座り込む悠真の横に座つた。

「見せしめだ」

秋幸は言つた。人骨を見て、そして低く続けた。

「使用者たちが裏切らないように、今まで殺した人たちを、こうやつて置いているんだ。使用者同士に見張りをさせ、それぞれから人質をとる。妻を、子供を、夫を、兄弟を、親を……。誰も逃げられない。誰かが逃げることを見逃せば、自分の人質を殺される。そして、自分自身も、殺されるんだ。この見せしめの骨が、俺たちの自由をさらに奪う」

悠真は底知れぬ不安を覚えた。深い、深い闇の中にいるようだつた。そこは冷たい場所で寒さと孤独が悠真を襲う。誰も脱出できない牢の中での、互いに互いを監視しあつてゐる。そんな中で、悠真と行動を共にする秋幸も、わずかな隙間から秋幸たちを逃がそうとした春市と千夏も、一人脱出に成功した冬彦も、悠真より遙かに強い。悠真では出来ない決断と行動。今まで感じたことがない不安と恐怖に教われ。悠真の身体は震えた。

「大丈夫、大丈夫だ」

秋幸は障子を閉め、不安に襲われる悠真の隣に秋幸がいる。それだけで悠真は安心できた。

「異常な世界なんだ」

秋幸の横顔が悠真の隣にあつた。

「でも、恐れちゃいけない。彼らは皆、生きていたんだ。生きて、未来を願つていたのに、不条理に奪われたんだ」

秋幸は悠真と一つしか年齢が変わらないのに、悠真よりずつと大人だ。秋幸は座つたまま手を伸ばし、一つの髑髏を手に取つた。少しこの髑髏。前歯が一本欠けている。

「これは、伊汰の骨だ。伊汰は八歳だった。乳歯が抜けてね、歯抜けだった時に殺されたんだ。伊汰の母が逃げようとした仲間を見逃してね、それで巻き添えだ。死ぬときまで、歯抜けの顔で笑つていたよ。俺は、何とかして伊汰を助けたかったけれど、その力が無かつたんだ」

秋幸は愛しそうに髑髏を撫でた。

「最期の言葉はね、饅頭が食べたい。そんな言葉だったよ。伊汰は可愛い子だった。俺は、助けることが出来なかつたんだ。どんなに悔やんでも、伊汰は生き返らない。自然に帰ることもなく、永遠にこの屋敷に捕らわれるんだ。大丈夫だよ、伊汰。解放してあげるから。伊汰が好きだつた青空を見せてあげるからね」

髑髏を手に持つ秋幸は、神秘めいて、人間離れしているようであつた。平凡なのに、悠真とは生きる世界が違う。そう教えられる姿だ。悠真の故郷では、死した者は荼毘された後、海に流される。墓として骨壺に入れる風習が火の国では一般的だが、他にも様々な埋葬方法がある。山に戻し、その上から木を植えることもある。悠真の故郷が海に骨を流すのは、命は海から生まれるという考えに基づくものだ。

悠真の父は海で死んだから、死した後は海に帰つた。母も死した後は海に帰つた。そして、祖父は故郷と共に海に流された。海は命を生み出し、命は海に帰る。

この屋敷で殺された者は、海に帰ることが出来ない。自然に帰ることが出来ない。墓で眠ることも出来ない。この屋敷の主は、生きている間だけでなく、死した後も捕らえているのだ。

全てが恐ろしかった。

## 赤の消えた屋敷（5）

秋幸は教えてくれた。

その声には怒りが満ちていた。平凡な秋幸が怒りをあらわにしているのだ。

奴の名前は「下村登一」といつ。奴とは、この屋敷の主のことだ。苗字があるのは、彼が代々高官であることを示している。火の国で苗字を持つものは半分にも満たない。田舎者の悠真にも苗字は無く、悠真の故郷で苗字を持っているのは名主や医師など権力を持ったものだけだ。苗字を持つ者は親から子へと権力が譲渡され、将来が保障されている。

苗字を手にするには、苗字のある家に生まれるか、養子に貰われるか、己が出世して権威を手にするしかない。例えば、術士として名を上げるか、官吏として雇用されて立場ある地位まで出世するか。いずれにせよ、苗字を得る道は限られている。

つまり、地位のある者は苗字を得る権利を手にし、その繁栄を子孫に残すことが出来る。逆に、親が有能であっても、子が無能であれば家が取り潰されることもある。陽緋である野江や、朱将の都南、そして佐久や義藤にも苗字はあるはずだが、彼らは苗字を名乗らない。それは、己の繁栄を子供たちに継がせない決意でもあるのだ。

苗字を使用するのは、豪商や地主たち。己の繁栄を子孫に継がせる存在たち。

下村登一もそうだ。親から、祖父母から、先祖代々繁栄を受け継いでいる。この屋敷も建てたのは先祖だろう。登一は、誰よりも紅を崇拜していた。そして、紅になりたいと願っていた。なぜなら、紅は色神だから。火の国の頂点に立つ存在だから。しかし、赤は登

一を選ばず、登一は色神になれなかつた。己が色神になれないことへの不満が、紅へと向けられた。そして、紅を超える存在になろうと考えたのだ。紅は、民からの信頼で成り立つてゐる。登一は信頼を集められない。だから、人を使ったのだ。人の心を使ったのだ。

そして、力を使える四兄弟を利用し、紅の暗殺を図つた。

悠真是心の奥から怒りが湧き上がつてくるのを感じた。なぜ、このようなことが生じるのか。悠真には分からなかつたし、分かりたくなかった。怒りは悠真に決意を固めさせた。

止めなくてはいけない。

復讐心でなく、決意が悠真を突き動かした。この状況を見過ごすことは出来ない。

「許せない」

自然と悠真的口から言葉がこぼれた。田舎者の悠真が固執するものは何もない。権力にも興味は無かつた。生活が出来て、笑つて生きることが出来れば十分だ。秋幸が伊汰の髑髏を撫でながら言つた。

「人は誰しもが、手にしたものを持放したくないと思うものかもしれない。だから人は自分の力で物を持放さなければならない。自分の力で手にした物は、自分の力量の範囲内の物だから、手放さないように苦戦することも無い。俺だって、手にした物を持放したくないよ。孤児だつた俺は、義兄弟と呼べる仲間を得て、一度と一人に戻りたくないと思っている。家族と呼べる子供たちを失いたくないと願つてゐる。登一は、多くを手にしそうだ。先祖が登一の許容量を超えた物を与えすぎたんだ。だから、登一は苦労した。手放さないように、家の顔を潰さないように、そして、己が潰れていった。　そういう事だよ」

秋幸の言葉で悠真是己を振り返つた。悠真は何を持っているのだろうか。これまでだつたら、悠真が持つてゐるのは故郷だつた。しかし、故郷は破壊された。残された悠真は、何も持つていないのであるか。否。悠真是持つてゐるのだ。赤の仲間との絆を、紅への気持ちを、友を。悠真是それを手放したくない。そのために、登一を憎

む。

悠真が抱いている気持ちは、これまでとは違う。奪われた物の復讐ではなく、己の大切な物を守る為の敵対心なのだ。

「大丈夫」

悠真が言つと、秋幸は不思議そうに悠真に目を向けた。どういうわけか、悠真是笑いたい気持ちだった。不思議そうな秋幸がおかしいのか、自分がおかしいのか、理由は分からなければども笑いたい気持ちだつた。

「登一は、多くの物を持っていると思うんだ。でも、それは物でしかない。俺なんて田舎者だから、そういう物は何も持っていないよ。でも、俺は登一より多くの物を持っていると思うんだ。人との繋がり。人との繋がりが、何よりも大切な物だと、俺は思うんだ。だから大丈夫。俺たちは登一より多くの物を持っているから、負けるはずがないんだ」

小さく、秋幸が笑つた。

「悠真是、面白いな。悠真が一緒だと、負ける気がしない」

苦笑した秋幸の表情が柔らかく崩れ、緊張の糸がほぐれていく。悠真以上に秋幸は緊張していたのだ。秋幸が大人だから、表情に出さないだけなのだ。悠真是立ち上がつた。

「許せない。必ず、必ず止めよう」

悠真が言うと、秋幸は微笑んだ。

「もちろん。一緒に、こんな支配を終わらせよ」

秋幸が言つて、悠真に手を差し出し、悠真是迷うことなくその手を取つた。

## 赤の消えた屋敷（6）

庭園に面した廊下を歩きながら、悠真は辺りの様子を探つた。静寂と気持ちの悪い色が辺りを包む。先ほどの人骨の光景が、悠真の脳裏をよぎり、再び悠真を恐怖と不安に落とそうとしていた。その不安を覚えるたび、心を落ち着かせるため悠真は故郷の海を思い出した。

海の中の静寂は心地よい。海は人を喰うのに、少しも不安を感じさせない。海の水はとても冷たいのに、身体は熱を帯びたように熱くなり、心音と息継ぎの呼吸音が響く。苦しさを覚えるたび、海面に顔を出し、肺に酸素を取り込む。全ての命は海から生まれる。祖父がそんな話をしていた。だから、父は命の生まれる海に帰るだけだと。母が死した後も、村の風習で燃やした骨を海に流した。弔い、祈りを海へと捧げる。海へ帰ることもなく、汚い部屋に押し込められた遺体が無残だった。赤い色を失い死に、青い海に帰ることも出来ない。それはとても辛いことだ。

「登一は、鍵をかけた部屋に自分のものを入れている。手にしたものは一度と離さない。石もきっとそこにある」

秋幸が歩きながら言つた。複雑に入り組んだ屋敷は、まるで迷路のよう。途中、人とすれ違つたびに、秋幸は悠真を部屋に押し込んで隠し、隠れながらも悠真と秋幸は確実に石へと向かつた。もちろん、人骨のある部屋は、先ほどの一室だけではない。

「俺も数えたことは無いけれどね。全部で十数部屋はあるはずだ」  
秋幸は人骨の部屋に出会つたびに、苦笑していた。これだけの人がこの赤の消えた屋敷で命を落としている。

身を隠しながらだから、少し進むのに時間がかかる。悠真たちは慎重に、それでも確実に目的の石に近づいていた。

「待つて」

唐突に、秋幸が悠真を止めた。

「どうかしたのか？」

辺りに人はいない。なのに、どうして秋幸が止まつたのか分からなかつた。秋幸は辺りを見渡して、そして言つた。

「いつもと違う気がする。どこかが違う」

悠真には分からぬ。先ほどの静寂と何も変わらない。不審な人影もない。なぜ秋幸が止まるのか分からなかつた。

「何が違うんだ？」

悠真は尋ねた。

「分からぬ、でも、何かが違うんだ。嫌な予感がする。俺は、こ  
ういう勘は当たるんだ」

秋幸は躊躇つて動こうとしなかつた。

「どうするんだ？」

悠真は秋幸に尋ねた。悠真は分からぬ。どうすれば良いのか分からぬのだ。秋幸は危険だと言つ。裏切りが発覚することの代償を悠真は知つているつもりだ。だから秋幸が恐れる気持ちも分かる。どうすれば良いのか、ここで悠真が決めるることは出来ない。代償を支払うのは悠真でなく、秋幸なのだから。

「分からない。でも、戻ることも出来ない」

秋幸は顔を覆つた。迷つているのだ。悠真は紅の言葉を思い出した。

危険を恐れていっては、何も手にすることは出来ない。

今、悠真たちは選択を迫られている。義藤は、危険を承知で証拠を手にするために動いた。義藤は選択したのだ。悠真はどうするべきなのか。悠真は秋幸のことを疑つつもりはない。秋幸が危険を感じているのなら、危険なのかもしれない。それでも、逃げるわけには行かないのだ。故郷を失つた絶望をぶつけるために、殺された人たちの復讐をするために。今、悠真は復讐に息巻いているのではな

い。感情は荒立たず、自分でも驚くほど冷静だつた。冷静だからこそ、悠真は後悔しない選択が取れるのだ。

裏切りが発覚した際の代償を支払うのは秋幸だ。もちろん、悠真も支払わなくてはならないだろう。吉藤が殺されてしまうかもしれない。己が殺されるかもしれない。しかし、この裏切りに対しても大きな恐怖を抱いているのは、秋幸の方が悠真より大きいはずだ。

危険を恐れていっては何も出来ない。

悠真は自分に言い聞かせた。ここで引き返すことは出来ない。秋幸に、後悔の無い選択をして欲しいと願いつつ、間違った選択をして欲しくない、と強く思つのだ。

悠真は秋幸に言った。

「秋幸が危険を感じるのなら、本当に危険なんだと思う。でも、紅は言った。危険を恐れていっては、何も手にすることは出来ないと。だから義藤は、あの場にいたんだ。危険を知つていても、大切なものを手にするために。敵の正体を突き止めるために。秋幸、俺は危険でも行きたい。紅たちが動けないのなら、俺は危険でも行きたい。秋幸は振り返り、悠真を見た。秋幸の表情には戸惑いの色が強い。悠真よりも二歳年上の秋幸は、戸惑い、そして目を細めていた。

秋幸は悠真と辺りを何度も見比べて、そして言つた。

「分かった、行こう」

秋幸は足を進めた。

秋幸の行動が人質の解放と、牢の崩壊につながると願つて、悠真是秋幸とともに行動をした。

## 赤の焦り（1）

庭園の中にある離れが登一の自室だった。そこは鉄製の扉が付けられ、南京錠で固定されていた。鎖で厳重に固定された扉が登一の疑り深い性格を表していた。排他的で他者を信頼しない。そういう存在。

「どうやって入るんだ？」

悠真は尋ねた。すると、秋幸は答えた。

「悔るなよ、俺は隠れ術士だ。大丈夫。下村登一は慎重な性格。己が俺たち隠れ術士に貸し与えた石を必ず回収する。これは、俺が盗んだ石だよ。官府に潜入して内情を探つていたとき、色神紅派の派閥から盗んだんだ。紅派は、官吏が溜め込んだ石を回収して回っている。加工されていないから使いにくいけれど、多少は役に立つだろ」

秋幸は紅の石を出した。その石を鎖に当てるとい、紅の石が僅かに輝いた。すると、鉄が赤くなり、ぐにゅりと溶けて切れたのだ。

「紅の石の基本の力は熱だ。だから簡単なこと。術士は紅の石の様々な力を生み出す。熱量を変化させて刃物にかたどつたり、大切な者を守る盾となつたりする。風を生み出し、波をうねらせることも可能だ。石は色によつて力が異なるとされているけれど、紅の石ほど可能性を秘めた石はない。俺たち火の国は、紅の石で守られている。俺たちは誇りに思わなきやいけないんだ。火の国で生きられることを。色神紅の下で生きられることを」

秋幸の手の中で、加工されていない角ばつた紅の石が転がっていた。悠真が見たのは、加工された後の石。形を整えられ、術士に合わせて色を合わせた後の石。今、秋幸の手の中にある石は加工される以前の石だ。

紅の石は、色神紅によつて生み出される。どのようにして生み出されるのか、悠真は知らない。知つている者は少ないだろう。

火の国は紅の石を持っているから、豊かなのだ。紅の石が貴重なら、外交面でも役立つ。島国として侵略を防いでいるのも紅の石のおかげなのだ。思うと、紅の石はとても輝いて見えた。赤い色がとても高貴に思えた。そして、紅が大きな重圧の中で生きていることを改めて感じた。紅の石が強い力を持っているのなら、監視を止めることは出来ない。官府の思い通りにさせることは許されない。進むしかない。進んで、紅の力になりたい。悠真は己を奮い立たせた。

「入ろう」

秋幸は鉄の扉を開いた。すると、鈍く重い音が響いた。

「このままじゃ気づかれる。急げ」

秋幸は身体を横向きにして鉄の扉の奥へと入つていった。悠真もそれに続いた。

離れ屋敷の部屋の中は異様だった。窓には鉄枠がはめられ、まるで牢獄だ。畳みの上は布団は乱れ、何ヶ月も、何年も掃除をしていないようだった。

「他人を部屋に入れるのを嫌っていたんだ。日々、病的になつていく。今じゃ生きているのか、化け物なのかも分からない。権力や地位が人の心を蝕み、狂わせるのなら、俺はそんなもの欲しくないな。立派な屋敷を持ちながら、戸籍を持たず山で暮らす俺たちより荒んだ暮らしをしているのだから」

秋幸は部屋の中をあさり始めた。悠真もそれに習つた。汚い部屋の中、牢獄のような場所で生きていることの気が知れなかつた。広い屋敷があるのに、主は自らの部屋の鍵と鉄格子をつける。悠真が登一を見たのは一度だけだ。ほんの一目、春市を殴り蹴る姿を見た。

醜く、愚かな存在。

悠真は部屋をかき回し、一つの箱を見つけた。その箱に呼ばれているような気がしたのだ。

秋幸には見えないかもしれないが、赤い光が箱から零れているのだ。その赤は、惣次の赤と同じ色だ。悠真が故郷で慕つていた下緋

の惣次と同じ赤色を持つている。つまり、惣次に合わせて加工された石があるということだ。

重厚な小さな箱には鍵が掛けられているが、隠れ術士の秋幸の力があれば何の問題もない。秋幸が加工前の紅の石を取り出し、紅の石が赤い光を放つと箱の金具が溶けた。

零れ落ちる赤い光に導かれるように、悠真は箱を開いた。

小さな箱を開くと、そこには紅の石があつた。

「これ、惣次の石かな？」

悠真が尋ねると、秋幸は紅の石を手に取つた。

「たぶん。ほら、紐の付け根に飾りがついている。俺が悠真から奪つた石も同じ飾りがついていた」

秋幸は言つと、悠真に石を握らせた。悠真の手の中に、紅の石が入つた。二年前の戦いで力の大半を失い、悠真の故郷に身分を隠して隠居してきた惣次。その惣次が隠居前に使つていた紅の石は大きな力を有している。

悠真が憧れていた惣次を守り、惣次と共に戦つてきた紅の石。紅の石は歴史を持ち、紅の石は惣次の思いを持っている。惣次と赤い色が同じだから、まるで惣次がそこにいるように感じた。

### 惣次。

悠真の脳裏に惣次の姿が浮かんだ。術士の才覚を持たない悠真に、優しく諭してくれた惣次。惣次と共に歩んだ紅の石が今、悠真の手の中にある。それを使うと不思議な気分だった。

「やつと、惣次の石が戻ってきた」

悠真は強く紅の石を握り締めた。

## 赤の焦り（2）

悠真の手の中に、惣次の石が戻ってきた。この石は惣次と共に歩み、惣次を支えてきた石。感極まる悠真をよそに、秋幸は焦りの色を濃くしていた。

「何でもいいから、石を使って。早く紅にこの場を知らせるんだ」言われて悠真は石を握った。秋幸の焦りが言葉の端々から伝わってきた。裏切りの発覚を防ぐにも、裏切りが発覚したときに支払う代償を少なくするためにも、一刻も早い石の使用が必要なのだ。石を使つて、紅にこの場を伝えなくてはならないのだ。

悠真は石を使ったときのことを思い出した。惣次の石を使ったとき、義藤の石を使ったとき、悠真はそれを思い出した。一刻も早く石を使わなくてはならない。

赤

悠真は赤に願つた。今、力を貸して欲しい。義藤を救うためにも、秋幸たちを救うためにも、悠真には赤の力が必要なのだ。

赤

悠真は心中で赤を呼んだ。しかし、赤からの返答はない。無色な声が赤を拒んでいるのか、赤が悠真を見放したのか、眞実は分からぬ。確かなのは、今、術の力を使わなくてはならないということだ。

頼む、赤！

悠真は願つた。義藤を助けるためにも、術を使わなくてはならない。

秋幸とともに来た理由は、一刻も早く紅の石を使つてこの場を伝えるためだ。

「悠真、急いで」

秋幸が悠真を急かした。秋幸が急かすから、悠真の焦りは深くなつた。

早く、早く、早く

もちろん、悠真も急いだ。けれども、分からぬのだ。一体、自分がどのようにして石を使ったのか思い出せない。嵐の日、無我夢中で惣次の石を使った時を、復讐の気持ちに駆られて義藤の石を暴走させた時を、悠真は思い出した。心を赤で満たし、赤を願つた。

思えば、好きなときに石が使えれば、義藤を守ることが出来たはずだ。それが出来れば、こんな苦労はなかつたはずだ。

「悠真」

秋幸が悠真の名を呼んだ。

早く、早く、早く！

悠真の心臓が早く脈打つた。どのようにして石の力を使つたのかどうのよにして使えたのか。術士はどうのよにして色の力を引き出しているのか。

野江は簡単そうに紅の石を使いからくりを動かしていた。佐久は息をするように石を使っていた。それは秋幸も同じだ。そもそも術士とは、どのようにして石の力を引き出しているのだろうか。生まれながらの才覚が必要であるが、使い方の基礎や基本はあるのだろうか。悠真は術士のことを何も知らない。

早く、早く、早く。

出来ない。

悠真のこめかみを汗が流れた。意識を集中させた。今、使えなければ全てが無駄になる。登一の支配から人を助け出せない。遺体を葬ることさえ出来ない。

悠真の心に、伊汰の觸體が浮かんだ。解放してあげなければならぬ。

悠真の心に、意識を失った義藤の姿が浮かんだ。義藤を救うには、今、紅の石が使えなくてはならない。

今、使えなければならない。

悠真は自分に言い聞かせた。しかし惣次の石は、悠真を冷たく突き放すように、何の反応も示してくれなかつた。赤の声も無色な声も聞こえない。

惣次、助けて。

悠真は死んだ惣次に願つた。惣次と過ごした二年間、悠真は祖父と酒を酌み交わす惣次をいつも見てきた。惣次は悠真の年の離れた友であり、家族であった。この紅の石は、長年惣次と戦つてきた石。

惣次が生きていた証。なのに、何の反応も示してくれない。

惣次！

悠真は心で惣次を呼んだ。けれども、紅の石は何の反応も示さない。悠真の焦りだけが深まり、焦りと緊張で気分が悪くなるような思いだつた。吐きそうなほど気分の悪さの中、悠真の焦りだけが先走つていた。近くで感じるのは、悠真を急かす秋幸の気配。

赤の気配は感じない。悠真は赤に見放されたように思えた。火の国は赤の国。赤が高貴な色で民は赤を持つ者が多い。その中で赤に見放されるということは、悠真は火の国に否定されたということだ。悠真の感情は複雑に回っていた。

## 赤の焦り（3）

「」の一日前、悠真は何度自分自身のことを愚かだと思つただろうか。今回ほど、愚かだと思ったことはない。悠真は使えない。惣次の石を使えない。感情に任せて、動き始めたけれど、悠真は自分が石を使えなかつた時のことを考えていなかつたのだ。悠真是一度、紅の石を使つた。けれども、思うように使えたことはない。これで術士といえるのだろうか。どんなに焦つても、悠真が無力な小猿であるという事は何もかわらないのだ。

「使えないんだ」

悠真は言つた。秋幸が息を呑むのが分かつた。

「使えないんだ。俺は、思つようには石が使えない」

秋幸の顔が大きく陰り言い様のない哀しみを浮かべた。

「そんな……」

秋幸は悠真のことなどをどうに思つだらうか。愚かな小猿だと思うだらうか。愚かな小猿に惑わされた己を責めるだらうか。

「ごめん、秋幸。でも俺は……」

悠真が言つたとき、鉄の扉が開いた。赤い夕日は沈み、辺りは薄暗くなつていて。赤の時間が終わり、辺りを黒が支配し始める。悠真是秋幸の後ろに隠された。秋幸は悠真を守るために隠したのだ。それは、義藤が悠真を守ろうとしたのと同じ。嫌な予感がした。自分の愚かさのために、再び誰かが傷つく予感。秋幸は平凡だ。平凡な印象なのに、佐久と同様の才能を有している。その上、悠真よりも深いところで物事を考えている。その秋幸が悠真を背に隠した。決して逆らうことの出来ない「下村登一」を前にして、秋幸は悠真を守るために背に隠した。無力な悠真は何も出来ず、ただ秋幸の背中越しに外の景色を見るだけなのだ。

「何をしてある、秋幸」

それは、忘れることの出来ない登一の声。悠真の身体がこわばつた。

「何をしていると聞いていいんだ！」

登一の声が響いた。

「出て来い！来なければ、殺すぞ！」

秋幸は立ち上がり、出て行つた。悠真も秋幸の後ろを追つた。

外に出ると、既に灯りが付けられていた。登一の後ろには、義藤が倒れていた。そこには、千夏も春市もいた。暗がりの中でも一人の顔の強張りははつきりと分かつた。

「秋幸」

春市が秋幸の名を呼んだ。心配するように。責めない優しさを春市は持つてゐる。春市も千夏も秋幸の責めるのではなく、純粹に秋幸のことを心配していた。

「使用者の報告を聞いて来てみれば、どういうことだ？」

登一が春市に目を向けた。登一は苛烈な目で春市を威嚇していた。醜く太り、豪華な衣装に身を包んだ心の荒んだ男。何も信じていなさい。

「愚か者の秋幸が、冬彦を逃がしたらしい。それで、部屋で何をしている？春市、どうやって責任を取るつもりだ？無力で幼い子供たちを殺すつもりか？」

そして登一は不敵な笑みを浮かべた。他者が苦しむのを楽しむように、氣味の悪い笑みを浮かべた。

「秋幸、お前のことだ。何か理由があつたんだろ？」

春市が秋幸の行動を受け入れていた。裏切りが発覚し、代償を支払うのは秋幸だけではない。春市と千夏も子供たちを大切に思い、子供たちのために隠れ術士となり利用される道を選んだ。全てが無駄になることも知りつつ、二人は秋幸の行動を受け入れていた。

「秋幸。大丈夫よ」

千夏は目を細めていた。春市、千夏、秋幸は下村登一に利用された。奴がどのような行動をとるのか、どのような罰を下すのか、想像が出来ているはずだ。それはきっと、悠真が想像するより、ず

つと現実的で残虐なものに違いない。それでも、一人は秋幸のことを許していた。そして、秋幸の行動が意味あるものだと信じていた。

悠真は手の中の紅の石を握り締めた。次に語りかけた。紅に語りかけた。四人の隠れ術士と、彼らが守ろうとした子供たちの安全のため、今、術を使わなくてはならないのだ。どんな些細な力でも良い。少しでも使える、紅が気づくはずなのだ。もう少し。もう少しで、解決への道が開かれようとしているのに、悠真の力が及ばないばかりに道は閉ざされてしまうのだ。焦りが無常にも空回りをしていた。

## 赤の犠牲（1）

秋幸の裏切りが発覚した。それがどのような結末へと導くのか、想像するに容易い。

焦る悠真をよそに登一は不敵な笑みを浮かべた。他者が苦しむのを楽しむように、気味の悪い笑みを浮かべた。

「無力な子供たちを殺すのか？」

子供たちを見殺しにするか、春市は究極の選択を迫られているのだ。春市が悩み、苦しむのを見て登一は喜んでいる。

「秋幸、お前のことだ。何か考えがあつたんだろ」

春市は秋幸を責めなかつた。下村登一は強い相手には見えない。隠れ術士の三人が力を合わせれば勝つことが出来るかもしれない。しかし、彼らは大切な人の命を人質に捕られ、囚人となつている。冬彦が紅へ救援を求めているが、人質が、紅の手によつて救われたという証拠はない。闇雲に、動くことは出来ない。この場は、最悪のことを考えて、人質は助けられていないと、いう前提で動くことが正しい。悠真は手に握つた紅の石に願つた。一瞬で良い、僅かでも良い、少しでも力を貸して欲しい。そうすれば、紅に届くはずなのだ。

「春市、俺は……」

秋幸は何かを言いかけた。それでも、秋幸は言葉に詰まつていた。何を口にしても言い訳にしかならない。言い訳では何も解決しない。秋幸はそれを知つてゐるようだ。

「俺たちは、人質を失いたくありません。あの子供たちを死なせることは出来ない」

春市が苦しそうに登一に頭を下げた。登一は醜く笑つた。

「お前は子供たちを守りたいと言う。ならば、誰か一人殺せ。お前たち四人の義兄弟のうち、誰か一人を殺せ。お前にそれが出来るのなら、許してやらんでもないぞ」

悠真は息を呑んだ。なぜ、この裏切りの代償は、互いを思い合う四人のうちの一人の死なのだ。

「殺せ。命に重さがあるのか？兄弟一人の死が、多くの子供を救うぞ。春市、お前は一人のために、多くの命を犠牲にするのか？」  
登一が春市をけしかけた。なぜ、選ぶことが出来ようか。春市たちは子供たちのために、隠れ術士として利用されている。そして、兄弟を思いあつてている。

命に重さはない。それは平等で、唯一無二のもの。命を選ぶことなど出来ない。大切な子供たちのために、悠真の故郷を滅ぼした秋幸は深い後悔つ罪の意識の中にいた。秋幸たちにとって悠真の故郷は他人の集まりだ。だから選択できたはずだ。しかし、今は違う。春市は大切な命を天秤に掛けなくてはならないのだ。

春市は刀を抜いた。

「約束していただけますか？ここにいる、兄弟のうちの誰か一人が死ねば、残った兄弟は助けていただけるんですね」

春市は登一に問うた。そして、登一は笑った。

「今から殺しあえ。兄弟で殺しあえ」

高らかに登一は笑っていた。

悠真は息を呑んだ。春市が命を選ぶことなど考えたくなかつた。この場にいる千夏か秋幸のどちらかを殺すつもりなのだろう。

「春市……」

秋幸が春市の名を呼んだ。

春市の表情がこわばつていた。

「春市、馬鹿なことは考ぢやいけない」

千夏が春市を止めようとしていた。悠真は手の中にある紅の石に助けを求めた。けれども、石は反応しない。悠真は惣次に見捨てられたような気分がした。義藤が危機にさらされたときも、今も、紅の石は悠真に力を貸してくれない。春市は誰を犠牲にするつもりなの

か、悠真には分からぬ。

「分かつた、春市」

言つと、千夏は自分の刀を抜いた。悠真は言葉を失つた。どうして、彼らが殺しあわなくてはいけないのだ。そんな必要はない。千夏は春市に刀を向けた。一人が殺し合いを始めるかもしれない。そう思うだけで、悠真は恐怖で足がすくんだ。

「春市が考えていることなんて分かつてゐる」

千夏がそう言つた直後、春市が口に刀を向けた。自分の腹を、自分で突き刺そうとしたのだ。悠真は目を閉じることさえ出来なかつた。

兄弟のうち、誰かが死ななくてはならない。

そんな無理難題を突きつけられて、春市が辺りつく答へは明らかだ。弟も妹も死なせたくない。ならば、己が死ねばいい。己が死ねば、愛しい妹と弟は救われる。犠牲となるのは、春市自身だ。

「春市！」

千夏が叫んだ直後、赤い光が辺りを包んだ。

## 赤の犠牲（2）

誰かが犠牲にならなければならぬ状況。

春市は「己」を犠牲としようとして、千夏がそれを止めた。

千夏が紅の石を使って春市の刀を弾き飛ばしたのだ。紅の暗殺に繰り出すために準備していた千夏は、紅の石を持つていたようだ。誰かが加工したのだろう。千夏の色に合わせられていたが、微妙に色は違った。加工師柴のように、優れた加工が出来る者は稀だということだらう。

千夏は刀を構えて、強く言い放つた。

「させない、そんなことさせない」

言つた千夏の声が震えていた。

「俺は、誰も死なせたくないんだ！」

春市が叫ぶように言った。誰かが犠牲にならなくてはならない状況。春市は、皆を生かすために己の命を捨てようとした。そして千夏は、春市を死なせたくないから、死のうとする春市を止めるのだ。

「誰も死なせたくない、って思つてるのは春市だけじゃないのよ！私も、誰も死なせたくない。春市を死なせたくない！」

千夏が震える声で叫んだ。ならば、誰が犠牲になると叫うのだ。悠真は惣次の石を握り締めた。

紅、助けて。

惣次、力を貸して。

悠真は願つた。下村登一が作り出した牢獄の中に、春市と千夏は囚われているのだ。下村登一の命じるまま、恐ろしい選択を強いられている。状況を開けるには、悠真が惣次の石を使って紅に助け

を求めるだけだが、悠真にはその力が無い。

この状況を作り出した責任の一端は悠真にある。だから、悠真は秋幸に目を向けた。平凡な印象だけれども、優れた才能を持ついる秋幸ならば解決策を見出せると思ったのだ。

秋幸は、春市と千夏の様子を、じつと見つめていた。なぜ、秋幸は何もしないのか。悠真は分からなかつた。

「秋幸」

悠真は秋幸の袖を掴んだ。秋幸ならば、春市と千夏を止めることが出来ると思ったのだ。互いに生きて欲しいから、自ら死のうとしている彼らを救うことが出来ると思ったのだ。秋幸は袖を掴む悠真の手を見て、哀しく笑つた。

「俺には何も出来ないよ。俺が乱入したって、状況は混乱するだけ。誰かが死ななくちゃいけない。それは俺でも良い。でも、一人が争っているのは、皆が生きる道を探しているから。俺が死んだら、一人の意志はどうなる？それにね、俺は無駄死にしたりしない。ここで命を自ら絶つたとして、紅が助けに来なければ何にもならない。俺が死ぬのは、紅が皆を救う鍵となるためだけ」

悠真には秋幸の考えが一寸も理解できない。皆が生きる道を探している。それは、己の命も生きなくてはならないのだ。秋幸は無鉄砲に突き進む小猿悠真とは違う。そして、優しさのため己が犠牲となるうとしている春市の気持ちも、春市を救おうとしている千夏の気持ちも考えている。だから秋幸は動かない。

しかし……

俺が死ぬのは、紅が皆を救う鍵となるためだけ。

秋幸も己の死を視野に入れているのだ。無駄死にはしない。しかし、無駄死いでなければ、死ぬという意味だ。

誰かが犠牲にならなくてはならない。誰も犠牲にしたくない。誰もが同じ気持ちなのだ。「犠牲」という言葉は、火の国の民が好む言葉だ。特に「自己犠牲」という言葉が好まれている。他者のために美しく散る。未来のために、美しく散る。しかし、悠真は嫌いな言葉だ。何があつても、生きたい。他人を犠牲にするのではなく、自分を犠牲にするのではなく、皆で生きていたい。悠真は願つた。

「殺しあえ！ 殺しあえ！」

登一が叫んだ。

残酷な言葉。その言葉で誰かが命を落とす。

それに掻き立てられる様に、春市は落ちた刀を拾い、直後、千夏は春市に斬りかかった。春市は刀で受け止めた。一人は隠れ術士。兄弟四人が集まれば、野江を阻むほどの力を持つ。兄弟は信頼で結ばれ、力で結ばれている。

「どちらかが死ななくちゃいけないなら、戦つて決めればいい。喜ばせるためにも。私は、誰も死なせたくない。春市が私に生きて欲しいと思つているの。平等に決めましょ」

千夏はそう言つた。

「俺は千夏とは戦わない。千夏、俺を殺せ」

春市が千夏に言つた。千夏がその刀をまつすぐと春市に向かた。

「なら、春市。私を殺して」

直後、千夏が刀を己に向かた。

「止める！」

春市が大声で千夏の行動をとめた。

## 赤の犠牲（3）

出口の無い迷宮に春市と千夏は迷い込んでいた。互いを思いやるからこそ、逃げだせない。抜け出せない。刀を下ろした千夏がゆつくりと春市に言った。

「春市、昔、ずっと昔、あれば、女術士に助け出される前のこと。私たちは、大人に利用されるだけの存在だった。そうしなければ、生きていけないから。今も同じ。利用されなければ生きていけないから。あの時、私たちは何も持つていなかつた。持つていないと思つていた。でもね、今は違うと思うの。私たちは、この命を持つている。そして、この命は、私たちだけのものじゃなくて、大切な仲間のものもあるのよ。春市の命が消えて困るのは春市だけじゃない。私は悲しくて辛い。秋幸や冬彦だって同じ。春市、簡単に犠牲にならないで」

春市は頭を抱えていた。

「じゃあ、じゃあ誰が犠牲になるって言つんだ？誰が犠牲になつても、失うものは同じなんだ」

春市の声も震えていた。

「戦いましょ」

千夏が小さく言い、悠真は息を呑んだ。辺りの空気が水を打つたよう静まりかえる。その中で、千夏が静寂を破つた。

「誰が犠牲になるなんて決められない。なら、本氣で戦いましょ。本気で戦つて、決めましょ」

千夏が刀を構えた。

「千夏らしい」

言つて春市も刀を構えた。

そして、二人は刀を抜き合い、牙を向け合つた。

「止める、止めるよ！」

悠真是二人を止めようと叫んだ。一人が冗談で刀を抜き会つていな  
いことは明らかだ。

誰かが犠牲にならなくてはならない。

そのようなこと、悠真是嫌だつた。なぜ、一人が戦わなくてはなら  
ないのか。悠真是叫んだ。非力な悠真の言葉は何も意味を持たない。  
悠真の隣で、秋幸が体を固めていた。

「悠真」

秋幸が小さな声で悠真を止めた。何をしても無駄なのだと、秋幸は  
知つているのだ。

「殺し合え！春市、千夏。殺しあえ！」

下村登一が玩具を得た子供のように嬉しそうに叫んでいた。

春市が駆け出し、千夏も駆け出した。二人が振り上げた刀が擦れ、  
火花が散つた。それは、都南と義藤の手合させのようだつたが、手  
合させとは違う。手合させの時は、野江が止めるために戦いを見守  
つていた。しかし、今、戦いを止める存在がない。二人は技術向  
上のために戦つているのではなく、犠牲となる者を決めるために殺  
しあつているのだ。

それはまるで遊ぶように、踊るように、二人は刀を向け合つてい  
た。ぶつかり合つた刀の衝撃で小さな赤い火花が散る。辺りは暗く  
なり、ともされた灯だけが辺りを照らしている。暗がりが深い。悠  
真は何も出来ない。嬉しそうに笑っているのは登一だけだ。

「殺せ！」

登一の声が高らかに響いた。

「殺しあえ！」

悠真は腹立たしさを覚えたが、何も出来ない。手に握る惣次の石さえ使えば、解決することなのに、悠真が出来ないがゆえに一人は殺しあつていい。時間だけが過ぎていく。

永遠に続くかのような時間。一人は互角で、どちらも決定打を打てずにいた。それが悠真を安心させた。戦いが続く限り、春市と千夏が死ぬことはない。

素人悠真とは違う角度で、秋幸は春市と千夏の戦いを見ているようであった。秋幸は身を固め、じっと見守っていた。

「時間を稼いでいる」

秋幸が一人を見て言つた。小さな声で言つた。

「二人は時間を稼いでいる。一人で争うように見せかけている。互いに殺しあつてているのなら、とっくに決着がついているはずだ。ほら、千夏が決定打を出せるところで一歩引いた。もしかしたら、春市と千夏は俺たちに賭けているのかもしれない。俺が、何か策を持つていると考えて、時間を稼いでいるんだ」

秋幸のその言葉が、悠真を更に追い込んだ。この状況は悠真が作り出したものだ。悠真が惣次の石を使うことが出来ると言つたから。悠真が惣次の石さえ使うことが出来れば、紅たちがここへ進撃する理由をもつことが出来る。

力を……

悠真は願つた。それでも、紅の石は反応しない。色の声がない。

悠真は紅の石の使い方を知らない。感情だけでは動けない。

悠真は目を細めて未来を願つた。悠真が石を使えない。このことが、大きな犠牲につながる可能性なのだ。

## 赤の犠牲（4）

犠牲となる者を決めるための、春市と千夏の戦い。美しく舞うよう、遊ぶように、刀で打ち合っている。術の力は春市と千夏よりも、秋幸、冬彦の方が上だが、刀での戦いは一人の方が格段上なのだろう。

刀とは無縁の生活を続けていた悠真であっても、一人の戦いの美しさに心を奪われる。

「二人は強いよ。幼い頃、孤児を戦闘道具として育て上げる奴らの元にいたから」

秋幸の言葉に、悠真は秋幸の横顔を見つめた。秋幸は一人の戦いを一瞬たりとも見逃さないように、まっすぐに見つめていた。

なんて無力なのだろう。

悠真は思った。犠牲となる者を決めるための戦い。一人は時間を稼いでいるのに、一人のために悠真は何も出来ない。一人は秋幸信じて、秋幸は悠真を信じているのにだ。

一人の戦いは永遠に続くようだった。真剣を使つた勝負なのに、とても美しい。見てみたい。悠真はそう思つたが、登一は違うらしい。登一はあからさまに苛立つていた。時間を稼ぐための戦いに、下村登一が気づいたとき、戦いの均衡は崩される。登一が大きく息を吸い込み、叫んだ。

「早く殺せ！これ以上かかるようなら、人質を殺すぞ！」

登一のその言葉が引き金だった。登一が叫んですぐ、千夏の刀が春市を貫き、ゆっくりと力なく春市が地に倒れた。春市の赤い血がゆっくりと弧を描く。

決着がつくのは、一瞬の出来事だった。

千夏が刀を春市の身体から引き抜くと、地に赤い血が流れ出して行く。立ち尽くす千夏が手に持つ白刃の刀は赤く染まり、不気味に赤黒い血が流れ落ちてゆく。

「ごめんね、春市」

力なく地に横たわる春市と、肩で荒々しく息をしながら立ち尽くす千夏。千夏が倒れる春市に小さく謝罪した。

「春市！」

秋幸が悲痛に叫んだ。それでも、秋幸が駆け出さなかつたのは、絶対的支配者である登一がいるからだろう。

目の前の残酷な光景に、登一が手を叩いて喜び、千夏は血の滴る刀を持つて、立ち尽くしていた。

「どうして……」

秋幸の声が震えていた。悠真は何も出来ない。

秋幸が小さく呟いた。

「良いんだ。これで……間違っちゃいない。今、ここで動いたって何も実りはない。今、ここで動いても実りはしない。待つんだ。時が来るまで、確固たる意志とともに、俺は石のようにならぬ待ち続ける。選んだ道だ。大丈夫」

秋幸の手には、加工されていない紅の石がある。加工前であるが、普通の人間である下村登一を殺すことは容易いはず。それでも動かないのは、秋幸が強いからだ。

「秋幸」

悠真はいたたまれなくて、秋幸を呼んだ。今、秋幸は何を思い、何を考えているのだろうか。秋幸は、平凡な印象を持たせる人物であるが、その内実は平凡とは掛け離れた存在である。秋幸は、今、何

かを考えているはずだ。

その時、悠真は人影を見た。年齢の割りに少し小さな身体。歴代最強の陽緋野江に匹敵する才能の持ち主。無茶をするのは、彼が幼いから。固まつた足を、動かさせる力を持つのは、彼が無茶をするから。冬彦の一言が、凍り固まつた場に希望を与える。

「証拠だ！」

冬彦の声が庭に響いた。冬彦は、紅への救援を求めに行つた。戻つてきたということは、紅が冬彦を信じたということだ。

「証拠なんだ！朱軍はそこまで来ている！」

冬彦は叫び続けた。

「今すぐここに攻め込む理由があれば、俺たちは勝てる。朱軍は待つていいんだ。ここに攻め込むための証拠を！」

冬彦の言葉で悠真は確信した。彼らの人質は紅たちの手によつて救われたのだ。必要なのは証拠だけ。紅たちが登一を攻撃するに足る証拠が必要なのだ。けれども、悠真は石を使えない。ここに惣次の紅の石があつて、これを使うことが証拠になるのに、無力な小猿「悠真」は使うことが出来ないのだ。

「なぜ、なぜ春市が倒れているんだよ！」

冬彦の悲痛な叫びが響いた。

「なんで、こんなことになつていいんだよ！」

下村登一が絶句していた。この、赤の消えた屋敷を崩壊に導くために、朱軍が近くまで来ている。来ているのに、最後の一手が見つからないのだ。

## 赤の犠牲（5）

冬彦の登場に、登一は狼狽し、腹の辺りを搔くように手が泳いでいた。秋幸が言った。

「冬彦、それは本当なんだな。みんな、解放されているんだな」秋幸が冬彦に確認し、冬彦は頷いた。秋幸の声は落ち着き払い、低く響いた。

秋幸は何かを考えている。それは明らかなのに、何をするつもりなのか悠真には盲目検討もつかない。

その直後、悠真は強い力で突き飛ばされたのだ。突き飛ばされ、投げられる間に、悠真は秋幸に紅の石を奪われた。

普通の人見える秋幸も、悠真より優れた力を持ち、容易く悠真是惣次の石を奪われた。それは、紅たちをここに招きこむ証拠。ここに惣次の石がある。それを示せば、証拠となる。

紅の石は持ち主以外に使用することはできない。

悠真はそれを知っていた。自分が、他人の石を使えるということは、例外なのだ。なのに、秋幸は悠真から惣次の石を奪った。悠真是地に倒れた。地に叩きつけられた衝撃で、一瞬視界が揺らいだが、悠真の目は秋幸から離れることはなかつた。

「秋幸……」

悠真は秋幸を見ていた。秋幸は普通だ。だから接しやすい。その秋幸が、なんとも言えない表情で微笑むのだ。秋幸の手には、惣次の紅の石が握られている。この地に義藤と悠真がいるという証拠となる石だ。悠真しか使うことが出来ない石。その石を持って、秋幸

は何するというのだろうか。

「ごめんな、悠真。こうするしかないんだ。俺は、何も後悔をしないない。自分を責めるな」

秋幸が言つた直後だつた。

赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤

燃える炎。

立ち込める煙。

悠真は分からなかつた。

赤はとても高貴なのに、とても美しいのに、時に豹変し残酷な色となる。それは絶対的な権力の色であり、力の色であり、死の色。鮮烈に焼きつく赤。

他人の石は使用できない。

それが人に合わせて加工された石ならば、なおのこと。惣次の紅の石は、加工師柴が惣次にあわせて加工した石。惣次の色と寸分違わず加工しているから、双子の惣次出さえ使うことが出来ない。

それは分かつていたことだ。けれども、悠真は他人の石を使用することで支払わなくてはならない代償を知らなかつた。

紅たちに証拠を渡すには、惣次の石を使うしかない。悠真は惣次の石を使うことが出来ない。他人の石を使っても平気なのに、術士のように思うがまま石を使うことが出来ない。

「秋幸！」

悠真は叫んだ。目の前の赤い色に叫んだ。

秋幸は悠真が持っていた惣次の石を使った。

秋幸は秋幸が持っていた惣次の石を使えた。

他人の石は使えない。

その事実さえ除けば、秋幸は惣次の石を使えない。

他人の石を使えない。ということは、紅の石の力を発揮することが出来ないことだと、悠真は勝手に思っていた。しかし、他人に合わせて加工された石を使うことは可能なのだ。代償を支払うことを恐れなければ、使うことが出来るのだ。

他人の紅の石を使った。

秋幸は惣次の石を使うことをしなかった。春市が倒れても、使おうとしなかった。つまり、他人の石を使うことが、何を意味するのか、秋幸は知っていたはずなのだ。しかし、秋幸は使った。

悠真が見たのは、紅の石を中心に燃える秋幸の身体。赤い炎は秋幸を舐めるように広がり、秋幸は倒れた。火は瞬く間に消えたが、そこについたのは黒焦げの秋幸。着物はほとんど燃え落ち、皮膚も変色し、火傷をしていない皮膚が分からないほど。残酷なのは、秋幸が未だに生きていることだ。うつぶせに倒れた秋幸は、小さな息

をしていたが、目は閉じられていた。

命が消える前の姿だ。命の証、赤い色が失われ始めている。秋幸の一色が消えつつある。

紅に助けを求めるために、仲間を救つために犠牲となつたのは「秋幸」だった

「秋幸！」

悠真は叫んだ。

## 赤い希望（1）

紅に救援を求めるために、惣次の石を使った秋幸は、炎とともに燃え上がった。

悠真は秋幸のことを思つた。今、黒焦げになつて倒れている秋幸は、ずっと考えていたはずなのだ。悠真から惣次の石の話を聞いたときから。悠真が惣次の石を使えない。と打ち開けたときから、秋幸は考えていたに違いない。秋幸自身が惣次の石を使って、紅に救援を求めるなどを、ずっと考えていたはずだ。

春市と千夏が戦つたとき、秋幸は動かなかつた。今、動いても無駄死にになるだけかもしれないから。紅が確実に助けてくれる、という保障がなければ、秋幸は無駄死にになるかもしれないから。

紅が助けに来てくれるという確信があれば、秋幸が躊躇う必要はない。

己が犠牲になることで、涙を流す人がいることを知りながら、秋幸は惣次の石を使った。

「めんな。

秋幸の言葉が悠真の脳裏に響いた。

「秋幸！」

千夏が悲痛な叫びを上げた。助からない。他人の石を使用することは出来ない。使用すると、必ず死に結びつく。そういう事だ。

春市が千夏の刀に倒れた。秋幸は紅に助けを求めるために他人の石を使った。四人の兄弟の一人が倒れた。悠真の頭は真っ白となり、

こらえきれず膝を折つた。立つことさえ出来なかつた。辛くて、現実から逃げたかつた。悠真が殺したようなものだ。悠真は強い自責の念に駆られ、死んで、消えたいと願つた。祖父や惣次が死んだ時と同じだ。悠真は、再び己の無力さのために大切な人を死なせるのだ。なぜ、ここへ来てしまつたのか。なぜ、紅城へ足を運んだのか。悠真が無力だから。悠真が他人の石を使えると、根拠のない自信を持つていたから。悠真の無鉄砲な行動のせいで、秋幸は燃えた。

「どうのことだ、どうのことだ……」

登一が混乱していた。そんな登一の混乱さえ、雑音に聞こえる。どこで判断を間違つたのか。どんな行動をとれば良かつたのか。もう一度やり直したところで分からぬ。

「どうのことだ、答えろ！ 答える、千夏！」

春市が千夏に叫んでいた。千夏は立ち上ると、拳で登一を殴り倒した。登一は地に引っくり返り、高価な登一の着物に土がついた。倒れた登一を見下して、千夏は言つた。

「子供たちは紅の手で解放された。なら、私があんたに仕える理由はない。秋幸が犠牲になつて希望を導いてくれたから。忘れないで。私たちの自由を奪う牢獄は、既にないことを」

千夏の言葉は正論だつた。そして千夏は暗くなつた空を仰いだ。

「ほら、聞こえるでしょ。紅たちが攻めて来る声が。終わりなの。もう、終わつたのよ。秋幸の命と引き換えに」

千夏は持つていた刀を捨て、両の手を地につき、膝を折つた。それは深い悲しみと絶望の姿。全ては悠真の罪が生み出した結果。消えることの無い悠真の罪。

「秋幸……秋幸……」

千夏がうめくように秋幸の名を呼ぶ。立ち尽くす冬彦。愕然とする千夏。紅が助けに来てくれる。なのに、とても辛い。望んだのは、こんな結末ではない。

「何で、秋幸が死ななくちゃいけないんだ」

冬彦が空を仰ぎながら、泣いていた。彼らは仲間だ。兄弟だ。深い

絆で結ばれている。その中の一人が命を失った。それは、悠真の罪によるものだ。

空を飛ぶ船が、建物を潰すように着陸した。空を飛ぶ船「空挺丸」を操るのは、野江。稀代のからくり師鶴藏が、野江のために造ったからくり。それが空挺丸。そして、野江が来たということは、紅が助けに来たということ。空挺丸には篝火が炊かれている。赤い炎が辺りを照らし、高貴な雰囲気が漂つた。この場に漂う穢れた空気を拭い去るような清潔しさと美しい赤が空挺丸から漂つっていた。

待ち望んでいた紅の救援だ。紅が助けに来てくれた。絶望の中に赤い光が差し込む。色の消えた屋敷に、赤い色が灯り始める。

「紅」

悠真は空挺丸を仰いだ。赤い希望とともに、紅がこの屋敷に助けに来てくれたのだ。

## 赤い希望（2）

赤い色は時として残酷な色へと豹変するが、今の悠真には希望の色に見えた。空挺丸に乗り紅が現れた。この、閉ざされた場所に鮮烈な赤が満たされていく。

「紅」

悠真は思わず彼女の名を呼んだ。様々な顔を持つ色神。火の国を支えている紅の石を生み出す色神紅。逆光だから、悠真から紅の顔は見えない。けれども、誰が紅なのかすぐに分かった。紅はなんとも言えない雰囲気を纏っているのだ。香の匂いが漂つた。辺りを浄化するように、その場を紅の空間へと変えていく。涙が出そうなほど、悠真は嬉しかった。

「ここにおつたか。わらわに牙を向ける反逆者は……」

紅はしじけなく、それでも優雅に空挺丸から足を下ろした。紅が足を下ろしやすいように、そつと都南が手を貸していた。赤の茶会のような気安い雰囲気は紅から漂っていない。そこにいるのは、高貴で威圧的な紅の姿だつた。

紅が踏みしめた場所から赤が広がり始める。一步、一步と紅が足を進めるたび、足跡を起点にして赤が広がっていく。

赤い色は悠真に安心感を与えた。赤は残酷だが美しく温かい色。紅が足を進め、悠真は紅の顔を見ることが出来た。紅の言葉を借りるなら、それは理想の紅像その一だ。高圧的で、高貴な雰囲気。深紅の紅を唇に差し、まぶたの上には赤い線を引く。幾重にも重ねられた赤い着物が美しい。赤い着物を引きずるように、紅は土の上を歩いていた。黒い長髪にはいくつもの簪が挿され、彼女の高貴さを引き立たせていた。そんな彼女の傍らには、野江と都南、そして佐久がいた。遠次がひつそりと歩き、空挺丸から鶴藏が僅かに顔を覗かせていた。

「醜い屋敷じや。赤が嫌うほど、空気がよどんでる。汚らわしい

紅は口元を着物で押えながら辺りを一瞥すると、佐久に言った。

「佐久、こっちへ寄れ」

佐久は紅の前に控えると、地に片膝を着いて頭を下げた。

「あの者が死に近い。救え」

紅は煙管で秋幸を指し、白い石を佐久の手に落とした。佐久は再び深く頭を下げた。

「今、わらわが自由に使える白の石は一つだけじゃ。その男を救うことには、異論はあるまいな」

その言葉は、春市に向けられていた。

白の石はいかなる傷や病さえも癒す力を持つ。

春市も倒れている。もちろん、義藤もだ。悠真は紅が真っ先に義藤を救うと思っていたから、不思議な気分がした。

「もとより、覚悟の上の傷。命に差し障りはございません。義藤にも助かる道が残されているのなら、どうか弟を……弟を救つてくださることに、深く……深く感謝いたします」

春市が起き上がり、地に頭をなすりつけるように膝を折った。秋幸の命と同時に義藤を案ずる。それが春市の優しさなのだ。春市が千夏に斬られたのも一人の策に違いない。紅が姿を表す、紅が言葉を発する。色神紅の行動、言葉が、行き止まりだった場所に道を作り出していく。出口を作り出していく。もちろん、千夏も冬彦も膝を折った。その光景に、紅は鼻で笑い、佐久に命じた。

「義藤は問題ない。佐久、石を使え。代償を知りながら、他人の石を使った男じや。死なせるでない」

佐久は頭を下げて、秋幸に歩み寄った。佐久の手には、白い石が握られている。途中で佐久が足を地に取られなかつたのは、奇跡的なことだ。

「大丈夫だよ、悠真君。紅はこういう状況を想定して、口八丁を使って白の石を一つ持つて来たんだ。他の色の石の中でも、高価な石

をね

佐久は悠真を安心させるように言つと、秋幸を仰向けにした。よく頑張ったね。君は、よく頑張った。君でしょ。僕のとびきりの技を真似したのはね。あの、赤い夜の戦いで、水人形を見たときは驚いたよ。君でしょ。あれをしたのはね。恐ろしいほどの才能だよ。僕だって、天童と呼ばれていた時代はあつたのにね。一つの時代に多くの優れた術士が揃う。それは奇跡のこと。君は、紅に力を貸してくれるでしょ」

佐久の言葉は秋幸に向けられていた。佐久は他人である秋幸を、まるで本当の弟のように声をかけていた。それが佐久の優しさなのだ。思えば、佐久は悠真に対しても優しかった。

紅はこのような状況を想定して、白の石を持ってきたのだ。

希望があつた。

秋幸が助かるという希望。

紅が来たから、誰も死なない。

赤い希望があつた。

## 赤い希望（3）

きっと秋幸は助かる。

仲間がいるから。仲間が助けれくれるから。一人で戦っているのではないのだ。

悠真は思った。紅城で、復讐に息巻いていたときから、悠真はひとりでなかつた。佐久だけない。野江も都南も悠真を大切な者として接してくれていた。紅も悠真を追い出さなかつた。遠次も温かかつた。夜、襲撃の前に義藤が教えてくれた言葉が脳裏に響いた。

俺は一人だと思っていたのに、一人じゃなかつた。

悠真も義藤と同じことを思った。紅の姿が見えたとき、涙が出るほど嬉しかつた。野江たちが助けに来てくれたと分かつたときは足が震えた。悠真の心は、既に彼らの中に所属していたのだ。悠真は佐久を見た。佐久が助けてくれる。そう思うと、安心した。そして、佐久は秋幸の胸の上に白の石を乗せた。

「佐久、秋幸は助かるよね」

悠真は自らを安心させるために、佐久に尋ねた。

白の石は、いかなる傷や病も癒す。

白の石の力は周知の事実。この石があれば、秋幸は助かるはずなのだ。悠真は佐久の口から肯定の返事を待つた。

「さあ、どうだろうね」

佐久は低く答え、悠真はそれが理解できなかつた。

「え？」

悠真は息を呑んだ。佐久の返答の意味が分からなかつたのだ。白の

石は、いかなる傷も癒すはずなのだ。悠真は信じられず、白の石を使う準備をする佐久に問い詰めた。

「なんで？白の石は、いかなる傷も癒すんでしょう。どういう意味だよ」

白の石があるのに、秋幸が助からないかもしね。それが理解できないのだ。

「確かに、白の石はいかなる傷や病も癒すよ。でも、それは色神白が使つたときだろうね。僕には、白の石を完全に引き出すだけの才能が無いから。僕は、白との相性の良さを持つていらないんだ。

でも、命は助かると思うよ。何かの代償を支払つてね」

佐久はじっと黒焦げになつた秋幸を見ていた。

「命は助かっても、術士として生きることが出来るかは分かない。悠真君は知らないんだつたね。一年前、僕と都南、そして惣爺は死の淵に立っていた。白の石を使って命を永らえたけれども、僕と都南が支払つた代償、君なら分かるでしょ。僕は先の朱護頭。都南に及ばずとも、今の義藤と同等の剣術を会得していた。都南は朱軍で、大絆の力を持つていた。僕と都南は、命の代わりに代償を支払つた」

佐久は目に涙を浮かべていた。

「優れた才能を持つていて、優れた力を持つていて、優しい心を持つていて、こんなところで未来を閉ざされるなんてね……。この子は強いよ。きっと、僕らに並ぶ力を持った存在だ。紅に力を貸してくれたのなら、僕らも安心なのに。なぜ、世の運命というのは、こんなに残酷で皮肉なんだろうね」

佐久は先の朱護頭だ。悠真はそれが信じられなかつた。身体を動かすことが極端に苦手な佐久が、朱護頭として戦えるはずが無いのだ。しかし、もし一年前まで佐久が刀を使うことが出来たら？都南は術の使えない朱将だ。悠真はそれも疑問に思つていた。術が使えないのに、紅に近づくことが出来るはずがない。術が使えないなら、朱軍に入る術は無い。剣術が優れているのなら、官軍に入るはずなのだ。惣次は二年前まで赤の仲間を率いて戦つっていた。そして戦うこ

とが出来なくなつたから、隠居して下緋として悠真の村に来た。

赤の仲間たちは一年前の戦いを、隠そうとしていた。そして、佐久と都南は一年前の戦いの後に紅城を去りうとした。

佐久と都南が支払つた代償。

二人に欠けたもの。

白の石の力を完全に引き出すことが出来る者がいなければ、秋幸は生きながらえたところで術士として戦うことが出来なくなつてしまふ。どのような代償を支払うのか、それは定かでないが、佐久と都南が支払つたもののことを考えると、それは術士として致命的なはずだ。

秋幸は優れた力を持つてゐる。その力は紅にとつても必要なはずだ。信じることが出来る赤の仲間を増やすことが、紅には必要なのだ。秋幸の人柄を悠真は知つてゐる。絶望的な状況でも、未来を信じることが出来る人だ。紅に忠誠を誓えば、裏切つたりはしない。秋幸のためにも、紅のためにも、秋幸の術士としても未来を閉ざすこととは出来ない。

悠真は辺りを見渡した。何かを忘れてゐるような気がしたのだ。半身を起こす春市。膝を折つたままの千夏。そして、立ち戻くす冬彦。

(冬彦)

悠真は冬彦を見た。冬彦を見て思い出しだしたのだ。色を引き出す強大な力。そして、白との相性の良さ。冬彦は白の石を使うことに優れているのだ。もし、赤との相性が良ければ、歴代最強の陽緋野江に並ぶほどの、色を引き出す強大な力を持つてゐる。

冬彦が白の石を使つたら？

悠真は佐久の手を掴んだ。



## 赤い希望（4）

悠真は白の石を使おうとする佐久の手を掴んで止めた。

「悠真君？」

佐久が不信そうに悠真に尋ねた。今、白の石を使うべきは佐久ではない。白の石を使うのに、最も適した人がこの場にいるのだ。

「冬彦だ。冬彦に使つてもらうんだ。冬彦は白との相性が良いから、冬彦なら代償なく秋幸を助けることが出来るかも知れない」

冬彦の白との相性の良さを悠真是佐久に伝えた。佐久がそれを信じる保証は無いが、佐久なら信じてくれると思っていた。佐久は自らの弱点も素直に受け止める度量の大きさを持った人だから。

「冬彦君？……なるほどね、彼が白との相性が良いのなら、もしかしたら助かるかも知れないね。狭隘な力を持った子だから」  
佐久が手を止めた。

悠真是立ち上がり、冬彦の下へ駆け寄つた。そして冬彦の腕を掴むと引つ張つた。

「秋幸を助けてくれ。佐久じゃないんだ。白と相性が良いのは、冬彦なんだ。全力で、白の石を使ってくれ。冬彦の相性と力があれば、秋幸が助かるはずなんだ」

冬彦は状況が理解できていなかった。

「どうということだよ。佐久が……」

佐久が使つべきだと、冬彦は言つたが悠真是冬彦を引つ張つた。冬彦は自分の才能に気づいていないのだ。冬彦の白との相性の良さは才能だ。その才能を活かす時は、今なのだ。

悠真是冬彦を引つ張り、秋幸の横に座らせえた。

「冬彦は、白の石使つたこと無いだろ。そりゃあ、白の石は貴重な石だから。だから、自分で気づいていないんだ。冬彦が一番相性

が良いのは、白の石なんだ。白の石の力を誰よりも引き出すことが出来る。俺には見えるんだ。冬彦は白に愛されている」「佐久が白の石を冬彦に握らせた。

「僕や都南のような代償を支払わせちゃいけない。使ってくれないか?」

冬彦は戸惑いながらも、そつと白の石を握り締めた。

「秋幸を死なせたりしない。こいつは、強い奴なんだ」

悠真が初めて見る白い石は、秋幸を中心に白く光を放つた。光は秋幸と冬彦を包んだ。穢れなく、美しい白。白には毒々しさが無い。赤と白は異なる。

白の石はいかなる傷や病でも完治させる。

悠真は白の石の力を感じた。冬彦は白の石の力を確実に引き出し、秋幸の傷は治っていた。秋幸の傷が治ると引き換えにするよう、白の石は色を失い砕けた。

悠真は白の石が高価な石である理由を理解した。誰もが、喉から手が出るほど欲しい石のはずだ。白の石は、命のやり取りを行うことができる石なのだ。

「よく頑張ったね」

佐久が秋幸の髪を撫でて、自らの赤い羽織を脱いで秋幸にかけた。

「良かった。僕が使うよりも、冬彦君が使つた方が確実だった。きっと大丈夫。代償を支払わずに、きっと術士として表舞台に立つことが出来るよ」

佐久は柔らかく微笑んだ。

悠真は佐久を思った。佐久は優れた術の力と、剣術の腕を持つていた。しかし今は、身体を動かすことが出来ない。そのことを、佐久はどのように捉えているのだろうか。術の力は使っても、術士と

して未来を奪われたことは事実だ。もし、二年前の戦いの場に冬彦がいたのなら、状況は違うかもしない。

佐久と都南は大人だから、現実を受け止めている。佐久は悠真に微笑みかけ、強い目を紅に向かた。

「終了しました」

佐久が深く紅に頭を下げた。紅は頷くと、煙管を登一に向かた。

「野江、都南。捕らえろ。殺すでないぞ」

紅という存在は圧倒的だ。気持ちが良いほど、相手を裁いていく。誰も紅に逆らえない。紅に表から立ち向かうことは出来ない。野江と都南は赤い羽織をなびかせ、朱塗りの刀に手を伸ばした。

「待て！」

登一が叫んだ。

登一は庭の隅の物にかけられた布をめくつた。布の下には義藤が隠されていた。

登一が短刀を握り白刃を義藤に突きつけ、野江と都南は足を止めた。

「殺すぞ、殺すぞ。殺されたくないれば、後ろへ下がれ。ここから立ち去れ！」

登一が持つ短刀の刃先が義藤に迫り、都南と野江が身動きをとれず固まっていた。それは、春市たち登一の使用人と同じ牢に捕らわれたことを意味する。大切な人を守るためにならば、人は信念を捨てる。野江と都南、どちらも動きが取れない。

希望が絶望に変わった瞬間だった。

## 赤い希望（4）（後書き）

今年は一色を読んでいただきありがとうございました。来年もよろしくお願いします。

## 赤と義藤（1）

下村登一が義藤に刃を向けて、人質にとつた。それだけで、歴代最強の陽緋野江と朱将都南は動きを封じられるのだ。この赤の消えた屋敷の使用人たちと同じ。自由を奪われ、登一の道具となる。人は誰しも、大切な人を持っているから。

一人が心から義藤を信頼していることは周知の事実。緊迫した空気が当たりを包んでいた。義藤の代わりは誰もいない。

悠真はこれからのこと我が恐ろしくて、紅に目を向けた。紅の強大な力ならば、この状況を開いてくれると信じているのだ。

悠真の考え方どおり、紅は野江と都南が自由を奪われた、人の牢獄を容易く踏み越えた。しかしそれは、悠真が想像するのとは違う方法だ。もちろん、赤の仲間たちでさえ考え付かない方法であった。

「殺すが良い」

紅は煙管で義藤と登一を指した。

「わらわは止めぬ。義藤を殺すが良い」

紅は少しも躊躇わらず、断言した。それは、紅とは思えぬ言葉だった。紅は義藤を信頼していたはずだ。紅が義藤を見殺しにするとは思えず、悠真は息を呑んだ。もちろん、野江や都南、佐久たちも目を見開いていた。その中で、最も驚いたのは登一なのかもしれない。

「良いのか、本当だぞ。殺すぞ。義藤を、殺すぞ！」

登一は狂ったように叫んだが、紅は薄く笑みを浮かべていた。野江が悲痛に叫んだ。

「紅！馬鹿なことはお止めなさい！義藤はここで死んで良い人じゃないわ。分かるでしょ。お止めなさい！なぜ、なぜ義藤を見捨てるの！義藤は必要な人よ。これから、あなたを支え、あたくしたちと共に歩み続ける人よ」

野江の言葉は最もだ。悠真は紅が義藤を見捨てるとは想像もしてい

なかつた。紅を守るために戦い続けた義藤を見捨てる紅が信じられなかつた。

「野江、黙つておれ。わらわは、隠れ術士のよつと利用されるつもりはあるぬ。わらわは誰にも困ることは出来ぬ」「出来ぬ」

野江は叫んだ。

「駄目よ！ 義藤を死なせることは出来ないわ…」

紅は苦笑し、野江と都南に言った。

「わらわは下村を止めぬ。されど、命ずることは出来る。そこで狸寝入りをする義藤に命ずることが出来る」

紅は煙管で義藤を指した。

「いつまで動かぬつもりじゃ？ そのまま殺されるつもりか？ 何もせずに、殺されるつもりか？」

紅は義藤にそう言つたのだ。

「紅、義藤は……」

悠真は紅に言つた。義藤は戦えるような状況ではない。悠真を庇つて深い傷を負つたのだ。

すると、紅は悠真に目を向け、ぴしゃりと言つた。

「小猿、黙つておれ」

紅は悠真を制すと、再び義藤に言つた。

「わらわは救わぬ。わらわと共に戦うのならば、今すぐ田の前におる愚者を捕らえよ。そのまま殺されるつもりか？」

義藤は動かない。紅は続けた。

「愚者を捕らえるのはそちの役目じゃ。今すぐ捕らえよ。わらわの刃なのじやん。わが刃が、鞘におさまつままで折られるのを待つだけとは。情けなすぎて笑いが出るわ」

すると、今まで黙していた遠次が田を見開き、紅に問ひよつた。

「紅、まさかお前……」

遠次は何かに気づいたらしい。何度も義藤と紅を見比べていた。狼狽する遠次を見て、紅は不敵な笑みを浮かべた。遠次の問いに答える様子はない。

「そのまま死ねば、表の世界から義藤が消える。良いのか、それで。それで良いのか？紅が命ずる。紅が許す。今すぐ、そやつを捕らえろ。何も案ずるな。わらわが許したのじや。わらわが許可をしたのじや。何も案ずるな。そちが案ぜねばならぬのは、そちが生きること。そして、わらわに反する者を捕らえる」とじや」

紅が命じた。

「無茶だ。義藤を救うには白の石が必要だ。きっと、代償を支払わずに助かるだらうけど、今すぐに動けといつのは無茶な話だよ」

佐久が紅に言った。

「義藤を殺すつもりか？いくら義藤でも動けるような状態じゃない。お前らしくもない。」

都南も紅と止めようとした。彼らにとって、義藤は信頼できる大切な存在。死なせたくない存在なのだ。

「いくら義藤でも無理です」

野江も紅を止めていた。義藤を知る人々は、彼を救おうと必死だった。赤く血の染みた着物が、汚れた赤い羽織が、義藤の傷の深さを物語つていて。その傷の深さが、赤の仲間たちの足を止め、牢獄へと導くのだ。

赤と義藤（一）（後書き）

あけましておめでとうございます。祝100歳生日になりました。今年もよろしくお願いいたします。

紅は本氣で義藤を見殺しにするつもりなのだ。紅に仕え、紅を守らうとしていた義藤を見殺しにするのだ。悠真は覚えている。義藤が紅に対し信頼を語っていたことを。それだけ紅を思う義藤を見殺しにすることに、悠真はとても腹が立つた。

「止めるよ」

悠真は立ち上がり言つた。怒りで肩が震えた。義藤は悠真を庇つて深手を負つた。けれども、それ以前に紅を守るために戦つたのだ。それでも紅は言葉を止めなかつた。紅の言葉はとても攻撃的だつた。「小猿は黙つておれ。これは、わらわたちの問題じや。のづ、そうじやろ。わらわが紅となつた時、生涯わらわに仕えると申したのは誰じや？神の子としてではなく、赤の力を受け継ぐ者として、わらわを守ると申したのは誰じや？ここで死すことが、わらわを守ることなのか？わらわが死ぬまで、隣にいると申したのは誰じや？己は親のようにならぬと申したのは誰じや？わらわを悲しませぬと、わらわとともに生き続けると、そう申したのは誰じや？？」

紅は一呼吸置いて言つた。

「辺りを知れ。深い絆で結ばれた兄弟、信頼した仲間。いつまで、一人孤独に生きるのじや？なぜ、己に孤独を課すのじや？慾を開け。閉じこもつた部屋から出るには、己の足で踏み出すしかない。明るいところへ來い。わらわは、お主が出てくるのを待ち続けるぞ」

紅は微笑んだ。

「わらわは、誰か一人が犠牲になれば良いとは思わぬ。そちの生きる影の世界に、わらわの色を届かせてはもらえぬか？」

言つた直後、紅の高圧的な雰囲気が消えた。それは、普段の紅であった。

「聞いているんだろ。私はお前を死なせたくない。そして、仲間も死なせたくない。お前が動かなくては、下村登一を捕らえることが

出来ないんだ。大丈夫だ。小言なら、私が聞いてやる。罪だと言うのなら、私が負つてやる。私はただ、生きて欲しいだけなんだ。皆に、生きて欲しい。そのためにはお前が動かなくてはならないんだ」紅が言った時、義藤の目が開いた。そして、登一の手首を掴んだのだ。

「義藤？」

悠真だけでなく野江も都南も佐久も同時に言つた。それは、傷ついた義藤が目を開き、登一の手を掴んだからだ。まるで紅の言葉に呼応するように、意識を失っていた義藤が動いたのだ。

「あなたは無茶をしそぎる」

義藤は紅に言つた。紅が苦笑した。

「お前なら、必ず動くと信じていた。さあ、思い切り暴れろ」

紅が義藤に言い、義藤は目を細めた。

「思い切り暴れさせてもらいます」

義藤の声だ。義藤の顔だ。義藤の微笑だ。義藤は無事だったのだ。

「義藤、どうして……」

野江が戸惑っていた。それは、佐久も都南も同じだった。

「悠真君、一体何が起こったんだ？」

佐久が悠真に尋ねたが、悠真にも何が生じたのか分からぬ。義藤は悠真の目の前で斬られ、そして倒れていた。それは、容易く動けるほどの傷ではない。白の石を使う時間は無かつたはずだ。ならば、なぜ義藤はそこに立ち、下村登一の腕を掴んでいるというのだろうか。

義藤は下村登一の腕を締め上げ、登一の表情が歪んだ。

「俺は紅を守る存在だ。簡単に倒れたりしない。俺は知っている。下村登一が、どのようにして使用人を支配していたのか、どれほど残虐な行為をしていたのか、俺は知っている。だから、許したりしない」

抜き身の刃のように美しく強い義藤を悠真は見つめた。赤が救ないと叫び、赤がすがつた義藤がそこにいた。

## 赤と黒の攻防（1）

下村登一が作り出した牢獄は、紅と義藤によつて崩された。人質は朱軍によつて解放され、四人の隠れ術士も下村登一を守つたりしない。登一は一人になり、誰も彼を擁護したりしない。義藤によつて腕を締め上げられ、登一は殺される存在だ。

「なぜ……」

登一が言った。

悠真の目の登一の一色が見えた。直後、登一の目の色が変わった。不安と恐怖とが入り混じり、醜く濁つた色となつた。

「どうして、わしじや駄目なのだ」

登一が言った。

「どうして、わしは昇れない」

ぶつぶつと登一は呟いた。

「どうして、誰もわしを認めない」

登一の色が登一の気持ちを表していた。

はかり知れない不安。

登一は不安なのだ。不安だから、権力を誇示しようとする。不安だから、誰も信じない。不安だから、頂点に立ちたがる。悠真が登一に目を向けると、登一の色が見えた。直後、嫌な気配がした。黒い色が迫つてくるような気配。

「何か来る」

悠真は呟いた。不思議そうに佐久が悠真を見たが、悠真は登一から目を離すことが出来なかつた。赤が呑み込まれる。赤を呑み込む色は黒。

黒  
黒

悠真は義藤の言葉を思い出した。

黒の石は一日だけ存在する不死の異形を生み出す。

黒い色が赤い色を呑み込む。そんな気がした直後、登一の持つ黒が凝縮した。

「黒がくる」

悠真は登一の持つ色に引き込まれそうであった。

「悠真君？」

佐久はまだ気づいていない。

「佐久、黒がくる。気をつけて。黒が憎しみともに赤を飲み込みにくる」

登一の持つ黒い色は凝縮を続けた。

凝縮した黒い光は形を変え、歪んだ。歪み、変形し、膨張した。膨張し、形を形成した。

異形の者

凝縮した黒が形を持つた。そこにあるのは、生き物でない。あまりに醜悪で、吐き気がするほどの異臭がした。足は八本。黒以外の色は無い。開けた口からは液体がこぼれていた。

「悠真君」

佐久が悠真に言った。

「いいかい、全力で逃げるんだ。ここは僕らに任せて」

囁くように、異形の者を刺激しないように、佐久は言った。高らかに笑う登一と異形の者。異形の者が声を上げると、異臭を放つ液体

が口から零れ、地に落ちた。地に落ちた液体は音を立てながら玉砂利を溶かした。

登一が石の力を使つたことは明らかだつた。野江が刀を抜いた。  
「まさか、こんなところに隠れ術士がいたなんて。富と権力で選別をかいくぐつたのね。道理で尋常じやないほどの石を隠し持つているわけね。自分で使えないのなら、石なんて必要ないですもの。石の力を止めなさい。これ以上、罪を重ねてはいけないわ」

野江が命じた。それでも登一は止まらない。異形の者は足を進めた。野江と都南が刀に手をかけ、警戒を強めた。千夏も、春市も警戒している。佐久も同様だ。秋幸を隠しながら、異形の者を警戒していった。

春市は地に倒れながら、半身を起こし紅の石を構えていた。それは千夏も同じ。異形の者がそこにいる。

異形の者を悠真は初めて見た。赤の仲間たちは見たことがあるかもしれないが、隠れ術士たちは初めて見たのだろう。表情が引きつっていた。

醜い異形の者は、下村登一に従うようであつた。登一の腕を締め上げる義藤が小刀を抜いて登一に突きつけた。

「異形の者を止めるんだ」

義藤が言つた。しかし、登一はげらげらと笑つた。

「殺せ！殺してしまえ！」

登一が叫ぶと、異形の者が吠えた。吠えた異形の者は、その爪を登一を押さえつける義藤に向けた。

黒い色が輝く。

「義藤！」

悠真は義藤が貫かれて殺されたと思った。爪は義藤を狙い、黒い色が不気味に輝いたのだ。爪は義藤を寸分違わず狙つた。それは、赤

の仲間たちが助けに向かうよりも早い時間だ。

赤。

赤が黒を打ち消した。

紅の石を使った義藤。義藤を狙つた異形の者。二つの力が衝突し、義藤は後方へ弾き飛ばされた。

義藤は紅の石を持つていなかった。悠真が暴走させた義藤の紅の石は色を失い砕け、紅が与えた代わりの紅の石も色を失い砕けた。しかし、義藤は紅の石を使い、異形の者の黒を打ち消したのだ。

(さゆるる)

異形の者は声を上げた。赤に跳ね返されても、死ない。異形の者は一日だけ存在する不死のものだから。黒と赤のせめぎあいがはじまつた。

## 赤と黒の攻防（2）

異形の者の黒い力と義藤の赤い力が衝突し、辺りに力の風が舞つた。義藤は後方へ弾き飛ばされ屋敷の障子へとぶつかり、屋内へと消えた。身体の大きな異形の者は庭に留まつた。

（ぎゅるるる）

異形の者が吠えた。義藤を一瞬で弾き飛ばすほどの力を、異形の者は持つている。その事実がいかほどの恐怖か、赤の仲間たちは悟つたらしい。野江と都南の緊張が高まっていることに、離れていた悠真でも気づいた。同じように佐久も緊張を高めていた。

（ぎゅるるる）

義藤の思わず反撃に焦つたのか、異形の者は吠えた。黒い目がはたと春市と千夏を見ていた。黒い色が歪み、春市と千夏の方へ流れていぐ。異形の者は二人を狙つている。

「春市、千夏！」

悠真は一人に危険を伝えようと叫んだが、既に手遅れだつた。

異形の者は一度爪を振るつた。春市と千夏は紅の石を使って身を守ろうとした。同時に、一人を助けるために野江と都南が駆け出した。

義藤は異形の者と力の衝突を起こし、後方へ弾き飛ばされた。義藤が作り出した赤の盾を異形の者が破ることが出来なかつたためだ。二人は違う。

春市と千夏が作り出した赤の盾を、異形の者の黒い爪容易く破り、爪は一人を捉えた。その爪で春市と千夏が地に倒れた。傷を負つた春市、彼を庇つた千夏。二人は何もなさずに倒れた。悠真は春市と千夏の力を知つていて、彼らが疲労し傷を負つっていたとしても、その力は本物だ。

「春市！千夏！」

野江と都南が救援に向かう間も無いほどの短い時間。無力な悠真に何かが出来る時間ではない。

悠真の視界はゆっくりと巡り、地に倒れた一人が目に迫った。異形の者の力は強大で一人が容易く倒された。それが、どれほどの事態なのか考える必要もない。隠れ術士四人揃えば義藤と対等の力を持つ。一人は義兄弟を率いる存在。その一人が爪の一振りで倒された。それが何を意味するのか考える必要もない。これは、この場にいる紅さえ危険にさらすほどの非常事態。赤の仲間たちは、誰よりもそれを感じている。

「都南！」

野江が都南の名を呼び、一人は同時に駆け出した。野江の放った赤い光が黒い光を呑み込み、凝縮した。都南は朱塗りの刀を抜き、異形の者の首を斬りおとした。これが、火の国を支える陽緋と朱将の力。歴代最強の力を持つ陽緋野江と、術を使えずに朱将まで成り上がった都南。二人は一つの意志で動いているかのよう。息を呑むほどの力。美しい戦い方。赤が煌く。一人の戦いは百戦錬磨の戦い。二人が負けるということは、火の国の沈没を意味する。それゆえ、二人は強い。

黒の石は一日だけ存在する不死の異形を生み出す。

火の国を支える陽緋と朱将が刀を抜いた。

黒の石は一日だけ存在する不死の異形を生み出す。

その意味を悠真はようやく知った。これが黒の力なのだ。「赤」「黒」「白」が色の中で強い力をもつた色だ。黒がなぜ強い力を持っているとされるのか。それは黒が戦闘に特化した色だからだ。

陽緋野江と朱将都南が刃を抜いたのに異形の者は倒れなかつた。

野江は再び紅の石を使った。術士の筆頭、陽緋の野江が使う石は火の国で頂点を争うほどの力を持つ石のはずだ。赤い光は異形の者を呑み込み、押さえこんだ。術を使うことが出来ない都南も紅の石が刃に埋め込まれた刀を振り抜いた。

「この石は黒の石の中でも強大な力を持つ石だ。わしの勝ちじゃ！」  
登一が狂ったように笑っていた。いや、下村登一は既に狂っていたのかもしない。他者を蹴落とし、他者の痛みを知らない男は狂っていたのだ。

異形の者は止まらない。

異形の者は赤い光を跳ね除けた。歴代最強の陽緋野江が作り出した赤い格子を飛び越えた。

これが、黒の石の力。  
世界が欲する石の力。

こんな石を持つ国と争うことは無謀だ。官府が黒の石を有する宵の国との争いを考えているのなら、それは火の国を滅ぼす行為。一日経たない限り、異形の者は消えない。一日、押さえつけなければ、異形の者に勝つことは出来ない。黒と赤、どちらが強い色なのか。術士の戦いでなく色同士の戦いのようであった。

### 赤と黒の攻防（3）

赤と黒が争っていた。赤を操る陽緋野江。黒を扱う下村登一。

「下村登一は、黒との相性が良いみたいだね」

佐久の声には焦りが含まれていた。今でこそ、学者として落ち着いている佐久であるが、二年前までは朱護頭として術士の最前線にいた。一年前の戦いで、代償を支払わなければ、佐久は今でも野江と都南と肩を並べていたはずだ。その佐久が言つのだ。下村登一が生み出した異形の者がどれほど脅威か、いやでも教えられる。

「駄目だ……。野江、左だ！」

佐久が言つた直後、異形の者は野江の作り出した格子を左から打ち砕き、紅に向かつて走り始めた。異形の者が命を狙うのは、火の国で最も高貴で、火の国の民の生活を支える存在。異形の者の爪の先には紅がいた。

「待て！」

都南が叫んだ。都南も野江も紅を守ろうとした。

野江は石を使い、複数の格子を作り出した。都南は紅の石で加工された刀を振るつた。異形の者は薄い硝子を打ち砕くように、いつも容易く野江の作り出した赤の格子を打ち砕いた。紅と離れたところにいる野江では、異形の者を止めることが出来ない。それは、都南も同じだ。離れたところからでは、紅の石の力でしか紅を守れない。

都南の刀は空気を歪め、力を薙ぎ払う。歪んだ空気の刃が異形の者を狙い、異形の者を傷つけるが倒れない。特殊な刀を持っているとはいえ、都南の力が活かされるのは接近戦だ。異形の者はまっすぐ紅に走り続けた。

異形の者は止まらない。

佐久も紅を守るために慌てて紅の石を取り出した。佐久の力は野江と都南を器用に補佐していく。陽緋野江に次ぐ術の使い手である佐久が戦う姿を悠真は初めて見た。佐久は強い。それは偽りの無いことだ。

異形の者は止まらない。

その爪が、火の国を支える色神紅を捕らえようとしていた。この火の国で最も強く、最も美しい存在を。

「紅！」

野江と都南と佐久が声をそろえて叫んだ。実力のある彼らが異形の者を止めることが出来ない。紅を守ることが出来る存在は誰もいない。

都南を破り、佐久を破り、野江を破り、紅へ爪を伸ばした。

異形の者は止まらない。

悠真は身を固めた。美しい紅は煙管を優雅に持つたまま、少しも警戒していない。身の危険を感じていないようだ。

黒じやわらわの紅を倒せぬ。

まるで、赤がそう言つたように思えた。

黒が赤を呑み込もうとする。赤が黒に倒される。どれほど赤が余裕であつても、今の状況は紅に不利だ。逆転のための好機はない。異形の者は止まらない。

「紅！」

その場にいた誰もが叫んだ。野江、都南、佐久は紅を守ろうとした

が間に合わない。遠次も動かない。悠真は目を閉じることさえ出来なかつた。赤が呑み込まれる。黒に呑み込まれる。それを覚悟するしか出来なかつた。

目に浮かぶのは倒れる紅の姿。赤い血が糸を引き、赤い着物が血に落ちる。悠真はその光景を想像すると恐ろしくて、身動き一つ取れなかつた。

もう、駄目だ！！

悠真が覚悟を決めたとき、紅と異形の者の間、そこに二つの影が割り込んだ。影は迷うことなく異形の者前に立ちはだかつた。

身を呈して紅を守る存在は、紅の石の力で異形の者を弾き飛ばした。強い赤は異形の者の黒い力に勝つた。弾き飛ばされた異形の者は、野江の力によつて押さえつけられ、都南の刀によつて前足を切り落とされた。足を斬りおとしても、異形の者はすぐに戻る。

野江が全力を發揮し作り出した赤い格子も飛び越える。佐久も補佐も虚しいだけ。三人のしていることは時間稼ぎだ。

野江の使う紅の石の力は強大で、悠真は身震いをした。赤と相性が良い野江。石の力を引き出す能力も他者を凌駕する。野江の赤い格子に押さえつけられながら、異形の者は吠えた。

(ぎゅるるる)

同時に、紅が笑つた。

「やはり、お前じやなきやな」

紅は不敵に笑つた。紅は己を守る存在がいることを知つていいようで、影に向かつて笑いかけた。

あまりの速さのために、影に見えた存在。野江が作り出した赤の格子の光に照らされて、その顔がはつきりとする。二つの影のうち、一つは紅を守つた存在。そして、もう一人は……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2341x/>

---

一色

2012年1月8日20時46分発行